

四国横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

第三十八冊

川津東山田遺跡 I 区

2001. 10

香川県教育委員会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

第三十八冊

川津東山田遺跡 I 区

2001. 10

香川県教育委員会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団



S R 03出土土器



S R 02出土土器

卷頭圖版 2



1018



1421



1434



1620

內面朱付着土器

## 序 文

四国横断自動車道の高松～普通寺間は、平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり、香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～普通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに埋蔵文化財の発掘調査を委託し、3年6ヶ月の期間を要して平成3年9月に28遺跡の発掘調査を終了致しました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査で出土した文化財の整理を順次行っているところであり、平成4年度からは調査報告書の刊行をいたしております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十八冊 川津東山田遺跡Ⅰ区」として刊行いたしますのは、坂出市川津町東山田に所在する川津東山田遺跡Ⅰ区についてであります。この遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が出土し、それぞれの時期の集落跡を確認しました。なかでも弥生時代の朱付着土器や、古代の鍛冶に関連する遺物が出土し、これらの生産の様子を窺わせる貴重な資料が得られたと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成13年10月

香川県教育委員会

教育長 折原 守

## 例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38冊で、香川県坂出市川津町東山田に所在する川津東山田遺跡（かわつひがしやまだいせき）I区の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

平成2年8月～平成3年3月　　金丸真明　中野昇一　和田素子　松尾優美

平成3年9月　　西岡達哉　真下拓也　白川悦代

4. 発掘調査及び報告書の作成に当たって下記の関係諸機関などの協力を得た。記して謝意を表したい。  
(順不同、敬称略)

香川県土木部横断道対策室、同坂出土木事務所横断道対策課、坂出市瀬戸大橋・横断道対策室、坂出市教育委員会、坂出市川津公民館、四国横断自動車道建設坂出川津連合対策協議会、同西又地区対策協議会、地元自治会

5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、執筆、編集は山元素子が担当した。

6. 本報告書の作成に当たっては、下記の方にご教示を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)  
谷山 譲　魚島 純一

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S B 挖立柱建物 S D 溝 S E 井戸 S H 壁穴住居 S K 土坑

S P ピット S X 性格不明遺構 S R 自然河川

8. 石器実測図中の網目は磨滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れ痕、摩滅痕を示す網目は、磨滅痕の著しい部分については細かくしている。現代の折損は剥離面を黒く塗りつぶしている。

9. 採図の一部に国土地理院地形図 丸亀（1/25,000）および坂出市都市計画図を使用した。

10. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関に分析を委託した。

プラント・オパール分析 株式会社 古環境研究所

鉄滓等金属科学的分析 鮎九州テクノリサーチ・大澤正己

11. 土器観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖1992版』を使用して表す。また、残存率は遺物の完形品に対する割合で記す。

# 本文目次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	4

## 第2章 立地と環境

## 第3章 調査の成果

第1節 調査の概要	10
第2節 土層序	14
第3節 遺構・遺物	
1. 弥生時代中期後半～終末期の遺構・遺物	21
2. 奈良時代の遺構・遺物	53
3. 平安時代の遺構・遺物	62
4. 鎌倉時代の遺構・遺物	93
5. 時期不明の遺構	105
6. 自然河川	107
7. 包含層	238

## 第4章 自然科学分析の調査結果

第1節 川津東山田遺跡I区のプラント・オバール分析	242
第2節 川津東山田遺跡I区出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	250

## 第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷	269
第2節 赤色顔料付着土器について	274

## 挿図目次

第1図 四国横断自動車道(普通寺~高松)路線図	1	第40図 S D3120、S D3203、S D3205断面図(1/40)	
第2図 調査区割図(1/1,200)	6	S D3120出土遺物(1/4)	46
第3図 遺跡位置図(1)	7	第41図 S D3401~S D3404断面図(1/40)、 出土遺物(1/4)	47
第4図 遺跡位置図(2)(1/5,000)	8	第42図 S D3306、S D6101、S D6201、S D2208断面図 (1/40)、S D6201出土遺物(1/4)	48
第5図 周辺の遺跡(1/35,000)	9	第43図 S D2401・S D2403断面図(1/40)	51
第6図 主要遺構配置図(1)(1/500)	11~12	第44図 S D2401、S D2403出土遺物(1)(1/4)	52
第7図 主要遺構配置図(2)(1/500)	13	第45図 S D2403~S D2405出土遺物(2)(1/4)	53
第8図 調査区土層図位置図(1/1,500)	16	第46図 S B05平・断面図(1/80)	54
第9図 調査区土層図①(1/80)	17	第47図 S B05出土遺物(1/4、1/2)	55
第10図 調査区土層図②③(1/80)	18	第48図 S B06平・断面図(1/80) 出土遺物(1/4)	56
第11図 調査区土層図④⑤(1/80)	19	第49図 S B07平・断面図(1/80)	56
第12図 調査区土層図⑥⑦(1/80)	20	第50図 S E01平・断面図(1/40)	57
第13図 S H01、S H02平・断面図(1/60)	22	第51図 S E01出土遺物(1/4)	58
第14図 S H01出土遺物(1/4)	23	第52図 S D3119断面図(1/40) 出土遺物(1/4、1/2)	59
第15図 S H02出土遺物(1/4)	23	第53図 S D3103~S D3105断面図(1/40)	59
第16図 S H03、S D3201平・断面図(1/60)	25~26	第54図 S X01平・断面図(1/60) 出土遺物(1/4)	60
第17図 S H04、S D3204平・断面図(1/60)	27~28	第55図 S B08平・断面図(1/80)	61
第18図 S D3201土器出土状況平面図(1/40)	29	第56図 S B09平・断面図(1/80)	63
第19図 S H03出土遺物(1/4)	29	第57図 S B09出土遺物(1/4)	64
第20図 S H04出土遺物(1/4)	29	第58図 S B10平・断面図(1/80)	64
第21図 S D3201出土遺物(1)(1/4)	30	第59図 S B11平・断面図(1/80) 出土遺物(1/4)	65
第22図 S D3201出土遺物(2)(1/4、1/2)	31	第60図 S B12平・断面図(1/80) 出土遺物(1/4)	66
第23図 S D3204出土遺物(1/4、1/2)	31	第61図 S B13平・断面図(1/80)	67
第24図 S H05平・断面図(1/60)	32	第62図 S B14平・断面図(1/80) 出土遺物(1/4)	67
第25図 S H06平・断面図(1/60)	33	第63図 S P3201~S P3204、 S P3101出土遺物(1/4)	68
第26図 S H06内S K01土器出土状況 平・断面図(1/10)	34	第64図 S D01断面図(1/40)	69
第27図 S H06出土遺物(1)(1/4、1/2)	35	第65図 S D01(A・B)出土遺物(1)(1/4、1/2)	70
第28図 S H06出土遺物(2)(1/4)	36	第66図 S D01(B)出土遺物(2)(1/4)	71
第29図 S H06出土遺物(3)(1/4、1/2)	37	第67図 S D01(B)出土遺物(3)(1/4、1/2)	73
第30図 S H07、S D2201平・断面図(1/60)	38	第68図 S D01(C)出土遺物(4)(1/4)	74
第31図 S H07、S D2201出土遺物(1/4)	39	第69図 S D01(C)出土遺物(5)(1/4)	75
第32図 S H08平・断面図(1/60) 出土遺物(1/4、1/2)	40	第70図 S D01(C)出土遺物(6)(1/4、1/2)	76
第33図 S B01平・断面図(1/80)	41	第71図 3区①鍛冶窯連違構平面図(1/100)	77~78
第34図 S B01出土遺物(1/4、1/2)	42	第72図 S H09平・断面図(1/60) 出土遺物(1/4)	80
第35図 S B02平・断面図(1/80) 出土遺物(1/2)	43	第73図 S K01~S K03平・断面図(1/40)	80
第36図 S B03平・断面図(1/80)	44	第74図 S P3102、S P3103平・断面図(1/40) 出土遺物(1/4)	81
第37図 S B04平・断面図(1/80)	44	第75図 S D3106断面図(1/40) 出土遺物(1/4)	81
第38図 S P3401平・断面図(1/5) 出土遺物(1/4)	45	第76図 S D3109出土遺物(1)(1/4)	83
第39図 S P3402、S P3403、S P4101平・断面図(1/40) 出土遺物(1/4)	45		

第77図	S D3109出土遺物(2)(1/4).....	84
第78図	S D3109断面図(1/40).....	85
第79図	S D3109出土遺物(3)(1/4).....	85
第80図	S D3210a断面図(1/40).....	86
第81図	S D3210a出土遺物(1/4).....	86
第82図	S D3210b断面図(1/40)出土遺物(1/4).....	87
第83図	S D3209、S D3211、S D3214平・断面図(1/40)	
	S D3214出土遺物(1/4).....	87
第84図	S D3209出土遺物(1)(1/4).....	88
第85図	S D3209出土遺物(3)(1/2).....	89
第86図	S D3111～S D3113断面図(1/40).....	89
第87図	S D3501断面図(1/40).....	90
第88図	S D3501出土遺物(1/4).....	90
第89図	S D3213、S D3504～S D3507断面図(1/40)	
	出土遺物(1/4).....	91
第90図	2区②連構配位置図(1/100).....	92
第91図	S B15平・断面図(1/80)出土遺物(1/4).....	93
第92図	S P2201平・断面図(1/40)出土遺物(1/4).....	93
第93図	S P2203、S P3104、S P3105出土遺物(1/4).....	94
第94図	S B16平・断面図(1/80)出土遺物(1/4).....	94
第95図	S B17平・断面図(1/80).....	95
第96図	S B18平・断面図(1/80)出土遺物(1/2).....	96
第97図	S B19平・断面図(1/80).....	96
第98図	S B20平・断面図(1/80).....	97
第99図	S B21平・断面図(1/80).....	98
第100図	S B22平・断面図(1/80).....	99
第101図	6区②連構配位置図(1/100).....	100
第102図	S B23、S B24平・断面図(1/80).....	101
第103図	S P3501、S P3404、S P4102、S P6201～S P6203、5区トレンチ出土遺物(1/4).....	101
第104図	S K04平・断面図(1/40).....	102
第105図	S K04出土遺物(1/4).....	103
第106図	S X02平・断面図(1/60)出土遺物(1/4).....	103
第107図	S D6202断面図(1/40)	
	出土遺物(1/4、1/2).....	104
第108図	S D6102～S D6104断面図(1/40)	
	出土遺物(1/4).....	105
第109図	S D3503断面図(1/40)出土遺物(1/4).....	105
第110図	S D2202、S D2206、S D2207、S D2209、S D2210断面図(1/40).....	106
第111図	S R01～S R03土層図作成位置図(1/1,000).....	108
第112図	S R01(A・B)土層図(1/40).....	109
第113図	S R01(C)土層図(1/40).....	110
第114図	S R01(D)土層図(1/40).....	111
第115図	S R01(D)土層図(1/40).....	112
第116図	S R01(E)土層図(5)(1/40).....	113
第117図	S R01(A・B・C)出土遺物(1)(1/4).....	114
第118図	S R01(C)出土遺物(2)(1/4).....	116
第119図	S R01(C)出土遺物(3)(1/4).....	117
第120図	S R01(D)出土遺物(4)(1/4).....	119
第121図	S R01(D)出土遺物(5)(1/4).....	121
第122図	S R01(D)出土遺物(6)(1/4).....	122
第123図	S R01(D)出土遺物(7)(1/4).....	123
第124図	S R01(D)出土遺物(8)(1/4).....	125
第125図	S R01(D)出土遺物(9)(1/4).....	126
第126図	S R01(D)出土遺物(3)(1/4).....	127
第127図	S R01(D)出土遺物(3)(1/4).....	128
第128図	S R01(D)出土遺物(2)(1/4).....	129
第129図	S R01(D)出土遺物(3)(1/4).....	130
第130図	S R01(D)出土遺物(4)(1/4、1/2).....	131
第131図	S R01(D)出土遺物(5)(1/4).....	133
第132図	S R01(D)出土遺物(6)(1/4、1/2).....	134
第133図	S R01(E)出土遺物(1)(1/4).....	135
第134図	S R01(E)出土遺物(2)(1/4).....	136
第135図	S R01(E)出土遺物(3)(1/4).....	137
第136図	S R01(E)出土遺物(4)(1/4).....	138
第137図	S R02(A)土層図(1)(1/40).....	140
第138図	S R02(A)土層図(2)(1/40).....	141
第139図	S R02(B)土層図(3)(1/40).....	142
第140図	S R02(B・D)土層図(4)(1/40).....	143
第141図	S R02(A)出土遺物(1)(1/4).....	145
第142図	S R02(A)出土遺物(2)(1/4、1/2).....	146
第143図	S R02(A)出土遺物(3)(1/4).....	148
第144図	S R02(A)出土遺物(4)(1/4).....	149
第145図	S R02(A)出土遺物(5)(1/4).....	150
第146図	S R02(A)出土遺物(6)(1/4).....	151
第147図	S R02(A)出土遺物(7)(1/4).....	152
第148図	S R02(A)出土遺物(8)(1/4).....	154
第149図	S R02(A)出土遺物(9)(1/4).....	155
第150図	S R02(A)出土遺物(1)(1/4).....	156
第151図	S R02(A)出土遺物(2)(1/4).....	157
第152図	S R02(A)出土遺物(3)(1/4).....	158
第153図	S R02(A)出土遺物(3)(1/4).....	159
第154図	S R02(B)出土遺物(4)(1/4).....	160
第155図	S R02(C)出土遺物(5)(1/4).....	162
第156図	S R02(C)出土遺物(6)(1/4).....	163
第157図	S R02(C・D)出土遺物(1)(1/4).....	164
第158図	S R02(D)出土遺物(8)(1/4).....	166
第159図	S R02(D・A)出土遺物(9)(1/4).....	167
第160図	S R02(A・B)出土遺物(1)(1/4).....	169

第161図	S R02(B)出土遺物20(1/4) .....	170
第162図	S R02(A・B・C)出土遺物22(1/4) .....	172
第163図	S R03(A・B)土層図(1)(1/40) .....	173~174
第164図	S R03(B)土層図(2)(1/40) .....	176
第165図	S R03(C)土層図(3)(1/40) .....	177
第166図	S R03(D)土層図(4)(1/40) .....	178
第167図	S R03(A)出土遺物(1)(1/4) .....	179
第168図	S R03(A・C)出土遺物(2)(1/4、1/2) .....	181
第169図	S R03(C)出土遺物(3)(1/4、1/2) .....	183
第170図	S R03(C)出土遺物(4)(1/4) .....	184
第171図	S R03(C)出土遺物(5)(1/4) .....	185
第172図	S R03(C)出土遺物(6)(1/4) .....	186
第173図	S R03(C)出土遺物(7)(1/4) .....	187
第174図	S R03(C)出土遺物(8)(1/4、1/2) .....	188
第175図	S R03(C)出土遺物(9)(1/2) .....	189
第176図	S R03(C・D)出土遺物0(1/4、1/2) .....	190
第177図	S R03(D)出土遺物0(1/4) .....	192
第178図	S R03(D)出土遺物02(1/4) .....	194
第179図	S R03(D)出土遺物03(1/4) .....	195
第180図	S R03(D)出土遺物04(1/4) .....	196
第181図	S R03(D)出土遺物05(1/4、1/2) .....	197
第182図	S R03(D・C)出土遺物06(1/4、1/2) .....	199
第183図	S R03(C)出土遺物07(1/4) .....	200
第184図	S R03(B)出土遺物08(1/4) .....	201
第185図	S R03(B・C)出土遺物09(1/4、1/2) .....	202
第186図	S R03(C)出土遺物10(1/4) .....	204
第187図	S R03(C)出土遺物10(1/4) .....	205
第188図	S R03(C)出土遺物12(1/4) .....	206
第189図	S R03(C)出土遺物13(1/4) .....	207
第190図	S R03(C)出土遺物14(1/4) .....	208
第191図	S R03(C)出土遺物15(1/4、1/2) .....	209
第192図	S R03(C・D)出土遺物16(1/4、1/2) .....	210
第193図	S R03(D)出土遺物17(1/4) .....	212
第194図	S R03(D)出土遺物18(1/4、1/2) .....	214
第195図	S R03(C)出土遺物19(1/4) .....	215
第196図	S R03(C)出土遺物20(1/4) .....	216
第197図	S R03(C)出土遺物21(1/4、1/2) .....	217
第198図	S R03(D)出土遺物22(1/4) .....	218
第199図	S R03(D)出土遺物23(1/4、1/2) .....	220
第200図	S R03(C)出土遺物24(1/4、1/2) .....	221
第201図	S R03(C)出土遺物25(1/4) .....	222
第202図	S R03(C)出土遺物26(1/4) .....	223
第203図	S R03(C・D)出土遺物27(1/4、1/2) .....	224
第204図	S R03(D)出土遺物28(1/4) .....	226
第205図	S R03(D)出土遺物29(1/4、1/2) .....	227
第206図	S R03(D)出土遺物30(1/2) .....	228
第207図	S R03(D)出土遺物31(1/4) .....	229
第208図	S R03(D)断面図(1/40) 出土遺物32(1/4、1/2) .....	230
第209図	S R03(A・B)出土遺物33(1/4) .....	231
第210図	S R03(A・B・C)出土遺物34(1/4) .....	232
第211図	S R03(C)出土遺物35(1/4、1/2) .....	233
第212図	S R03(D)出土遺物36(1/4、1/2) .....	234
第213図	S R03出土遺物37(1/4) .....	235
第214図	S R03出土遺物38(1/4、1/2) .....	236
第215図	S R03出土遺物39(1/2) .....	237
第216図	3区①包含層出土遺物(1)(1/4、1/2) .....	239
第217図	3区②包含層出土遺物(2)(1/2) .....	240
第218図	3区③包含層出土遺物(1/4、1/2) .....	241
第219図	3区④包含層出土遺物(1/4、1/2) .....	241
第220図	川津東山田遺跡I区におけるプランツ・オパール 分析結果 .....	246
第221図	透構変遷図(1)(1/800) .....	270
第222図	透構変遷図(2)(1/800) .....	271
第223図	透構変遷図(3)(1/800) .....	272
第224図	透構変遷図(4)(1/800) .....	273

## 写真目次

写真1	プランツ・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真(1)	247
写真2	プランツ・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真(2)	248
写真3	プランツ・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真(3)	249
写真4	羽口・楕形鐵治津の顕微鏡組織	259
写真5	楕形鐵治津の顕微鏡組織(1)	260
写真6	楕形鐵治津の顕微鏡組織(2)	261
写真7	合鐵鉄津の顕微鏡組織	262
写真8	鐵塊系遺物の顕微鏡組織	263
写真9	棒状鉄片・板状金の顕微鏡組織	264
写真10	純形鐵治津・合鐵鉄津のマクロ組織	265
写真11	鐵塊系遺物のマクロ組織	266
写真12	棒状鉄片・板状金のマクロ組織	267
写真13	鐵塊系遺物表皮スラグの鉱物相の特性X線像	268

## 表 目 次

表1 四国横断自動車道（普通寺～高松）建設に伴う埋蔵文化財調査地一覧	2	表4 供試材の履歴と調査項目	258
表2 発掘調査及び整理作業の体制	5	表5 供試材の組成	258
表3 川津東山田遺跡I区のプラント・オパール分析結果		表6 赤色顔料付着土器一覧	275
	245		

## 図版目次

図版1 川津東山田遺跡I区遠景（下が北）	(2) S D3201土器出土状況（北から）
図版2 1区②、2区②（△地）・③、3区① 航測写真（左が北）	(3) S H04全景（北から）
図版3 2区②航測写真（下が北）	(4) S H04内S K01（北から）
図版4 3区④・⑥航測写真（下が北）	(5) S D3204断面
図版5 4区①航測写真（下が北）	(6) S D3204土器出土状況
図版6 6区②航測写真（左が北）	(7) S H05全景（南東から）
図版7(1) 2区②（南部）全景（南から） (2) 3区①全景（南から）	(8) S H06全景（北東から）
図版8(1) 3区③全景（東から） (2) 3区④全景（北西から）	図版14(1) S H06内S K01（南西から）
図版9(1) 6区①S B22・S H08付近（西から） (2) 6区②（西半部）全景（東から）	(2) S H06内S K01（西から）
図版10(1) 1区②（△地）全景（南から） (2) 2区②（△地）全景（南東から）	(3) S H06上面土器集中部（北西から）
(3) 2区③全景（南西から） (4) 2区④全景（西から） (5) 2区⑤（東部）全景（南西から） (6) 4区③全景（北東から） (7) 6区①北半全景（西から）	(4) S H07全景（西から）
図版11(1) 6区②北半全景（北西から） (2) 5区南北付（西から） (3) 5区南北付（西から） (4) 7区全景（南西から） (5) 7区付（南東から） (6) 4区①調査風景（東から） (7) 1区②S H01・02・S B10・12付近（南西から）	(5) S H07内S K01断面（北東から）
図版12(1) S H01壁構北西角土器出土状況（南から） (2) S H01内S K01土器出土状況（西から） (3) S H03・04全景（北東から） (4) S H03全景（北西から） (5) S D3201④断面（西から） (6) S D3201④断面（南から） (7) S D3201土器出土状況（南から）	(6) S H08全景（東から）
図版13(1) S D3201土器出土状況（北東から）	図版15(1) S B05全景（南東から）
	(2) S B06全景（北西から）
	(3) S E01曲物出土状況（北西から）
	(4) S E01曲物出土状況（北西から）
	(5) S D3103断面（北から）
	(6) S X01全景（南から）
	(7) S B11全景（南西から）
	(8) S B13・18全景（北東から）
	図版16(1) S D01A断面（東から）
	(2) S D01B②断面（北東から）
	(3) S H09全景（南西から）
	(4) S H09土器出土状況
	(5) S K01断面（北東から）
	(6) S K02断面（西から）
	(7) S K03断面（南から）
	(8) S D3106断面（南西から）
	図版17(1) S D3109 a断面（南西部）（南東から）
	(2) S D3209 a断面（北から）
	(3) S B15全景（北西から）
	(4) S P2201土器出土状況

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| (5) S B16出土土器状況        | 図版30(1) S D3210 a 出土土器 |
| (6) S B17全景 (南西から)     | (2) S D3210 b 出土土器     |
| (7) S B19全景 (北東から)     | (3) S D3209出土土器        |
| (8) S B21全景 (北東から)     | (4) S P2201出土土器        |
| 図版18(1) S B22全景 (南西から) | 図版31(1) S B16出土土器      |
| (2) S K04断面 (南から)      | (2) S K04出土土器          |
| (3) S R01B断面 (南西から)    | (3) S R01出土土器①         |
| (4) S R01B土器出土状況       | 図版32 S R01出土土器②        |
| (5) S R01C断面 (西から)     | 図版33 S R01出土土器③        |
| (6) S R01C断面 (南西から)    | 図版34 S R01出土土器④        |
| (7) S R01D断面           | 図版35 S R01出土土器⑤        |
| (8) S R01E土器出土状況       | 図版36 S R01出土土器⑥        |
| 図版19(1) S R02断面 (南から)  | 図版37 S R01出土土器⑦        |
| (2) S R02断面 (北東から)     | 図版38 S R01出土土器⑧        |
| (3) S R02断面 (南から)      | 図版39 S R01出土土器⑨        |
| (4) S R02断面 (北西から)     | 図版40 S R02出土土器①        |
| (5) S R03C断面 (北から)     | 図版41 S R02出土土器②        |
| (6) S R03D断面 (西から)     | 図版42 S R02出土土器③        |
| (7) S R03D断面 (南東から)    | 図版43 S R02出土土器④        |
| (8) S R03D断面 (北東から)    | 図版44 S R02出土土器⑤        |
| 図版20(1) S H01出土土器      | 図版45 S R02出土土器⑥        |
| (2) S D3201出土土器①       | 図版46 S R02出土土器⑦        |
| 図版21(1) S D3201出土土器②   | 図版47 S R02出土土器⑧        |
| (2) S D3204出土土器        | 図版48 S R02出土土器⑨        |
| 図版22 S H06出土土器         | 図版49 S R02出土土器⑩        |
| 図版23(1) S H07出土土器      | 図版50 S R02出土土器⑪        |
| (2) S P3401出土土器        | 図版51 S R02出土土器⑫        |
| (3) S D3120出土土器        | 図版52 S R02出土土器⑬        |
| (4) S D3403出土土器        | 図版53 S R02出土土器⑭        |
| (5) S D6201出土土器        | 図版54 S R02出土土器⑮        |
| 図版24(1) S D2401出土土器    | 図版55 S R02出土土器⑯        |
| (2) S D2403出土土器①       | 図版56 S R02出土土器⑰        |
| 図版25(1) S D2403出土土器②   | 図版57 S R02出土土器⑱        |
| (2) S E01出土土器          | 図版58 S R02出土土器⑲        |
| (3) S D3119出土土器        | 図版59 S R03出土土器①        |
| (4) S X01出土土器          | 図版60 S R03出土土器②        |
| (5) S D01A出土土器①        | 図版61 S R03出土土器③        |
| 図版26(1) S D01A出土土器②    | 図版62 S R03出土土器④        |
| (2) S D01B出土土器①        | 図版63 S R03出土土器⑤        |
| 図版27 S D01B出土土器②       | 図版64 S R03出土土器⑥        |
| 図版28(1) S D01C出土土器     | 図版65 S R03出土土器⑦        |
| (2) S H09出土土器          | 図版66 S R03出土土器⑧        |
| (3) S P3102出土土器        | 図版67 S R03出土土器⑨        |
| (4) S D3109出土土器①       | 図版68 S R03出土土器⑩        |
| 図版29 S D3109出土土器②      | 図版69 S R03出土土器⑪        |

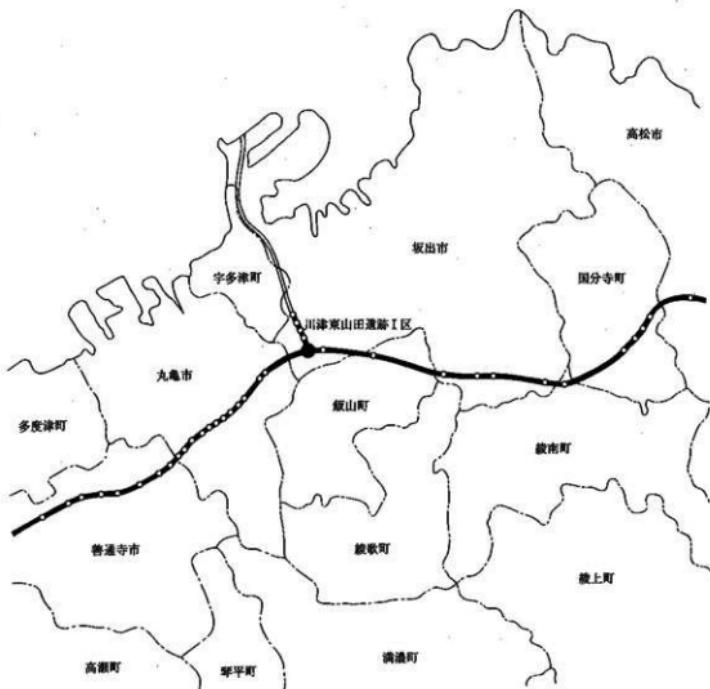
- 图版70 S R03出土土器②
- 图版71 S R03出土土器③
- 图版72 S R03出土土器④
- 图版73 S R03出土土器⑤
- 图版74 S R03出土土器⑥
- 图版75 S R03出土土器⑦
- 图版76 S R03出土土器⑧
- 图版77 S R03出土土器⑨
- 图版78(1) S R03出土土器⑩  
(2) 3区①包含层出土石器  
(3) 3区②包含层出土石器
- 图版79(1) S D3201出土石器  
(2) S D3204出土石器  
(3) S H06出土石器  
(4) S B01出土石器
- 图版80(1) S B05出土石器  
(2) S D01出土石器①
- 图版81(1) S D01出土石器②  
(2) S D3209出土石器  
(3) S R01出土石器
- 图版82(1) S R01·02出土石器  
(2) S R02出土石器
- 图版83 S R03出土石器①
- 图版84 S R03出土石器②
- 图版85 S R03出土石器③
- 图版86 S R03出土石器④
- 图版87 S R03出土石器⑤
- 图版88 S R03出土石器⑥
- 图版89(1) S R03出土石器⑦  
(2) 3区①包含层出土石器
- 图版90(1) 3区④包含层出土石器  
(2) 出土石器①
- 图版91 出土石器②

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査にいたる経過

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団總裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では、この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に国庫補助事業として分布調査<sup>(1)</sup>を実施し、これを基に調査対象面積を39万m<sup>2</sup>余りと判断した。路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と文化庁の協議により、基本的には記録保存で対応することが決定した。



第1図 四国横断自動車道(善通寺～高松)路線図

No.	遺跡名	所在地	調査面積 (ha)	調査期間	遺跡	遺物
1	鷹川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10,200	2.4~2.3, 3.1 2.4~2.3, 3.1	弥生時代(自然河川), 中世遺物, 近世半穴住居, 漢, 古代, 漢	弥生土器, 土師器, 瓦器, 石器, 木製品
2	鷹川四条遺跡	善通寺市原田町・不動町	20,200 1,700 300	7.1~2.3, 3.1 2.5~2.6~2.12.5 3.4~3.6, 18	古代墳墓群, 中世遺物, 土坑墓, 自然河川	陶文土器, 土師器, 瓦器, 破器, 中世鐵
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町中村	12,041 1,300	6.4~8~2~2.3, 3.1	弥生時代窪穴住居, 漢, 自然河川	弥生土器ほか
4	三条周島遺跡	丸亀市三条町黒島	7,677 1,700	6.3~15~6.3, 11, 26 2.60~2~2.3, 3.1	ユックト, 漢, 遺物 窪穴住居, 捨立柱建物, 漢	旧石器, 弥生土器, 土師器, 瓦器, 破器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
5	野家原遺跡	丸亀市野家町原	17,069 2,600	6.3~4~18~2~2.3, 3.1	窪穴住居, 漢, 灰陶器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器	弥生土器, 土師器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
6	野家一里塚遺跡	丸亀市野家町八幡上	14,067 6,450	6.3~4~18~2~2.3, 3.1	板立柱建物, 漱, 自然河川	弥生土器, 土師器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
7	群家大林上遺跡	丸亀市群家町大林上	11,175 12,741	6.3~15~2~2.3, 3.22 6.3~6.15~2~2.17	板立柱建物, 漱, 自然河川 板立柱建物, 漱, 灰陶器	有毛尖底器, 瓦器, 瓦器
8	群家田代遺跡	丸亀市群家町田代	3,033 4,034	6.3~12~2~2.3, 3.25 6.3~13~2~2.27	板立柱建物, 漱 自然河川	弥生土器, 瓦器
9	川西北・七条川遺跡	丸亀市川西北・十七条	4,760 4,760	7.2~2~2~2.3, 3.1	板立柱建物, 漱	土師器, 瓦器
10	川西北・七条川遺跡	丸亀市川西北・十七条	12,208 3,368	4.10~8~3.11 6.3~12~3~2.27	自然河川	土師器, 瓦器
11	川西北・七条川遺跡	丸亀市川西北・十七条	3,000 2,800	2.3~3~2~2.3, 3.1	板立柱建物, 漱	土師器, 瓦器
12	鹿野・東二瓦窯遺跡	丸亀市鹿野町東二瓦窯	500	2.8~2~3~3.2, 3.3	弥生時代窪穴住居, 古墳時代窪穴住居, 柱穴	弥生土器, 土師器, 瓦器
13	鹿野・東二瓦窯遺跡	丸亀市鹿野町東二瓦窯	500	2.8~2~3~3.2, 3.3	古墳時代窪穴住居, 古墳時代窪穴住居, 柱穴	弥生土器, 土師器, 瓦器
14	川津分山崎新野跡	坂出市川津町新野	28,100 5,400	2.4~2~2~2.3, 3.17	古墳時代窪穴住居, 古墳時代窪穴住居, 古代~中世遺物, 漱	陶文土器, 土師器, 瓦器, 土器, 土器, 瓦器
15	川津山東山遺跡	坂出市川津町東山元	28,100 5,400	2.4~2~2~2.3, 3.17	古墳時代窪穴住居, 古代~中世遺物, 漱	陶文土器, 土師器, 瓦器, 土器, 土器, 瓦器
16	川津山西遺跡	坂出市川津町	15,260 5,700	2.4~3~2.28 3.4~4~3.13	弥生時代窪穴住居, 古代~中世立柱建物, 漱	弥生土器, 土師器, 瓦器, 小刀
17	川津中瀬遺跡	坂出市川津町	9,650 2,000	2.5~1~3.1~3.16	弥生時代(水田, 并棚), 漱, 自然河川	陶文土器, 弥生土器, 瓦器, 灰陶石包丁(保存), 水器
18	川津下瀬遺跡	坂出市川津町	10,400 1,350	2.5~10~3~3.8 3.7~3~3.27	弥生時代(溝, 自然河川), 中世(溝), 漱	弥生土器, 土師器, 瓦器
19	川津二代瓦窯遺跡	坂出市川津町	35,160 3,300	2.4~12~3~2.28 3.7~3~3.7~16	弥生時代自然河川, 弥生時代(窪穴住居), 瓦器, 瓦器	弥生土器, 土師器, 瓦器
20	川津一ノ原遺跡	坂出市川津町	2,200 1,350	2.0~2~2.12.26 3.7~3~3.9~27	弥生時代自然河川, 瓦器, 瓦器	弥生土器, 土師器, 瓦器
21	龜山一本松遺跡	龜山町	3,000 2,900	2.10.30~2~2.12.26 5.22~7.24	窪穴立柱建物, 漱	弥生土器, 土師器
22	府中地区	坂出市府中町	4,17~5.16	2.12.26	土坑	弥生土器, 土師器
23	越前島下池内遺跡	池内町	4,400 900	2.11~2~10.2 9.1~12.26	弥生時代水田, 動物足跡 古墳時代窪穴住居, 石器	弥生土器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
24	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	4,400 5,600	2.11~2~10.2 6.1~1~12.26	弥生時代水田, 水田, 動物足跡 前方後円墳(主体部3基)	弥生土器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
25	国分寺御井遺跡	国分寺町福家	11,600 8,680	2.1~2~2.26 5.10~3~3.25	中近世遺物 古石造り井戸, 古墳, 土坑	弥生土器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
26	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	1,270	5.10~3~3.18	古石造り井戸, 古墳, 土坑	弥生土器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
27	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	900	5.1~1~12.26	前方後円墳	弥生土器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器
28	中間西井手遺跡	高松市中間町	11,600 8,680	2.1~2~2.26 5.10~3~3.25	近世遺物, 墓地, 墓地, 墓地, 墓地	弥生土器, 瓦器, 灰陶器, 瓦器, 瓦器

表 1 四国横断自動車道(善通寺→高松)建設に伴う埋蔵文化財調査全地一覧

香川県教育委員会では、これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。

その結果、昭和63年度当初から2カ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査終了後に実施することなどが決定した<sup>(1)</sup>。これを受けて香川県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに、専門職員の増員などの措置を実施した。

平成元年には、坂出市川津町に所在する埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため、日本道路公団と協議の上、用地買収の進捗に併せて予備調査を実施した。予備調査の着手に当たっては、地元関係者、四国横断自動車道・南進自動車道対策協議会、同中塙地区対策協議会、同西又地区対策協議会、坂出市都市開発部瀬戸大橋・四国横断道対策室、香川県坂出土木事務所横断道対策課等の多大な協力を得た。

予備調査の結果、川津東山田遺跡を始めとする集落跡を中心とした6遺跡についての内容を把握し、同地区での本調査対象面積を111,750m<sup>2</sup>に確定した。

今回報告する川津東山田遺跡I区は、調査対象面積は28,600m<sup>2</sup>である。調査の都合上、調査区はI区とII区に分けて行った。本調査は平成2年8月2日に開始し、未退去家屋部分を残し、平成3年3月20日に終了した。平成2年度に調査を行えなかった個所については、平成3年9月2日に調査を開始し、平成3年9月4日に終了した。

(1)香川県教育委員会1987『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』

(2)最終的に、用地買収・家屋退去等の関係で調査期間は3年6ヶ月を要し、本調査面積は予備調査による遺跡内容の確定を随時実施したことから、319,201m<sup>2</sup>になった。

## 第2節 調査の経過

### 1. 調査の経過

川津東山田遺跡の発掘調査は対象地をI・II区に分けて実施した。平成2年5月に予備調査を行い、横断道ジャンクション部分に相当する飯野山北麓緩斜面部分と、その西側の丘陵部について遺跡の広がりを確認することができた。遺跡の中には自然河川があることが確認できたため、掘り下げに排出する土量の資料を得るために、6月には補足の予備調査を行った。その結果を基に、発掘調査はI・II区に分けて行い、I区16,300m<sup>2</sup>、II区12,300m<sup>2</sup>の合わせて28,600m<sup>2</sup>の本調査を実施することとなった。

本調査は、平成2年8月より開始した。調査方式は工事請負方式である。調査は3区④から始め、仮設道を順次付け替ながら3区②で終了した。5区については、予備調査の結果、遺構が希薄であったこと、本調査で行った4区の調査でもきわめて遺構密度が少なく、さらに山手側である5区で遺構が検出する見込みがあまりなくなったことから、まずトレンチ調査を実施し、遺構があれば順次広げる方法を探った。しかし、遺構がみられなかつたことで、トレンチ調査で終了した。平成3年度は、平成2年度に調査を実施できなかった未退去家屋のうち、平成2年度の調査の結果、遺構の広がる可能性のある3区④の南側にあたる部分500m<sup>2</sup>について調査を実施した。調査方法は直営方式で、平成3年9月2日～9月4日まで実施し、川津東山田遺跡の調査を終了した。

今回の整理作業はI区の報告を行うもので、平成11年10月1日から開始し、平成13年3月30日に終了した。II区の整理作業については、平成13年度に行う予定である。

### 2. 発掘調査及び整理作業の体制

表2のとおり

整理作業に携わった方々は以下の通りである。

整理員 岡崎江伊子

整理補助員 合田和子、前田好美

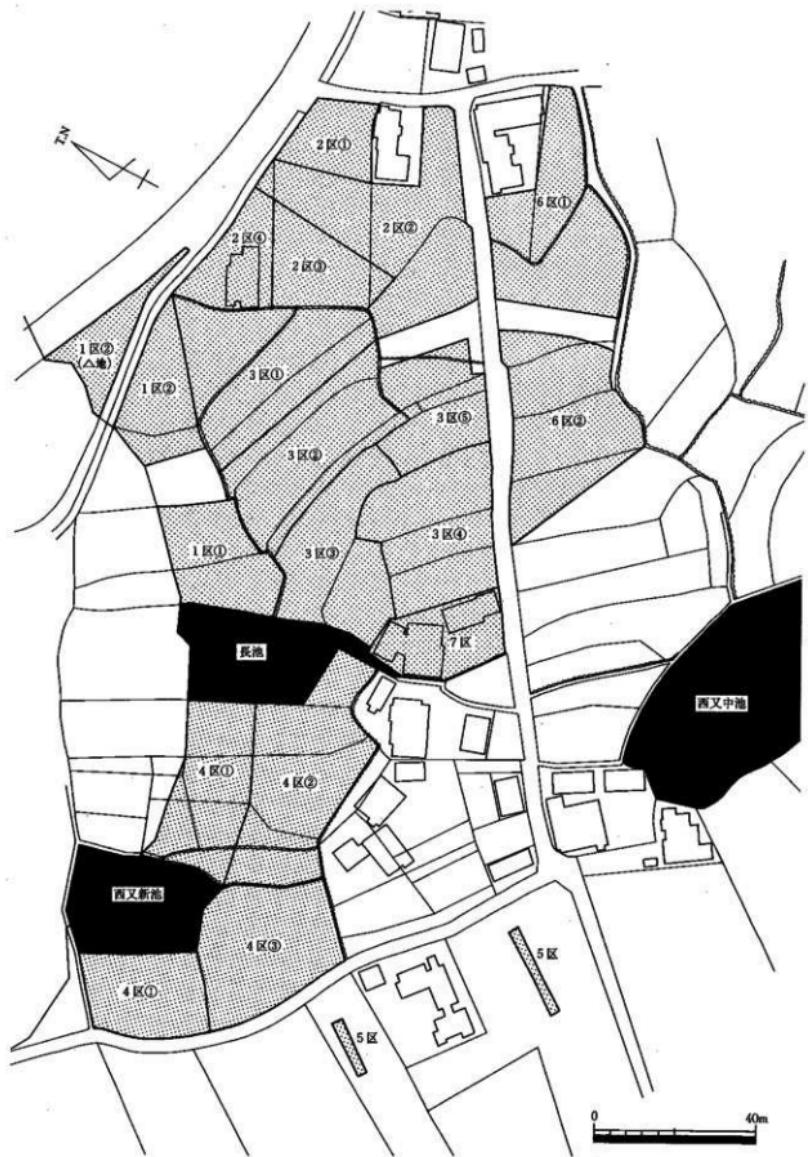
整理作業員 松尾優子、松本知子、池内妙子、藤川洋代、加藤恵子、東川真希子、東条貴美

地崎裕子

## 香川県教育委員会 文化行政課

		平成2年度		平成3年度		平成11年度		平成12年度	
総括	課長 瀧子祐佐 副主幹 菅原 亮弘 野瀬鶴二郎	太田 彰一 菅原 亮弘 野瀬鶴二郎	課長 主幹 課長補佐 副主幹 係長 主任主事 主事 主事	中村 仁 菅原 亮弘 小原 克己 野瀬鶴二郎 (~ 5.31)	課長 主幹 課長補佐 副主幹 係長 主任主事 主任主事 主任主事	小原 克己 史郎 常雄 菅原 常雄	課長 副主幹 係長 主任主事 主任主事 主任主事	小原 克己 史郎 常雄 菅原 常雄	小原 克己 史郎 常雄 菅原 常雄
総務	係長 主任主事 主事 主事	宮内 慎生 横木久美子 (~ 5.31) 石川恵三子 (6.1 ~)	係長 主任主事 主任主事 主任主事	菅原 亮弘 横木 伸秀 (~ 6.1 ~) 石川恵三子	係長 主任主事 主任主事 主任主事	中村 敦 三宅 隆子 松村 浩史 石川恵三子	中村 敦 三宅 隆子 松村 浩史 石川恵三子	中村 敦 三宅 隆子 松村 浩史 石川恵三子	中村 敦 三宅 隆子 松村 浩史 石川恵三子
振興文化財 係長 主任技術 技術	大山 真光 岩隈 孝 北山健一郎	藤好 史郎 岩隈 孝 北山健一郎	係長 主任技術 主任技術	西村 審文 森 格也 鷹崎 錠司	係長 主任技術 主任技術	西村 審文 森 格也 鷹崎 錠司	文化財専門員 文化財専門員 文化財専門員	文化財専門員 文化財専門員 文化財専門員	文化財専門員 文化財専門員 文化財専門員
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター									
総括	所長 次長	十川 桑 安藤 道雄	所長 次長	十川 桑 安藤 道雄	所長 次長	菅原 亮弘 川原 格掌	所長 次長	菅原 亮弘 (~ 10.31) 小原 克己 (11.1 ~)	所長 次長
総務	係長 (土木) 主任 (土木) 主任 (土木)	加藤 正司 山地 修 三宅 亮輔	係長 (事務) 係長 (事務) 主任 (土木)	加藤 正司 (~ 5.31) 土井 茂樹 (6.1 ~) 山地 修 (~ 5.31)	係長 (事務) 主任 (土木) 主任 (土木)	田中 秀文 新 一郎	係長 (事務) 主任 (事務)	川原 格掌 大西 誠治 新 一郎	川原 格掌 大西 誠治 新 一郎
調査	参事 係長 係長 係長	見勢 優 渡部 明夫 藤好 史郎 高橋 昌宏	参事 係長 主任技術 主任技術	渡部 明夫 昌宏 進哉 西岡 伸也 白川 悅代	参事 係長 主任技術 主任技術	大山 真光 木下 陽一 山元 素子	主任技術 主任技術 主任技術 調査技術員	主任技術 主任技術 主任技術 主任技術	主任技術 主任技術 主任技術 主任技術

表2 発掘調査及び整理作業の体制

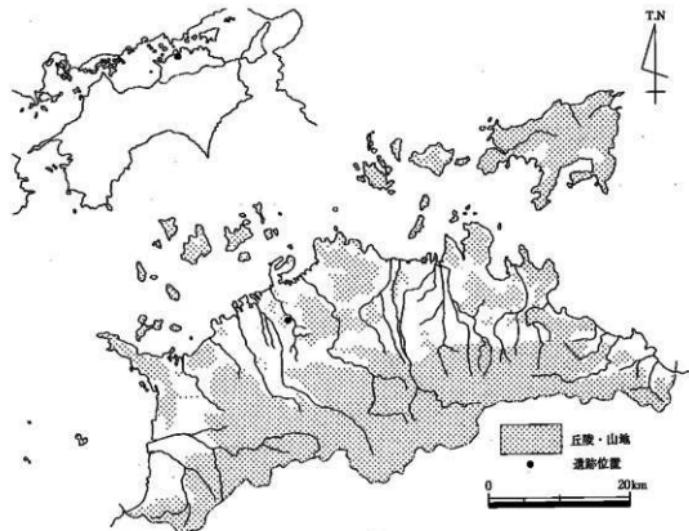


第2図 調査区割図(1/1,200)

## 第2章 立地と環境

川津東山田遺跡は丸龜平野の東部、飯野山麓に位置する。調査前の標高は約10~31mであった。調査前は、おおむね段丘1面に相当する1・2・3・6区は水田やビニールハウス・宅地に、段丘2面に相当する4・5区は果樹園に利用されていた。調査地の周辺地形については木下晴一氏による詳しい分析がなされているので、参照されたい。<sup>(1)</sup>今回報告する川津東山田遺跡I区は飯野山の北麓にあたり、地形は若干北へ傾斜している。歴史的環境については『川津一ノ又遺跡I』、『川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』<sup>(2)</sup>で詳述しているため、省略した。

- (1) 木下晴一 1995「第2章 遺跡の立地と環境」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十六冊 川津二代取遺跡」香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团
- (2) 山下平重 1997「第2章 立地と環境」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十六冊 川津一ノ又遺跡I」香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团  
藏本晋司 1999「第2部 川津川西遺跡の調査 第1章 立地と環境」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十三冊 川津川西遺跡・飯山一本松遺跡」香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团



第3図 遺跡位置図(1)



第4図 遺跡位置図(2)(1/5,000)



1. 川津東山田遺跡  
 2. 聖通寺山古墳  
 3. 聖通寺城跡  
 4. 田尾茶臼山古墳  
 5. 川津茶臼山古墳  
 6. 蓼尺茶臼山古墳  
 7. 下川津遺跡  
 8. 川津中塚遺跡  
 9. 川津下橋遺跡  
 10. 川津二代取遺跡  
 11. 川津元結木遺跡  
 12. 川津西又遺跡  
 13. 川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区  
 14. 川津一ノ又遺跡  
 15. 川津川西遺跡  
 16. 三ノ池古墳  
 17. 青ノ山山頂遺跡  
 18. 青ノ山古墳群  
 19. 青ノ山窯跡群  
 20. 竜塚古墳  
 21. 吉岡神社古墳  
 22. 青ノ山2号窯跡  
 23. 青ノ山城跡  
 24. 飯野山山頂遺跡  
 25. 坂本神社遺跡  
 26. 飯野東分山崎南遺跡  
 27. 飯野東二瓦砾遺跡

第5図 周辺の遺跡(1/35,000)

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

川津東山田遺跡は県道富熊字多津線の南側、飯野山北麓に位置する遺跡である。調査区割りはおおむね旧水田を単位として1区①から6区②まで設定し、平成3年度に行った部分は7区とした。

調査地は平野部へ取り付く部分から緩斜面地（段丘1面）、やや傾斜が急になる場所（段丘2面）まで、標高約15m～約16.5mまで位置する。場所によってはビニールハウスが多く設置されており、攪乱が及んでいた場所も少なくなかった。調査の結果、調査地の東・西側に谷筋が走り、北側に湿地帯が横たわることがわかった。遺構はその間の微高地上で検出した。また、遺構は段丘1面（1～3・6・7区）でおもに検出し、段丘2面（4・5区）では遺構密度は極端に低くなかった。

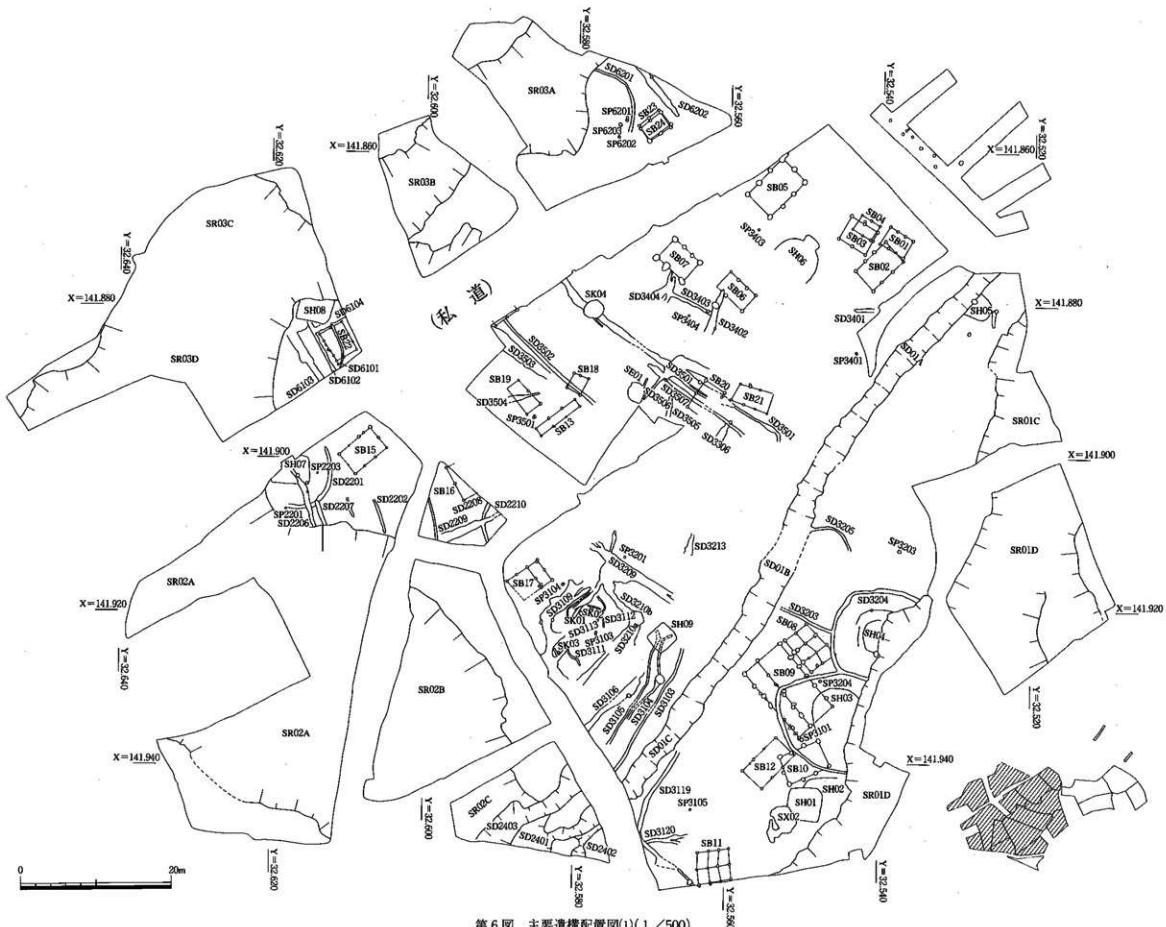
1区①・②（西半部）、3区③（西半部）では幅約20mの谷筋を検出した。この谷筋の堆積土中からはわずかに摩滅の進んだ弥生土器が出土しただけであるが、この谷筋を切って、13世紀頃に形成された2条の流路から、弥生時代後期～13世紀代の土器が大量に出土したことにより、この部分にも弥生時代後期の遺構が広がっていた様子も窺える。

6区①・②では集落の東側に広がる谷筋を検出した。幅約12mの谷筋で、6区②では埋土がほぼ全部が礫で占められていたことから、水流の激しさが窺える。この流路の埋土中からは弥生土器しか出土しておらず、流路の時期もこの頃と思われる。6区②から6区①にかけては、中世以降の小流路が土層断面から数条あったことが想定できるが、平面的に追うことはできなかった。

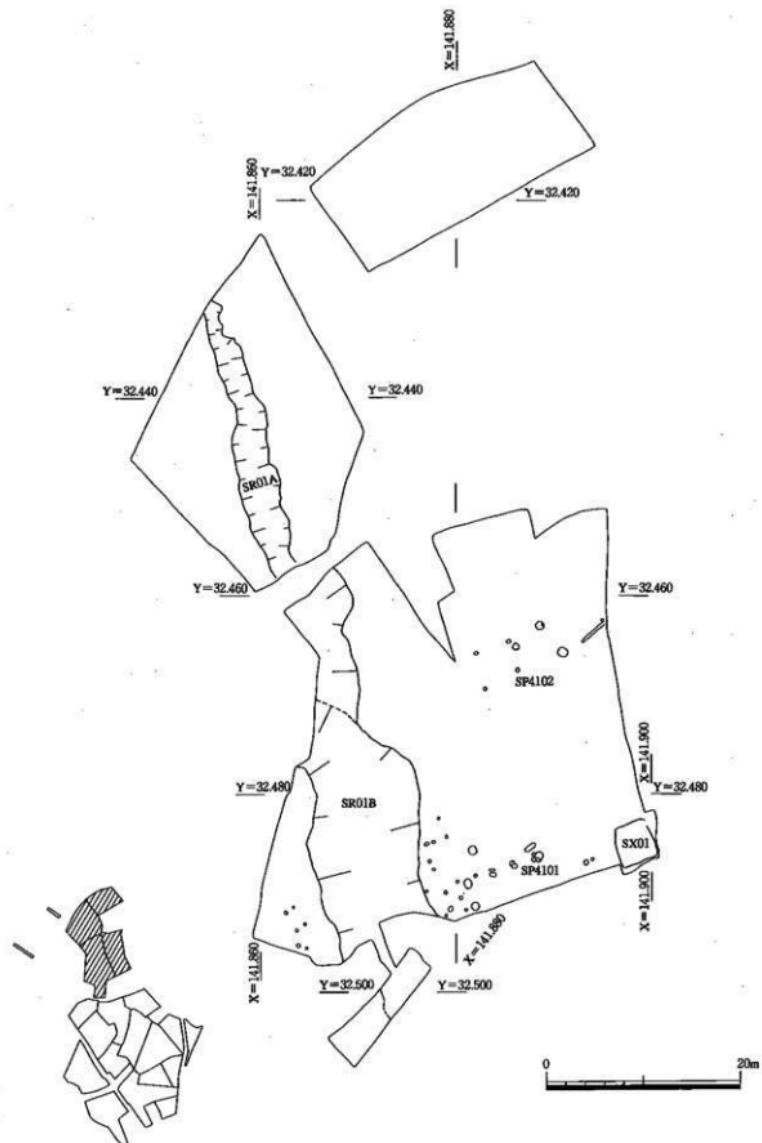
1区②△地・2区①・②・③・④・6区①では、遺跡の北側を限る湿地帯の埋土と思われる黒色粘土層を検出した。この黒色粘土層は川津一ノ又遺跡でも検出しているもので、川津一ノ又遺跡の集落と川津東山田遺跡の集落の境となっていたと考えられる。この黒色粘土層を中心とする埋土中からは多量の弥生土器が出土している。また、この湿地帯の名残は後の時代まで続いたようで、この上面には、古代～中世にかけての包含層が広がり、そのうちの複数面から、水田面を川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区、川津東山田遺跡Ⅰ区で検出している。このことから古代から中世にかけて水田域が広がっていたことがわかる。

1区②（東半部）・2区②（南半部）・3区①・②・③（東半部）・④・⑤・6区①（西半部）・6区②（西半部）は段丘1面の微高地上に当たり、遺構密度が最も高かった場所である。しかし、遺構の重複は、隣接する川津一ノ又遺跡などに比べれば少なく、川津一ノ又遺跡ほどには発展した集落ではなかったと思われる。遺構はわずかに弥生時代中期後半のものが含まれるが、おもに弥生時代後期後半～終末期、8世紀、9世紀後半～10世紀前半、13世紀頃の遺構を検出した。弥生時代後期の遺構は、おもに微高地の縁辺部や、段丘1面でも比較的高い位置にある3区④で検出している。古墳時代には集落はみられなくなり、8世紀代には徐々に遺構がみられる始めるが、遺構密度は低い。9世紀後半～10世紀前半代は集落の中心が段丘1面でも比較的標高の低い3区①・②（南部）・1区②（東半部）へ移る。ここでは延長82mに及ぶ幹線水路を中心に、地割を形成する溝・掘立柱建物のほか、精練鍛冶を行っていたと考えられる遺構群などを検出した。なお、この遺跡は丘陵の山裾に立地するため、条里型地割はあまり関係ない。13世紀代の遺構は、地割を形成する溝と小規模の掘立柱建物を散在して検出したが、10世紀代に比べて、遺構密度は低くなる。

段丘2面に相当する4区・5区では、西側の谷筋の上流に当たると思われる谷筋と遺構を検出しているが、遺構密度はきわめて希薄で、時期の判明する遺構も少ない。



第6図 主要構造配置図(1)(1 / 500)



第7図 主要造構配置図(2)(1/500)

## 第2節 土層序

土層図中、自然河川や湿地帯を含む場所は、自然河川の項目で掲載し、ここでは微高地部分の土層で斜面に直交するものと平行するものを載せた。

微高地部分の土層序は、わずかに包含層を含む部分があるものの、大半は耕作土・床土直下はベースである。ベースは段丘1面では黄灰色粘土層、段丘2面では黄褐色・褐色粗砂層で山土であった。微高地の東・西側では谷筋を、北側では湿地帯を検出した。微高地部分でも自然河川や湿地帯の近くになると、耕作土と地山の間に包含層や、自然河川の堆積土の最上部と考えられる土層が堆積するが、これらの土層については自然河川の項で述べる。

### (1) 土層図① (第9図)

2区②から7区にかけての断面で、調査区のほぼ中央の平野部から山麓への断面である。調査前の標高は11.9m～16.5mで、標高差4.6mである。3区④の低い部分と7区で弥生時代後期の遺物包含層(灰褐色砂質土)が堆積することを除けば、耕作土や近世の耕作土と思われる明黄灰色土の下部にはおおむね黄灰色砂質土のベースがある。遺構面までは一貫して50cm程度と浅い。

### (2) 土層図② (第10図)

3区①東壁の部分である。丘陵斜面に平行する壁面の土層で、微高地の土層中、最も低い位置の土層図である。調査前の標高は約10.8mである。耕作土の下部には近世の耕作土と思われる黄褐色系の砂質土層・中世の包含層の灰褐色砂質土層があり、南側の方では暗褐灰色砂混粘土層(古代包含層)、その下部には部分的に黒色粘土層も薄くみえる。ベースは暗青灰色粘土混砂質土で、この場所がやや湿潤であったことを示すと思われる。中世・古代包含層および弥生時代後期の遺物を含む黒色粘土層はいずれも2区の湿地帯から延びるものと思われ、その縁辺部に当たると考えられる。

### (3) 土層図③ (第10・11図)

3区①南側の壁面の土層図である。等高線に直交する方向と平行する方向のおおむね中間くらいの方位である。調査前の標高は約11.5mである。土層図②同様、耕作土の下部には薄く2区から続く灰褐色砂質土(中世包含層)が堆積するが、暗褐灰色砂質土(古代包含層)や黒色粘土層(弥生時代後期包含層)は認められなくなる。ベースは明灰黄色砂質土である。

### (4) 土層図④ (第11図)

4区①北壁の土層図である。段丘2面に相当し、等高線に直交する方向である。調査前の標高は17.5m～14.8mである。耕作土の下部には褐色や黄褐色砂質土など山土が堆積する。ベースは黄褐色～明褐色粗砂を中心とする土で、丘陵地の色合いを濃くする。

### (5) 土層図⑤ (第11図)

4区①東壁の土層図である。斜面に平行する方向の土層で、標高は調査前で約15.7mである。段丘2面の中では最も低い場所である。基本的な土層序は土層④とあまり変わらないが、ベースまでの深さは浅い。南側は自然河川に向かって低くなるので、その上面に堆積したと考えられる茶灰色粗砂質土を中心とする層が堆積する。

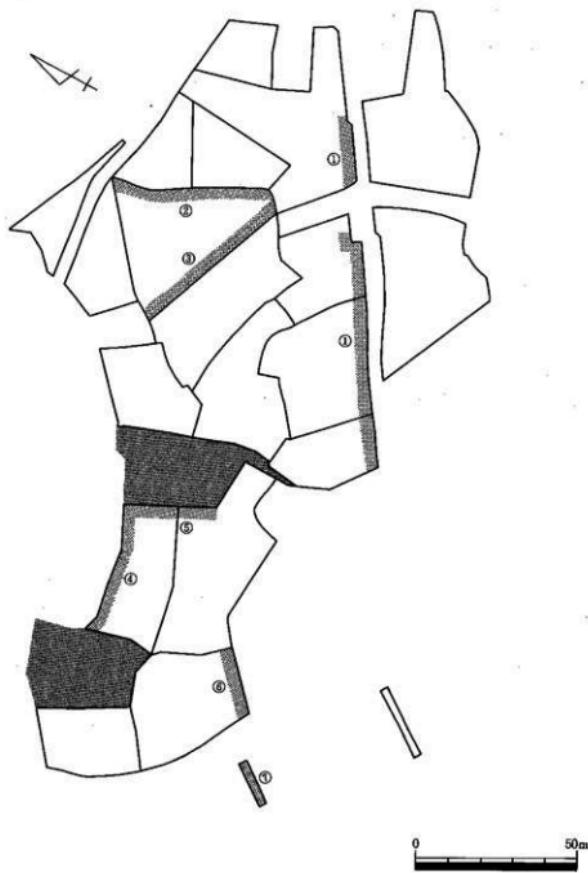
### (6) 土層図⑥ (第12図)

4区③南壁の土層図である。斜面に直交する方向で、4区で最も高い調査区である。調査前の標高は19.6m～23.0mである。上部は黄褐色土の埋土で、果樹園による搅乱土である。ベースは明黄灰色

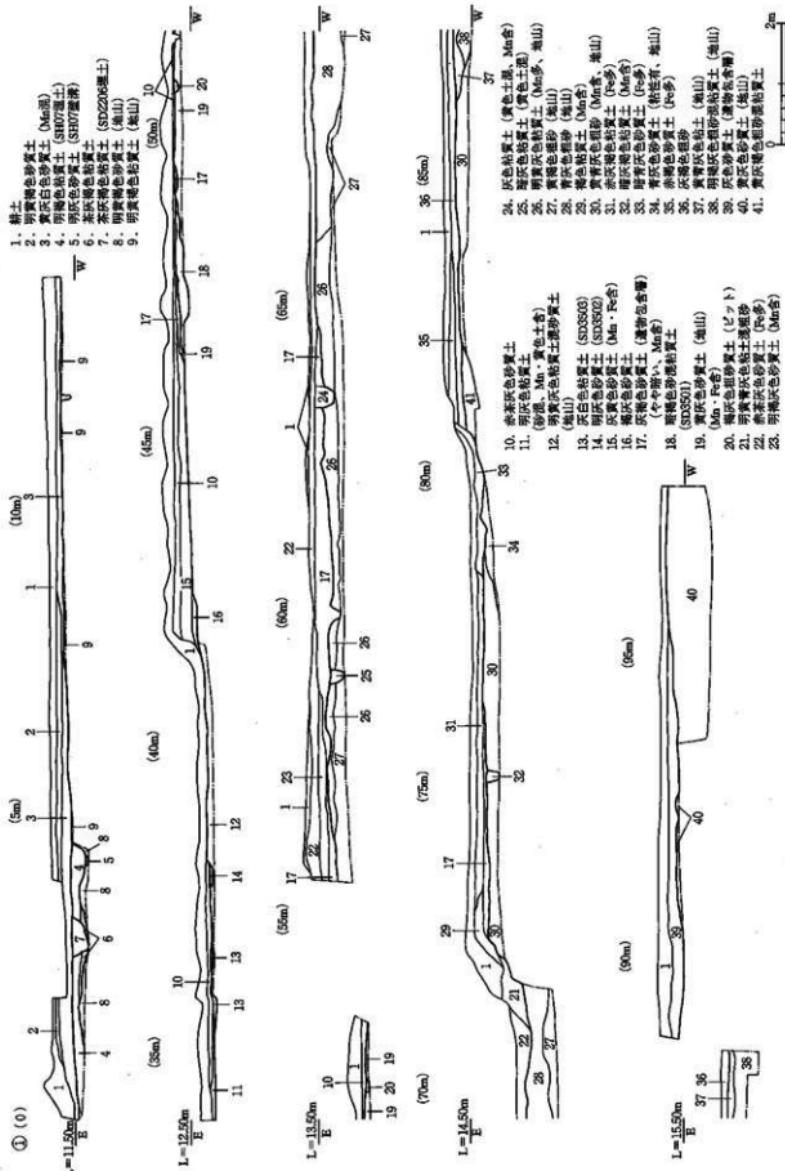
粘質土～粗砂質土である。この調査区の遺構は小規模の流路以外は皆無であった。

(7) 土層図⑦ (第12図)

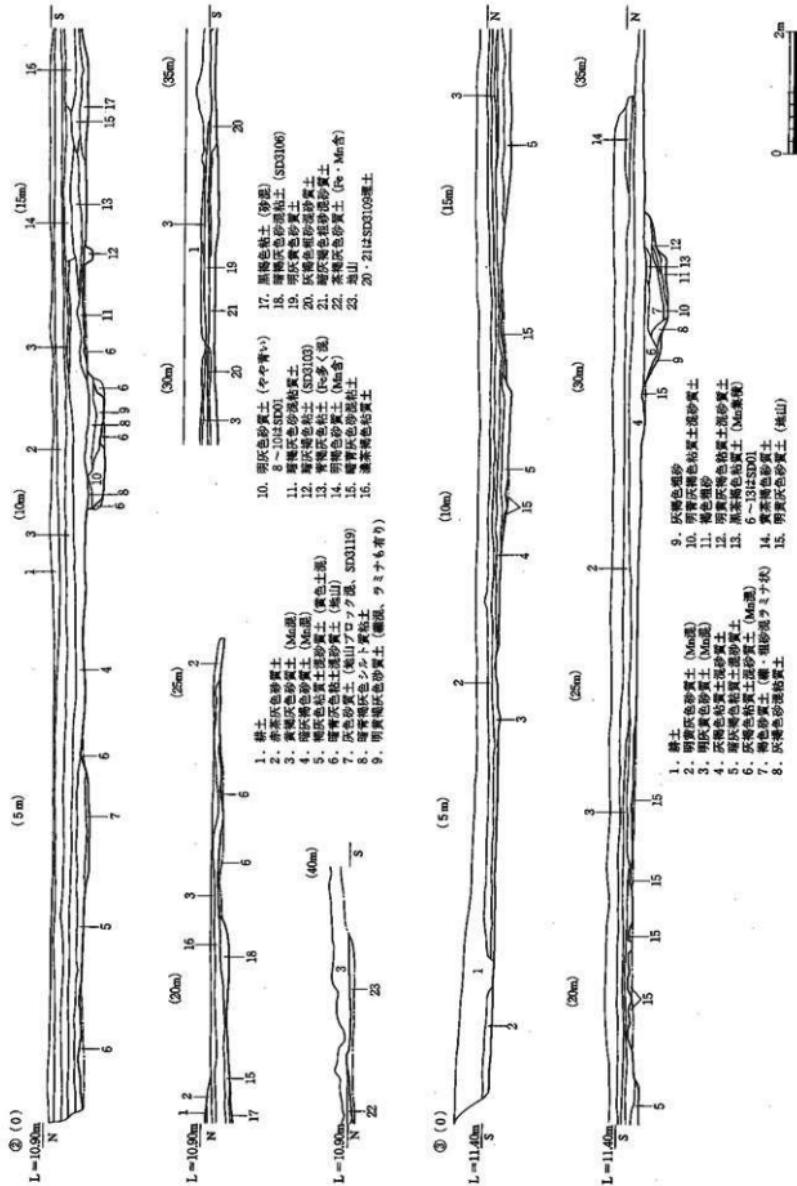
5区②北側トレンチの土層図である。斜面に直交する方向で、調査地の中で最も標高の高い場所にある。調査前の標高は23.4～31mである。耕作土の下部は淡褐色小礫混じりシルト、その下部に褐色混じりシルト・砂が堆積する。この調査区で遺構は皆無であった。



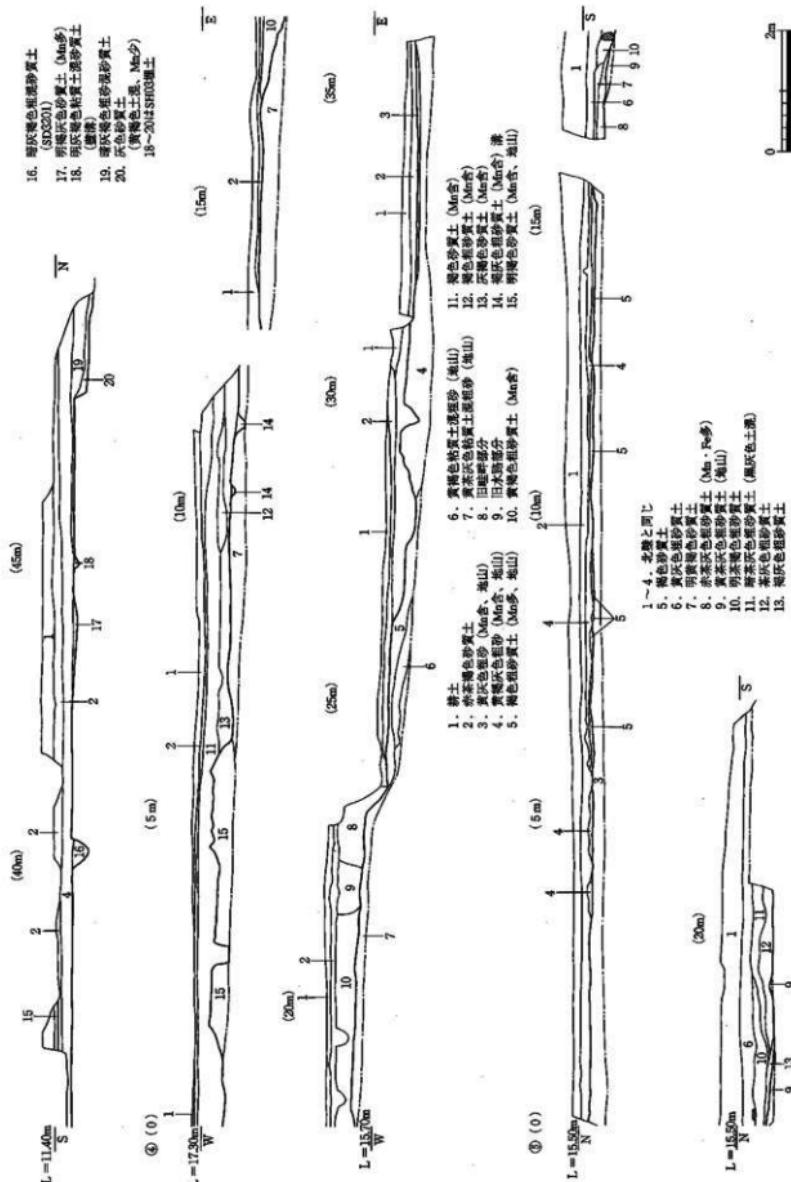
第8図 調査区土層図位置図(1/1,500)



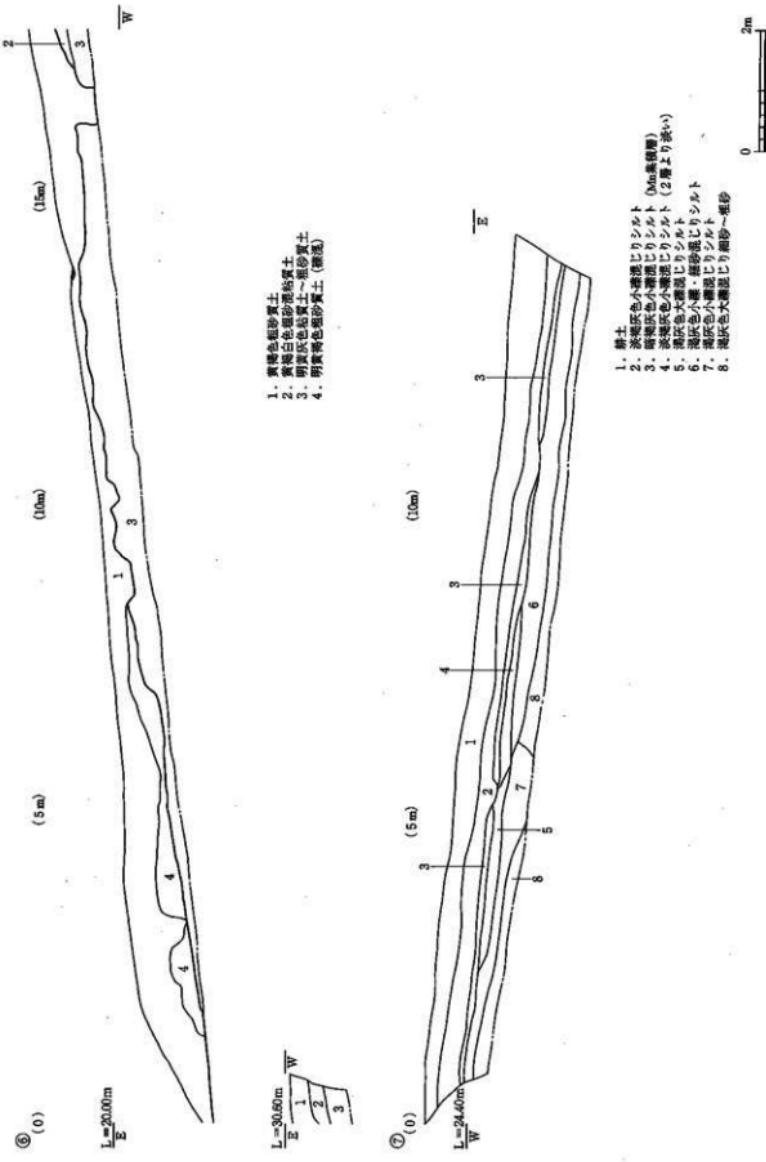
第9図 調査区土層図①(1/80)



第10図 調査区土層図②③(1/80)



第11図 調査区土層図③④⑤(1 / 80)



第12図 調査区土層図⑥⑦(1/80)

## 第3節 遺構・遺物

### 1. 弥生時代中期後半～終末期の遺構・遺物

#### (1) 壁穴住居・周溝

S H01 (第13・14図、図版11・12・20)

1区②ほぼ中央部で検出した壁穴住居である。隅丸方形で一辺約4.3m、深さ0.36m、北・東・南側に深さ8cmのベッド状遺構が確認できた。ベッド状遺構は地面を削り出すことにより作っている。周囲に壁溝を持ち、ベッド状遺構の四隅と、ベッド状遺構のない西側の辺の中央付近に主柱穴と思われるピットがある。中央部では長辺1.18m、幅0.42m、深さ0.12mのL字型の土坑（SK01）を検出し、その北側では長軸1.02m、短軸0.4mの長梢円形の範囲（SK04）で土が焼けていた。この壁穴住居はSH02を切る。

1～3はSK01から出土した遺物である。1は小型丸底壺。ほぼ完形。摩滅が著しい。底部は退化している。2は壺。口縁はくの字状で、外面はハケ、内面はヘラ削りで調整する。3は鉢。口縁部はくの字に曲がる。4は焼土の部分（SK04）から出土した脚である。穿孔が2ヶ所残存し、残存範囲から孔は4ヶ所と考えられる。摩滅が著しい。5は南東隅のピットから出土した。鉢。楕円形の器形で、外面にはクラックが残る。6は壁溝の北西のコーナーから出土した。鉢。上向きで完形で出土した。外面は叩いて調整する。7～13は壁穴住居埋土中から出土した。7は広口壺口縁部。8は台付の小型丸底壺と考えられる。底部はわずかに段を形成するのみで形骸化が著しい。内面はハケ、外面はヘラミガキで調整する。9は壺。10～12は底部。13は瓶底部。底部に1孔穿孔し、底部は平底を呈する。出土遺物は全般に摩滅するものが多く、遺存状況はあまりよくない。時期は概ね弥生時代終末期2と考えられる。

S H02 (第13・15図、図版11)

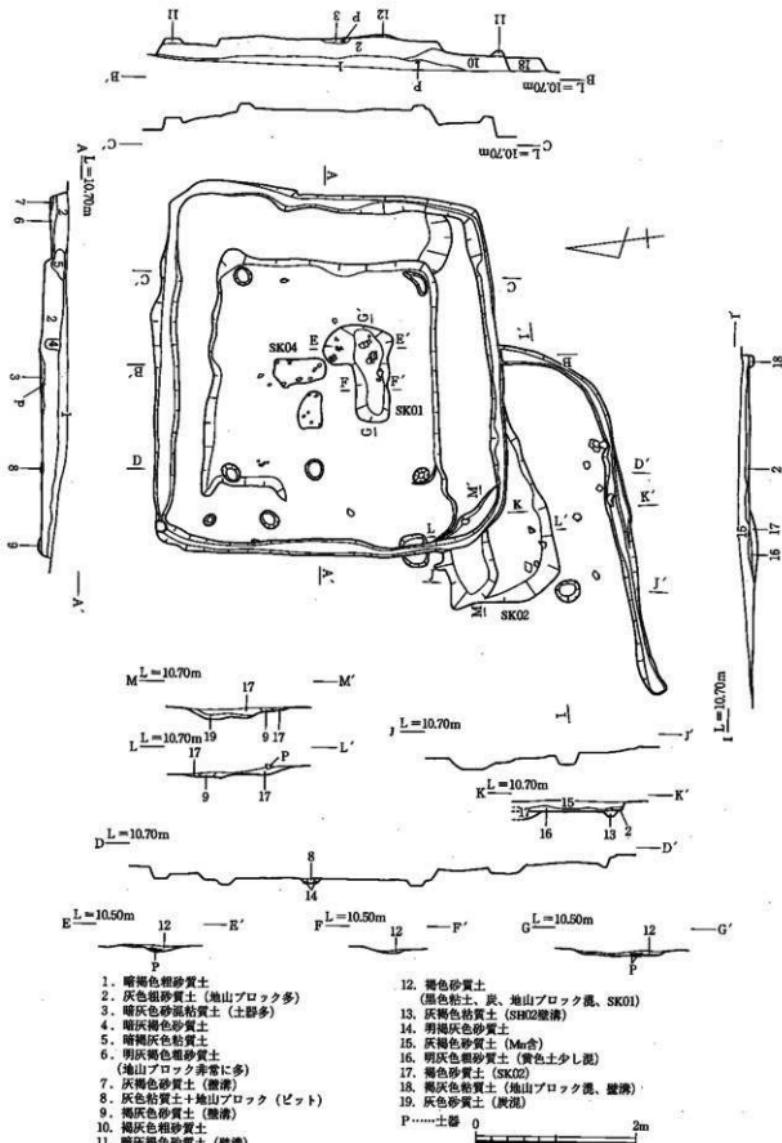
1区②ほぼ中央部で検出した壁穴住居である。隅丸方形と考えられるが、北側はSH01に切られ、西側はSR01による浸食のため、地盤が低くなってしまい、大半が失われる。残存部分から、1辺は4m程度、深さは0.1mと考えられ、周囲には壁溝を巡らせる。中央には長軸2.4m、短軸1.4m、深さ20cmの土坑がある。ピットは2穴確認したが主柱穴は不明である。

14はSK02から出土した。広口壺頸部である。体部はハケで仕上げる。15は床面上で出土した壺である。下川津B類。口縁端部をわずかに引き上げる。摩滅が著しく調整は不明瞭である。16は壁穴住居埋土中から出土した。壺口縁部。口縁端部内面には幅4cmで黒くなっている部分があり、二重口縁の壺となると思われる。

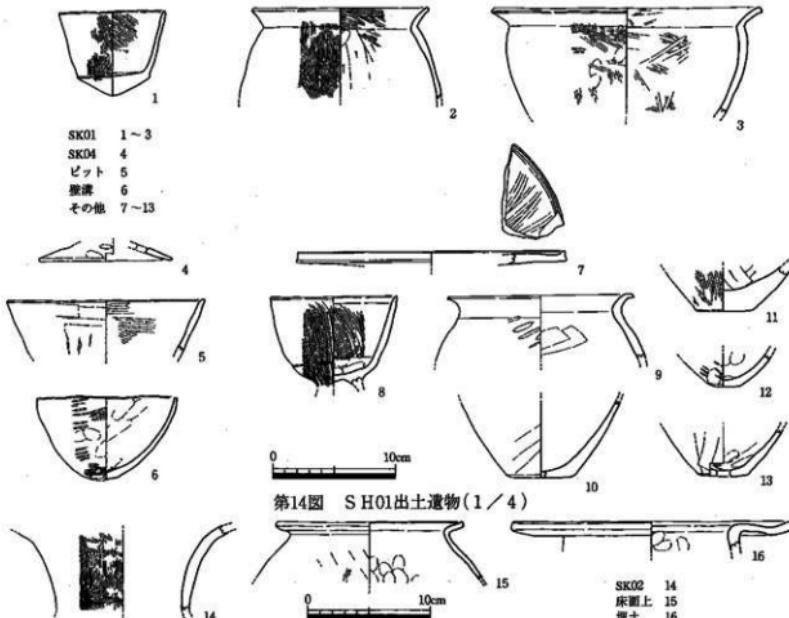
遺構の切り合い関係からはSH01より古いが、出土土器の時期差はほとんどみられず、弥生時代終末期1～2くらいと考えられる。

S H03 (第16・19図、図版12)

3区②西部で検出した壁穴住居である。西半分はSR01により消失する。円形で、一番外側の壁溝で直径3.15m、深さ0.25mで、その外側4.7mの部分で周溝が巡る。SR01の際には長軸2m、幅1.6m、深さ0.13mのL字型の土坑（SK01）があり、埋土中には炭が含まれる。その外側にピット、壁溝がある。壁溝は3条検出した。一番外側のものはほぼ途切れずに幅30cmで巡り、その内側に2重に切れ切れなが



第13図 S H01、S H02平・断面図(1/60)



第14図 SH01出土遺物(1/4)

ら壁溝が巡る。ピットは壁溝に対応して、3重に巡り、建て増しが想定できよう。主柱穴は壁溝の際に巡っていた。SH03は周溝をSH04と共有しており、SH04と同時期と考えられる。

17・18は柱穴から出土した遺物である。17は壺口縁部。18は壺口縁部。19～26は竪穴住居埋土中から出土した。19～22は甕。20は下川津B類。口縁端部を上方に引き上げ、内面上半部は板ナデを施す。21はくの字に曲がる口縁を持つ。23・24は底部。23は壺底部。24は内面を横～斜め方向のハケで仕上げ、鉢と思われる。25・26は鉢。25は楕円形で内面はハケ調整をする。26は小型の鉢。外面を叩いて仕上げる。歪みが著しい。

SH03の時期は弥生時代後期後半と考えられ、SH01・02よりやや古いと考えられる。

#### SH04 (第17・20図、図版12・13)

3区②西部で、SH03の山手側に隣接して検出した。西半部はSR01により消失する。1辺4m程度、深さ15cm程度の円形あるいは隅丸方形である。壁溝は3重に巡って検出され、SH03同様建て替えの可能性がある。一番内側の壁溝はほぼ全周するが、2重目、3重目の壁溝は一部しか検出できなかった。中央付近に1辺1m、深さ10cmの隅丸方形の土坑(SK01)があり、埋土中に炭を含む。主柱穴は内側の壁溝の内部に4穴検出した。SH03と周溝の一部を共有する。

27はSK01から出土した。甕底部。外面はタキ後ハケで調整し、わずかに平底を呈する。28は壁溝から出土した。広口壺の口縁部。口縁端部に波状文を施す。29～35は竪穴住居埋土中から出土した。29は細顆壺口縁部。下川津B類。30～32は甕。30は口縁部が緩く屈曲する。31・32は下川津B類。いずれ

も小片で、31は傾き、口径ともやや不確かである。33は壺底部。平底を呈する。34は高坏脚部。35は鉢。口縁部は外側へ屈曲し、体部はタキの後ハケで調整する。

時期はSH03と同じ弥生時代後期後半と考えられる。

SD3201 (第16・18・21・22図、図版12・13・20・21・79)

3区①・②・1区②に跨って検出した円弧状の溝である。SH03の外側に、SH04に近い方で2m程度、北・東側で4.5mの位置を巡り、西側半分はSR01により消失する。溝の南側はSH04を囲むSD3204と共有する。周溝の直径は概ね15m前後と考えられる。規模は北側で幅44cm、深さ28cm、断面形状は半円形に近いU字状を呈し、南側では幅32cm、深さ32cm、断面形状はU字状だが、溝の外側はややなだらかで、地山の土が落ち込んだ様子が窺えるので、外側の肩が少し崩れたと考えられる。溝の埋土は概ね灰褐色砂質土である。底のレベルは北側の方がやや低く、地形の傾斜にあう。溝の中からは弥生土器壺・壺・鉢などがコンテナ3箱ほど出土した。特に溝の東部（微高地に面する方）から集中して土器が出土した。

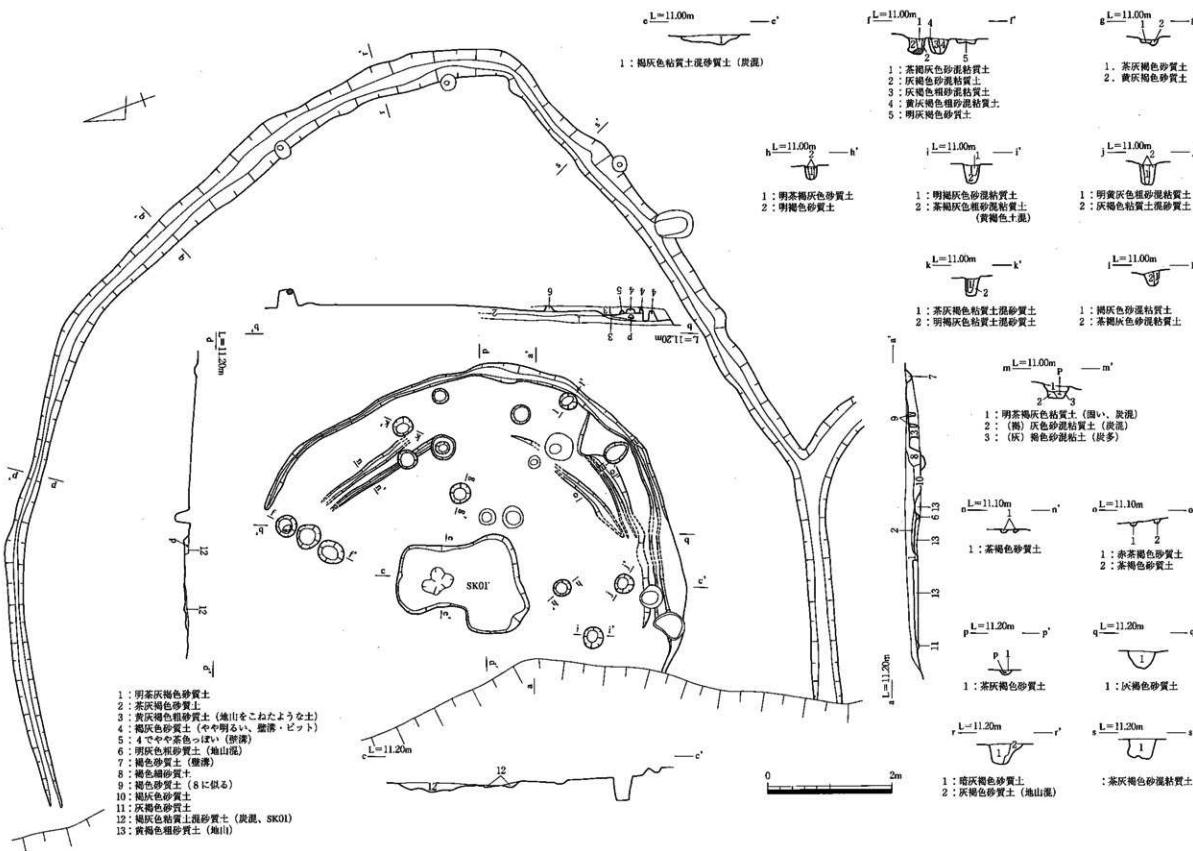
36~40は壺。36~38は広口壺。36はやや新しい要素を持つと思われる。37は頸部から口縁部へ緩やかに開く。38は短い直線的な頸部に口縁部が広がる。口縁端部には沈線状のものが4条巡る。39は短頸壺。内外面ともハケを施し、内面には明瞭に粘土の継ぎ目を残す。40は壺の底部。底部は平底で肩がやや張る器形で、外面はハケで調整した後磨く。42~50は壺。概ね外面はハケで調整し、内面はハケ、ヘラ削り、板ナデなどで調整する。45は外面にタキ痕を明瞭に残す。50は小型の壺。内面にヘラ削りの痕跡を明瞭に残す。43は口縁部が外側へ強く屈曲し、胎土中に多量の雲母を含む。51~52は壺の底部。52は外面のタキはほとんどナデ消されている。53は高坏脚部。杯部との取り付き部分に剥離痕跡を残す。図化範囲では穿孔はない。54は台付鉢脚部。55~61は鉢。55は底部に明瞭に葉脈痕を残す。56は浅めの器形で内外面ともハケで調整する。内面は最後に磨いて調整し、口縁端部にはわずかに面を持つ。58は口縁部がわずかに外反し、外面にはクラックを残す。59~61は外面は指押さえ、内面はハケで調整するが、外面には顯著な調整痕を残さない。62は石庵丁。背面は潰し、刃部の表面は珪酸により光沢を持つくらいに磨滅する。

やや時期幅を持つが、溝の時期は弥生時代後期～終末期（1）と考えられよう。

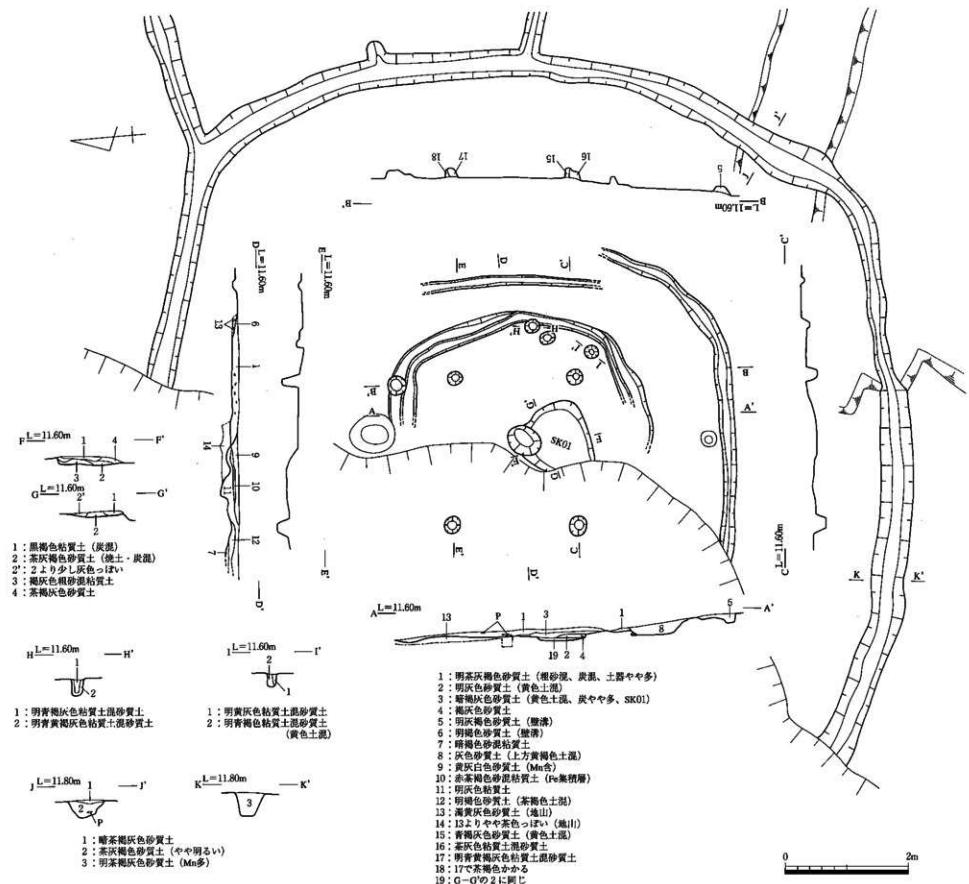
SD3204 (第17・23図、図版13・21・79)

3区②西部で検出した溝である。SH04の外側約2.5mの位置を円形に巡り、西側はSR01により消失する。溝の北側はSH04を囲む溝SD3201と共有する。直径は概ね12m前後と考えられる。溝の規模は北側で幅50cm、深さ38cmで断面形状は逆台形、南側では幅58cm、深さ28cmで断面形状は逆台形を示すが、溝の外側が若干崩れている。埋土はやや明るい茶灰褐色砂質土である。溝の底のレベルは場所によらず同じで、SD3201と地表面からの深さは同じくらいである。埋土中からは弥生土器壺・鉢・高坏などがコンテナ2箱ほど出土した。

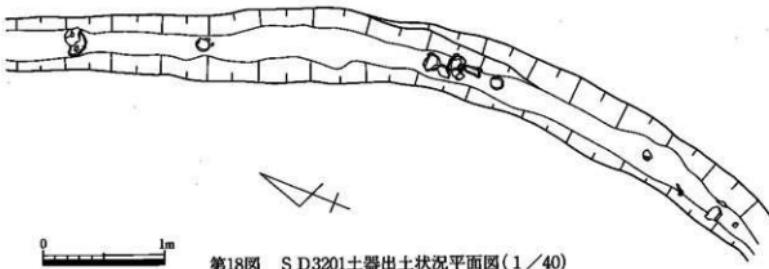
63~64は壺。内外面ともハケで調整する。63は体部上部付近（図化部分）で全体に割れており、ここが粘土の継ぎ目であったと思われる。やや新しいか。65は底部。66は小型の壺。67~68は高坏杯部。67は小片で摩滅が著しい。68は口径は小さく深めの器形。外面は板ナデ又はヘラ削り、内面はヘラミガキ、見込みは分割ミガキで底部に一方向のミガキを施す。脚部は図化部分の個所で全体に割れており、この部分が粘土の継ぎ目であったと考えられる。69~71は高坏脚部。69は残存部で2孔穿孔がみられ、均等に穿孔があるとすれば6孔程度であったと考えられる。71は残存部分で1孔残存する。72~74は楕形の



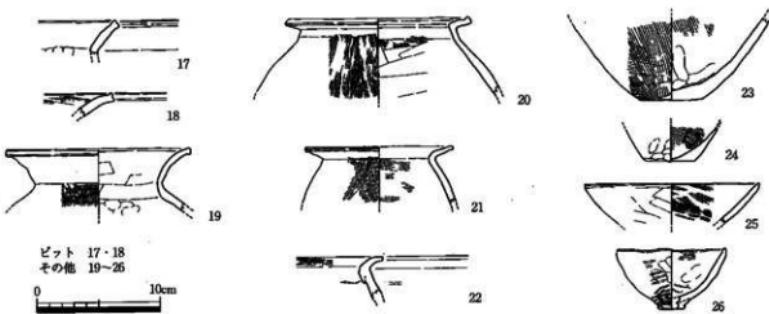
第16図 S H03, S D3201平・断面図(1 / 60)



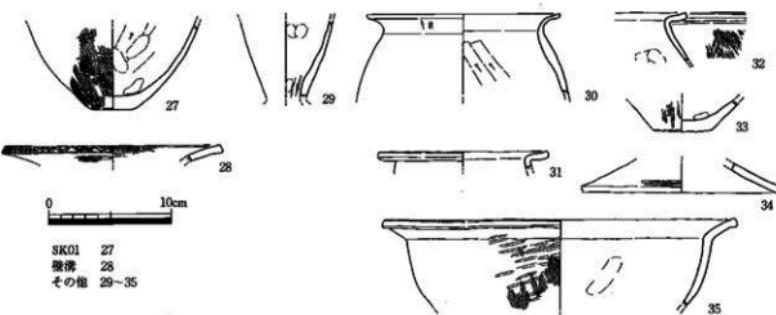
第17図 SH04、SD3204平・断面図(1/60)



第18図 S D3201土器出土状況平面図(1/40)

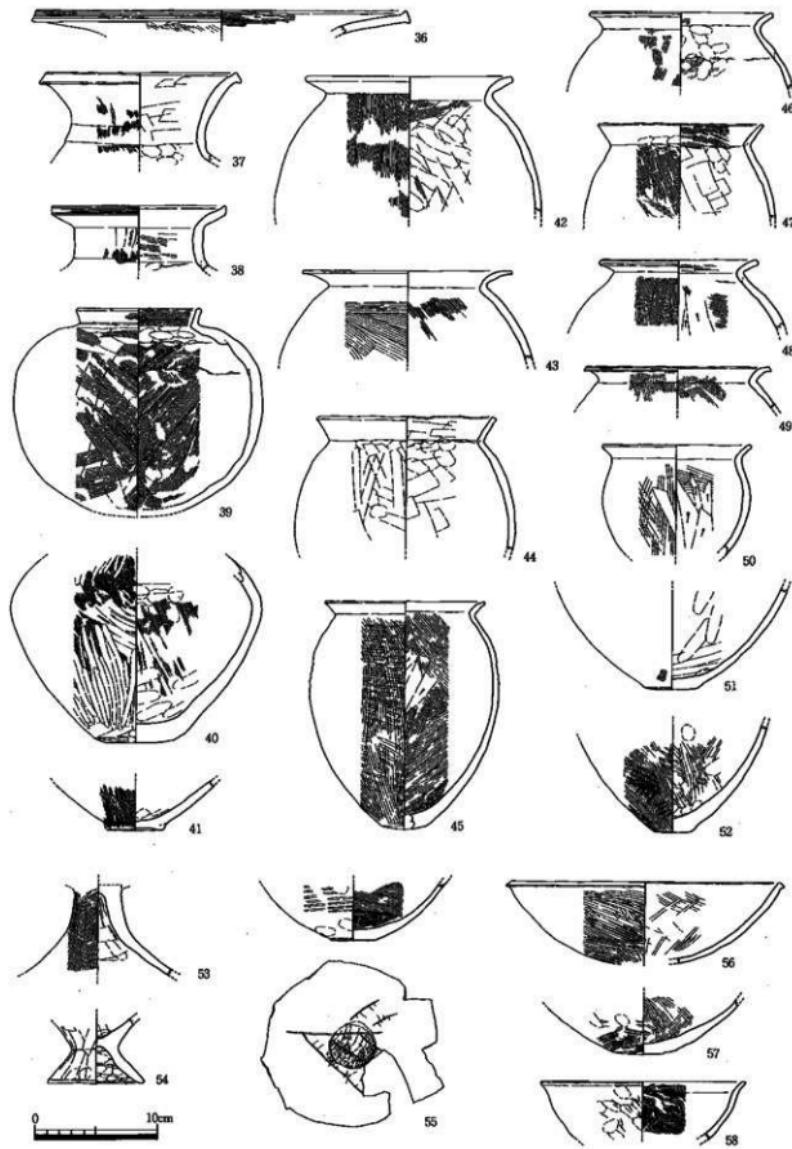


第19図 S H03出土遺物(1/4)

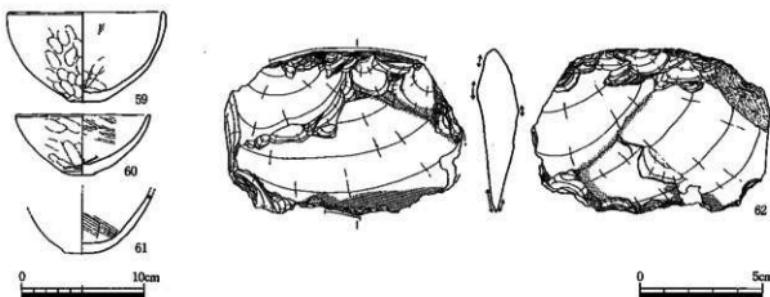


第20図 S H04出土遺物(1/4)

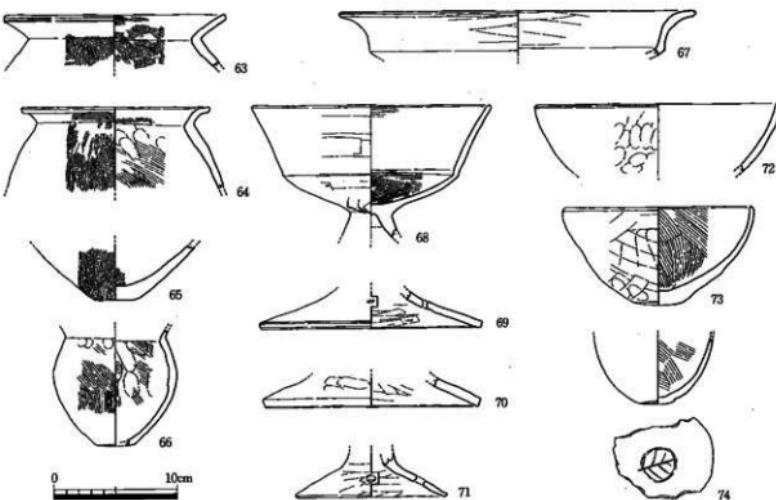
鉢。いずれも外面には調整痕をほとんど残さない。74は底部外面に葉脈痕を残す。75は石庖丁。サヌカイト製。上面をつぶして加工し、刃部は磨滅する。両端には抉りを入れる。刃部は一部割れている。  
溝の時期は弥生時代後期後半(V-4新)~終末(1)と考えられよう。



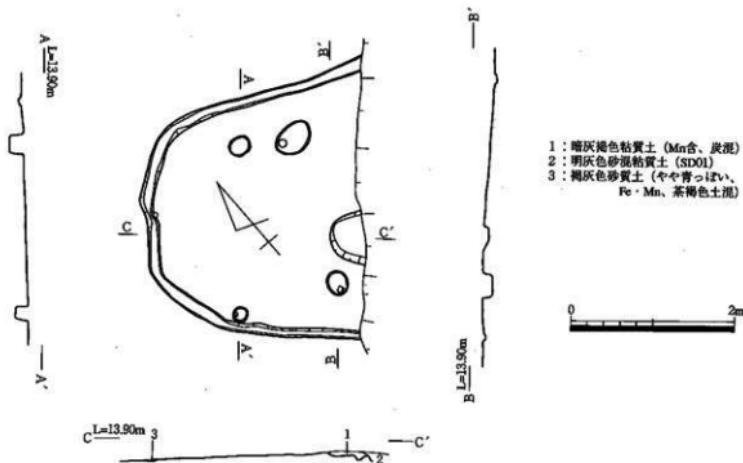
第21図 S D3201出土遺物(1)(1／4)



第22図 SD3201出土遺物(2)(1/4、1/2)



第23図 SD3204出土遺物(1/4、1/2)



第24図 S H 05平・断面図(1/60)

S H 05 (第24図、図版13)

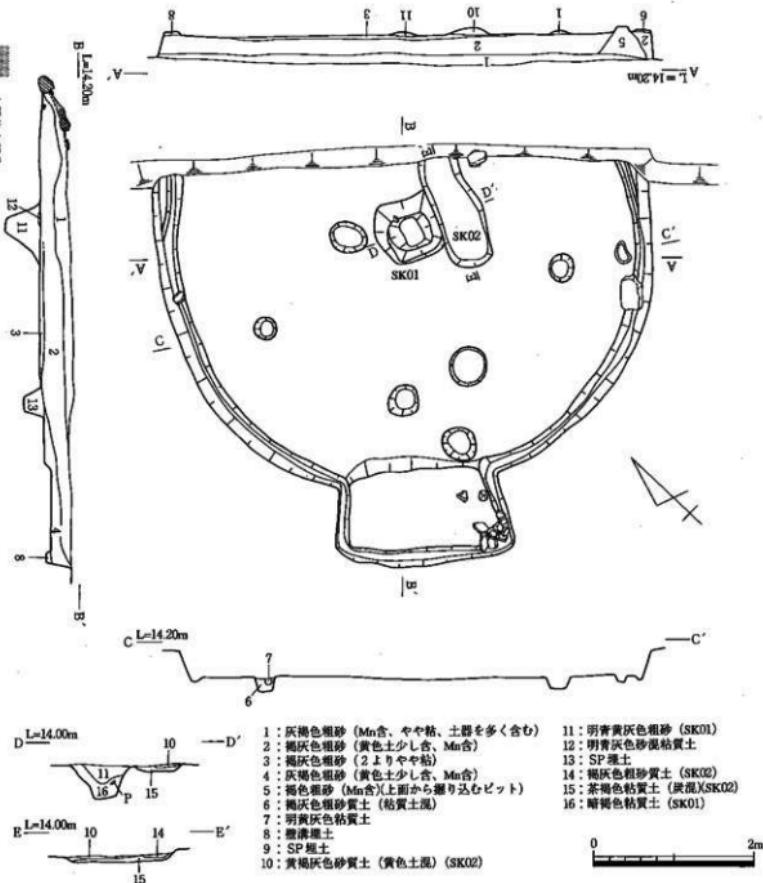
3区③上段で検出した竪穴住居である。南西部はSD01により消失している。形状は長椭円形または隅丸長方形と考えられる。竪穴住居としての掘り込みは残っておらず、壁溝と土坑（西北半部）・ピットが残されているだけである。土坑を中心とすると、長軸5.2m程度、短軸3.3mとなり形状がやや歪になることや、竪穴住居がSD01を越えて検出されていないことを考えれば土坑は住居の南東よりに位置し、長軸は長くても4.8m程度であろう。土坑は直径60cm程度で深さ5cm程度と考えられる。埋土中に炭を含み、底は凹凸がある。ピットは4穴検出したが、主柱穴は北西側の2穴で、残り2穴はSD01により消失したと思われる。

遺構内からは甕体部の小破片が出土しただけであった。周囲の状況から考えれば弥生時代後期～終末期の造構と思われる。

S H 06 (第25～29図、図版13・14・22・79・90)

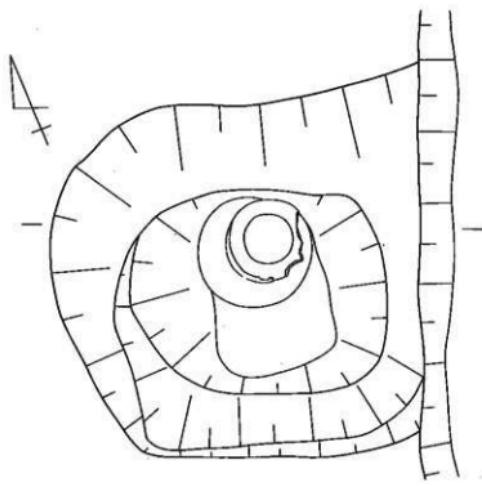
3区④中央部付近で検出した竪穴住居である。北西部約1/3は後世の耕作に伴う削平のため消失する。直径約6mの円形で、深さは32cm、南東部に張り出しを持つ。張り出し部の規模は長辺2.1m、短辺1.2mで、張り出し部は竪穴住居床面から7cm程度高い。張り出し部の南隅には櫛が集中していた。壁溝は張り出し部を含めて巡らせる。中央部には方形の土坑と長方形の土坑が切り合って検出された。長方形の土坑（SK02）は深さは10cm程度で浅く、埋土中に炭を含む。正方形の土坑（SK01）はSK02に切られており、SK01の底部には壺がほぼ完形で上向きに埋められていた。竪穴住居を使用する前、あるいは炉を作る前に何らかの祭祀を行った可能性もある。播磨地方によく見受けられる、いわゆる10型住居と称されるものと思われる。床面でピットを6穴検出した。竪穴住居の上面で土器が多く散乱した状態で検出され、それらの土器を除去した後に竪穴住居を検出した。竪穴住居廃棄後にゴミ捨て場として使ったのかもしれない。

76～78はSK01から出土した土器である。76は壺。ほぼ完形で出土した。口縁端部は面を持ち、沈線

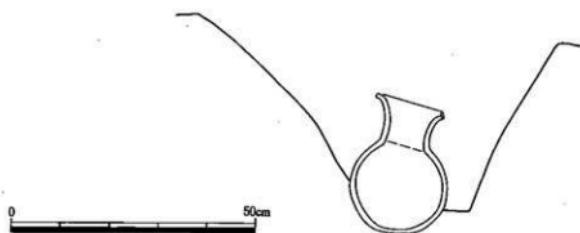


第25図 SH06平・断面図(1/60)

状に2条が巡る。頸部と体部の境にわずかに段を持つ。弥生時代後期後半。77は壺口縁部。口縁端部に面を持ち、そこに斜格子文を刻む。弥生時代中期後半まで巡るもので、摩滅が著しく、紛れ込みと思われる。78は鉢。口縁端部は外側へ屈曲し、わずかに面を持つ。79~90は堅穴住居埋土中から出土した。79は壺。直立する頸部に短く外反する口縁が付く。端部はわずかに面を持ち、上方へ引き上げられる。80~82は壺。81は強く外反する口縁で端部に面を持つ。82はくの字に曲がる口縁で内面はハケ、外面は薄い板ナデに近いハケで調整し、体部を薄く仕上げる。やや新しいか。口縁部と底部は直接は接合しないが、胎土や調整などの特徴から明らかに同一個体と考えられる。83は高壺。84~86は鉢。85は口縁を外側へ屈曲させ、内外面とも磨く。口縁端部はわずかに上方へ引き上げる。86は椀形で外面はハラミガ

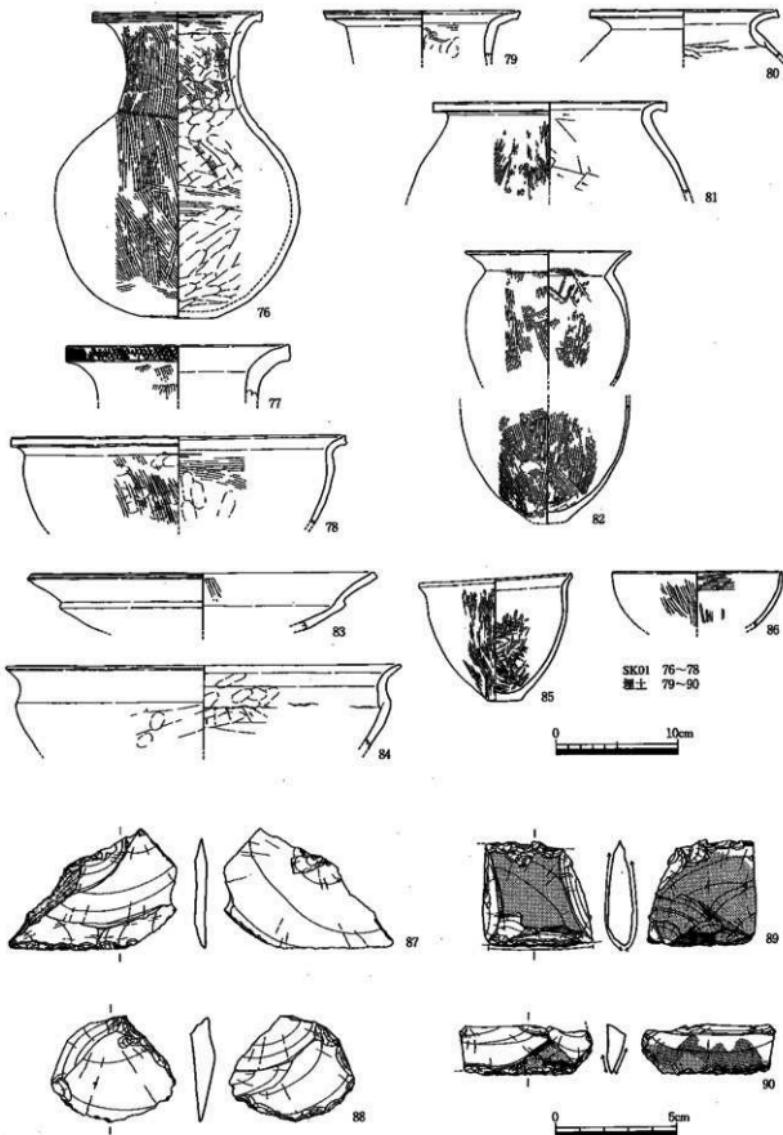


L=13.80m

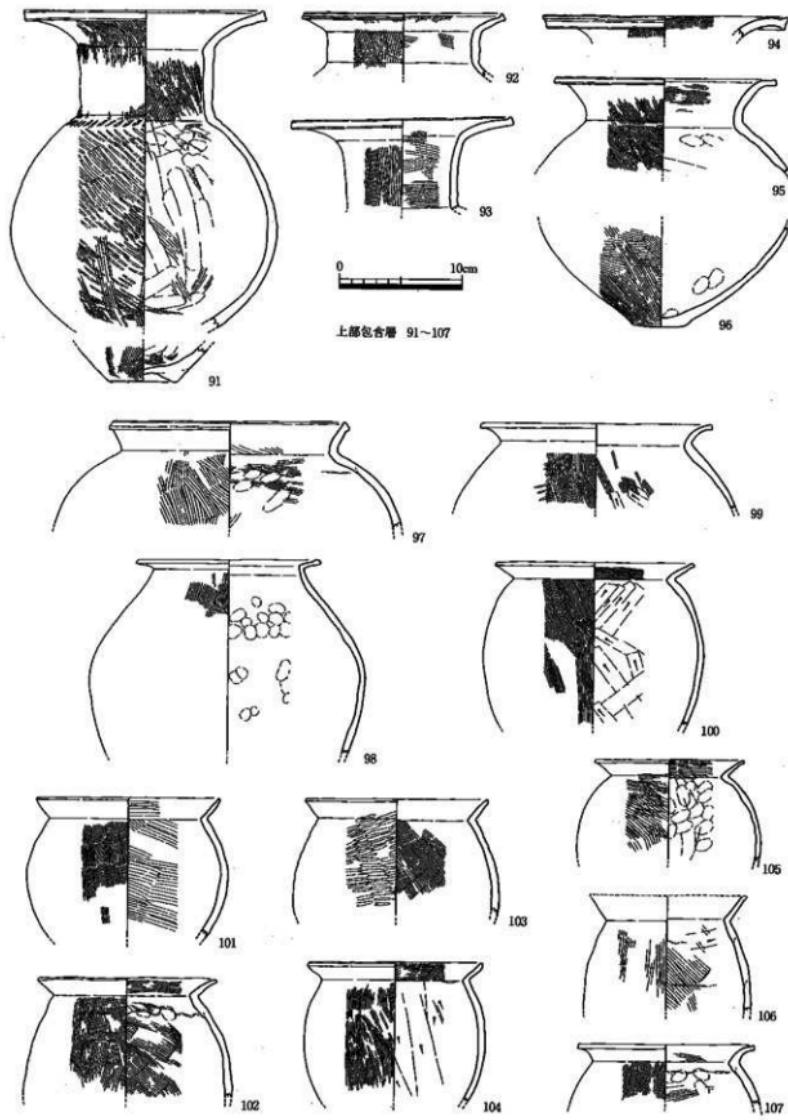


第26図 S H06内S K01土器出土状況平・断面図(1/10)

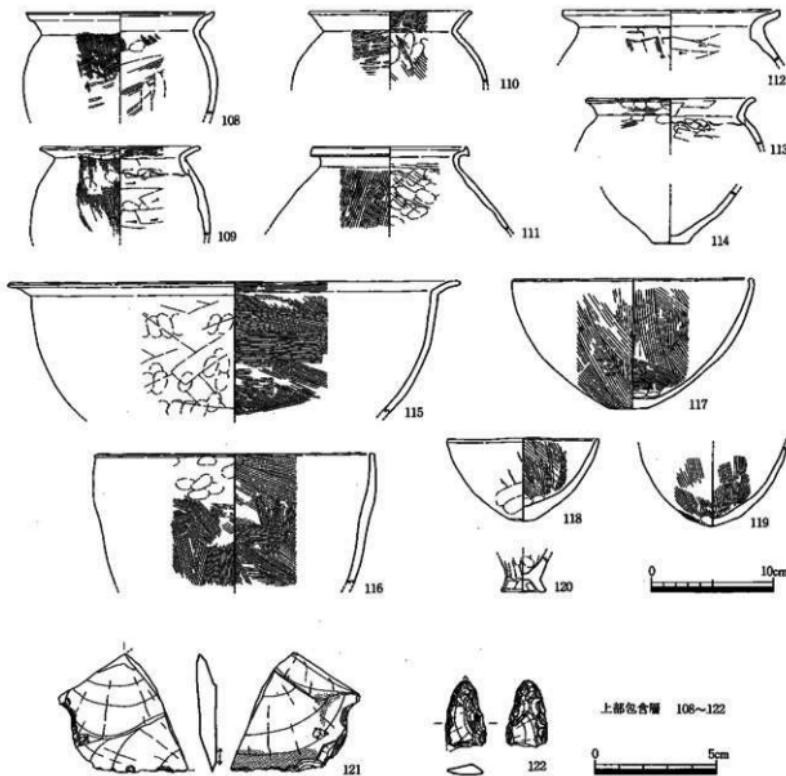
キする。87・88・90はスクレイパー。サヌカイト製。87・88は簡単な加工で刃部を少しだけ作り出す。90は裏面中程付近が著しく磨滅する。89は楔形石器。上面を潰し、両端は削られている。全体に磨滅している。91～122は竪穴住居の上面の土器が集中する包含層で出土した。91～95は広口壺。頸部の形状にやや差があり時期差があると思われる。91は摩滅が著しいもののほぼ完形に復原できる。頸部に斜め方向の刻み目を持ち、体部はタタキで仕上げる。95は斜め上方に緩く立ち上がる頸部でやや新しい。96は95と同一個体の可能性がある。97～113は壺。97は口縁が直立気味に立ち上がる。98はなで肩の体部から口縁部を外側へ強く屈曲させる。口縁端部には面を持つ。下川津B類。100～110は概ね丸みを持った体部にくの字に屈曲する口縁部を持つもので、外面はタタキやハケ、内面はハケ、ヘラ削りで仕上げる。115～118は鉢。内面はいずれもハケ、外面は116・117はハケ、118はクラックを残し調整痕はあまりない。115は口縁部を屈曲させ外面は指押さえ痕跡を残す。119は底部。120は製塙土器。体部外面は板ナデで調整する。121はスクレイパー。サヌカイト製。刃部はほとんど加工していない。端部にわずかに抉りを作るか。122は石鎌。端部・基部ともわずかに欠損。平基式と考えられる。



第27図 SH06出土遺物(1)(1/4、1/2)



第28図 S H06出土遺物(2)(1 / 4)



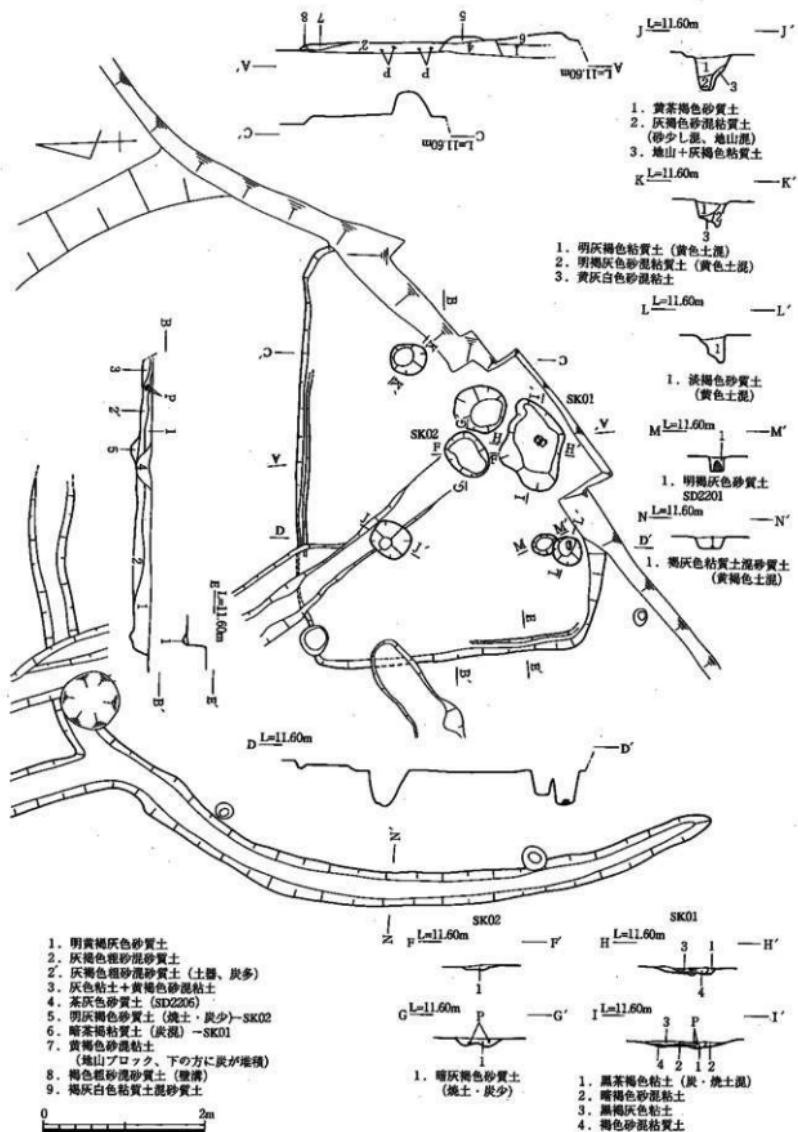
第29図 S H06出土遺物(3)(1/4、1/2)

竪穴住居時期は土坑や埋土から出土した土器から概ね弥生時代後期後半(V-4頃)を中心とした時期と考えられようが、上部の包含層からは終末期下がる遺物も多く含まれるようである。

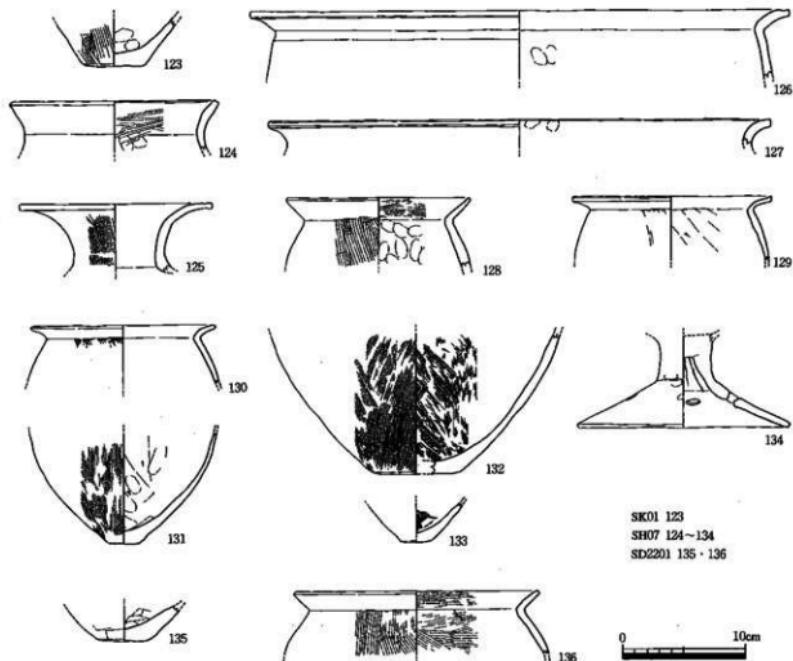
#### S H07 (第30・31図、図版14・23)

2区②南西部で検出した竪穴住居である。南東部は調査区外へ延びる。北東部には隣接して黒色粘土の埋土を主体とする湿地帯が広がる。隅丸長方形で東西5.5m、南北3.7m、深さは20cmである。北側と西側の一部で幅15cm、深さ4cmの壁溝を検出した。中央部より南へ寄った場所に長軸65cm、短軸55cmの楕円形の範囲で炉跡と考えられる焼土の範囲があり、その北側に深さ10cm程度の炭が多く堆積する土坑(S K01)がある。主柱穴は炉跡を囲むように3穴検出した。主柱穴は4穴と考えられ、1穴は調査区外へ延びると考えられる。埋土中からは弥生土器壺・壺・鉢・高杯、サヌカイト剥片が出土した。

123はS K01から出土した。壺の底部。124~134は竪穴住居埋土中から出土した。124は短頸壺。体部から短めの傾斜の緩い頸部が付く。125は広口壺。126~133は壺。126・127は口縁の破片が小さく口径・傾きは不確かである。128~130はくの字の口縁が付き、体部は外面はハケで仕上げる。130・131は直



第30図 SH07、SD2201平・断面図(1/60)



第31図 S H07、S D2201出土遺物(1/4)

接は接合しないが、胎土・調整などがよく似ており、同一個体の可能性が高い。134は高壊脚部。中位で大きく外側へ屈曲し広がる。穿孔がほぼ均等に4ヶ所ある。132～133は底部。132は外面はハケで仕上げ、底部は平底を呈す。時期は弥生時代後期後半(V-4)頃である。

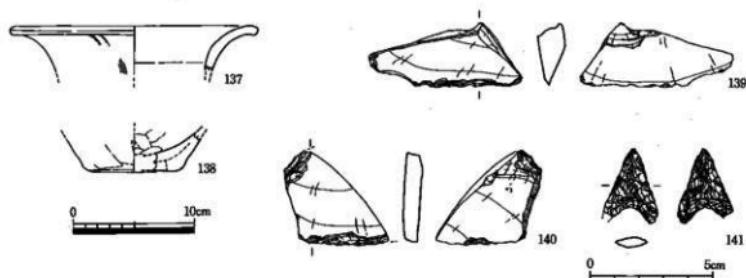
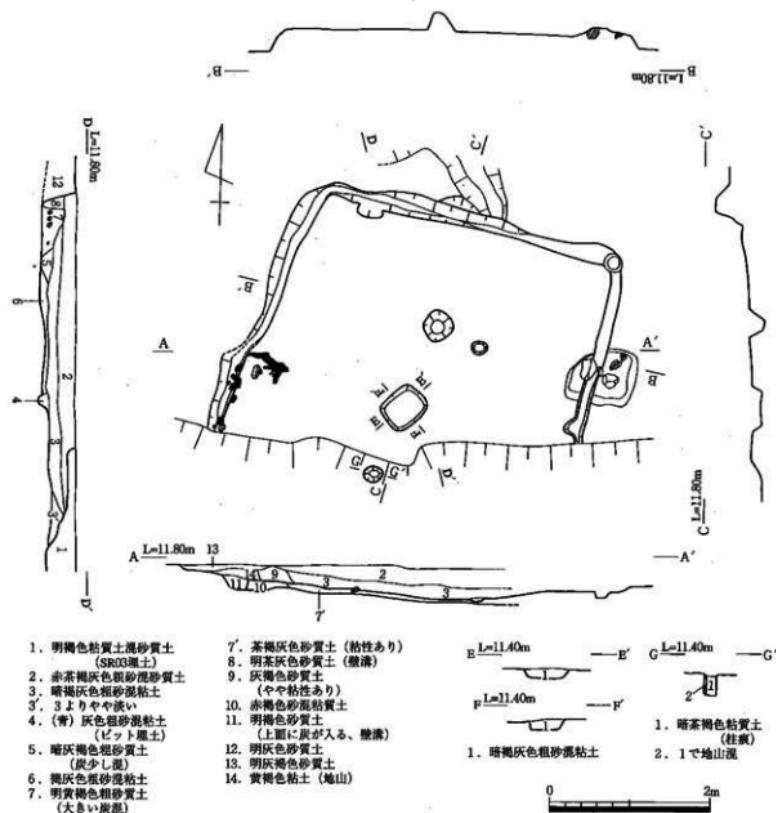
#### S D2201 (第30・31図)

2区②西部、微高地で検出したS H07の外側2.8m付近を巡る周溝である。幅38cm、深さ16cm、埋土は褐灰色粘質土混砂質土(茶褐色土混)で断面は逆台形である。溝は南東部半分は途切れている。調査地のレベルや隣接する調査地の壁面の土層図から、削平による消失とは考えられず、もともとなかったと考えられる。地形的には北東方向へ落ちているので土地の高い箇所にだけ周溝を掘ったと考えられる。溝からは弥生土器、サヌカイト剥片などが出土した。

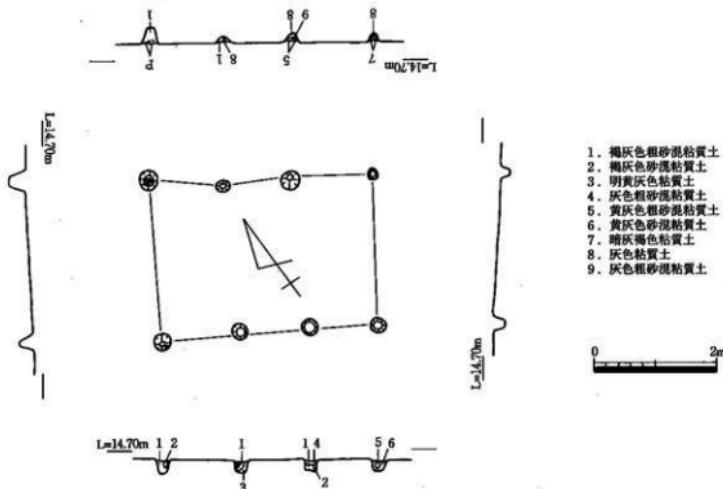
135は底部。摩滅が著しい。136は壺。くの字に曲がる口縁で内外面はハケで調整する。わずかに平底を呈する。弥生時代後期後半～終末頃。

#### S H08 (第32図、図版14・90)

6区①西部中央付近で検出した竪穴住居である。南半部はS R03により消失する。方形で1辺4.2m、深さ0.35mである。周囲に壁溝を巡らせ、中央に長辺55cm、短辺40cmの長方形の土坑を配する。ピットはいくつか検出されたが、主柱穴を構成するピットは不明。竪穴住居の南西部には炭化材が少し残っており、焼失家屋と考えられる。この竪穴住居の平面形態はS H07に似ており、場所も近接していることか



第32図 SH08平・断面図(1/60)出土遺物(1/4、1/2)



第33図 S B01平・断面図(1/80)

ら、S H07と同時期の可能性があろう。

137・138は竪穴住居土中で出土した土器である。いずれも摩滅が著しい。137は広口壺。138は底部。139・140はスクレイバー。刃部は片側をわずかに作り出す。140は側縁の片側が折損し、片側には自然面が残る。刃部はわずかに作るだけである。サヌカイト製。141は石鎌。凹基式。サヌカイト製。

## (2)掘立柱建物

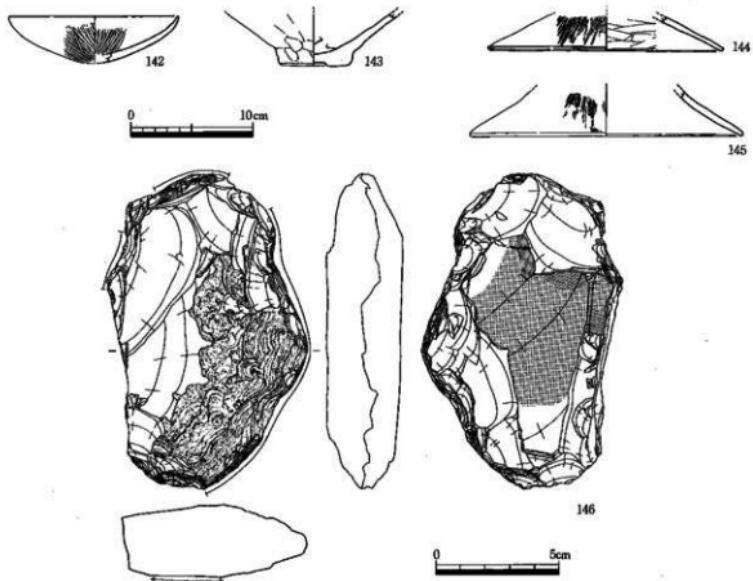
### S B01 (第33・34図、図版14・79)

3区④上段北西部で検出した掘立柱建物である。方位はN58°Wで、S B03・S B04とほぼ同じ方向を示す。現地割より若干南へ振るが、等高線には概ね平行する。桁行3間(3.5m)、梁間1間(2.5~2.8m)で、柱間は桁方向が1.05~1.25m、梁方向が2.5~2.8m、面積は約9.3m<sup>2</sup>である。ピットは円形で直径16~24cm、深さ10~20cmである。ピット内から弥生土器、土師器、サヌカイト片が出土している。

142は鉢。内外面とも放射状のヘラミガキを施す。143は底部。しっかりした平底で内側が少し窪む。144・145は高坏脚部。146は石斧。サヌカイト製。上部に抉りを入れる。刃部の左側は欠損する。古墳時代初頭頃。

### S B02 (第35図、図版14)

3区④上段北西部で検出した掘立柱建物である。方位はN46°Eで、ほぼ現地割と同じ方向で、等高線と直交する方向である。桁行3間(5.6m)、梁間1間(3.5m)で柱間は桁方向が1.65~2.0m、梁方向が3.5m、面積は19.6m<sup>2</sup>である。ピットは円形で直径25~32cm、深さ14~44cmであるが、概ねは30cm前後で高い山側の柱が浅く、低い平野側の柱が深いようである。ピットからは弥生土器の小破片、サヌカイ



第34図 SB01出土遺物(1/4、1/2)

ト剥片が出土した。SB01・03・04とは方向が違うが、ピット内から出土するものに新しいものがないので、時期は弥生時代後期後半としておく。

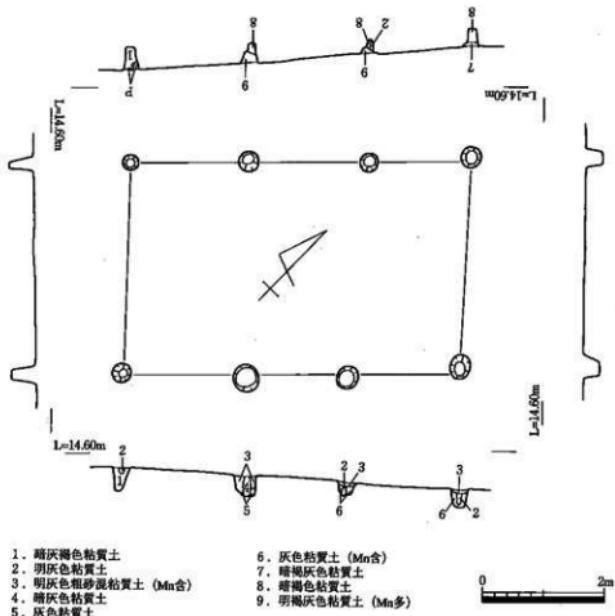
147はスクレイパー。サヌカイト製。刃部を少し削り出すだけのもの。

#### SB03 (第36図、図版14)

3区④上段北西部、SB01の南側で検出した掘立柱建物である。方位はN58°Wで、SB01とほぼ同じく、現地割からはやや南に振り、等高線にはほぼ平行する。桁行2間(4m)、梁間2間(3.4~3.5m)だが、南西梁間の柱筋の中央のピットが落ヶしている。面積は13.8m<sup>2</sup>である。ピットは円形で概ね直径34~38cm、深さは22~27cmである。埋土中からは土器は出土せず、サヌカイト剥片が出土しただけであった。時期はSB01と方向を同じくすることから弥生時代後期後半~古墳時代初頭としておく。

#### SB04 (第37図、図版14)

3区④上段北西部、SB03と重複する位置で検出した掘立柱建物である。方位はN58°Wで、SB01・03とほぼ同じく、現地割からはやや南に振り、等高線にはほぼ平行する。桁行2間(2.75~2.8m)、梁間1間(2.2~2.3m)で面積は6.16m<sup>2</sup>である。ピットは円形で直径20~30cm、深さ9~13cmである。SB03との前後関係は不明である。ピットからの出土遺物はなかった。時期は決めがたいが、SB01・03と同方向で、この場所は弥生時代後期の造構が比較的多く立地するので、弥生時代後期後半~古墳時代初頭としておく。



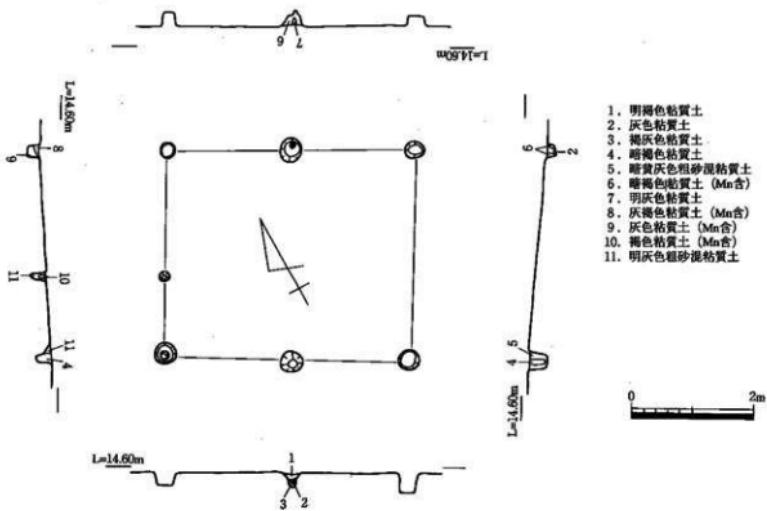
第35図 S B 02平・断面図(1/80)出土遺物(1/2)

### (3) ピット

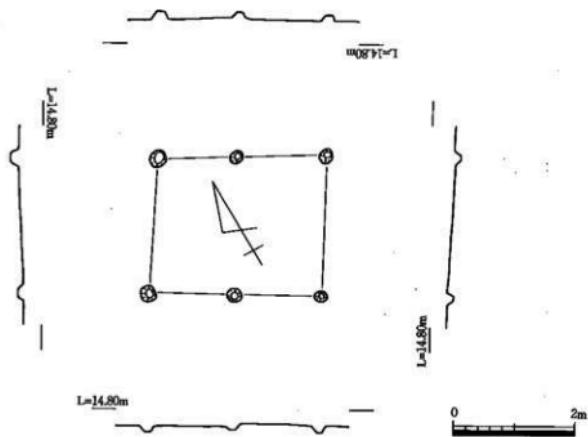
S P 3401 (第38図、図版14・23)

3区④下段北端付近で検出したピットである。比較的遺構密度の低い場所である。円形で直径29cm、深さ11cmである。ピットからは上向きに重ねられた状態で鉢が2点、小型丸底壺が1点の合計3点が出土した。下側2点が椀型の小型の鉢で、最上部が小型丸底壺である。鉢2点は北側に口縁部を向け、壺はほぼ上面に口縁部を向いている。いずれもほぼ完形である。

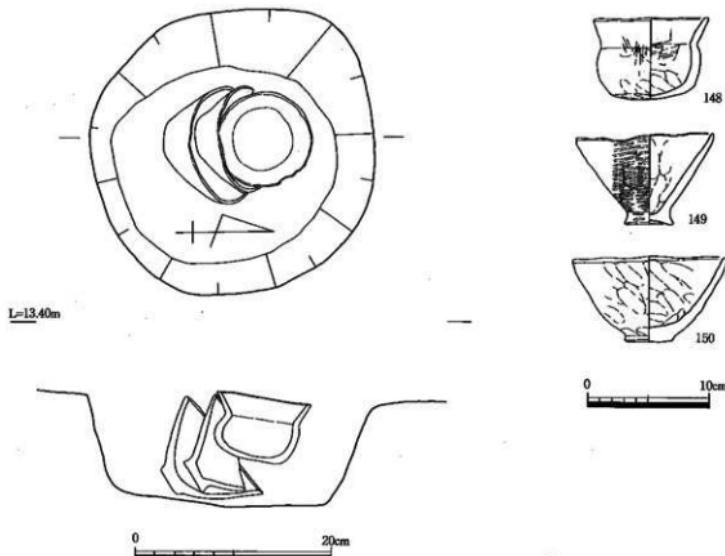
148は小型丸底壺。小型で体部から底部にかけて球形に近い。149・150は鉢。いずれも平底を呈し、149は体部が直線的に上がり、150は丸みを持って立ち上がる。時期は弥生時代後期後半～終末期と考えられる。



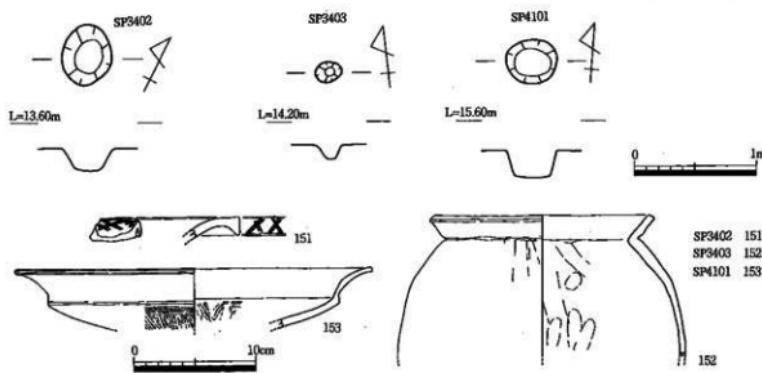
第36図 S B 03平・断面図(1/80)



第37図 S B 04平・断面図(1/80)



第38図 SP 3401平・断面図(1/5)出土遺物(1/4)



第39図 SP 3402、SP 3403、SP 4101平・断面図(1/40)出土遺物(1/4)

#### SP 3402 (第39図)

3区④ S D 3403・3404に接して検出したピットである。直径45cm、深さ18cmである。埋土中からは弥生土器壺の破片が出土した。

151は弥生土器壺。口縁部が大きく外側に広がり、面を持つ口縁端部と口縁内面上端部に斜格子文様

を入れる。弥生時代中期後半。

S P 3403 (第39図)

S H06の東南側（私道側）で検出したピットである。直径20cm、深さ11cm、埋土は明褐色粗砂混粘質土である。埋土中からは弥生土器壺が出土した。

152は弥生土器壺。摩滅するが、内外面とも板ナデ。弥生時代後期後半。

S P 4101 (第39図)

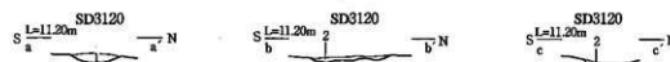
4区①東部（平野部側）で検出したピットである。この付近より山手側では等高線は急に幅が狭くなり、勾配が強くなる。直径41cm、深さ25cm、埋土は灰褐色粗砂混砂質土である。埋土中からは弥生土器高坏が出土した。

153は弥生土器高坏。内外面にミガキを施す。胎土中に角閃石を含む。下川津B類。弥生時代後期後半。

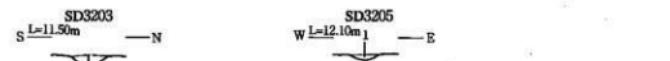
(4)溝

S D 3120 (第40図、図版23)

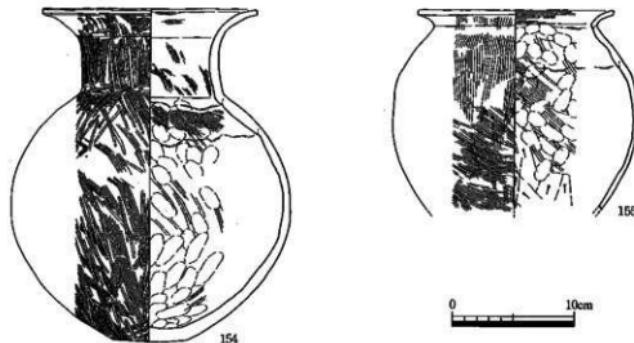
3区①北端付近で検出した溝である。西半分は二股に分かれる。隣接する1区②では延長部は検出し



1. 灰褐色粘質土(下部、黄色土堤)  
2. 明灰褐色粘質土



1. 灰褐色砂混粘質土  
1. 明褐灰色砂質土(Me堤)



第40図 S D3120、S D3203、S D3205断面図(1/40) S D3120出土遺物(1/4)

ていないが、調査時のベース面が削平により3区①より15cmほど低く、延長部は削平により消失したと考えられる。幅40cm、深さ7cm、埋土は灰褐色粘質土、断面形は浅いボウル状である。この溝はSD3119に切られる。弧の直径は歪みがあまりないとすれば12m前後であろうが、検出部分が少ないので不確かである。堅穴住居の周溝の一部であろうか。埋土中からは弥生土器壺が出土した。

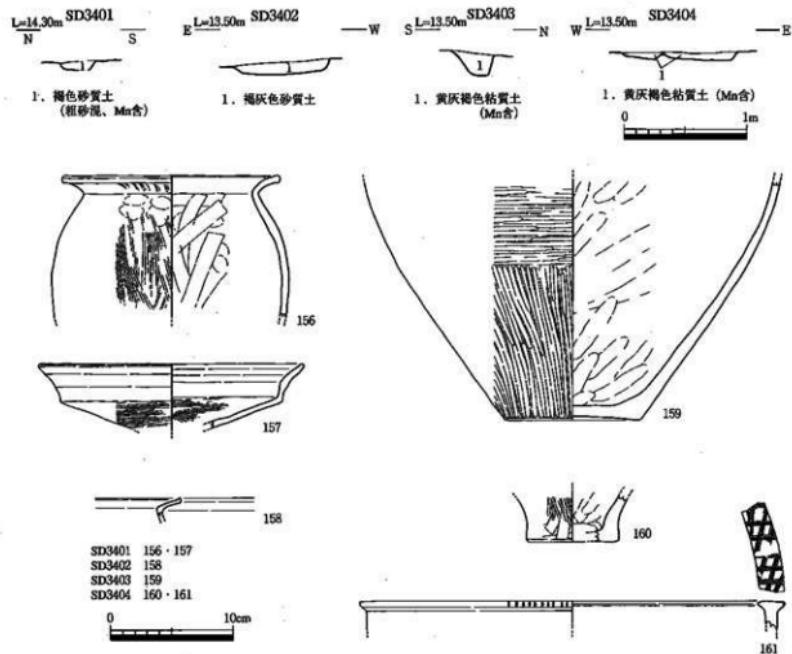
154は弥生土器広口壺である。体部は球形に近く、頸部はほぼまっすぐに立ち上がって口縁部で大きく外反する。口縁端部は四角く收める。155は壺。球形に近い体部で内外面ともハケ、内面下半はヘラ削りする。弥生時代後期後半である。

#### S D3203 (第40図)

3区②下段西部で検出した溝である。等高線の方向とほぼ同じで、SH04の周溝であるSD3204から東へ延び、西へは延びない。SD3204との切り合い関係も認められなかった。幅30cm、深さ8cm、埋土は灰褐色砂混粘質土、断面形は浅いボウル状である。溝の底のレベルはSD3204より5cm高い。埋土中からは土器の小破片がわずかに出土しただけであったが、SD3204と同時期と考えられることから、SD3203の時期も弥生時代後期後半～終末と考えられる。

#### S D3205 (第40図)

3区②上部の西部で検出した円弧状の溝である。検出できたのは1/3程度で、東側はSD01に切ら



第41図 SD3401～SD3404断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

れ、北側は後世の削平で約40cm低くなっているので、消失したと考えられる。幅24cm、深さ5cm、埋土は明褐色砂質土（Mn含）、断面形状は浅いボウル状である。直径は約7.2mに復元できる。埋土中からは土器の小破片がわずかに出土したのみで時期の比定は難しいが、S D01より古いことは間違いない、直径が小さいことから、堅穴住居の壁溝の可能性があろう。

#### S D3401 (第41図)

3区④山手側北端で検出した溝である。ほぼ南北方向で、等高線に対しては斜交している。検出長は6mで平野部側へも3区③へも延長しない。幅30cm、深さ8cm、断面形状は浅い逆台形で、埋土は褐色砂質土（粗砂混）である。埋土中からは弥生土器壺・高坏が出土した。

156は壺。157は高坏。高坏は下川津B類。弥生時代後期後半である。

#### S D3402 (第41図)

3区④平野部側・中央付近で検出した溝である。東西方向で等高線には直交し、現地割より南へ振る。溝の山手側・平野部側ともに削平を受けたと考えられ、検出長約6m、幅80cm、深さ10cm、埋土は褐色砂質土（粗砂混）、断面形状は浅い逆台形である。S D3403を切る。埋土中からは弥生土器壺小破片やサヌカイト片が数点出土した。

158は壺口縁部。小片である。弥生時代後期後半頃であろう。

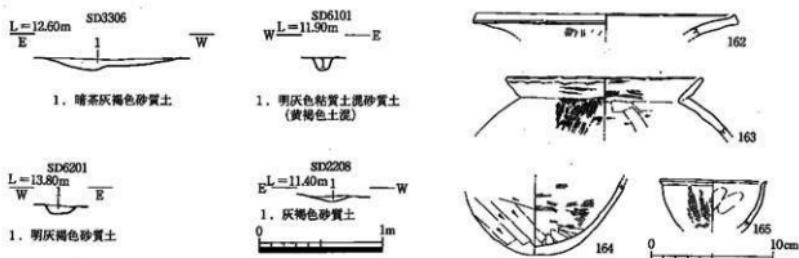
#### S D3403 (第41図、図版23)

3区④平野部側中央付近で検出した南北方向の溝である。S D3404・S D3402に直交し、等高線には平行である。S D3402に切られるが、そこから北側は消失している。この場所はちょうど地形的に落ちがやや急になる場所があるので、後世に削り取られた可能性もある。S D3404とは切り合い関係が認められず、そこから南へは続かない。幅35cm、深さ18cm、埋土は黄灰褐色粘質土で断面形状は逆台形である。埋土中からは平底を持つ壺の底部の他、サヌカイト剥片、焼けた石が出土した。

159は壺底部。外面を丁寧に磨く。弥生時代中期後半である。

#### S D3404 (第41図)

3区④平野部側中央部付近で検出した南北方向の溝である。方向はS D3403に直交し、等高線とも直交する。西側と東側は消失している。検出長は4m、幅95cm、深さ6cm、埋土はS D3403と同じ黄灰褐色粘質土、断面は浅い台形を2個連結した形状で、S D3403と接していない溝の北側と南側は2股に分かれている。S D3403との切り合いはないと考えられる。埋土中からは弥生時代中期後半の鉢や壺底部、サヌカイト剥片、焼け石が多く出土した。



第42図 S D3306、S D6101、S D6201、S D2208断面図(1/40) S D6201出土遺物(1/4)

160は壇底部。しっかりとした平底で外面は磨く。161は鉢。溝の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

#### S D3306 (第42図)

3区③下段南端で検出した溝である。西北西から東南東の方向で概ね等高線に直交する方向である。3区③の平野側、3区②側では検出していない。検出長は4m、幅105cm、深さ10cm、埋土は暗茶灰褐色砂質土である。埋土中からは土器の小破片の他サヌカイト剥片が出土した。弥生時代後期の遺構と思われる。

#### S D6101 (第42図)

6区①微高地上、北部で検出した弧を描く溝である。幅16cm、深さ10cm、埋土は明灰色粘質土混砂質土（黄褐色土混）、断面逆台形を呈す。幅が狭いのに比べて、断面はしっかりとしており、後世の削平を受けた可能性が高い。S H08、S D6104には切られる。円弧の直径は14m程度になる。溝の東側は調査区外、南西部はやや地形が落ちていく箇所に当たり、削平を受けて消滅している可能性もある。埋土中からの出土遺物はなかった。溝の形状から竪穴住居の周溝になる可能性が高く、弥生時代後期後半と考えられる。

#### S D6201 (第42図、図版23)

6区②西部の山手側で検出した円弧状の溝である。西側1/3を検出した。東側はS R03により消失し、北側も後世の削平により50cmほど低くなっている。幅24cm、深さ7cm、断面形状は逆台形で、埋土は明灰褐色砂質土である。円弧の直径は概ね11.2m前後と考えられる。埋土中からは弥生土器壺・壺・鉢などが出土した。この溝は規模・形状や出土遺物から竪穴住居の周溝の可能性が高いと考えられる。竪穴住居の痕跡は不明だが、溝の立地が微高地と谷筋の縁辺にあって竪穴住居に想定される場所が急激に落ちていることから、S R03により消失したと考えられる。溝の時期は弥生時代終末期と考えられる。

162は広口壺口縁部。163は壺。口縁はくの字に外傾し丸い体部を持つと考えられる。164は底部。ほぼ丸底を呈し、外面下部はヘラ削りする。165は鉢。口縁端部がわずかに外反し、外面はハケで調整する。

#### S D2208 (第42図)

2区②の西端で検出した弧を描く溝である。調査区外へ延びるが、隣接する3区④では未検出である。円弧の直径は10m程度になると想われるが、円弧が歪で不確かである。幅26~36cm、深さ3~5cm、断面形状は浅く、削平が著しいと思われる。埋土は灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器杯が出土したが、S D2210の遺物が混入したとも考えられる。円形に巡る溝の形状から、竪穴住居の周溝である可能性があり、弥生時代後期のものである可能性があろう。

#### S D2401 (第43・44図、図版24)

2区④北部を南西から北東へ流れる溝である。幅1.4m、深さ0.32mで埋土は暗灰色小礫混シルトである。出土した土器は弥生土器が多く、摩減度も少ないが、小破片ながら9世紀後半~10世紀前半の土師器杯、須恵器杯・壺などが特に溝の西側のS R02と切り合わない場所から出土する。出土遺物は弥生土器が圧倒的に多く摩減度も少なく破片も大きいが、掲載した弥生土器はすべてS R02と切り合う場所から出土しており、S R02の土器を巻き込んだものである可能性も高かろう。検出した位置関係から、この溝は後述するS D01に統く可能性があると思われる。

166は広口壺。外面と内面の頸部から上をハケで調整し、内面体部はヘラ削りする。体部の上部では

とんどが削れており、ここは粘土の継ぎ目であったと考えられる。167・168は壺。167は内外面ともハケで底部はわずかに底がある。内面下半はヘラ削りする。168は外面を密なタタキで、内面はハケで調整する。169は鉢。口縁部は外側へ屈曲させ、器表にあまり調整痕を残さない。

S D2403 (第43~45図、図版24・25)

2区④中央部付近で、S D2401の南東側に平行して流れる溝である。幅1.2m、深さ0.6m、埋土は灰色小礫混細砂である。溝の北東部は上面を弥生時代後期の土器を包含する層に覆われ、時期はそれ以前である。S D2403の下部にはS D2404・2405の2つの流路を検出したが、土層の断面観察からは明確には確認できなかった。

170・172は最下層砂層から出土した。いずれも繩文土器。摩滅が著しい。170は浅鉢。口縁端部がわずかに内側へ屈曲する小片で傾きは不確かである。172は底部。171・176~180は黒色~暗灰色砂層（上層）で出土した。171は繩文土器。深鉢。外面に突帯が巡り、突帯にはV字状の刻み目が入る。摩滅が著しい。176は壺。短く直立する頸部が付く。内外面ともハケで仕上げる。外面体部下半は他の部分とは原体が異なる粗いハケで仕上げる。177~187は壺。177は口縁端部に面を持ち、斜め方向の刻み目を入れる。体部中位にも同様の刻み目を入れ、刻み目より上はハケ、下はヘラミガキを密に施す。時期は弥生時代中期後半。178は形態的には下川津B類と思われるが、角閃石は目立たない。体部外面は上部がハケ、下部は密なヘラミガキを行う。体部内面は上半は指押さえ、下半はヘラ削りを行う。指押さえの場所には指押さえの単位を超えて横方向の筋状の圧痕がある。この圧痕は指押さえをした場所で深く残っており、指押さえをした際に直接土器に指押さえをしたのではなく、何かの上から指押さえをしたと思われる。183は外面にタタキ痕が密に残る。胎土中に雲母を多量に含む。184は外面にあまり調整痕跡を残さない。173~175・181・185~188は上部の埋土中から出土した。173~175は壺。173・174は広口壺。174は口縁端部に面を持ち、そこに斜格子文を刻みつける。175は細頸壺。下川津B類。185~187は壺。外面はタタキの後ハケを施すが、いずれもあまり頸著には残らない。内面はヘラ削りする。188は鉢。あまり調整痕跡を残さない。底部には時計回りに粘土紐の巻き上げ痕跡が見える。

溝の時期は出土遺物から弥生時代終末期と考えられる。なお、177・179・180・182・185はS D2405との接合資料である。

S D2404 (第45図)

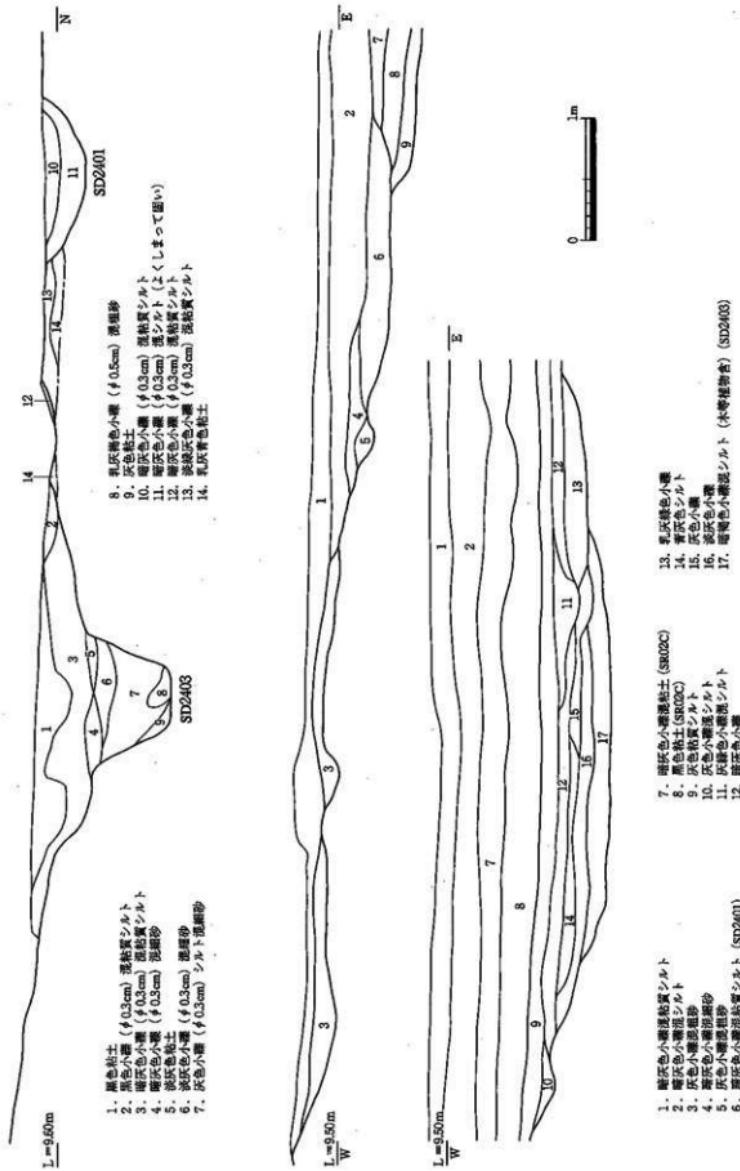
S D2403の下部で検出した2条の溝のうちの北側の溝である。幅0.35m、深さ15cmである。ただし、土層断面上では確認できなかった。

189は壺。外面はタタキの後丁寧にハケを施し、内面体部はヘラ削りで薄くする。190は鉢。手捏ねで口縁部はガタガタである。底部にわずかにハケを施す。

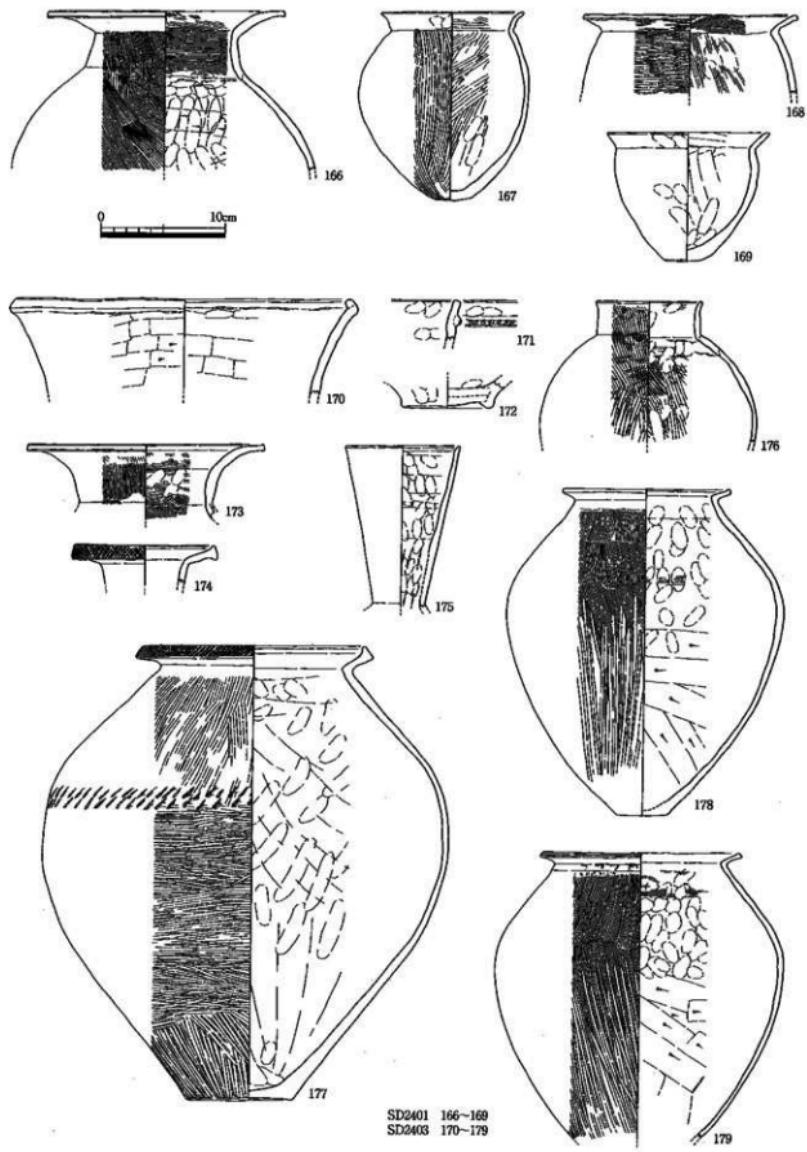
S D2405 (第45図)

S D2403の下部で検出した2条の溝のうちの南側の溝である。幅0.5m、深さ16cmである。ただし、土層断面上ではよく確認できなかった。

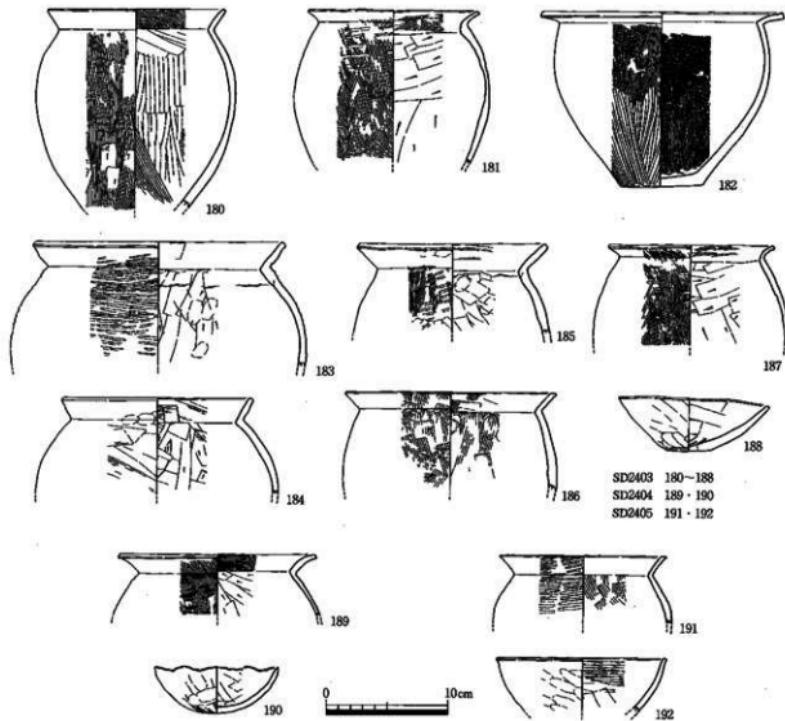
191は壺。外面はタタキを密に施す。192は鉢。内面は横方向のハケを施し、外面には調整痕跡をほとんど残さない。



第43図 SD2401・SD2403断面図(1/40)



第44図 SD2401、SD2403出土遺物(1)(1／4)



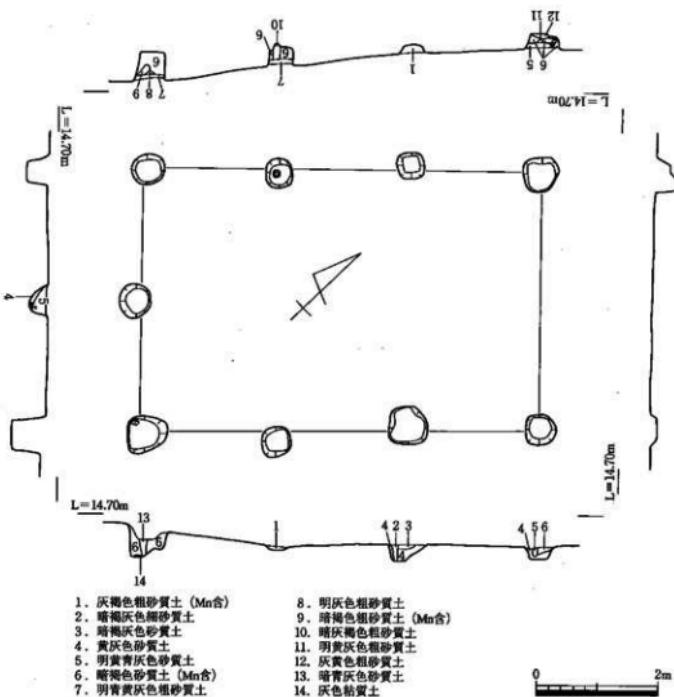
第45図 SD2403～SD2405出土遺物(2)(1/4)

## 2. 奈良時代の遺構・遺物

### (1)掘立柱建物

SB05(第46・47図、図版15・80)

3区④上段私道際で検出した掘立柱建物である。方位はN46°Eで、現地割には直交、等高線にも概ね直交する。桁行3間(6.45~6.55m)、梁間2間(4.25m)で、柱間は2~2.3m、面積は27.625m<sup>2</sup>である。南側梁間の中央の1穴がない。柱穴は円形または隅丸方形で、直径36~54cm、深さ25~50cmである。埋土は暗褐色灰色粗砂質土などである。埋土中からは暗文のある土師器杯、須恵器杯・壺、サヌカイト片、弥生土器壺口縁部などが出土した。出土遺物が少なく、時期は決めていくが、8世紀中頃と考えられる。



第46図 S B 05平・断面図(1/80)

193は土師器皿。小片。193は口縁端部はわずかに玉縁状を呈し、体部内面には斜放射状の暗文がある。外面は横方向のヘラミガキを施す。194は須恵器皿。口縁端部内面にわずかに段を持つ。外面の底部と体部の境付近でわずかにヘラ削り痕跡を残す。いずれも8世紀中頃。195は叩き石。砂岩。下端部に顎著に敲打痕を残し、側縁部にも敲打痕を少し残す。側面のうちの1面の比較的平らな面にはわずかに擦痕があり、砥石としても利用していたらしい。混入と考えられる。

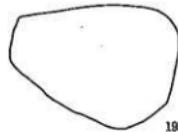
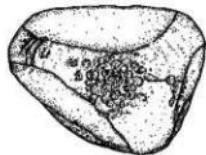
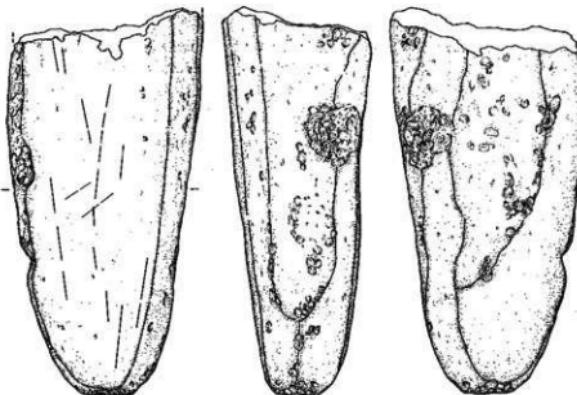
#### S B 06 (第48図、図版15)

3区④下段中央付近で検出した掘立柱建物である。方位はN47°Wで、現地割にはほぼ平行する。等高線からみれば、やや周囲より高い位置に立地する。桁行3間(4.6m)、梁間1間(2.75m)で面積は12.65m<sup>2</sup>である。柱間は桁方向が1.5~1.6m、東隅の柱穴が欠ける。柱穴の形状は円形で直径20~32cm、深さ15~23cm、埋土は暗褐色粗砂質土である。埋土中からは須恵器B、土器の小破片が出土した。土器の出土量が少なく、時期は明確にはしがたいが、出土遺物から時期は8世紀後半頃と思われる。

196は須恵器B。退化した高台が付く。

#### S B 07 (第49図)

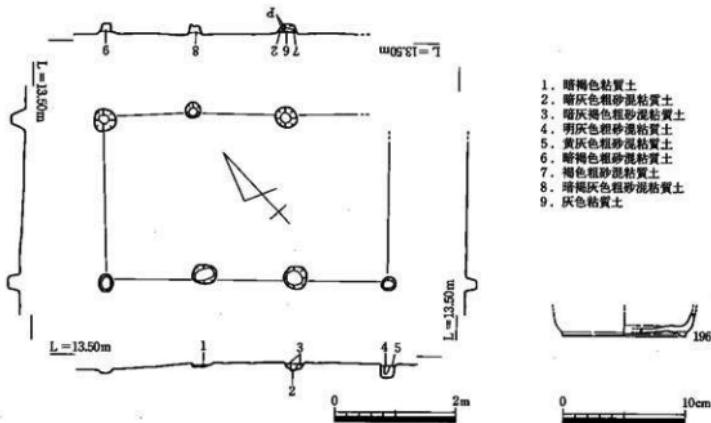
3区④下段東部で検出した掘立柱建物である。方位はN46°Wで、S B 06とはほぼ同じである。桁行3間(4.6m)、梁間1間(3.4m)で面積は15.64m<sup>2</sup>である。柱間は桁方向が1.4~1.6m、梁方向が3.4mで、



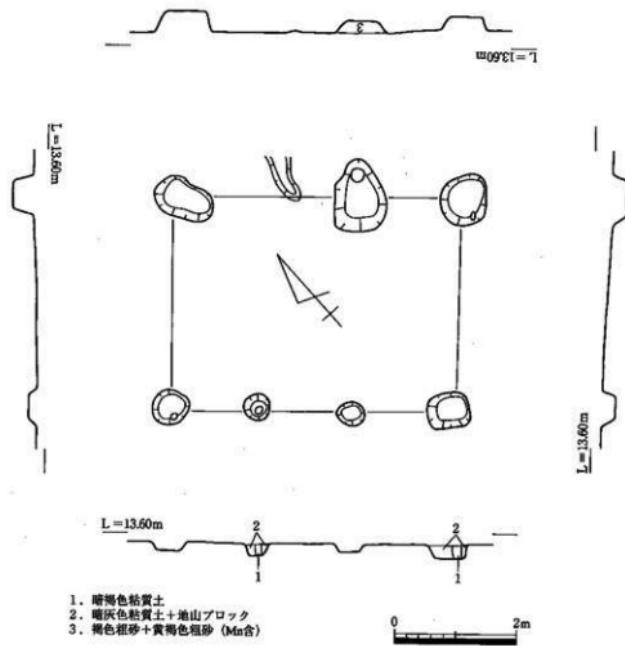
195



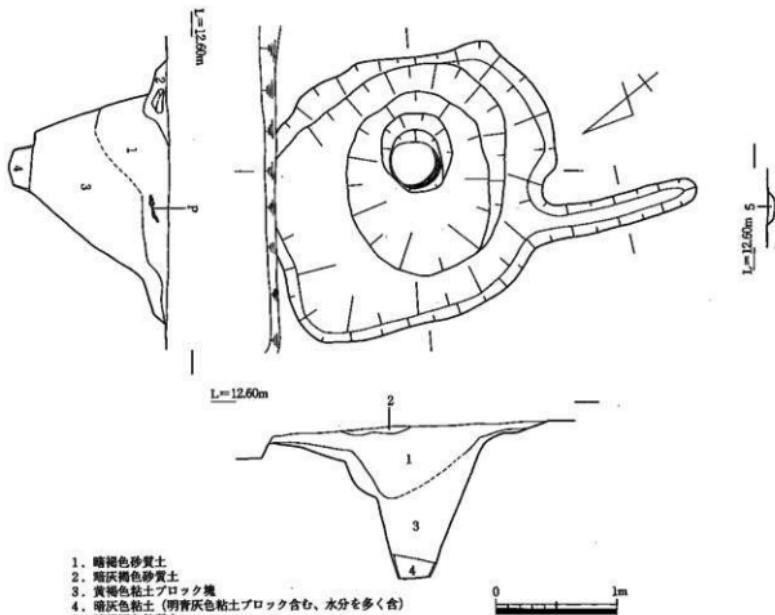
第47図 S B 05出土遺物(1/4、1/2)



第48図 S B06平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)



第49図 S B07平・断面図(1/80)



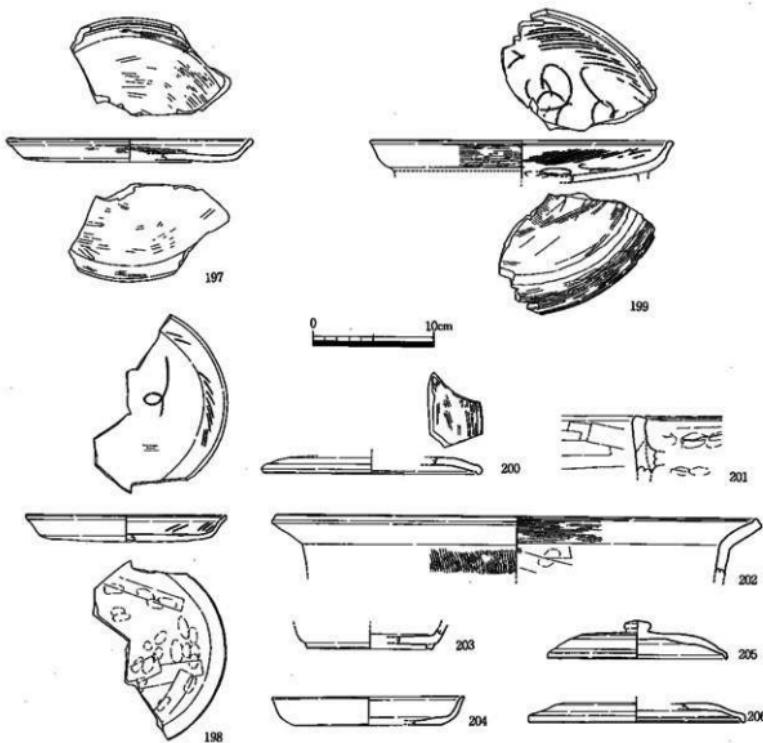
第50図 S E 01平・断面図(1/40)

北側の柵方向の柱が1穴欠ける。柱穴の形状は円形または隅丸方形で直径40~80cm、深さ20~35cm、埋土は概ね明灰色粘質土である。埋土中からは底部内面に螺旋形の暗文を施した土師器が出土したほかは、土師器小片が出土しただけである。時期は出土遺物から8世紀代とした。

## (2)井戸

### S E 01 (第50・51図、図版15・25)

3区⑤上段中央付近で検出した井戸である。ほぼ円形で直径2.2~2.4m、深さ1.33mで断面形は中央付近までは壠鉢状、それ以下は円筒形に近い。井戸の最下部には直径40cmの曲物が1段設置されていた。埋土は、井戸枠内は水分を多く含むベタベタの暗灰色粘土、井戸の中位までは地山ブロックで埋められ、人为的に埋め戻されたことがわかる。地表面から60cm程度までは暗褐色砂質土で漸次的に埋没していくと考えられる。井戸の北西方から西側へ、(等高線に直交する山手側の方向)現地割に沿う方向で約2.5mの溝が延びている。幅25cm、深さ6cm、埋土は暗褐色粘質土である。井戸から山手側へ水を引くための溝にしては規模が小さく、単に井戸の埋没後で水溜まり状になっていたときに、そこへ周囲の水を排水するために掘られたものであろう。井戸の埋土中からは土師器皿・蓋・甕・羽釜C・須恵器蓋・杯Bが出土した。土師器甕・羽釜Cが10世紀代の遺物である他は8世紀後半頃の遺物であり、井戸が稼働していた時期もその頃と考えられる。



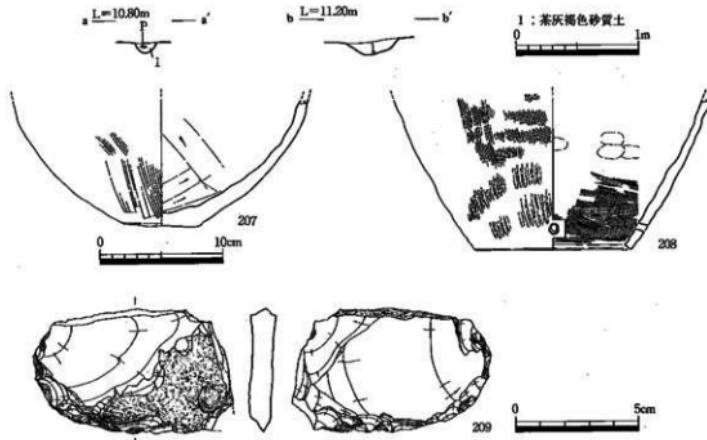
第51図 S E 01出土遺物(1/4)

197~199は土師器皿。198・199は体部に斜放射文、底部に連弧文の暗文を持つ。199は体部外面にもヘラミガキする。197・199は口縁端部を内側へ丸めるようにして玉縁状にする。199は高台の付くものであるが、高台は完全に剥離していて、剥離痕跡を残すのみである。200は蓋。外面にヘラミガキを施す。小破片のため傾きがやや不正確。202は甕D。体部はまっすぐに延び、長胴形になるもの。201は羽釜C。小片。203~206は須恵器。203は杯B。204は皿。205・206は蓋。頂部はヘラ削りで調整する。土器はいずれも造構の上半部から出土したもので、人為的に埋め戻したと考えられる層位より下からは出土遺物はなかった。

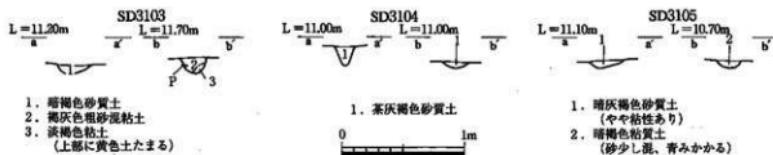
### (3)溝

#### S D3119 (第52図、図版25)

3区①北東部隅で検出した溝である。概ね現地割や等高線に平行・直交する方向で、調査区隅で平野の方向へ直角に曲がる。北側で溝接する1区②とは地表面の高低差が40cmあり、1区②ではかなり削平



第52図 S D3119断面図(1/40)出土遺物(1/4、1/2)



第53図 S D3103～S D3105断面図(1/40)

を受けている。溝の幅22cm、深さ10cm、埋土は灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器瓶が出土した。この溝は弥生時代後期後半の溝S D3120を切る。溝の時期は8世紀代と考えられる。

207は弥生土器底部。壺と思われる。外面にはハケ、内面はヘラ削りする。208は土師器瓶。体部は開き気味に上がり、体部下端部に孔が1個所残存する。外面は下部は継方向にタタキ痕が残り、その他はハケで仕上げている。209はスクレイパー。上部には自然面を残し、下部には簡単な刃部を作る。サヌカイト製。

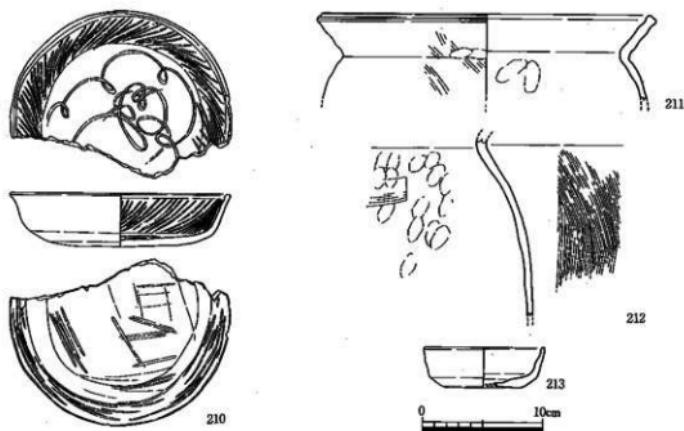
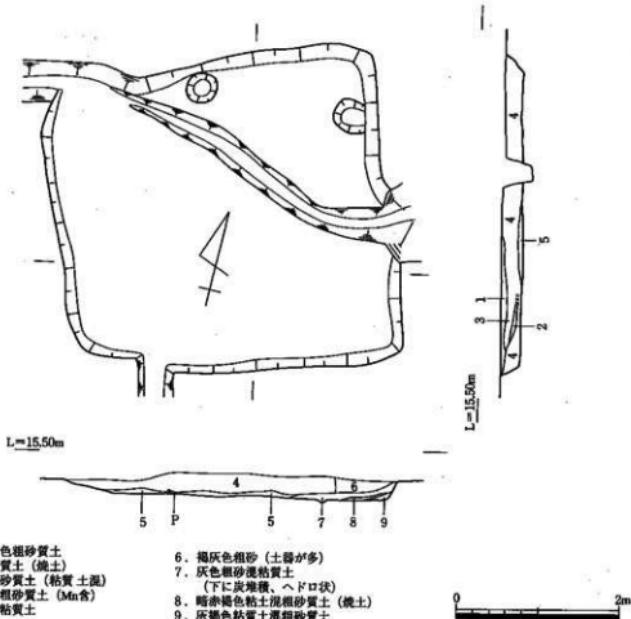
#### S D3103 (第53図、図版15)

3区①中央や野平部側(東部側)で検出した。S D3119とはほぼ同じ方向である。幅28cm、深さ7cm、埋土は褐灰色粗砂混粘土である。出土遺物は土師器か弥生土器か区別のつかない土器小片が出土したのみであったが、S D3104・3105・3119との形状や規模の類似性からこれらと同時期とした。

#### S D3104 (第53図)

S D3103の南側約1.5mで検出した溝である。方向は概ねS D3103と同じであるが、蛇行気味に流れ、西側ではS H09と重複する部分で北へわずかに屈曲し、消失する。幅24cm、深さ6cm、埋土は茶灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器小破片が出土したのみであったが、この溝はS H09に切られており、8世紀代の溝としておく。

#### S D3105 (第53図)



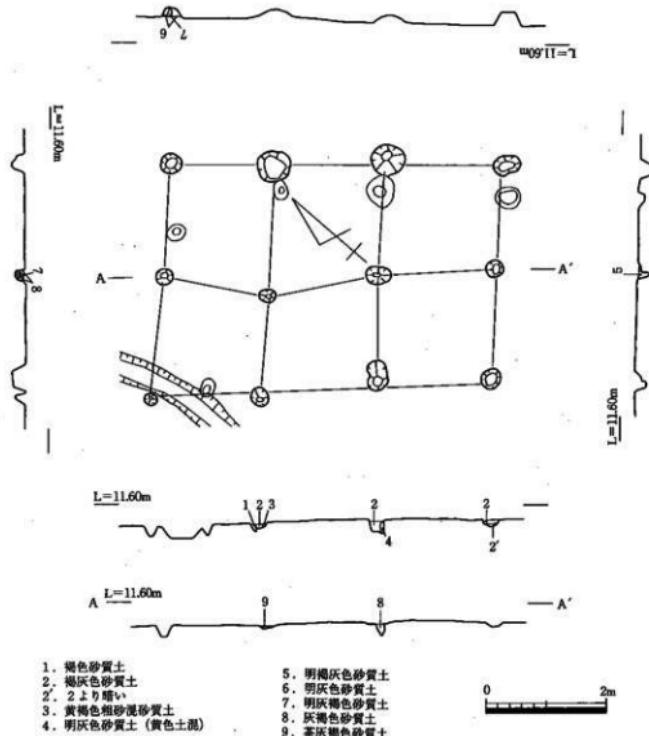
第54図 S X01平・断面図(1/60)出土遺物(1/4)

3 区①中央付近 S D3104の南約1mの位置で検出した。方向は概ね S D3103・3104と同じであるが、溝の西半でやや南へ振り、S H09と重複する部分で南へわずかに屈曲して消失する。幅28cm、深さ6cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器の小片が出土しただけであった。しかし、この溝がS H09に切られることから、一応8世紀代の溝としておく。

#### (4) 性格不明遺構

S X01 (第54図、図版15・25)

4 区①北東隅で検出した隅丸方形の堅穴状遺構である。傾斜の変換点で、ここより西側は急傾斜地となる。隅丸方形で1辺4m、深さ26cm、埋土は青みがかった灰褐色粗砂質土で遺構の東部には炭や焼土の堆積層がある。壁溝や炉跡は確認できず、北側でピットを2穴確認したが、主柱穴を構成するものかどうかは不明である。埋土中からは土師器杯・壺、須恵器杯Gが出土している。土師器杯は内面に斜放射+連弧文の暗文を持つものである。7世紀後半~8世紀前半頃と考えられる。



第55図 S B 08平・断面図(1/80)

210～212は土師器。210は杯。口縁端部内面にはわずかに沈線状に巡る。内面体部には斜放射、底部には蝶旋文を入れる。外面にはヘラミガキを入れる。211・212は壺。213は須恵器杯G。

### 3. 平安時代の遺構・遺物

#### (1)掘立柱建物

##### S B08 (第55図)

3区②北東部で検出した総柱建物である。桁行3間(5.5m)、梁間2間(3.0～4.0m)で、主軸方位はN40°Wである。柱間は桁行は1.7～2.0m、梁間は1.75～2.0mである。南東側の梁間はやや小さく、やや歪な建物である。柱穴は円形で、直径30～40cm、深さ10～22cm、埋土は褐灰色砂質土などである。S B09と柱筋をきれいに揃える。S B09との距離は75cmと非常に近接する。ピットの埋土中からは土師器羽釜、須恵器杯などが出土した。時期は、出土遺物からは10世紀前半頃を考えられようが、同時存在と考えられるS B09は11世紀代と考えられ、S B08もS B09と同時期であろう。

##### S B09 (第56・57図)

S B08と近接して検出した掘立柱建物である。S B08と主軸方位を揃え、南東の柱筋を揃える。桁行6間(11m)、梁間3間(6m)で、北東側に庇を持つ。柱間は概ね桁行が1.6～2.3m、梁間が1.8～2.4mである。柱穴は円形または楕円形で、直径30～60cm、深さ15～40cmで埋土はおもに褐灰色砂質土である。S B08との建物配置の計画性からS B08と同時存在は間違いないと考えられるが、ほぼ同時期の開削と考えられるS D01とは方向が異なり、位置的にも近接することから、S D01とはやや時期がずれると思われる。柱穴埋土中からは土師器杯・羽釜A、須恵器杯が出土した。時期は11世紀代のものでS D01より新しいと思われる。

214～220はS P194の柱穴から、221～224はS P206の柱穴から、225・226はS P188の柱穴から出土した。214～218・220～226は土師器。220以外は杯。小片が多いがいずれも回転台土師器と考えられる。216は体部が大きく開く。218は円盤状高台底部。219は須恵器。円盤状高台底部。全面に火拂がかかる。220は土師器羽釜A。口縁端部は上方へ引き上げ、体部は内外面とも板ナアで調整する。

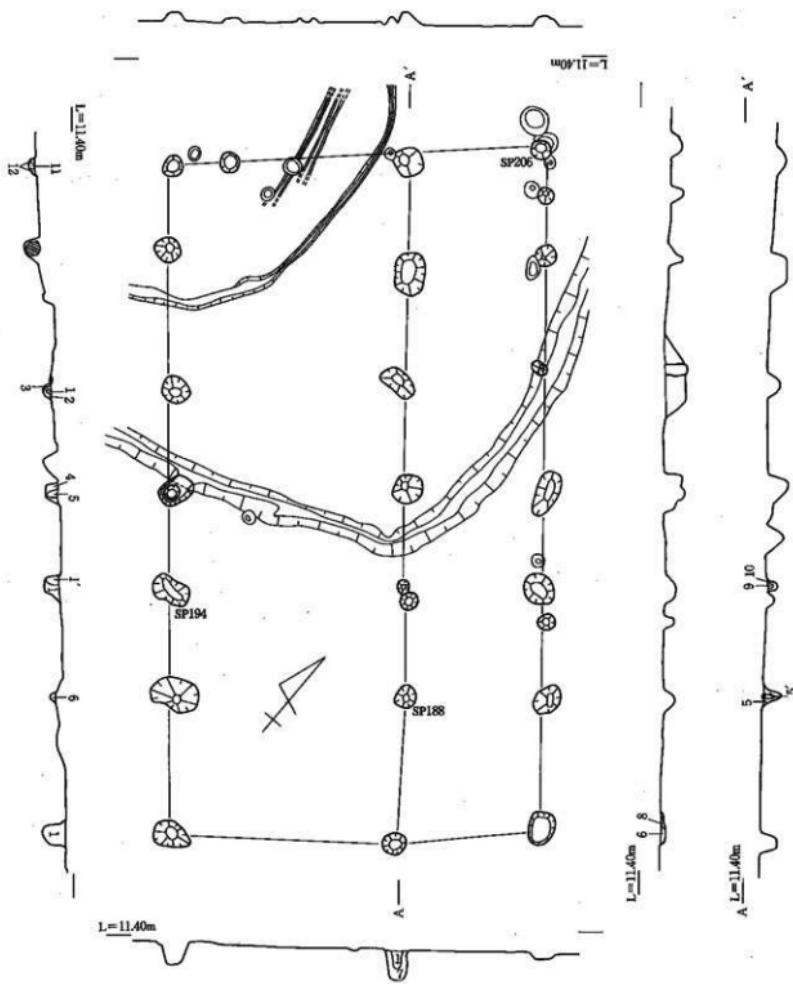
##### S B10 (第58図、図版11)

1区②と3区①に跨って検出した。桁行3間(5.7m)、梁間2間(4.0m)、面積は22.8m<sup>2</sup>である。方位はN67°Eである。柱間は桁行が1.6～2.1m、梁間が1.7～2.3mである。柱穴は円形または隅丸方形で大きさは1辺50cm前後、中間の柱穴はやや小さめである。埋土は主に褐灰色砂質土である。柱穴埋土中からは土師器小破片とともに鉄滓が出土した。当遺跡の鉄滓は10世紀前半代の遺構に限られることからこの建物は10世紀前半代に比定できる可能性があろう。

##### S B11 (第59図、図版15)

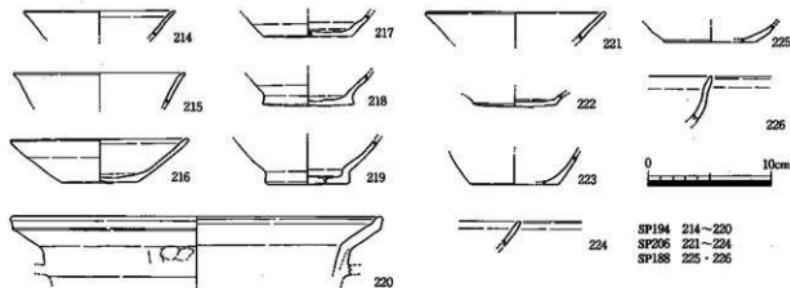
1区②北東端で検出した総柱建物である。桁行3間(4.2～4.35m)、梁間2間(3.9～4.15m)で、面積は17.2m<sup>2</sup>、方位はN81°Eである。柱間は桁行で1.35～1.6m、梁間で1.95～2.15mである。柱穴は円形で直径20～28cm、深さ9～32cm、埋土は主に褐灰色粘質土である。柱穴埋土中からは土師器壺、杯などが出土した。時期は概ね10世紀代と考えられ、S B10と同じくらいと考えられる。

227は土師器壺。やや胴が張るもので、10世紀頃と考えられる。

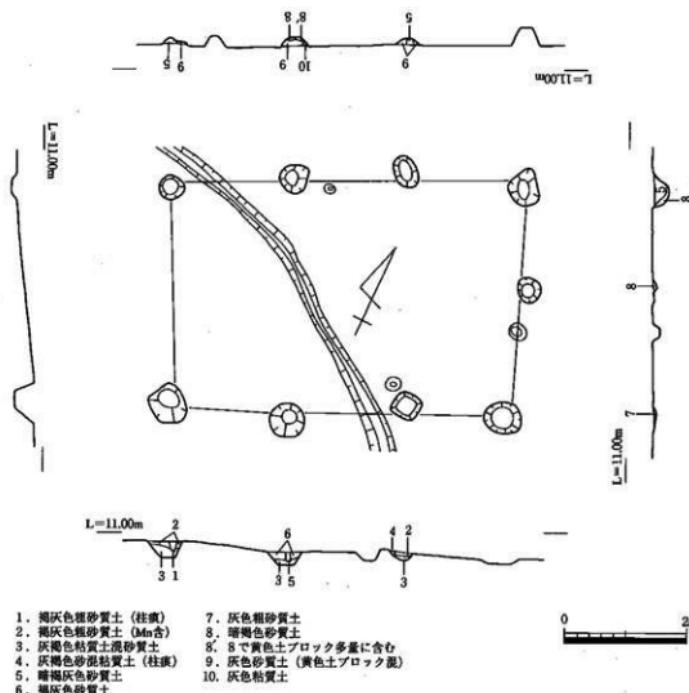


1. 褐灰色砂質土  
1. 1より少し明るい  
2. 黄灰褐色砂質土  
3. 灰色砂質土  
4. 黄灰砂質土 (Mn汚)  
5. 灰褐色砂質土  
5. 5よりやや青っぽい  
6. 茶灰褐色砂質土  
7. 明灰色砂質土 (黄色土風)  
8. 明茶褐色砂質土  
9. 黑褐色砂質土  
10. 明黄灰褐色砂質土  
11. 暗灰色粗砂質土  
12. 暗茶灰褐色砂質土

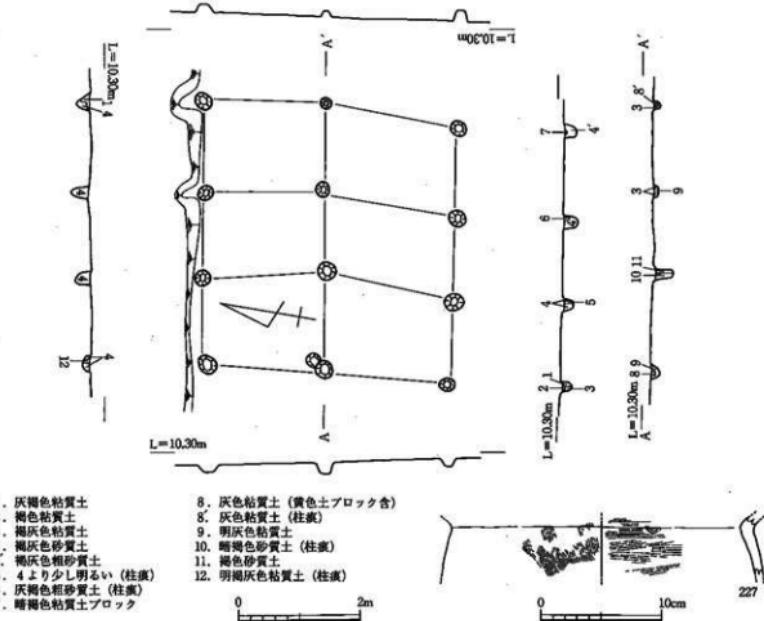
第56図 S B09平・断面図(1/80)



第57図 SB09出土遺物(1/4)



第58図 SB10平・断面図(1/80)



第59図 S B11平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)

#### S B12 (第60図、図版11)

1区②と3区①に跨って検出した掘立柱建物である。桁行3間(6.7m)、梁間1間(3.45m)で面積は23.1m<sup>2</sup>、方位はN43°Eである。柱穴は円形で直径18~27cm、深さは山側で28cm、平野部側で6~19cmである。平野部側は後に削平された可能性もある。S B10と重複するが、柱穴の切り合い関係ではなく、前後関係は明らかではないが、柱穴がS B10より小さいこと、S B08・09と柱筋が揃うことなどを考えあわせれば、S B10より新しいのではないかと思われる。柱穴内からは土師器杯の小片が出土している。

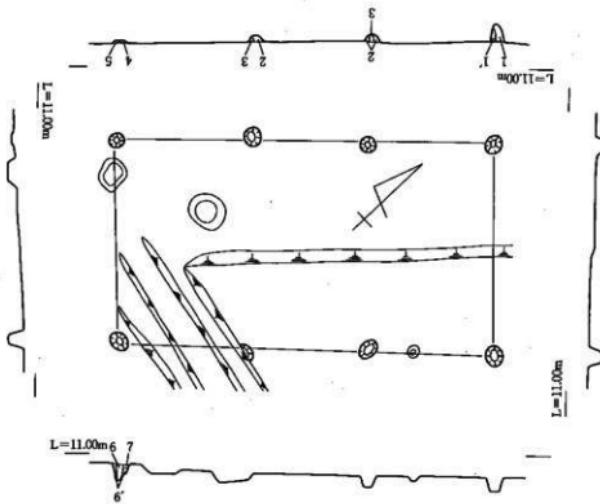
228は土師器杯底部。底部をヘラ切りする。回転台土師器になると考えられる。

#### S B13 (第61図、図版15)

3区⑤下段(北東部)で検出した。方位はN53°Eで、現地割にだいたい沿う。桁行3間(6.25m)、梁間1間(1.12~1.18m)で面積は8.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で直径13~26cm、深さ8~16cmで、埋土は灰褐色砂混粘質土である。柱穴の埋土中からは土師器壺または鍋、須恵器小片などが出土した。造構の時期は不明確ではあるが、一応土師器壺の時期である10世紀頃としておく。

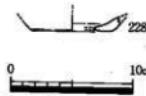
#### S B14 (第62図)

3区⑥下段西南端で検出した。2間分(3.4m)検出し、残りは調査区外の私道へ延びると考えられる。



1. 灰褐色粘土質土  
 1'. 1より少し暗い(柱痕)  
 2. 青灰色粘土質土  
 3. 灰色砂混粘土質土  
 (黄灰色土ブロック多)  
 4. 灰色粗砂質土  
 5. 灰褐色粗砂質土  
 6. 灰褐色砂質土  
 6'. 6より少し明るい  
 7. 黄灰色土(ベース) ブロック

第60図 S B 12平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)



0 2m

0 10cm

これが桁行になるか梁間になるか不明である。方位は検出分で判断する限り N53° E で、概ね現地割に沿う。柱間は1.7m; 柱穴は円形で直径18~30cm、深さ8~10cm、埋土は灰褐色砂粘土質土である。柱穴埋土中からは土師器碗・杯・甕、須恵器片が出土した。時期は11世紀中~後半と考えられる。

229は土師器杯。230は円整状高台を持つ土師器杯。底部の一部に指押さえ痕があるが、基本的には回転ナデで仕上げる。

#### S P 3101 (第63図)

S B 09北西隅のピットに接して検出したピットである。S B 09との切り合い関係はない。直径50cm、深さ12cmである。埋土中からは土師器羽釜が出土した。

235は土師器羽釜。端部は内面に折り曲がり、鋤は上方へ向く。12世紀前半。

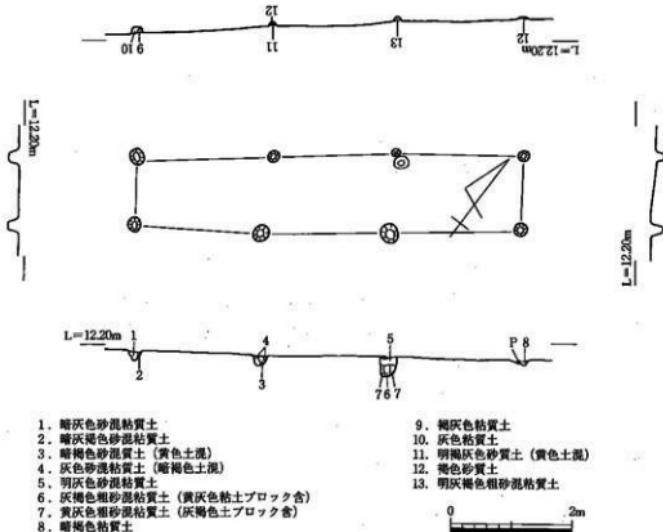
#### S P 3201 (第63図)

S D 3209の山側で検出したピットである。直径30cm、深さ13cmである。埋土中から須恵器杯が出土した。8世紀後半~9世紀前半。

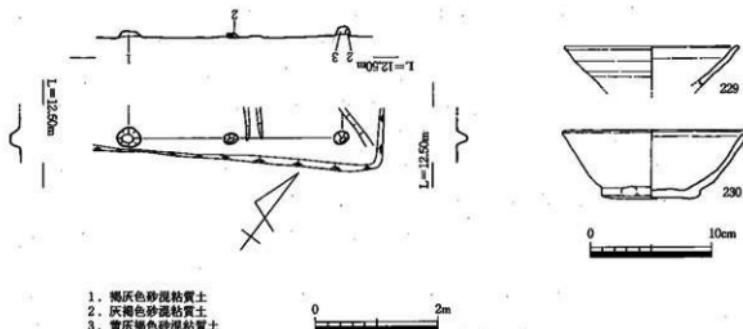
231は須恵器杯B。高台は完全に剥離しており、裏面に色の薄い剥離痕を残すのみである。

#### S P 3202 (第63図)

S D 3209私道側で検出したピットである。直径45cm、深さ17cmである。埋土中からは土師器杯が出土した。



第61図 S B 13平・断面図(1/80)



第62図 S B 14平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)

232は土師器杯。底部はヘラ切りで回転台土器である。9世紀後半~10世紀前半。

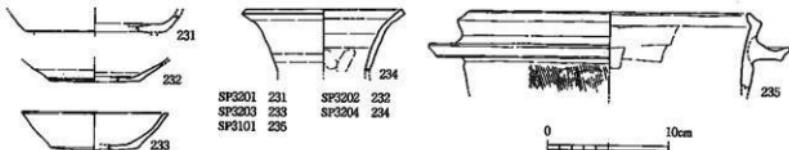
S P 3203 (第63図)

3区②北西部、S H04の東側で検出したピットである。直径35cm、深さ17cmである。

233は土師器杯A。体部はやや膨らみ気味に立ち上がり、口縁端部は緩く外反する。10世紀前半頃か。

S P 3204 (第63図)

3区②S B09の北西隅近くで検出したピットである。S B09を構成するピットの一つである可能性もある。直径20cm、深さ7cmである。234は須恵器壺。斜め上方に立ち上がる頭部で肩部に丸みを持つ体部が付く。全体にゴマ状降灰がみられる。9世紀後半。



第63図 S P3201~S P3204、S P3101出土遺物(1/4)

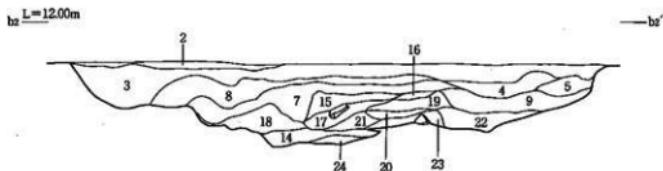
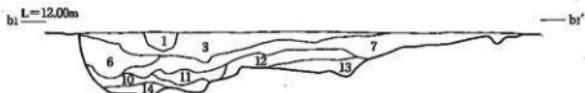
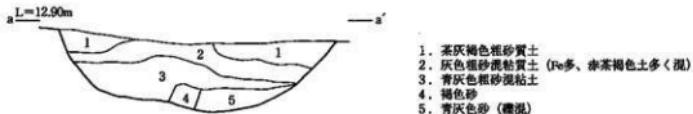
(3)溝(幹線水路)

S D01 (第64~70図、図版16・25~28・80・81)

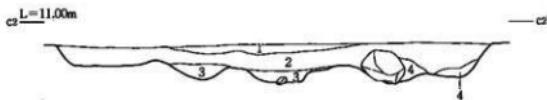
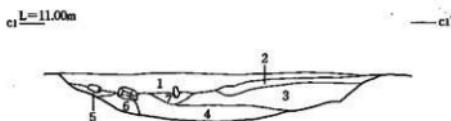
3区③から3区①にかけて丘陵部から平野部まで流れる溝である。3区①に南側に隣接する2区④では不明瞭であったが、S D2401へ続く可能性が高い。川津東山田遺跡I区と川津一ノ又IV区の境には少なくとも古代の一時期に水田城が広がっており、この溝はそこへ続いていた可能性が高いと思われる。延長約85mを検出し、高低差は約2mを計る。溝の幅は2.4~4.8m、深さは概ね70cm前後。3区②部分までは下部に砂層が多く、一定量の水流があったようである。方位は概ね等高線に直交する方向である。この時期の灌漑水路としての役割を果したと考えられる。

同じ溝ではあるが、延長距離が長いので、区ごとに分けて掲載した。236~246は最も丘陵部側の3区③(S D01A)から出土した。236は皿。摩滅気味で底部はヘラ切り。237は土師器杯D。摩滅気味で底部には反時計回りのヘラ切り痕跡を残す。238は椀。外面ともヘラミガキし、外面の高台と体部の境は指押さえ痕跡を残す。体部の下の方には粘土の雜目が見える。底部外面はナデがきれいに及ばず、クラックが残る。吉備系土師器椀。240・241は羽釜C。240は鈎が下へ垂れ、足釜になるものか。239は甕D。体部は丸みを持たず、長胴型になる。口縁端部は上部へ引き上げられる。242は須恵器杯。焼成はやや悪い。243は黒色土器B。内外面ともヘラミガキが施され、外面の体部と底部の境付近はヘラミガキの前にヘラ削りをしているようである。内面体部のヘラミガキは4~5分割と思われる。底部には時計回りのヘラ切り痕跡が観察できる。244・245は平瓦。いずれも須恵質である。244は凸面に繩タタキ痕跡が斜め方向に残り、下部から斜め上方に交互にタタキを施したことがわかる。端面の中位まで布目痕がかかる。245は凹面に糸切り痕跡(コビキA)が残る。246は扁平片刃石斧。片麻岩製。刃部に擦痕が顯著に残り、両側縁と上部に敲打痕が残る。

247~296は3区②(S D01B)部分で出土した遺物である。247~255は土師器杯。回転台土師器254・255は円盤状高台を持つ。255は口縁端部に煤が付着する。256は椀。高台は体部と底部の境に付き、体部はまっすぐ立ち上がりそうである。257~260は甕D。いずれも口縁端部を上方へ引き上げる。257~259は寸胴の体部を持ち、260は体部にやや丸みを持つ。内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケを施す。261~264は羽釜A。いずれも口縁端部を上方へ引き上げ、鈎はやや短めで、わずかに上方に向ける。概して薄い。265は羽釜C。口縁端部、鈎端部とも四角く作る。266~268は甕。266・267は鈎部と受け部の間がほとんどない。267は鈎端部を四角くする。268は底部。269は飯蛸壺。上部は窪ませる。270は須恵器杯。焼成はやや悪く、内外面に火拂がかかる。底部には板压痕が残る。271は皿。焼成はやや悪い。272は蓋。内外面に重ね焼きの痕跡が残り、外面の重ね焼きの場所には土器の溶着痕が残る。273~274は壺。273は長頸壺形体。肩部に稜線を持ち、その部分に沈線を巡らせる。体部の上部の方には絞り目がある。長い頭部が付く。体部下部にはヘラ削り痕が残る。274は外面に自然釉がかかり、内



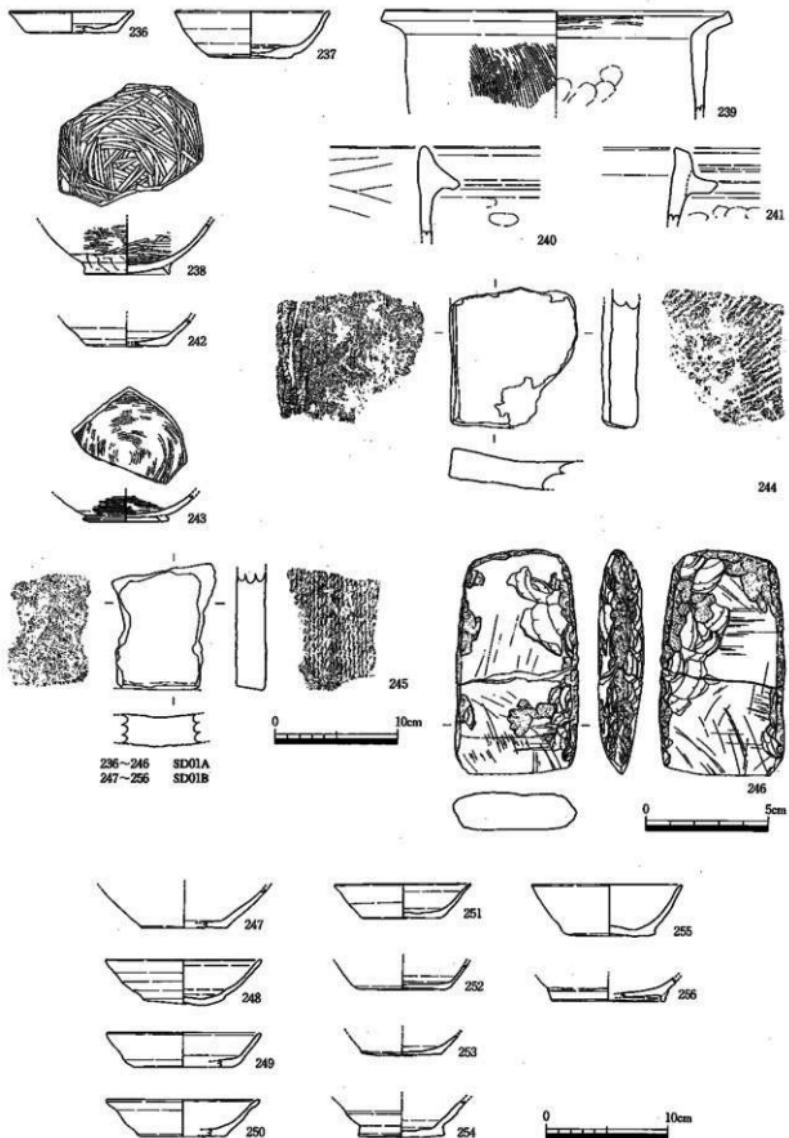
- |                         |                            |
|-------------------------|----------------------------|
| 1. 灰色砂質土 (少し褐色っぽい、下に漂泥) | 13. 明黄褐色砂質土 (漂多、土も多)       |
| 2. 明灰褐色砂質土 (Mn混)        | 14. 青褐色砂質土 (漂泥、水分多くややベタつく) |
| 3. 茶灰褐色砂混粘土質土           | 15. 明褐色砂質土 (漂泥)            |
| 4. 3より茶色が強く色が暗い         | 16. 黄褐色粗砂                  |
| 5. 4より茶色が強く灰色が強い        | 17. 明青灰褐色砂質土 (漂泥)          |
| 6. 茶灰褐色粗砂混粘土質土          | 18. 青褐色灰褐色粗砂               |
| 7. 深灰色漂泥質土              | 19. 灰褐色粗砂質土                |
| 8. 深灰色粗砂 (茶灰色土塊)        | 20. 淡白色粘質土混粗砂              |
| 9. 褐褐色粗砂漂泥 (少し茶色かかる)    | 21. 明灰褐色砂質土+黄褐色砂質土、ラミナ状    |
| 10. 茶褐色粗砂土混粘土質土         | 22. 青褐色粘質土混砂質土 (漂っている)     |
| 11. 茶灰褐色粗砂              | 23. 明褐色粗砂+砂                |
| 12. 明褐色砂質土              | 24. 明褐色粗砂+漂                |

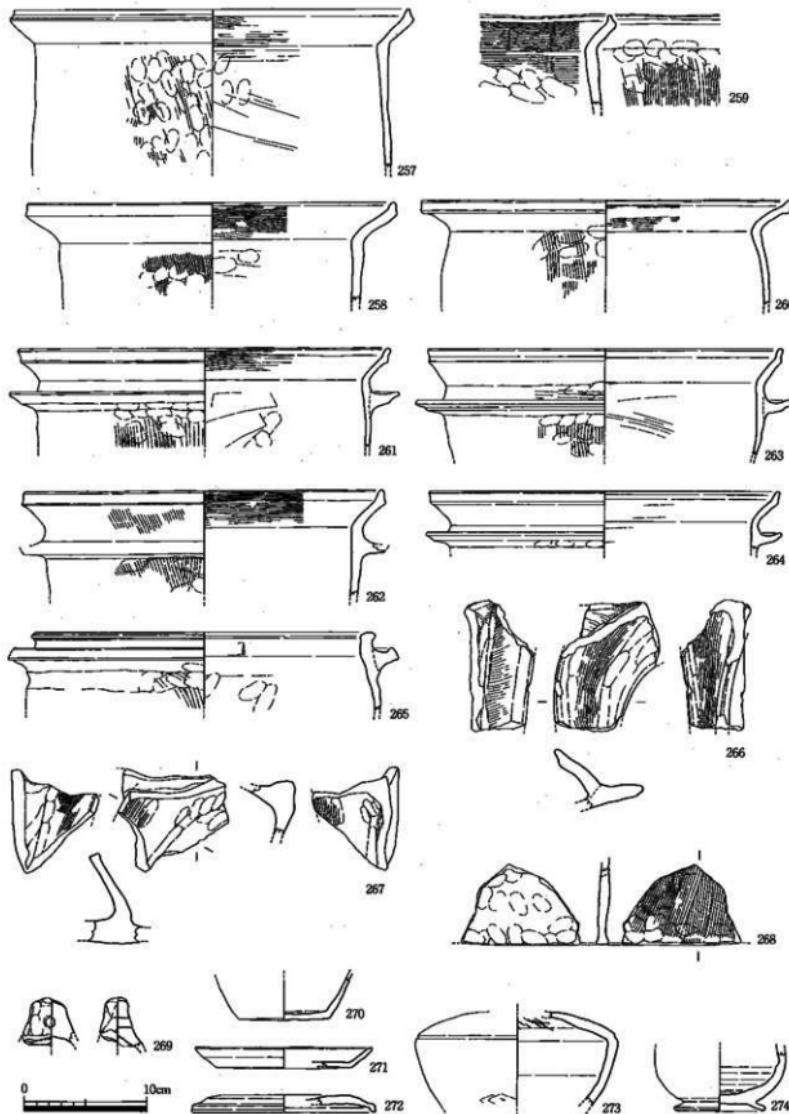


1. 棕褐色砂混粘土質土
2. 暗青褐色砂混粘土 (砂多)
3. 棕褐色砂混粘土質土 (赤茶褐色土上まる)
4. 灰色粘土漂砂質土 (地山B含、やや褐色かかる)
5. 明青灰色砂質土
6. 灰色砂質土 (粘性あり)
7. 明褐色砂質土 (所々黄色がかる)



第64図 S D01断面図(1/40)

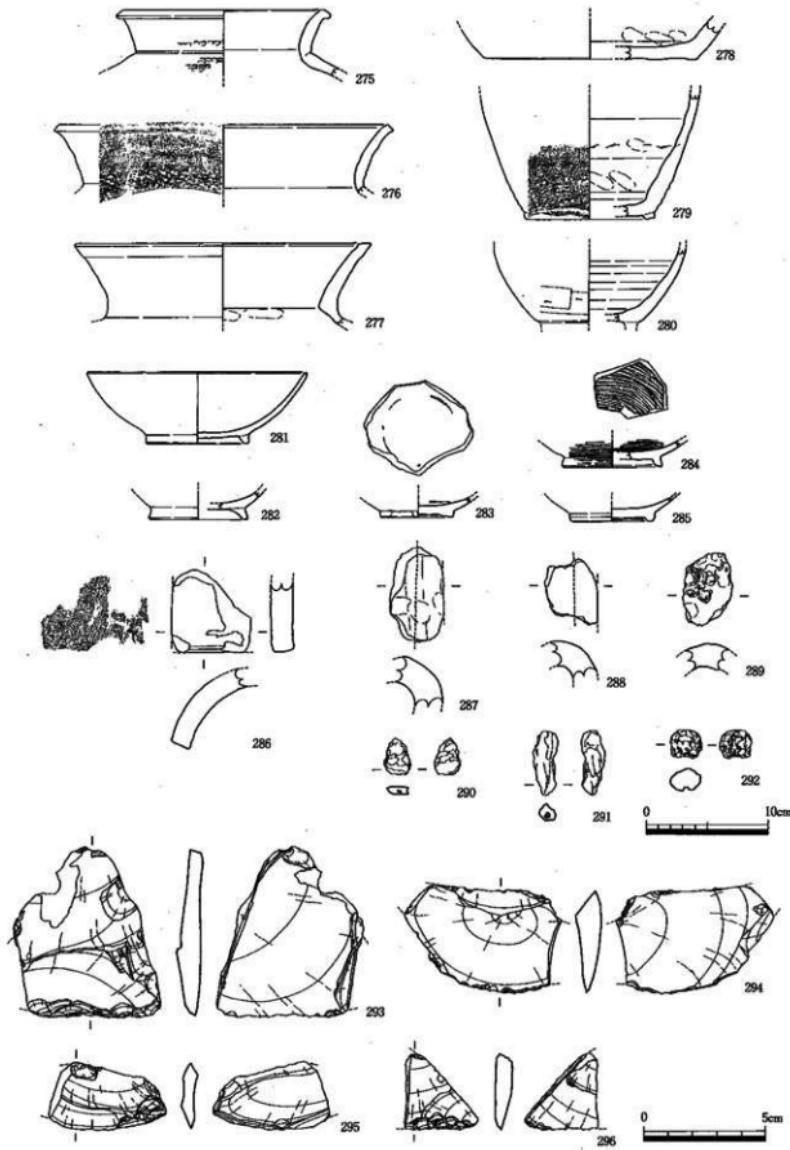




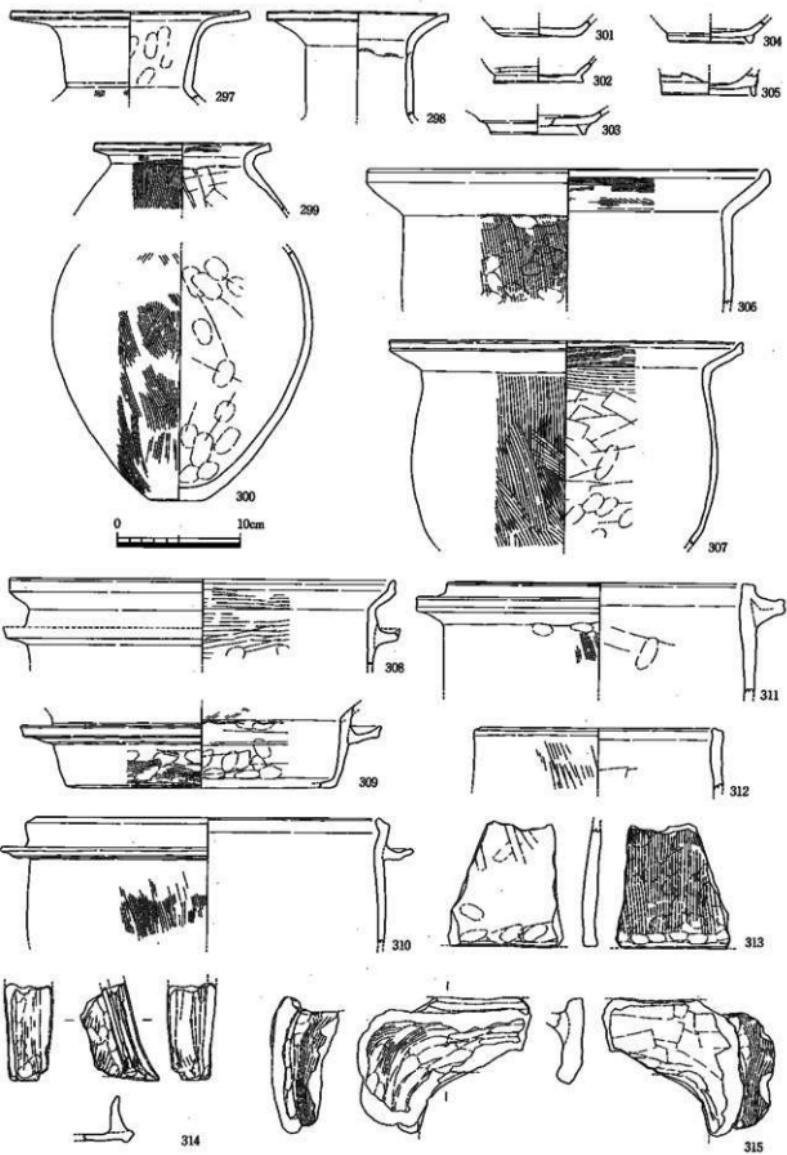
第66図 S D01(B) 出土遺物(2)(1 / 4)

面にはロクロ目を顕著に残す。高台は外側へ大きく踏ん張る形である。やや長めの頸部が付くと考えられる。これは S R02A 上層出土のものと接合した。275~277は壺。275は口縁端部を外側へ折り曲げ、276は四角く納める。276は頸部下部から体部にかけて格子タタキ痕がわずかに残るが、ほとんどがナデ消されていて不明瞭である。278~280は底部。278は壺、279・280は壺の底部。278は底部。外面には凹凸が残り調整は不明瞭である。279は低い高台が体部と底部の境付近に付き、体部の下部には1列文の右上がりの格子タタキ痕が残る。280は丸みを持つ体部で下端部にヘラ削りを施す。体部と底部の境に高台の剥離痕跡があるが、きれいに剥離していてほとんど痕跡を残さない。281・282は黒色土器 A 梗。全体に摩滅が著しく調整は不明瞭。281は高台は3/4程度まで剥離しているが、接合部には刻み目はない。283~285は綠釉陶器。いずれも削り出し高台で京都産。283は内面に重ね焼きの溶着痕を持ち、底部外面は施釉しない。高台は平高台の中を円弧状に沈線を入れたような雑な蛇の目高台である。285も高台内は無釉である。284は外外面にヘラミガキが観察でき、内面には重ね焼き痕と思われる色調の違いがみられる。全面に施釉するが高台内の施釉は薄く透明である。286は丸瓦。内面は布目痕、外面には横方向の板目痕が残る。287~289は輪羽口。287・288は溶融痕跡はみられないが部分的に灰色に変色する。289は先端部に溶融痕が残る。290~292は金属学的分析試料である。290・291は銅化の進んだ鉄器と思われる。290は長径4mm、短径2mm程度のものが、291は断面に直径5mm程度の円形のものが見えるが、器種は全くわからない。S D01の下流域東部には鍛冶関連遺構があり、S D01からも鉄滓や輪羽口が多く出土していることから、リサイクル用の鉄器であった可能性も指摘された。292は鉄塊系遺物。二次精錬する前の鉄で、この場所で二次精錬を行っていた可能性を示唆する遺物である。293~296はスクレイパー。サヌカイト製。294・295はいずれも刃部をわずかに作り出しているだけである。

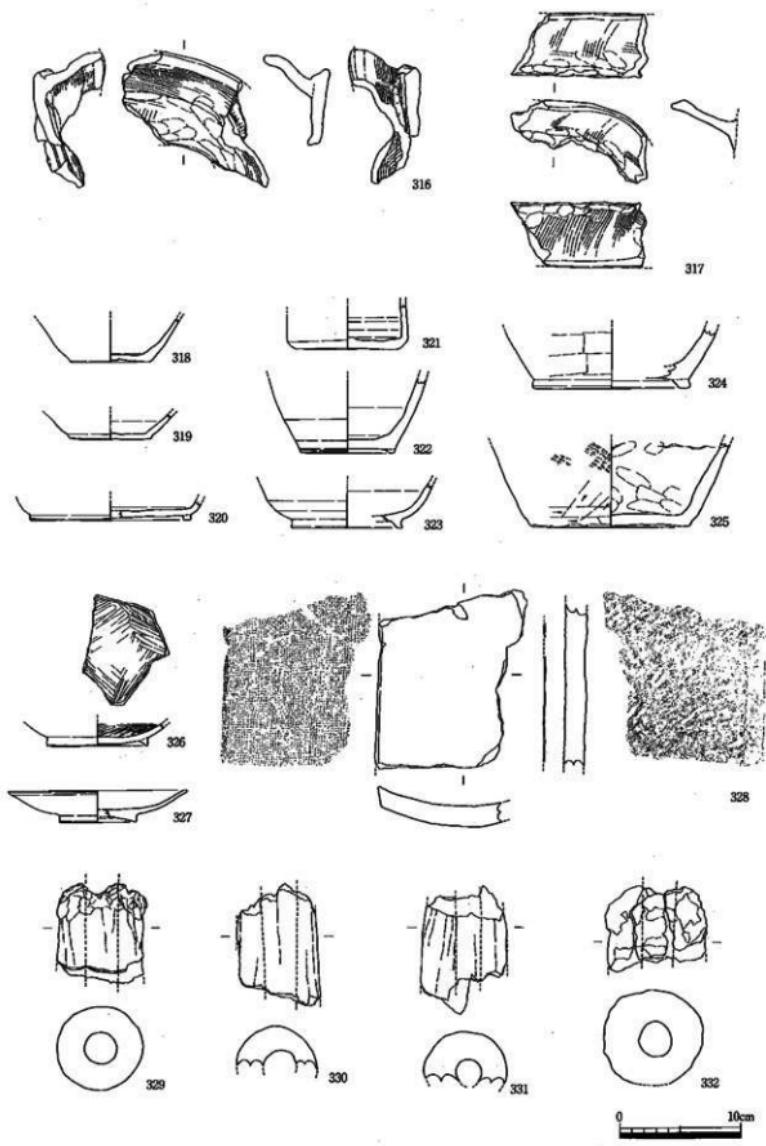
297~337は3区①部分（S D01C）で出土した遺物である。297~300は弥生土器。付近の遺構、または自然河川からの紛れ込みと思われる。全体に摩滅が著しい。297・298は広口壺。内面に粘土紐の継ぎ目の痕跡を残す。299・300は壺。外面はハケ、内面は板ナデで調整する。いずれも弥生時代後期後半~終末期。301・302は土師器杯。301は杯A。底部には時計回りのヘラ切り痕が残る。302は円盤状高台杯底部。底部外面には反時計回りのヘラ切り痕跡を残し、板压痕を残す。303~305は楕。306~307は壺D。口縁端部を上方へ引き上げる。外面を縦方向のハケ、内面口縁部は横方向のハケを行う。308は羽釜A。口縁端部を上方へ引き上げ、内面に横方向のハケを施す。309は羽釜。上半部の器形は羽釜Aに類似するようであるが、底部は屈曲し、平底状になる。外面の鋸下部には横方向のハケが残る。310は口縁端部を内側へ屈曲させ、鋸は中位で緩くくの字に屈曲させる。外面に縦方向のハケを残す。311は羽釜C。体部外面にはハケを残し、口縁端部、鋸端部は四角くする。312~317は壺。312は壺の受け口部分と思われる。小破片で口径はやや不確実である。鋸部は残らない。端部はわずかに内側へ屈曲する。313は底部。内面は板ナデ、外面はハケで、いずれも下端部は横方向に指揮さえをする。314は焚き口の下端部付近である。焚き口には接して鋸が付き、鋸先端部をわずかに内側へ屈曲させる。外面はハケ、内面はナデで仕上げる。315・316は鋸と受け部が残存する。315は鋸の内側を非常に粗雑な板ナデ、外面も雑なハケを施す。粘土がきれいに掻き取られておらず、成形はきたない。作りも厚手である。鋸部と受け部の間はほとんどない。317は鋸のみである。鋸部分がきれいに剥離しており、剥離面には体部の横方向のハケ目痕跡がネガで残っている。端部は下方へわずかに折り曲げる。316は鋸の外外面に横方向のハケを残し、鋸端部はやや下方へ折れ曲がる。318~325は須恵器。318・319は杯A。318は内外間に、319は外面に火拂を残し、いずれも底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。320は杯B。321~323は



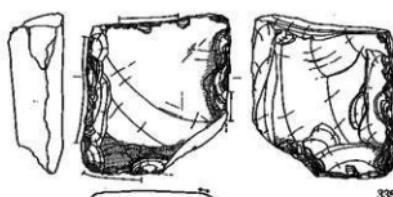
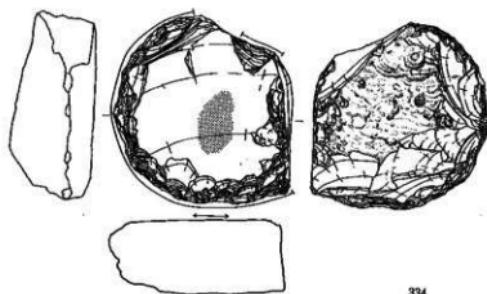
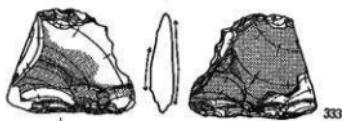
第67図 S D01(B) 出土遺物(3)(1/4、1/2)



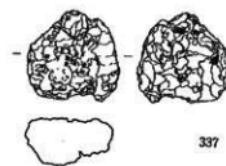
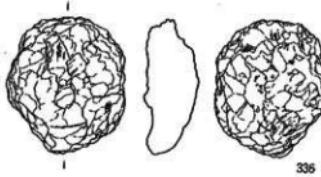
第68図 S D01(C) 出土遺物(4)(1 / 4)



第69図 S D01(C)出土遺物(5)(1 / 4)

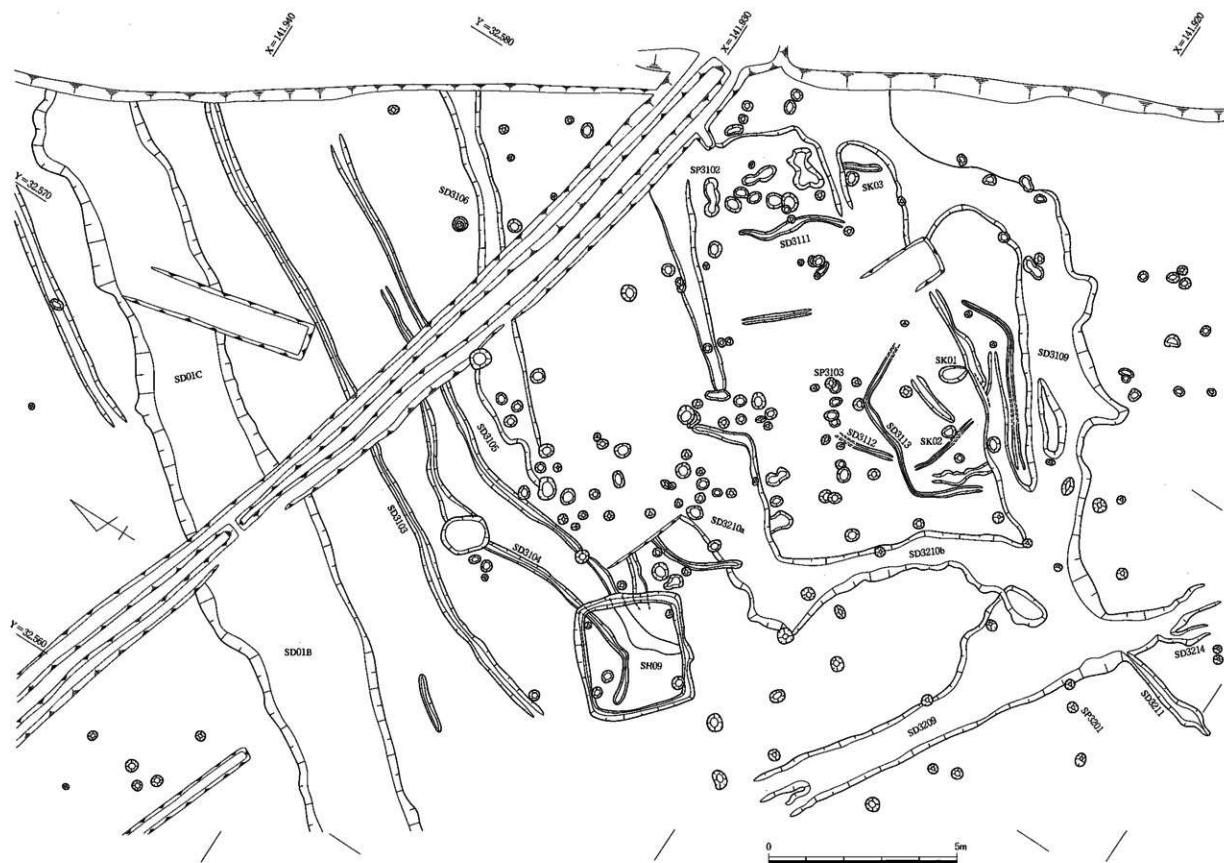


0 5cm



0 10cm

第70図 S D01(C)出土遺物(6)(1/4、1/2)



第71図 3区①鍛冶関連遺構平面図(1/100)

壺底部。321は平底の底部から直立気味に体部が立ち上がり、内面にはロクロ目を顯著に残す。やや長めの頸部が付く。323は外向きに張り気味の高台に丸みを持った体部が付く。下半部はヘラ削りをする。外面には自然釉がかかる。やや長めの頸部が付くと考えられる。322は底部と体部の境に短い高台が付く。体部下半はヘラ削りする。底部に杯又は皿の口縁部が溶着している。324も底部と体部の境に短い高台が外向きに付く。外面はヘラ削りし、内面には自然釉がかかる。322と同様底部には他の土器の小破片と粘土塊のようなものが溶着し、それをとろうとしたのか高台が一部打ち欠かれている。325は壺または壺の底部。体部外面には右下がりのタタキ痕がみられ、下端部にはヘラ削りをする。底部外面の外側部分では約1.2cm幅で工具が当たったような痕跡がみられる。326は黒色土器A椀。丸みを持つ底部に断面が3角形に近い高台を持つ。楠葉産ではないものの、他の在地産のものと比べ形態的に楠葉産に近いものがあり、それを真似た可能性はある。見込み部分には4方向の分割ミガキが観察できる。327は綠釉陶器皿。土師質。削り出し高台の蛇の目高台で、全面に施釉する。口縁端部はわずかに外反する。328は平瓦。凹面は布目痕、凸面は斜め方向のタタキ痕があるが、後に粗い板ナデをしてタタキ痕を少し消している。329・332は輪羽口。329・332は先端部に溶融痕跡を残す。333～335は石器。333は楔形石器。334は石核か。335は石斧か。いずれもサヌカイト製。336・337は楕形鍛治渾。336はやや浅めのもので、両面に木炭を置いた痕跡が見える。337はやや深めの楕形鍛治渾。同様に木炭の痕跡が両面に観察できる。いずれも金属学的分析試料である。

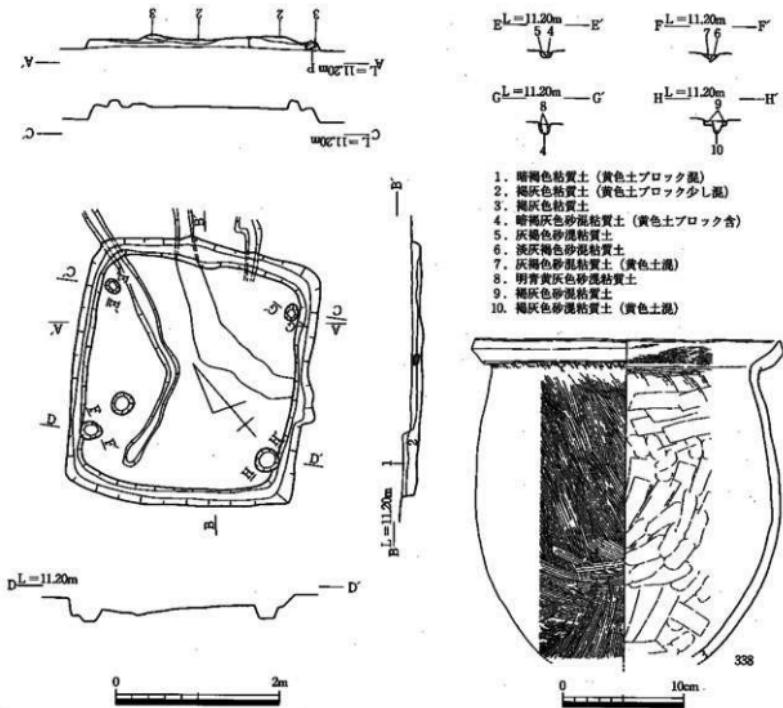
遺物は3区③部分が一番少なく、3区②・①はほぼ同じくらいであるが、やや3区②が多い。3区③では10世紀前半頃からの遺物が出土するが、10世紀後半の遺物がやや優勢と思われ、11世紀後半頃の吉備系土師器碗の頃の時期が最終埋没かと考えられる。3区②では時期の下るものも少しあるが、概ね9世紀後半～10世紀前半頃に収まりそうである。ここでは土師器の割合が多く、特に杯と羽釜Aが目出づ。3区①では供膳形態の器種が少なく、竈が目立つ。また、3区②でも出土した鍛冶関連遺物が多い。時期の中心はやはり9世紀後半～10世紀前半頃と考えられる。この溝の開削時期は9世紀後半～10世紀前半と思われ、この頃に集落が近辺に存在していたこの頃の遺物が3区②・①で多く出土し、10世紀後半頃になると山手で同時期の集落が営まれたと思われる。最終的には11世紀後半頃に埋没したと考えられる。

#### (4)鍛冶関連遺構群

##### S H09（第72図、図版16・28）

3区①中央部西側付近で検出した堅穴状遺構である。隅丸長方形で長辺2.8m、短辺3.2m、深さ12cm、埋土は褐色粘質土、褐灰色粘質土で黄色土ブロック混である。壁溝は4周を巡り、幅20cm、深さ2.4～8.8cmである。柱穴は5穴あり、主柱穴は4隅の4穴と考えられる。直径8～13cm、深さ4～15cm、埋土は褐灰色砂混粘質土である。炉跡などは認められない。土層断面図により、S D3104・3105の方が古い。S H09の北東辺の壁溝中の中央付近で土師器壺がほぼ完形で出土した。

338は土師器壺D。口縁部をわずかに上方へ引き上げる。外面口縁部下間にヘラ状の圧痕が残る。時期は10世紀前半と考えられる。



第72図 S H09平・断面図(1/60)出土遺物(1/4)



第73図 S K01~S K03平・断面図(1/40)

S K01 (第73図、図版16)

3区①南部、SD3109の北側で検出した土坑である。長椭円形で長軸74cm、短軸42cm、深さ8cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は黒灰色粘質土で炭を多く含み、底は赤く焼けている。埋土中からは須恵器杯・壺、弥生土器か土師器の小破片が出土した。調査時の不注意で埋土中に鍛造剥片や粒状滓などの細

かい精錬・鍛冶関連遺物が出土したかどうかは不明であるが、近接する S D3109で鋪羽口・鉄滓が多く出土していること、底部に被熱痕跡があり、埋土中に炭を多く含むことから火床であった可能性が高いと考えられる。

#### S K02 (第73図、図版16)

3区①南東部、S K01の南西部に近接して検出した土坑である。楕円形で長軸38cm、短軸30cm、深さ8cm、埋土は黒灰色粘質土で大量の炭を含み、底部は被熱により赤く焼けている。断面形状はボウル状である。出土遺物はなかった。しかしS K01と同じ事情でこの土坑も火床になる可能性が高いと思われる。

#### S K03 (第73図、図版16)

3区①南東部で検出した。楕円形の土坑で長軸38cm、短軸30cm、深さ10cmで埋土は暗灰褐色粗砂混粘質土、断面形状は浅いボウル状である。埋土中に炭はみられなかつたが、底部は被熱により赤く焼けていた。埋土中から出土遺物はなかった。しかし、S K01・02と同じ理由でこの土坑も火床となる可能性が高いと考えられる。

#### S P3102 (第74図、図版28)

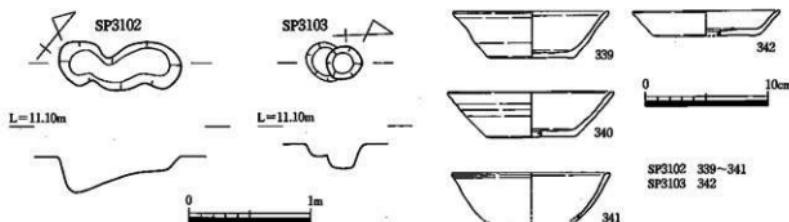
3区①南東部で、S D3107、S D3109支流に囲まれるようにして検出した。この周囲には同様にピットを連結したような不定形の土坑が集中する。大きさは長軸1m、短軸30cm、深さ28cmである。埋土中からは須恵器杯、黒色土器A碗が出土した。10世紀前半と考えられる。

339・340は須恵器杯。339は内面と底部外面に火拂がある。場所によっては赤っぽい色調で土師器に近い。340は口縁端部外面に重ね焼き痕が残る。341は黒色土器A碗。摩滅のため調整は不明。

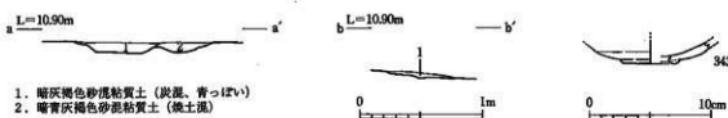
#### S P3103 (第74図)

S D3113の北側付近で検出したピットである。直径29cm、深さ20cmで埋土は暗褐灰色砂質土である。埋土中から須恵器皿が出土した。

342は須恵器皿。内面に一部火拂がかかる。9世紀前半～中頃。



第74図 S P3102、S P3103平・断面図(1/40)出土遺物(1/4)



第75図 S D3106断面図(1/40)出土遺物(1/4)

S D3106 (第75図、図版16)

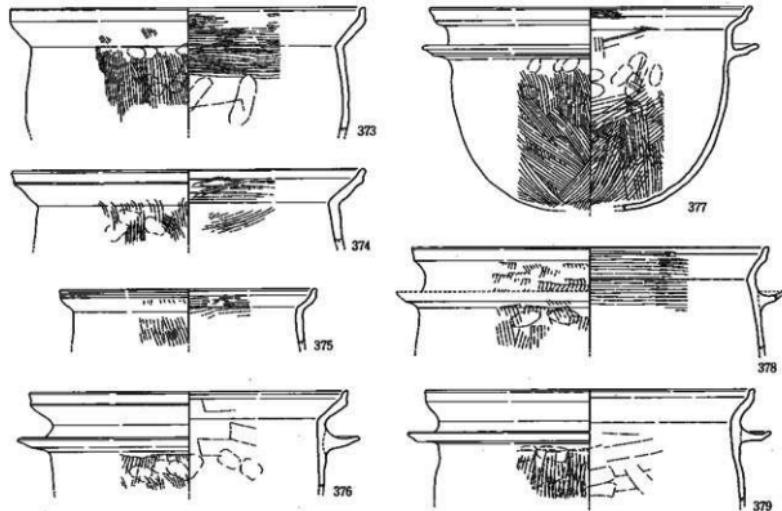
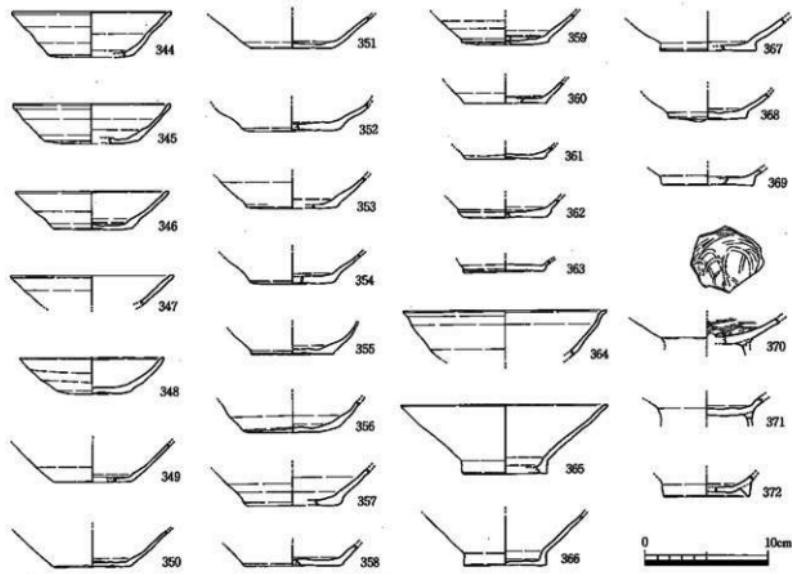
3区①中央部付近で検出した溝である。方位は概ねS D01と同じであるが、西南側では消失する。検出長10m、幅58cm、深さ10~15cm、埋土は上層が暗灰褐色砂混粘質土(炭泥、やや青っぽい)で下層は上層の土に焼土が混じる。断面形状は浅い皿状である。埋土中からは須恵器杯、土師器羽釜A、黒色土器A椀が出でたほか、鉄滓・焼土が数多く出土した。轆羽口の出土はなかった。この地区では鉄滓、轆羽口等が多数出土しており、S D3106も鍛冶関連遺構の1つで、鍛冶により炉中より排出された炭や鉄滓を廃棄した溝の1つとも考えられる。時期は10世紀前半頃と考えられる。

343は土師器椀。やや新しく13世紀代と考えられ、紛れ込みと思われる。

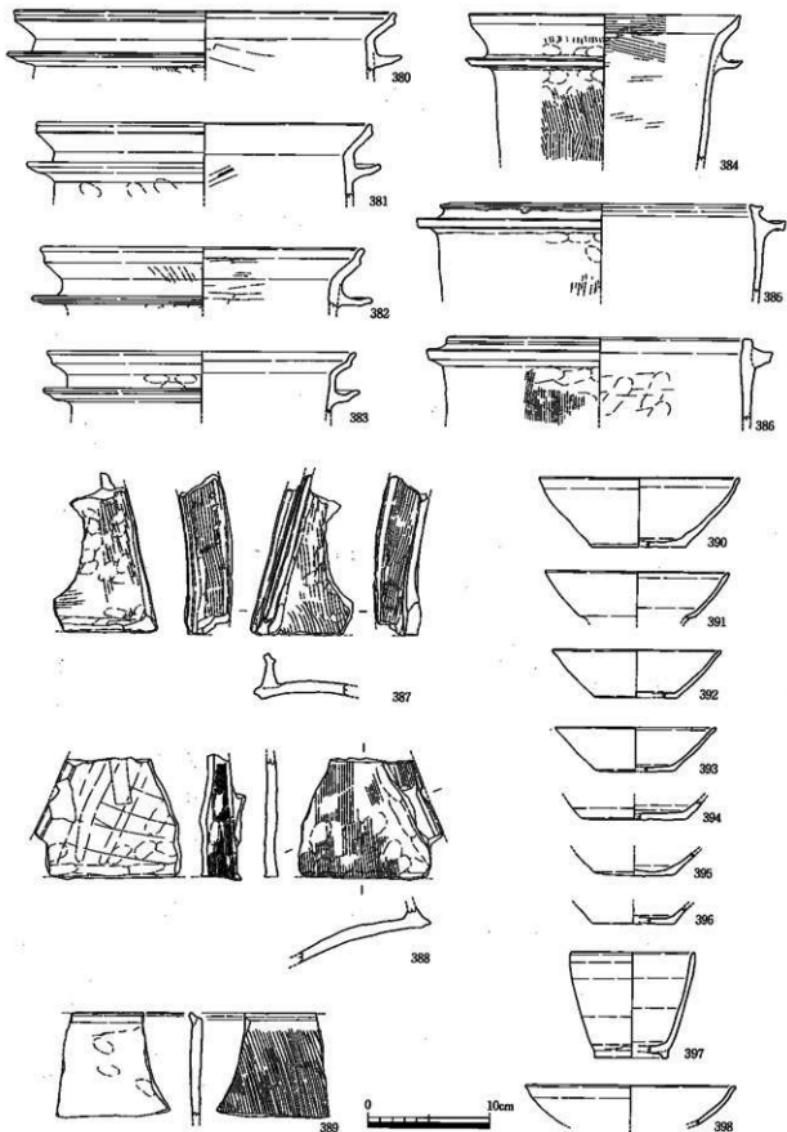
S D3109 (第76~79図、図版17・28・29)

3区②南東部で検出した溝である。S D3106とほぼ同方向であるが3区①と3区②の境付近で遺構のラインは不明瞭になり、消失する。幅200cm前後、深さ15~28cm、埋土は上層が暗灰褐色粗砂混粘質土、下層が暗褐色粗砂混粘質土で、いずれも埋土中に炭が混じる。断面形状は中央付近が盛り上がり、2条の溝が重複したような形状で、現に南側では2条に分かれている。溝の北側も調査区の境付近で不明瞭になり、北西側へオーバーフローしているような形になっている。また、この溝は屈曲してからそれぞれ北東に2m、3.5m進んだ場所でS D3109が屈曲する前の溝と同じ方向に分歧する。いずれも1.5~2mで消失する。しかし北側の溝の断面から北へ屈曲していることがわかり、鍵型の溝になる。埋土中からは土師器杯・羽釜A・竈・円盤状高台、須恵器杯、黒色土器A椀など、多量の土器が出土しており、溝の時期は10世紀前半頃と考えられる。その他轆羽口、鉄滓、焼けた石が出土しており、精錬鍛冶に関連する遺構と考えられる。炉から排出された廃棄物を搔き出す場所とも考えられるが、土器も数多く出土しており、他の廃棄物も集めた場所だったかもしれない。溝の時期は出土遺物から9世紀後半~10世紀前半と考えられる。

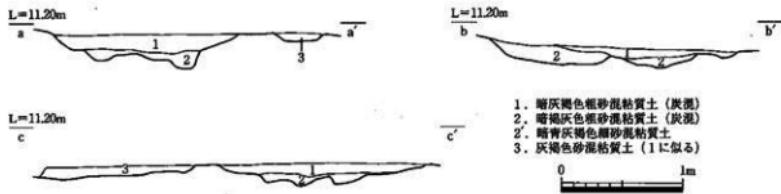
344~389は土師器。344~363は杯A。回転台土師器。概ね直径12.5~13.0cm、器高3.5cm前後になると想われる。365~369は円盤状高台の底部を持つ。底部の深いもの(365・366)と浅いもの(367~369)がある。370~372は椀。373~375は竈。いずれも口縁部上端を上方へ引き上げる。376~384は羽釜A。口縁端部・鋸端部とも上方へ引き上げる。385~386は羽釜C。いずれも口縁端部・鋸端部とも四角くする。387~389は竈。387・388は下端部で焚き口が一部残る。焚き口と鋸の間はほとんどない。389は受け口である。端部を内傾させる。390~402は須恵器。390~396は杯A。土師器杯Aと同じタイプ。390を除き口径13.5cm程度、底径6.5~7cm程度、器高は3.5cm程度である。390には内面に火拂が認められる。390・392・393の焼成は土師器に近い。397は外面に火拂がかかり、底部内面にはゴマ状の降灰がみられる。398は椀。西村産。口縁部内外面に重ね焼きの痕跡を残す。調整は回転ナダ以外は認められない。399~400は竈。399は口縁端部を外側へ折り曲げる。400には頸部に右上がりの格子タタキが認められ、一連叩打成形をしていたことがわかる。401は短径竈。竈E。強く張った肩部に稜を巡らせ、短い頸部が付く。肩部から体部にかけて自然釉が付着する。頸部と肩部の間の部分に重ね焼きの痕跡が残る。S D01との接合資料。402は竈。403・404は綠釉陶器碗。内外面にヘラミガキを密に施す。須恵質で、口縁端部外面を強くなれて、緩い腹を作っている。405・406は黒色土器A椀。405は底部の部分だけが円形に削れている。体部内面には4方向程度の、底部には1方向のヘラミガキが施されるようだ。406は底径が広めで断面3角形の高台が付く。植葉産の可能性がある。407は平瓦。土師質で凹面にはやや粗めの布目、凸面には右上り方向の繩タタキ目が残る。408~409は轆羽口。408は先端部に



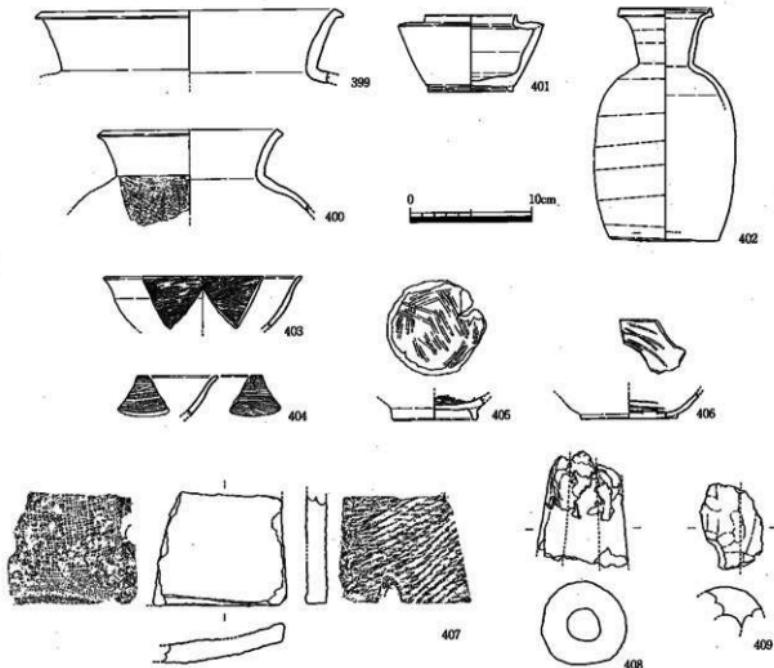
第76图 S D3109出土遗物(1)(1 / 4)



第77図 S D3109出土遺物(2)(1 / 4)

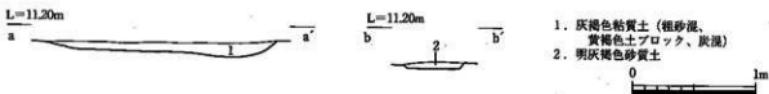


第78図 S D3109断面図(1/40)

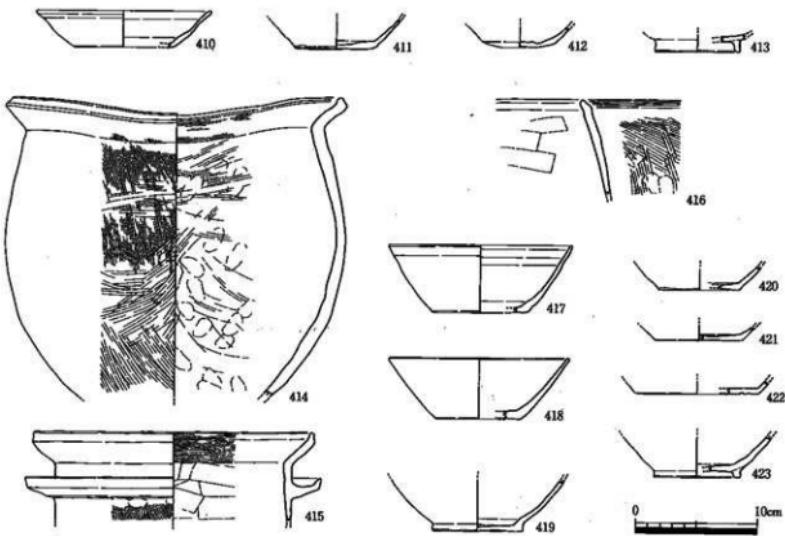


第79図 S D3109出土遺物(3)(1/4)

溶融痕が残り、その下部は灰色に変色している。



第80図 S D3210a断面図(1/40)

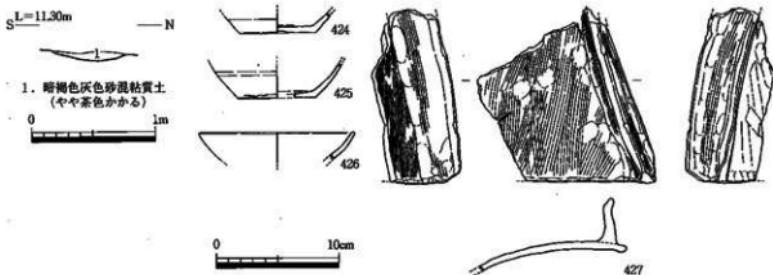


第81図 S D3210a出土遺物(1/4)

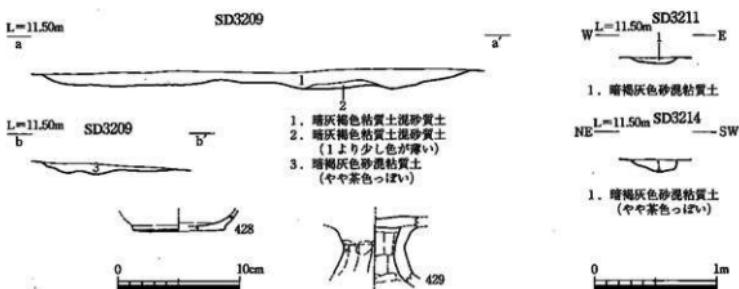
#### S D3210 a (第80・81図、図版30)

3区①南端で検出した溝状造構である。3区南端をS D3109の北西約9mの位置を並行して走り、約13mで南東へ直角に屈曲し、S D3109とS D3209と併せて長方形の区画を形成すると考えられる。S D3210 aの北側はベース面が10cm程度段差のある場所があり、そこは削平のため消失しているが、北側で幅48cm、深さ6cm、埋土が明灰褐色砂質土の溝に続くようである。南側では幅190cm、深さ11cm、埋土は灰褐色粘質土（粗砂混、黄色土ブロック、炭混）である。埋土中からは須恵器杯A・B、土師器碗・杯・羽釜・甕・壺が多数出土している。なお、埋土中に炭を含むものの、鏃羽口・鉄滓などの出土はなく、ここへは炉中のあまり廃棄物は搔き出されなかつたらしい。溝の時期はS D3109と同じく10世紀前半頃と考えられる。

410~416は土師器。410~412は杯。410は色調は土師器であるが、火拂がわずかに見え、須恵器の可能性もある。413は碗。口縁端部を上方へ引き上げる。415は羽釜A。口縁端部、鋸ともに上部へ引き上げ、外面はハケ、内面は口縁部をハケ、体部を板ナデする。416は甕。端部はわずかに段を持ち、内面の上部には煤が付着する。417~422は須恵器杯。417・418は深めの器形で火拂がかかる。418は口縁端部にわずかに重ね焼きの痕跡がみられる。419は円盤状高台の底部を持ち、ヘラ切り痕を明瞭に残す。423は杯B。底部と体部の境に高台が付き、高台径が小さいので深めの器形になると思われる。



第82図 SD 3210b断面図(1/40)出土遺物(1/4)



第83図 SD 3209、SD 3211、SD 3214平・断面図(1/40) SD 3214出土遺物(1/4)

遺構の時期は出土土器から10世紀前半頃と考えられるが、当遺構では供膳形態では須恵器が優勢である。

#### S D 3210 b (第82図、図版30)

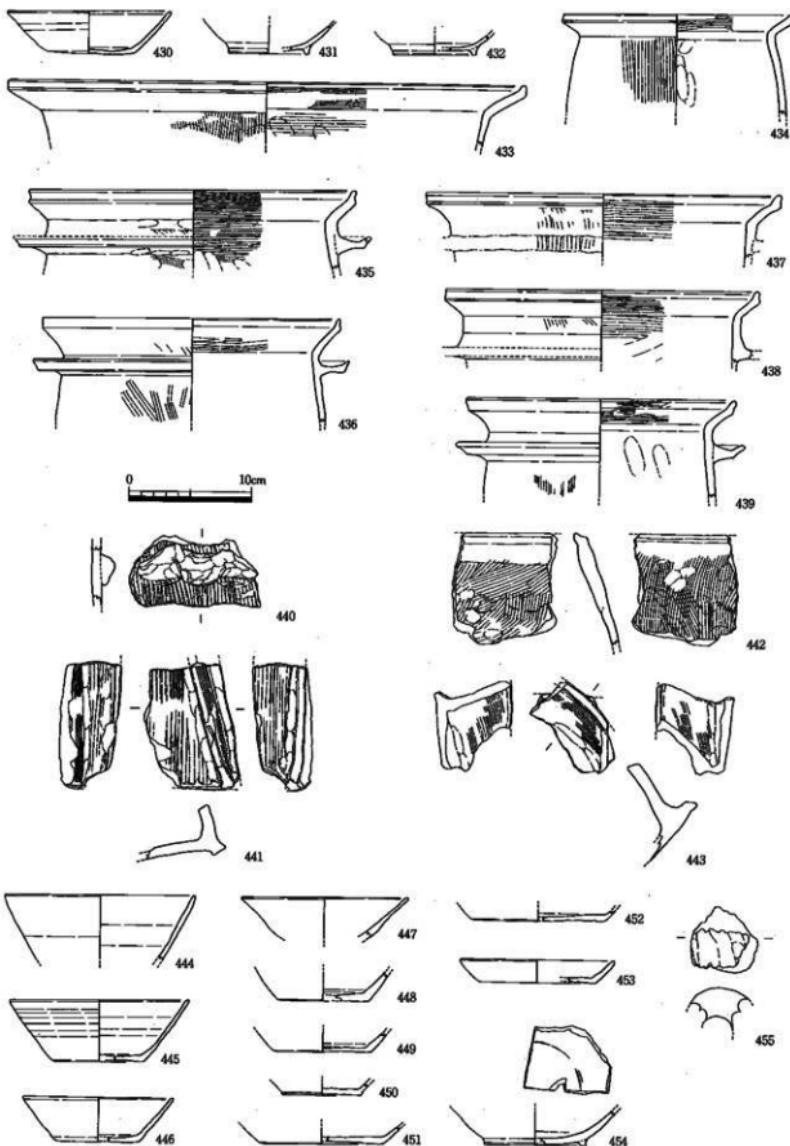
3区①と②の境付近で検出した溝である。S D 3210 aへ続く。方向はS D 3209と同じであるが、溝の南西隅部分でS D 3209と連結するようである。幅60cm、深さ7cm、埋土は暗褐色灰色砂混粘質土、断面形状は浅い皿形である。埋土中に炭の堆積はみられない。埋土中からは須恵器杯・椀、土師器杯・甕、黒色土器A種の他竈羽口が出土した。

424・425は土師器杯。回転台土師器。427は甕。下端部分で焚き口が残る。鉢は内側へ折り曲げられる。426は須恵器杯。焼成はあまりよくなく、口縁端部外面に重ね焼き痕跡が残る。

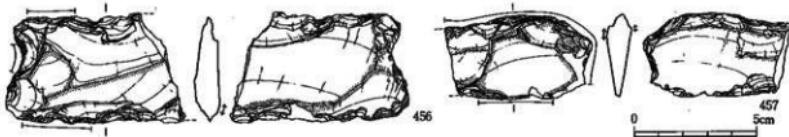
#### S D 3209 (第83~85図、図版17・30・81)

3区②で3区①に接する位置で検出した溝である。S D 3109と直交、南西部でS D 3210 bと連結する。調査区域に段差があり、溝の延長部がやや不明瞭であるが、S D 3109と連結する可能性もある。幅80cm/350cm、深さ8~16cm、埋土は暗褐色灰色砂混粘質土でS D 3210に類似する。炭の堆積はみられなかった。断面形状は中央部がやや盛り上がり、底が2カ所あるような形状である。埋土中からは須恵器杯・甕・壺、土師器杯・土釜・甕などが出たほか、竈羽口が出土した。鉄滓は出土しなかった。

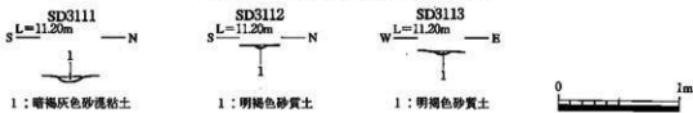
430~443は土師器。430は杯A。回転台土師器。431・432は碗。433・434は甕。433は口縁部破片で口径は不確かである。435~439は羽釜A。残存する範囲ではいずれも口縁端部・鉢端部とも上方へ引き上



第84図 S D3209出土遺物(1)(1 / 4)



第85図 SD3209出土遺物(2)(1/2)



第86図 SD3111～SD3113断面図(1/40)

げる。440は瓶の把手。先端部を下側へ折り曲げている。441～443は竈。441は下端部で焚き口とそれに伴う鉗が残る。442は受け部。443は受け部と上方の鉗の部分が残る。焚き口・受け部と鉗の間はほとんどない。鉗端部は四角くする。444～454は須恵器。444～450は杯A。444～446・450には火拂が掛かる。451～453は皿。いずれも火拂が掛かる。454は椀。内面には重ね焼きの痕跡が残る。455は輪羽口。456・457は石庖丁。後部分は磨滅する。サヌカイト製。

溝の時期は9世紀後半を中心とする時期と考えられ、SD3109と同じ頃に同じ様な機能を持つ遺構と思われるが、土器組成には若干の差が認められ、こちらは須恵器が優勢である。

#### S D3211 (第83図)

SD3209の南西隅からSD3209に垂直方向に西へ向かう溝である。延長約3mで途切れる。SD3209との切り合い関係はない。幅35cm、深さ5cm、埋土は暗褐色砂混粘土で出土遺物はわずかに土器の小片があるのみである。時期はSD3209と同じと考えられる。

#### S D3214 (第83図)

SD3209の南西隅でSD3209の南側へ派生する溝である。SD3209が消失するのと同じくらいの場所で消失する。SD3209との切り合い関係はなく、SD3209と同じと考えられる。幅36cm、深さ10cm、埋土は暗褐色粘土である。埋土中からは須恵器壺・皿、土師器杯等の他鉄滓が出土した。時期はSD3209と同じと考えられる。

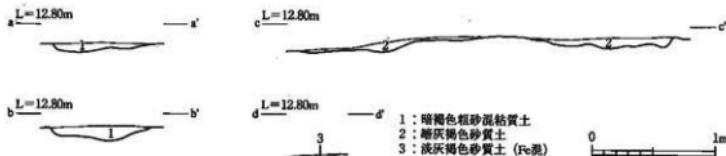
428は土師器杯。回転台土師器。429は土師器高壺。低めの脚部で脚部は面取りする。8世紀半ば頃と思われ、紛れ込みと思われる。

#### S D3111 (第86図)

3区①北東部で検出した小溝である。緩くS字状に曲がる。SD3109から派生する溝部分の南側を囲み、その中は不定形ピット群がある。SD3109等と直交する方向で延長2.8m、幅20cm、深さ5cm、埋土は明褐色砂混粘土である。埋土中からは土師器杯・羽釜が出土した。時期は周囲の遺構群と同じ10世紀前半としても大きな間違いはないと考えられ、鍛冶に関連する遺構の可能性があろう。あるいは形状が不安定なことから、不定形ピット群と同様の性格のものかもしれない。

#### S D3112 (第86図)

3区①南東部を弧を描く溝である。円形とすれば南半部のみ検出され、北半部は未検出である。SK



第87図 S D3501断面図(1/40)



第88図 S D3501出土遺物(1/4)

02と接しているが、前後関係は明らかではない。S K01を囲う位置である。幅6cm、深さ2cm、埋土は明褐色砂質土である。出土遺物はなかった。

#### S D3113 (第86図)

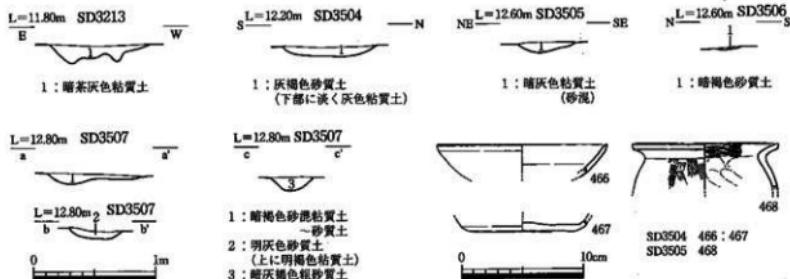
3区①南東部を変形5角形に巡る溝である。S K01・02を囲う位置にある。北西と南東の2カ所で途切れる。1辺2.4~3.5m、幅9~18cm、深さ2~5cm、埋土は灰褐色砂質土である。埋土中に炭などはない。埋土中から遺物は出土しなかった。

#### (5)溝

##### S D3501 (第87・88図)

3区⑤上段で検出した南西から北東方向へ走る溝である。地割の方向と合致する溝で、旧水田境の中央付近に位置し、東側の1段低い水田境の延長上でS D3506と直交し、そこから東では2~3条(A~C)に分岐する。また、S D3506と直交する場所付近ではS D3507が並行して東側を走る。北側で隣接する3区③では、地表面の高低差が3区⑤より約25cm低く、S D3501(B)の延長部と、S D3507延長部を検出ただけである。S D3501(B)の延長部は延長約9m北側で東側である平野部側へ屈曲し、隣接する3区②では検出していない。溝の幅は南東側で80cm、深さ7cm、北西側の分岐した後の場所では幅315cm、深さ10cmで埋土は暗灰褐色砂質土、断面形状は中央部分が盛り上がる形状である。S D3501を含めた溝群、特にS D3506から北側の溝群は何らかの区画を構成すると考えられる。3区③部分ではこれらの溝はほぼ平行して走り、屈曲するので、区画の南北の範囲は概ねこの範囲と考えられる。埋土中からはサヌカイト片、土師器杯・椀・土釜C・壺・須恵器蓋・壺・壺等が出土した。S D3501は13世紀後半の造構であるS K04に切られる。溝の時期は10世紀~11世紀と考えられる。出土土器はいずれも小破片である。

458~460は3条に分かれた溝の一番南側の筋(A)から出土した土器である。458は土師器杯。回転台土師器。459は羽釜C。460は須恵器蓋。口縁端部内面に重ね焼き痕跡がある。461~463は中央の筋



第89図 S D3213、S D3504～S D3507断面図(1/40)出土遺物(1/4)

(B) から出土した。いずれも回転台土師器杯の底部。464・465はその他の部分から出土したものである。464は土師器杯。465は土師器碗。

#### S D3213 (第89図)

3区②中央付近で検出した溝である。流れの上・下両方向とも擾乱により検出できず、検出したのはわずか3mであった。方向は概ね南北方向で、幅80cm、深さ12cm、埋土は暗茶灰色粘質土で、断面形状は両側が少し深く、中央付近がやや盛り上がる。出土遺物は弥生土器、サヌカイト片、須恵器片であった。遺構の時期は須恵器により10世紀代と考えられる。

#### S D3504 (第89図)

3区⑤下段、東部で検出した東西方向の溝である。現地割には沿わないようである。西は水田耕作の際の削平により、東側はおそらく低地であったため消失していく、検出長4mである。幅76cm、深さ8cm、埋土は灰褐色砂質土である。S B19を構成するピットに切られる。埋土中からは土師器杯・円盤状高台底部やサヌカイト片が出土した。土師器杯から13世紀後半頃と考えられる。

466は土師器杯。467は土師器杯底部。

#### S D3505 (第89図)

3区⑤上段の北端付近で検出した東西方向の溝である。現地割からは方向を東でやや北に振る。S D3506の北西側約1.8mの位置でS D3507に北東側から取り付き、それより西側へは続かない。またS D3507との切り合い関係も確認できなかった。幅45cm、深さ8cm、埋土は暗灰色砂混粘質土である。埋土中からはサヌカイト片、弥生土器小片が出土したのみであったが、遺構の切り合い関係などから他の溝と同時期ではないかと思われる。

468は弥生土器壺。口縁部はくの字に外傾し、口縁部内面はヘラミガキする。

#### S D3506 (第89図)

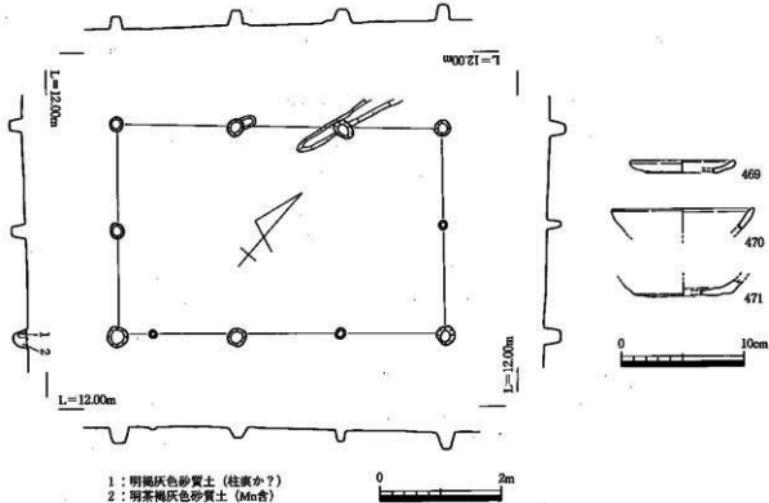
3区⑤上段北部で検出した東西方向の溝である。3区⑤下段の水田の北側境の延長上に東西方向に位置し、S D3501・S D3507と直交する。幅18cm、深さ1cm、埋土は暗褐色砂質土でS D3501・S D3507等との関連を考えあわせれば10世紀後半と考えられる。

#### S D3507 (第89図)

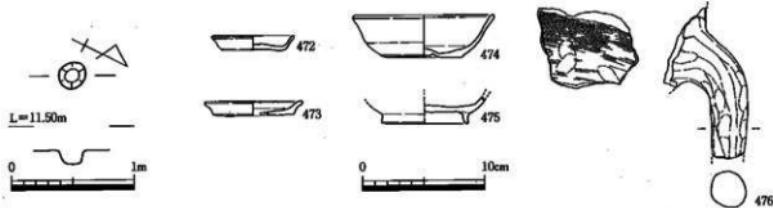
3区⑤上段で検出した、地割に沿う南北方向の溝である。S D3501がS D3506と直交する付近より約2.2m南側で出現し、S D3501の東側0.75m付近をS D3501と同方向に走る。S D3506と直交し、その1.8



第90図 2区②遺構配置図(1/100)



第91図 SB 15平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)



第92図 SP 2201平・断面図(1/40)出土遺物(1/4)

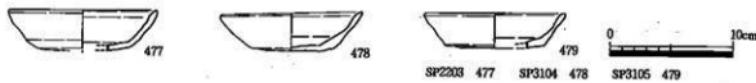
m北側ではS D3505が東側から取り付く。幅40cm、深さ10cm、埋土は明灰色砂質土、断面形状は半円形だが、S D3506の南側では東肩が崩れたような形状である。埋土中からは須恵器杯B・杯・甕、土師器土釜脚部などが出土した。溝の時期はS D3501と同様10世紀後半と考えるが、白磁片や足釜の脚部なども出土しており、溝は13世紀頃まで機能していたかもしれない。

#### 4. 錫倉時代の遺構・遺物

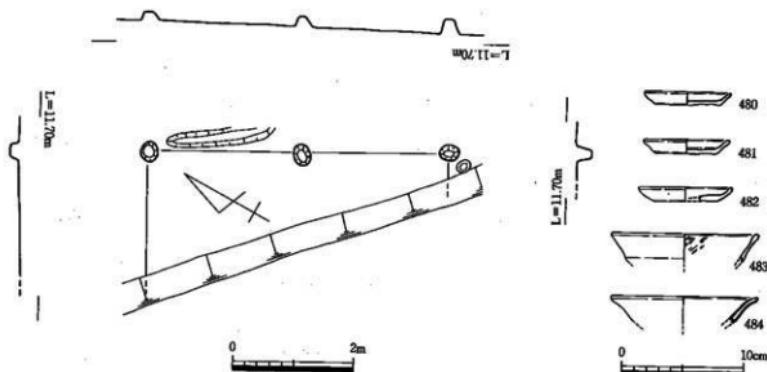
##### (1) 堀立柱建物・ピット

###### S B 15 (第91図、図版17)

2区②西部で検出した堀立柱建物である。桁行3間(5.3m)、梁間2間(3.5m)で面積は18.55m<sup>2</sup>、方



第93図 SP2203、SP3104、SP3105出土遺物(1/4)



第94図 S B16平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)

位はN50°Eで、概ね現状地割と同じである。柱間は1.6~2.0m、柱穴は円形で直径25~30cm、深さ15~54cm、埋土は明褐色灰色砂質土である。柱穴埋土中からは土師器杯・小皿が出土した。11世紀後半~12世紀。

469は土師器小皿。470・471は土師器杯。

#### S P2201 (第92図、図版17・30)

2区②東側の微高地縁辺部で検出したピットである。ピットの集中部からは少し離れた位置にある。円形で直径22cm、深さ12cmである。ピット内には土釜の脚部と下から土師器小皿・杯・碗の順で上向きの重ねた状態で埋納されていた。近接して掘立柱建物はない。時期は13世紀中~後半と考えられる。

出土土器は全て土師器である。472・473は土師器小皿。いずれもヘラ切りで、472はほぼ完形であった。ヘラ切り痕は時計回り。474は杯。ヘラ切り痕は反時計回りで、表面の摩滅が著しい。475は碗底部。底部はヘラ切り痕を残す。底部は完存し、体部は全くない。表面の摩滅が著しい。476は土釜脚部。脚部の下半部は欠損。

#### S P2203 (第93図)

S B15の北東部で検出した。円形で直径30cm、深さ19cmである。埋土中から土師器杯が出土した。時期は13世紀代と考えられる。

477は土師器杯D。

#### S P3104 (第93図)

S B17の南西部で検出した。円形で直径21cm、深さ9cmである。埋土中からは土師器杯が2/3ほど遺存した状態で出土した。

478は土師器杯。底部外面はヘラ切りで板压痕が残る。13世紀代と考えられる。

S P 3105 (第93図)

3区①と1区②の境付近で検出したピットである。S B 12の北東側で検出した。直径51cm、深さ10cmである。埋土中から土師器杯が出土した。13世紀代のものと考えられる。

479は土師器杯D。

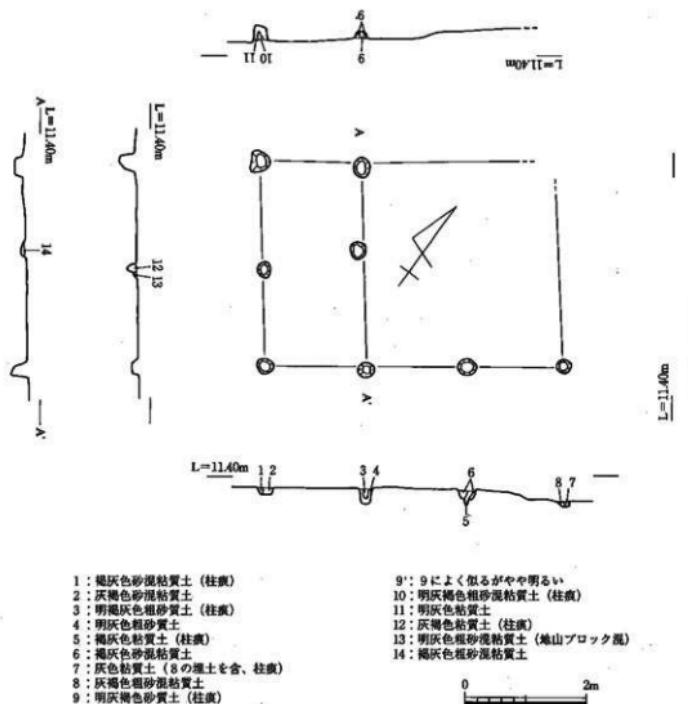
S B 16 (第94図、図版17・31)

2区②で2箇所検出した。南西側に延びて掘立柱建物となると考えられる。その場合は次の柱間での距離は2.2m以上となる。延長5m、柱間は2.5m、方位はN28°Wである。柱穴は円形で直径30cm前後、深さ12~24cm、埋土は灰褐色砂混粘質土である。柱穴の深さは川側(北東側)ほど浅く、山側(南西側)ほど深く、柱穴の底のレベルはあまり変わらない。埋土中からは土師器小皿・杯、須恵器碗、白磁碗などが出土した。12世紀後半。

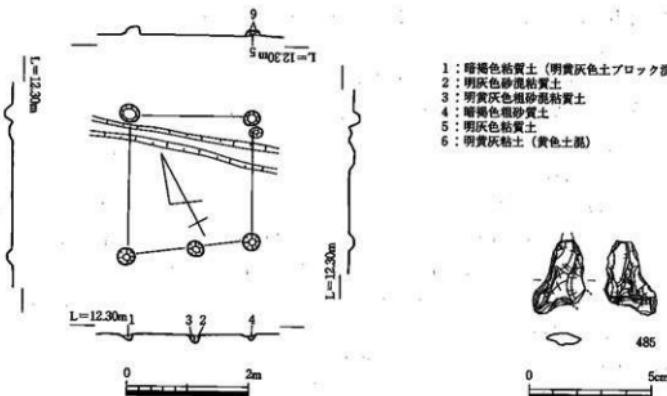
480~482は土師器小皿。483は土師器杯。484は白磁碗。

S B 17 (第95図、図版17)

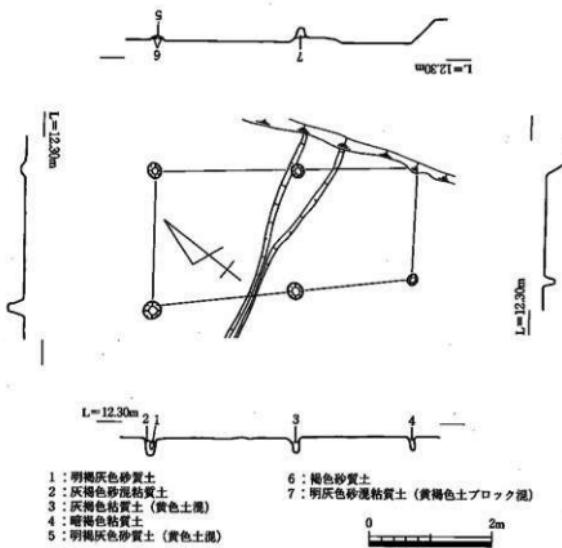
3区①南部で検出した掘立柱建物である。桁行3間(4.8m)、梁間2間(3.35m)、面積は15.68m<sup>2</sup>、方



第95図 S B 17平・断面図(1/80)



第96図 S B 18平・断面図(1/80)出土遺物(1/2)



第97図 S B 19平・断面図(1/80)

位はN55° Eである。南西側に間仕切りを持つ。北西側の桁行の柱穴が北東の2穴が欠けているが、この付近は造構面が下方へ傾斜していく場所であり、ピットは消失したとも考えられる。柱間は1.5 ~ 1.75m、柱穴は円形で直径22~26cm、深さ8~26cm、埋土は概ね灰褐色粗砂混粘質土である。出土遺物はないが、S P 3105と関連があると考え、同じくらいいの時期とした。

S B18 (第96図、図版15・90)

3区⑤下段中央部付近で検出した掘立柱建物である。桁行2間(2.0m)、梁間1間(2.0~2.34m)、面積は4.34m<sup>2</sup>、方位はN28°Eである。桁行き北側の柱列は中央の柱がない。柱穴は円形で直径24cm程度、深さは12cm前後である。埋土中からは石鎚のはか土師器の小片が出土しただけであった。時期は柱穴の配列の歪さや遺構の広がり方から中世としたが、曖昧さは残る。

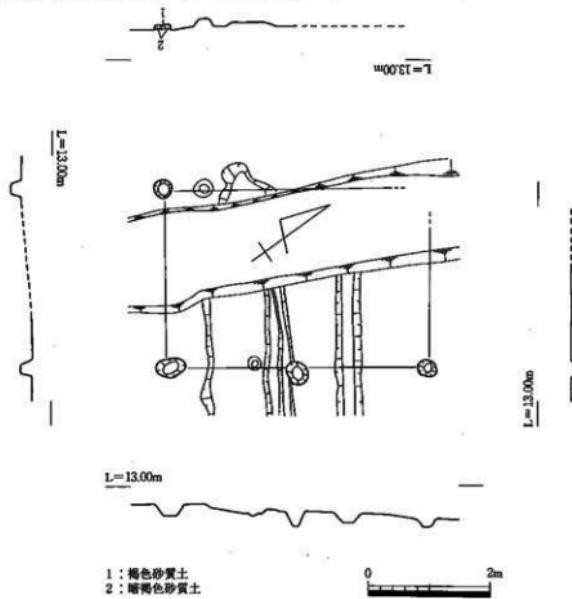
485は石鎚。サヌカイト製。四基式。基部の片側と先端部が欠損している。

S B19 (第97図、図版17)

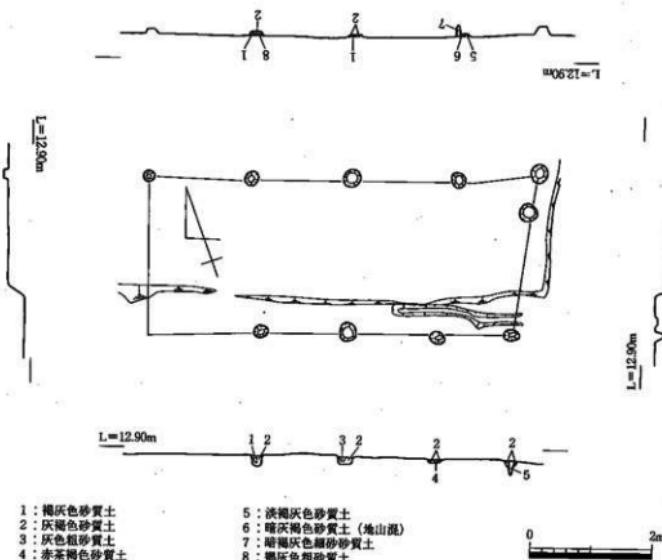
3区⑤下段南東部で検出した掘立柱建物である。桁行2間(4.25m)、梁間1間(2.3m)、面積は9.775m<sup>2</sup>、方位はN44°Wである。柱間は1.9~2.35m、柱穴は円形で直径16~22cm、深さ6~27cm、埋土は褐色粘質土、柱穴埋土中からは土師器小片、亀山焼壺、焼けた石などが出土した。SD3504を切る。時期は13世紀代と考えられる。

S B20 (第98図)

3区⑥上段北端部で検出した。SD3501・SD3507と重複する位置で検出している。一部3区③へ跨る。方位はN34°Eで、SD3501等とは直交する。北側柱穴列のうち、西側2穴は、調査区の境に当たって未調査地となり、検出していない。桁行2間(4.2m)、梁間(3.0m)で面積は推定12.6m<sup>2</sup>である。柱間は2.1m、柱穴は円形で直径30~32cm、深さ13~24cm、埋土は灰褐色砂質土・粘質土である。埋土中からは須恵器小片、土師器小片しか出土せず、明確な時期は不明であるが、掘立柱建物を構成するピットのうち1穴がSD3501を切っており、それより新しい。



第98図 S B20平・断面図(1/80)



第99図 S B21平・断面図(1/80)

#### S B21 (第99図、図版17)

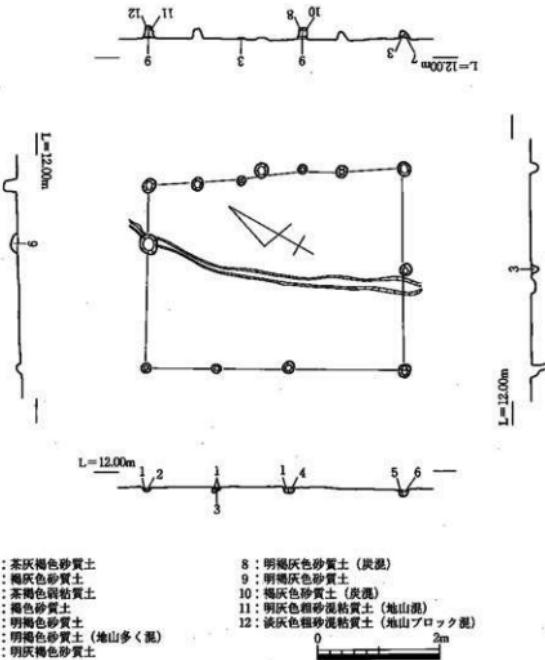
3区③南部、3区④・⑥塊付近で検出した掘立柱建物である。S D3501Aと重複する位置にあるが、前後関係は明らかではない。桁行3間(4.7m)、梁間1間(2.5m)、面積は11.75m<sup>2</sup>で、方位はN69°Wである。柱間は1.65~1.85m、柱穴は円形で直径20cm、深さ6~18cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。柱穴からは須恵器甕やサヌカイト片が出土した。時期は不明である。S D3501・3507とは方向が異なりおそらく関係ないと考えられること、S B20が近接しており、時期はこの掘立柱建物とあう可能性があるう。

#### S B22 (第100図、図版18)

6区①北西隅で検出した。S D6102とS D6104に囲まれる位置である。桁行は山手側が3間(4.2m)、平野側が6間(4.0m)、梁間は2間(3.0~3.25m)、柱間は平野側が0.3~1.0m、他は1.0~2.0mである。柱穴は円形で直径15~23cm、深さ6~12cm、埋土は灰褐色砂質土である。方位はN29°Wで、周囲の溝や現状地割と同じである。柱穴埋土中からは土器杯が出土した。時期は決めがたいが、S D6102~6104と関連性が高いと考えられることから13世紀代と考えられる。

#### S B23・24 (第102図)

6区②北西部私道際、S D6202の平野部側約1mの位置で検出した。南東側の柱穴列は狭い間隔で2列並列しており、北西側柱穴列はピットが2穴ずつ重なる。建て替えの可能性が高く、柱穴の切り合ひ関係からS B24の方が新しい。



第100図 S B 22平・断面図(1/80)

S B 23は桁行2間(3.3m)、梁間1間(2.55~2.75)m、面積は8.475m<sup>2</sup>で、方位はN52°Eである。柱穴は直径30~35cm、深さ12~16cm、埋土は概ね褐灰色砂質土である。柱穴埋土中から土師器壺の小破片が出土した。

S B 24は桁行2間(3.6m)、梁間1または2間(1.9~2.2m)、面積は7.38m<sup>2</sup>で、方位はN55°Eである。柱穴は円形、隅丸長方形で直径または1辺30~40cm、深さ16~30cmで埋土は概ね褐灰色粘質土混砂質土(黄色土混)である。柱穴埋土中からは出土遺物はなかった。

出土遺物は少なく時期の特定はしにくいが、S D 6202との関連性からS D 6202と同時期としておく。

#### S P 3501 (第103図)

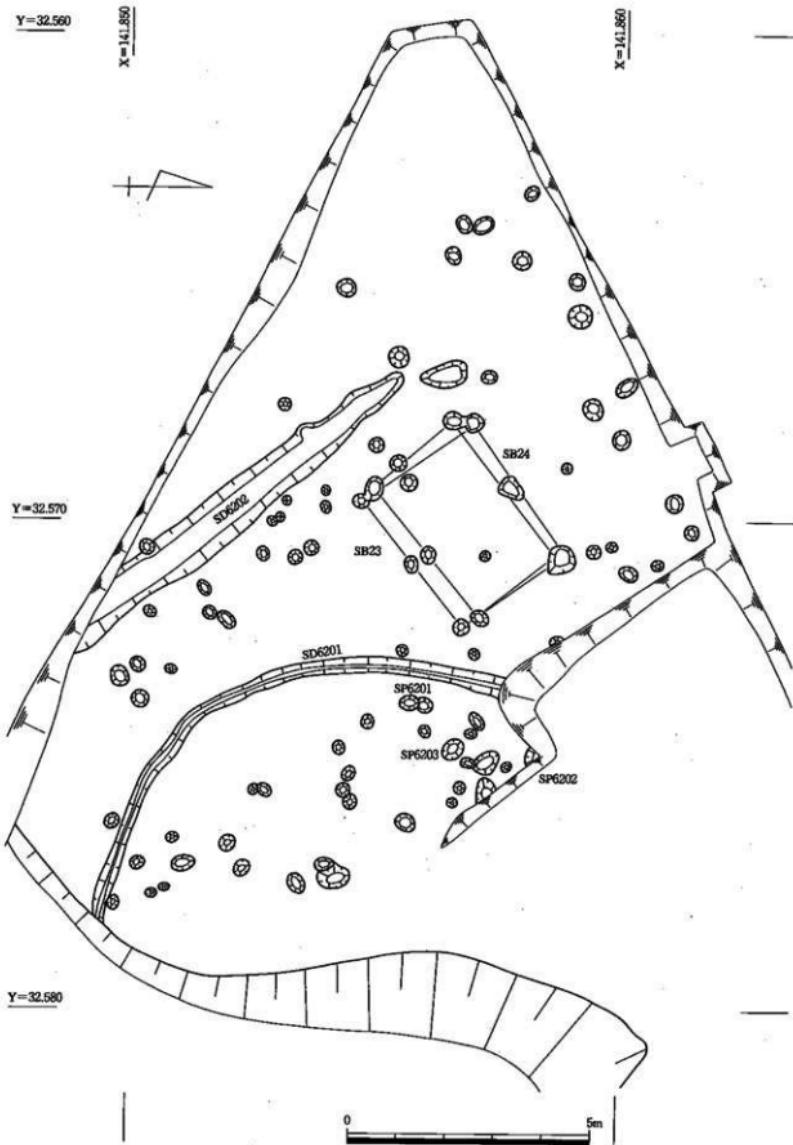
3区⑤下段、S B 19とS B 13の中間付近で検出したピットである。直径42cm、深さ17cm、埋土は明灰色粗砂質土である。埋土中からは土師器杯が出土した。

486は土師器杯。13世紀後半頃と考えられる。

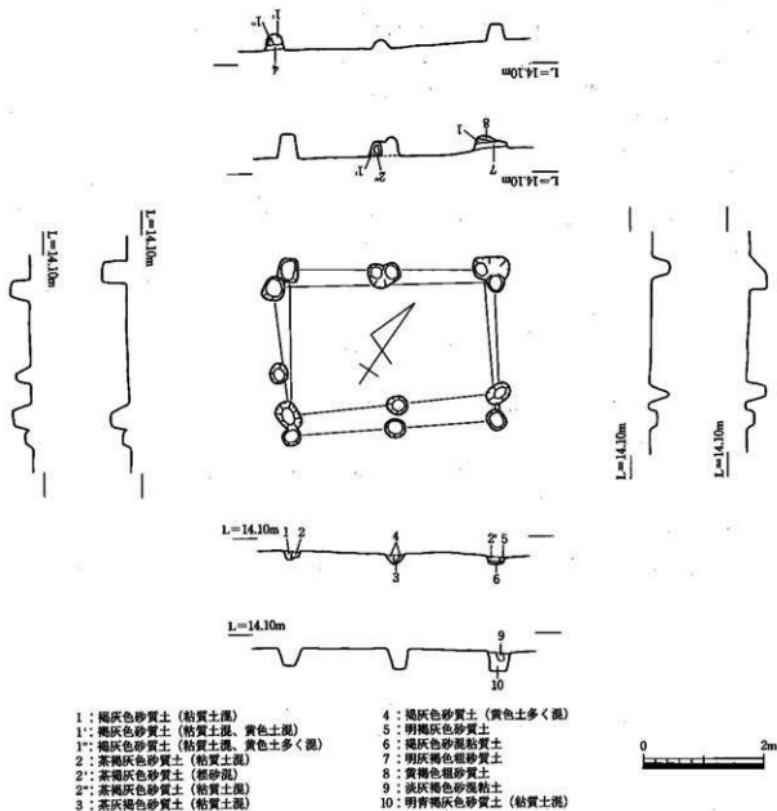
#### S P 3404 (第103図)

3区④下段3区⑤との境付近の中央付近で検出したピットである。直径25cm、深さ11cm、埋土は灰褐色粗砂混砂質土である。埋土中からは土師器杯が出土した。

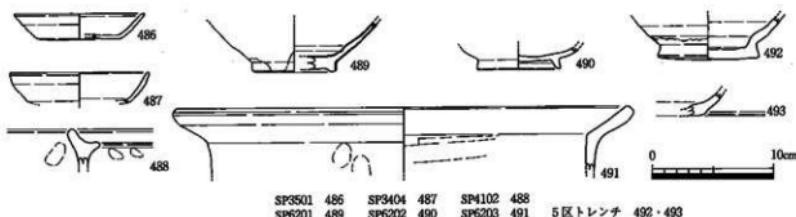
487は土師器杯。13世紀代と考えられる。



第101図 6区②遺構配置図(1/100)



第102図 S B23、S B24平・断面図(1/80)



第103図 S P3501、S P3404、S P4102、S P6201～S P6203、5区トレンチ出土遺物(1/4)

S P 4102 (第103図)

4区①山手側で検出したピットである。等高線が急になっている場所であり、周囲は遺構は希薄である。直径32cm、深さ17cm、埋土は暗黄灰色粗砂混砂質土である。埋土中からは土師器足釜片が出土した。488は土師器足釜の口縁部破片。14世紀末～15世紀初頭。

S P 6201 (第103図)

6区②S B 01東南方向のピット群の内のピットである。直径30cm、深さ10cmである。埋土中からは白磁碗の底部が出土した。

489は白磁碗底部。釉は高台部分まであまり及んでいない。12世紀後半。

S P 6202 (第103図)

S B 23・24の東南方向のピット群のなかのピットである。大半は削平により失われる。深さ45cmである。埋土中から土師器椀が出土した。

490は土師器椀底部。磨滅が著しく、調整は不明。吉備系土師器椀。

S P 6203 (第103図)

S B 23・24の東南方向のピット群のなかのピットである。直径45cm、深さ29cmである。埋土中からは土師器壺破片が出土した。

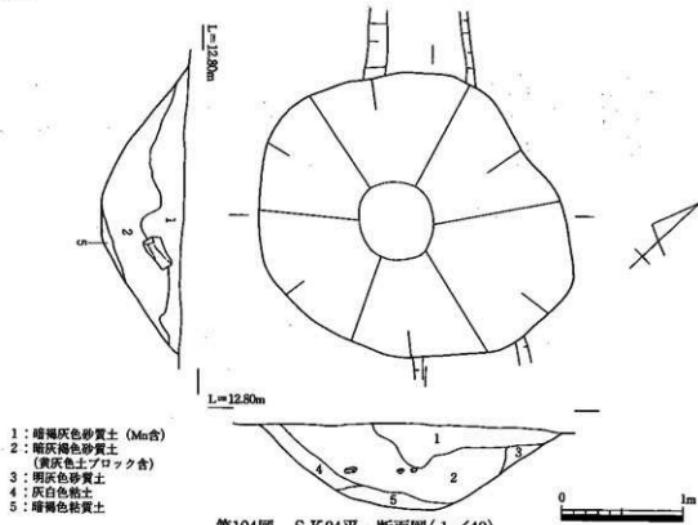
491は土師器壺F。内面は板ナデし、外面にはあまり調整痕を残さない。11世紀中～12世紀前半。

5区 予備調査出土土器 (第103図)

5区を予備調査した際に出土した土器である。周辺は急傾斜地で、周囲に遺構はみられない。

492は円盤状高台を持つ。493は土師器杯。小片で磨滅が著しい。時期は11世紀後半頃。

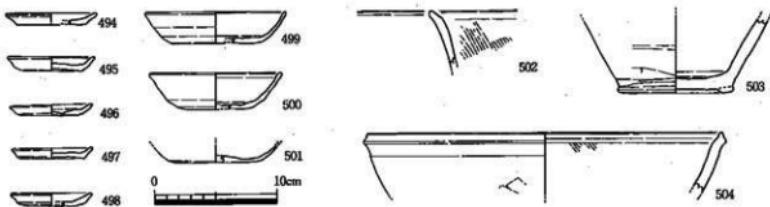
(2)土坑等



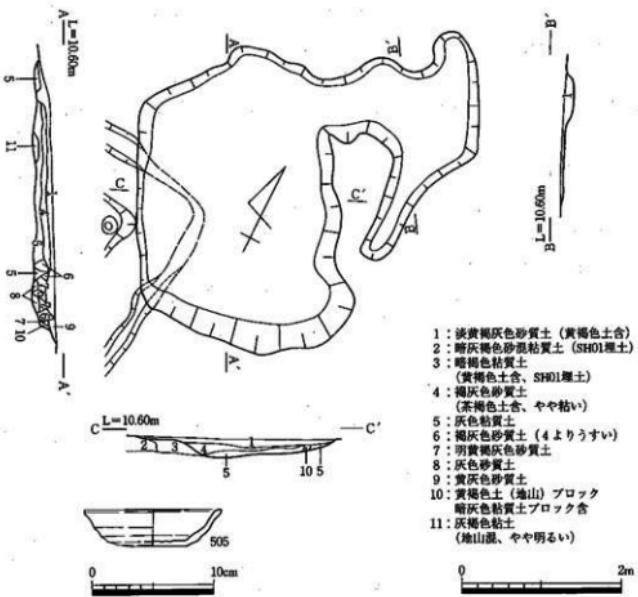
S K04 (第104・105図、図版18・31)

3区⑤上段中央部やや南東寄りで検出した土坑である。円形で直径2.35~2.45m、深さ70cm、埋土は最底部は暗褐色粘質土、上部は暗灰褐色砂質土(地山ブロックを含む)で、断面形状は擂鉢形である。S D3501を切る。埋土中からは須恵器壺底部、捏鉢、土師器杯・小皿・罐等が出土した。やや古い遺物が混じるもの、土師器杯・小皿から埋没時期は13世紀後半と考えられる。古い遺物はS D3501を掘り込んだ際に巻き込んだものと考えられる。

494~498は小皿。口径はだいたい6cm前後に収まる。499~501は土師器杯D。口径は概ね11cm程度に収まる。502は壺の受け口部分。口縁端部外面部分が黒く変色している。503は須恵器壺底部。外面下部は板ナデをしている。高台の接地部分が非常に摩滅している。504は須恵器捏鉢。西村産。502・503は10世紀前後、504は12世紀後半頃、あとは13世紀後半頃と考えられる。



第105図 S K04出土遺物(1/4)



第106図 S X02平・断面図(1/60)出土遺物(1/4)

### S X02 (第106図)

1区②で検出した。不定形の落ち込みでS H01を切る。深さは16cm、埋土は褐灰色砂質土である。S R01がオーバーフローしたものもある。埋土中からは土師器杯が出土した。

505は土師器杯D。完形でロクロ痕が顕著に残る。底部には左回りのヘラ切り痕が残る。13世紀中～後半と考えられる。

### (3)溝

#### S D6202 (第107図)

6区②山手側で検出した溝である。北西側はS B23・24の西側柱筋付近で消失する。幅92cm、深さ14cm、埋土は上層が暗茶褐灰色粗砂混粘質土、下層が明灰褐色砂質土で、断面形状はなだらかな鉢形である。概ね現地割に沿い、S B23・24ともほぼ直交する。また、この溝の私道を越えた延長上には調査前までの水田境がある。埋土中からは土師器杯・椀、黒色土器A椀、須恵器壺が出土した。時期は11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

遺物は摩滅したものの多い。506・507は土師器小皿。508は土師器椀。509は石器。石庖丁。サヌカイト製。半分以上が欠損。側縁に抉りを入れる。

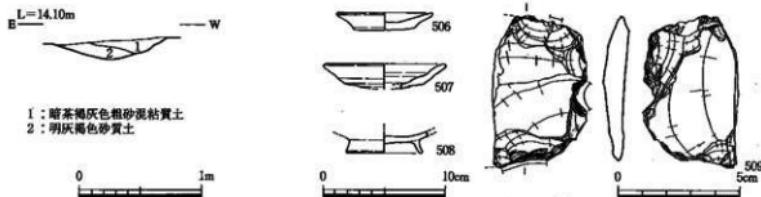
#### S D6102 (第108図)

6区①北西部で検出した溝である。幅30cm、深さ3cm、埋土は灰褐色粘質土混砂質土で、断面形状は浅い皿状である。方向は現状地割に沿う。南東側約2.5mの位置にS D6103が平行して走り、S D6103とともに道路状遺構の側溝となる可能性もある。また、S D6104が直交して山手側へ取り付き、S D6102とS D6104の西側ではやはり方位を揃えてS B22を検出しており、区画のための溝と考えられる。S B22との距離は50cmである。出土遺物はないが、S D6104との関連性から13世紀代の溝と考えられる。

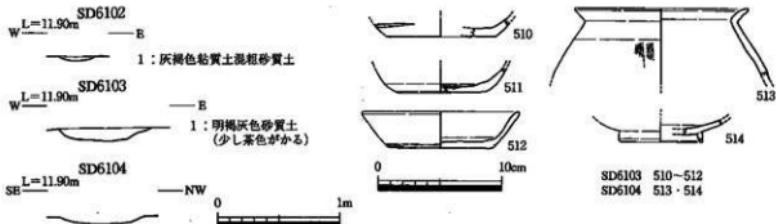
#### S D6103 (第108図)

6区①北西部で検出した。幅75～120cm、深さ10cm、埋土は灰褐色粗砂混粘質土でS D6202に似る。断面は浅い皿状である。現状地割に沿い、S D6202と平行する。S D6202の南東側（平野側）2.5mの位置し、2条の溝の間は道路状遺構になる可能性がある。埋土中からは摩滅の著しい弥生土器片、須恵器壺・杯、土師器杯・小皿などが出土している。

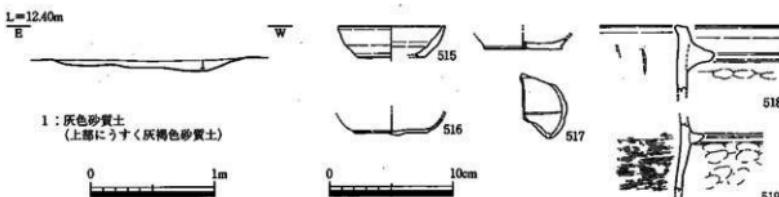
510～512は土師器杯。510は底部から少しあがった場所で全体的にきれいに割れている。底部外面のヘラ切り痕は丁寧にナデ消されている。時期は概ね13世紀代と考えられる。



第107図 S D6202断面図(1/40)出土遺物(1/4、1/2)



第108図 SD6102～SD6104断面図(1/40)出土遺物(1/4)



第109図 SD3503断面図(1/40)出土遺物(1/4)

#### SD6104 (第108図)

6区①北西部で検出した溝である。SD6102に直交して西側へ取り付き、SD6102の東側へは延びない。SB22の梁間との距離は約40cmである。幅71cm、深さ2cmである。おそらくSD6102とともにSB22を含む土地の区画となるものであろう。埋土からは弥生土器、土器器杯が出土した。

513は弥生土器甕。全面削離している。SD6104はSH08を壊しているのでその遺物が混入したのであろう。514は吉備系土器碗。時期は概ね13世紀代と考えられる。

#### S D3503 (第109図)

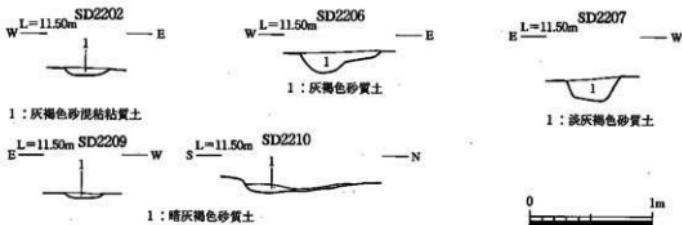
3区⑤下段東部で検出した東西方向の溝である。概ね地割に沿う。西半部は削平のため失われる。幅153cm、深さ10cm、埋土は灰色砂質土である。埋土中からは土器器杯・羽釜C・足釜脚部・青磁碗、備前焼撞鉢などが出土した。備前焼撞鉢を除けば概ね13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

515～517は土器器杯。底部はいずれもヘラ切り。517は杯A。体部と底部の境で全体的に割れており、底部にヘラ記号らしいものがある。他の遺物に比べやや先行する時期のものと思われる。515・516は杯D。518は土器器羽釜C。口縁端部は内傾させ、口縁部内面内側に稜線を持たせる。519は脚釜。口縁形態は不明。内面には密にハケを施し、外面の鋸下部には煤が付着する。

#### 5. 時期不明の遺構

##### S D2202 (第110図)

2区②南西部で検出した溝である。幅36cm、深さ6cm、埋土は灰褐色砂質土で断面形状は浅い皿状である。SD2206・2207と平行する。SD6103の延長上に近い位置にあるが、同一遺構かどうかは不明である。出土遺物はなく時期は不明である。



第110図 SD2202、SD2206、SD2207、SD2209、SD2210断面図(1/40)

#### SD2206(第110図)

2区②南部で検出した溝である。断面形状は東側が1段上がってテラス状になる。幅63cm、深さは東側が6cm、西側は16cm、埋土は灰褐色粘質土である。SH07を切る。SD2207とほぼ平行に走る。出土遺物はなかった。時期は不明である。

#### SD2207(第110図)

2区②南部で検出した溝である。幅44cm、深さ17cm、断面形状は逆台形で、埋土は灰褐色砂質土である。SD2206南側約1.2mの位置を走る。周溝の南側では検出していない。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### SD2209・2210(第110図)

2区②北部で検出した溝(SD2210)と、それにはほぼ直交する溝(SD2209)である。SD2209はほぼ等高線に直交し、SD2202・2206・2207の方向と似る。SD2210は等高線には斜交する。SD2210は幅100cm、深さ10cm、断面形状は浅い皿状、埋土は灰褐色砂質土でSD2209は幅43cm、深さ3cm、埋土はSD2210と同じ灰褐色砂質土である。ともに出土遺物はなかった。時期は不明である。

## 6. 自然河川

### S R01 (第112~116図、図版18)

4区③から1区②へかけて検出した谷筋で、微高地の西側を限るものである。この西側の谷筋は全域にわたってS R01とした。しかし、4区③に発する自然河川は、4区②の南側を西から東へ流れ、4区②の中央部南側から入る流路を切って流下するものの、その後3区③へ繋がるのかどうかは、4区と3区の間の距離がややあり、位置的には繋がっていると考えてもおかしくはないと思われるが、埋土や出土遺物からは別の流路である可能性も充分ある。

4区③と4区②の延長距離は75m、比高差は4.1cmである。4区②と3区③の間には延長距離は24m、高低差は2.7mの未調査部分があり、また、土層の堆積状況も4区②部分と3区③部分は対応関係が明確にできず、直接的に結びつくかどうかは疑問の余地がある。

3区③から1区②にかけては概ね連続的に調査区が設定されており、土層の堆積状況の対応関係もだいたい追える。3区③から1区②まで標高差約2.6m、延長距離約67m、流路は若干西へ膨らんでいる。傾斜は3区③南端から1区①北端にかけてが急で、1区①北端から1区②南端はなだらかである。3区③から1区①にかけては、大きい谷筋の上面から2条の流路が切っている。遺物の大半はここから出土している。

S R01の掘削は各調査区ごとでトレーナーを掘削後概ね層位ごとに掘削を行うことを心がけた。しかしながら、各調査区ごとで統一した層名では遺物の取り上げを行っておらず、土層図と遺物取り上げラベルの層名を照らし合わせながら復元を試みた。復元の方法は遺物取り上げラベルの層名と土層図の対照の比較的しやすかった3区③と1区①を基準に行った。3区③と1区①は大きい谷筋に2条の流路が刻まれて、その包含層の埋土が堆積する様子がよくわかつたことで遺物取り上げラベルとの対応も比較的容易であった。2条の流路の行方をたどりながら、1区②の流れの予測を行った。4区については先述した事情で、層位の対応関係が不明瞭であった。S R01からはコンテナ43箱分の遺物が出土した。

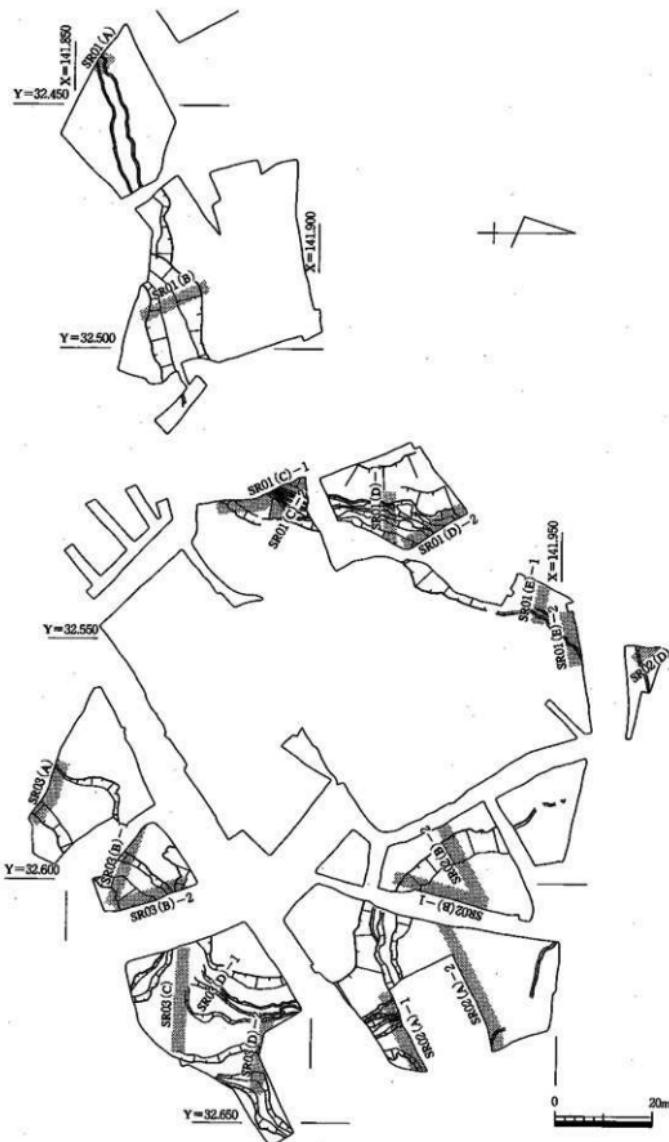
#### S R01A (第112・117図、図版31)

4区③を西から東へ流れる流路である。西端から東端までの比高差4.1m、幅3.7m、深さ62cm、埋土は上層に暗褐色粘質土、下層に灰褐色砂質土（礫混）、断面形はなだらかな半円形である。遺物はほとんど含まない。流れはそれほど急ではなかった。この流路はS R01Bの西半部に続くが、その後は不明である。ここからは12世紀代の土師器が出土した。

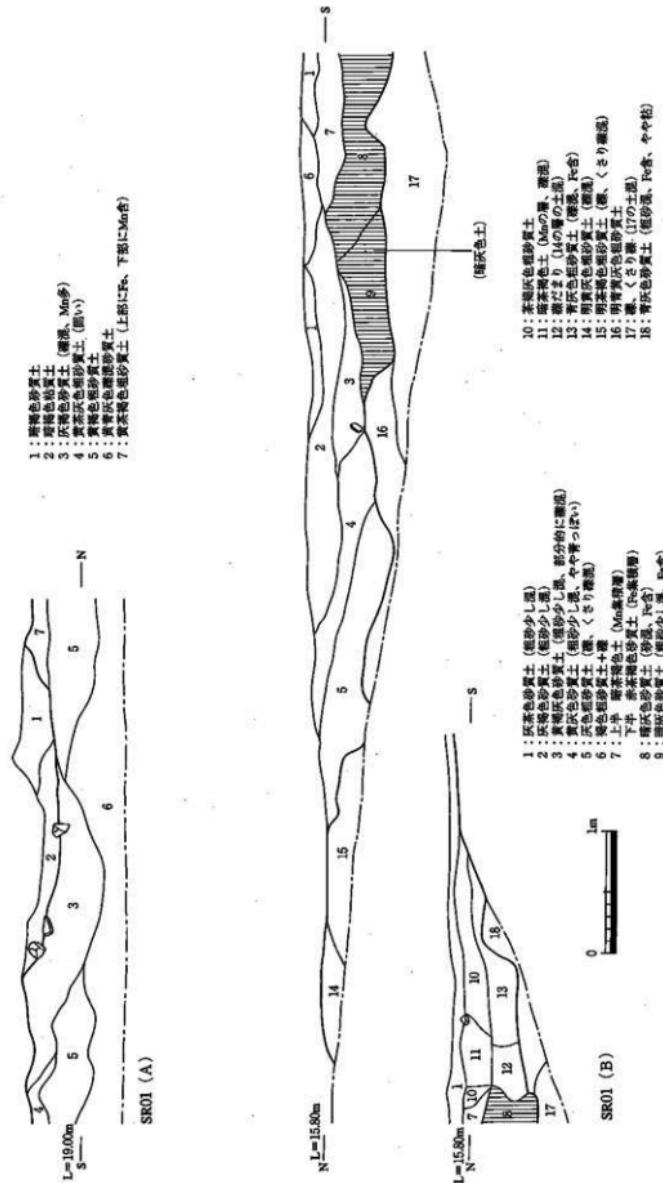
520・521はS R01Aから出土した。520は土師器杯。底部はヘラ切り後板ナデをする。521は土師器碗。外面の高台の上部1段分を全体に指押さえする。12世紀代。

#### S R01B (第112・117図、図版18・31)

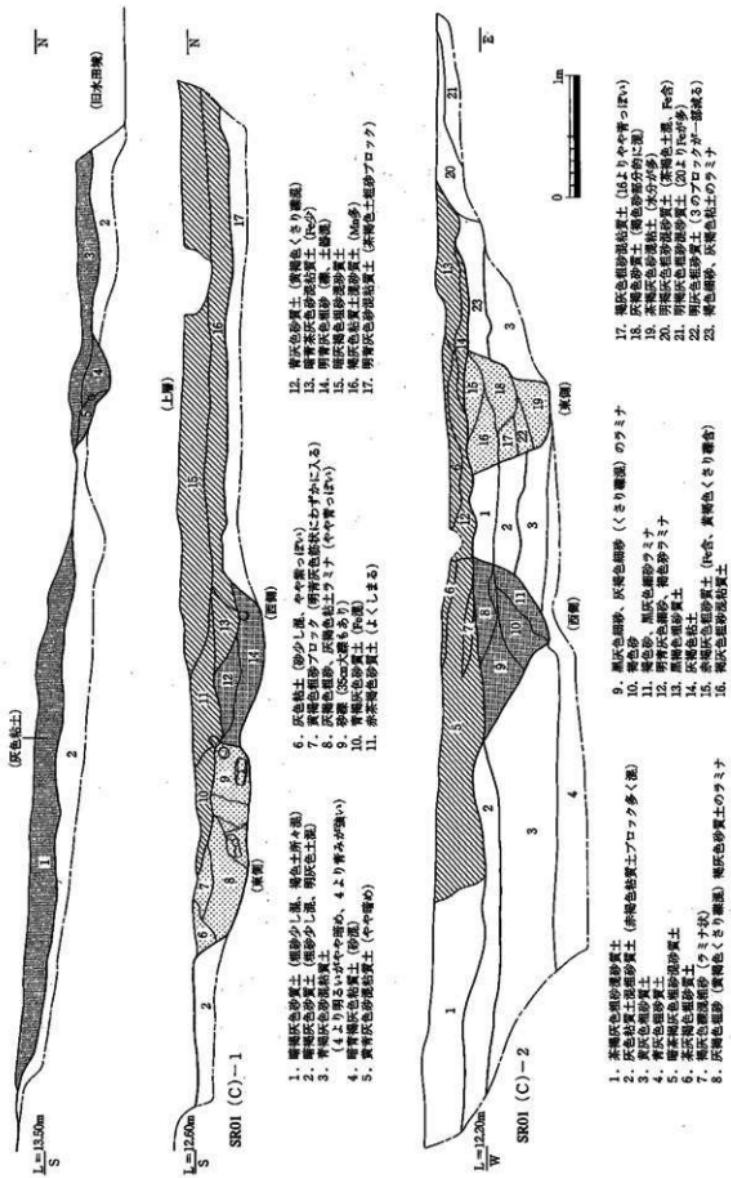
4区②の南部を西から東へ流れる流路を指す。この流路は4区②西側から入ってくる、4区③から続く流路と、4区②中央部付近から南から入る流路の両方が含まれる。4区③から続く方は、川の南側は調査区外へ延びるため、幅は不明であるが、6.6m以上、深さ70cm、埋土は黄灰色～灰色～灰褐色砂質土で、出土遺物はなかった。有機物を含まない川である。流れはあまり急ではなく、土壤化された層に近い。この川の行方は不明である。南から入ってくる流路については幅12m、深さ55cm、埋土は下層に礫、上層に暗灰色系の粘質土、最上層にそれらを切って褐色砂を中心とするラミナ層が見られる。当初流れが急であったものが、一定期間滞水状況にあり、再び急な流れが見られたと思われる。遺物は暗灰色粘



第111図 S R01～S R03土層図作成位置図(1/1,000)

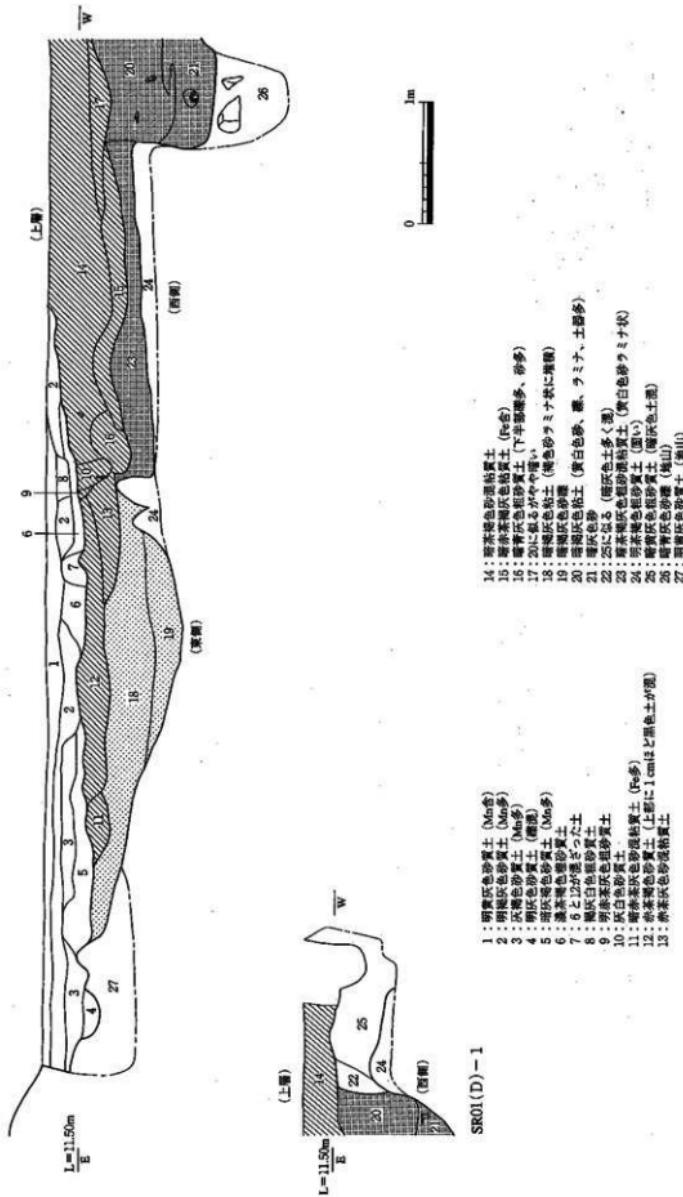


第112図 SR01(A・B)土質図(1)(1/40)

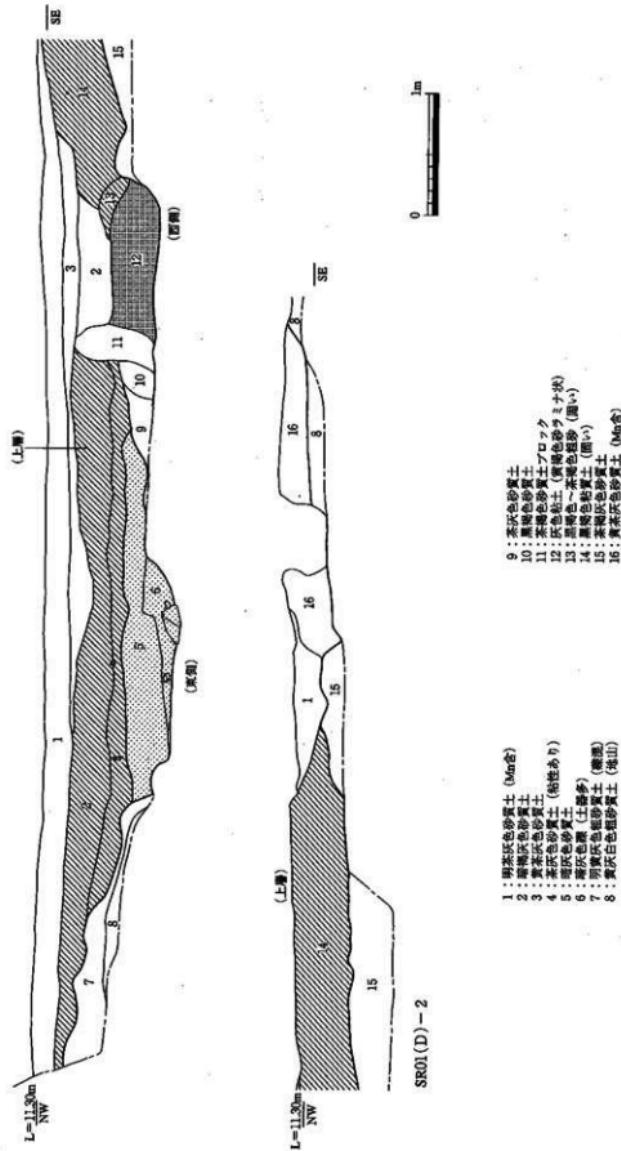


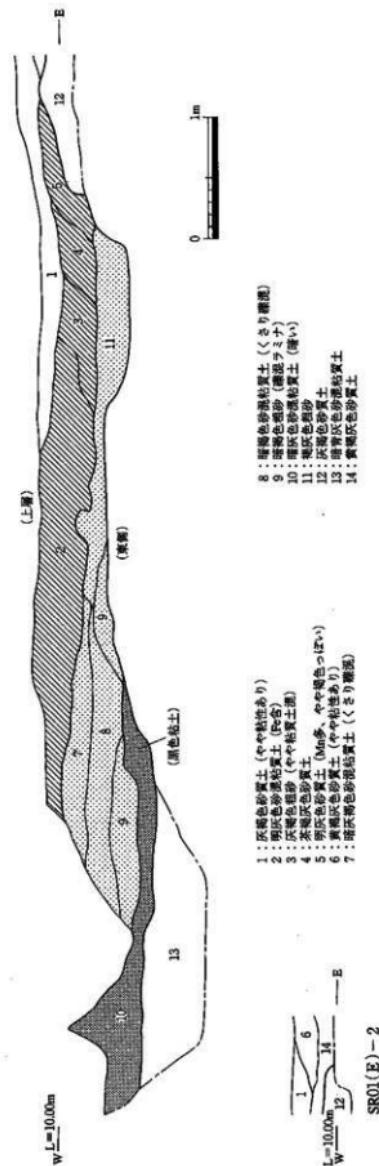
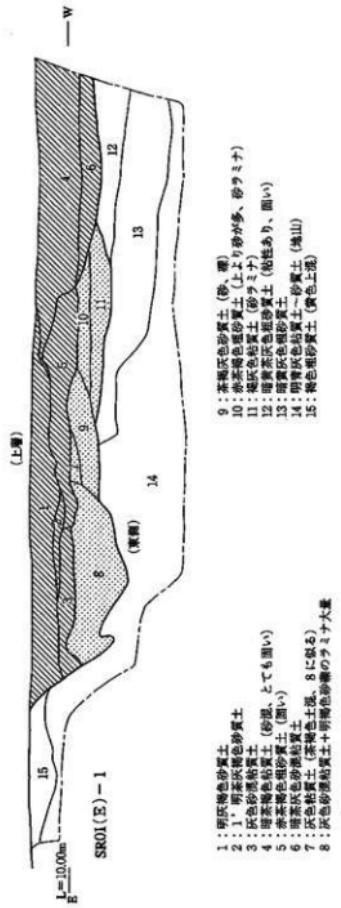
第113図 SR01(C)土層図(2)(1 / 40)

第114図 SR01(D)土層図(3)(1/40)

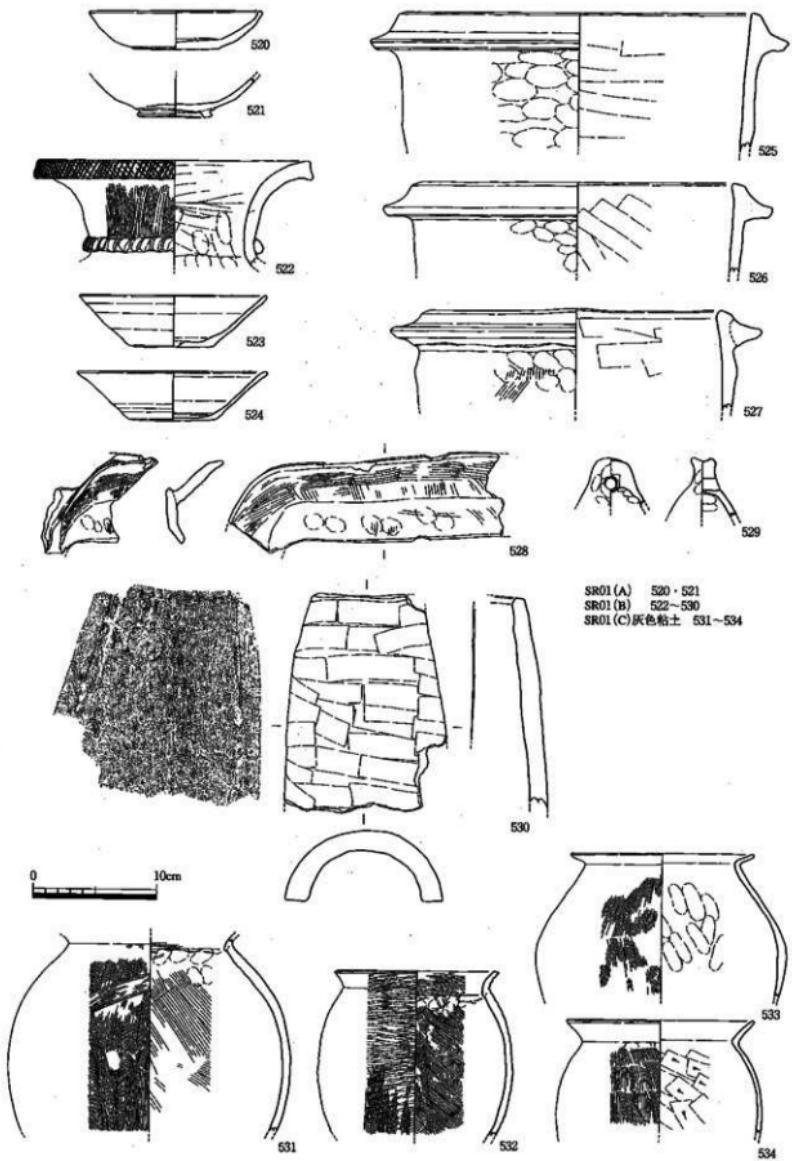


第115図 SR01(D)土層図(4)(1 / 40)





第116図 SR01 (E) 土厚図(5)(1/40)



第117図 SR01(A・B・C)出土遺物(1)(1/4)

土層から出土した。

522~530は4区②から出土した。522・529以外は暗灰色層から、522・529はトレンチなどから出土した。

522は弥生土器広口壺。口縁端部は斜格子文を入れ、頸部には押圧突帯を貼る。頸部で全体に割れており、ここで剥離した様子が窺える。弥生時代中期後半。523・524は土師器杯。回転台土師器で、524は底部に板目压痕が残る。523は底部から1cmくらい上がった場所で全体に割れており、ここに縦ぎ目があったことがわかる。525~527は羽釜C。525・526は外面指押さえ、内面板ナデで、口縁端部・鋸端部とも四角くし、527のみ外面にハケの痕跡が残る。口縁端部はわずかに先端を尖らせるもので、鋸端部はわずかに上部を尖らせる。528は竈。やや薄手の作りで、鋸端部は細くする。焚き口部分はやや外側へ折り曲げる。529は飯蛸壺。上端部を瘤ませる。530は丸瓦。上端が下端部に比べてすぼまっており、行基書きに使う瓦と思われる。凹面には布目、凸面には横方向の板ナデ痕跡がよく残る。この区画から出土する遺物は、弥生土器を除けば10世紀前半後と考えられる。

S R01C (第113・117~119図、図版18・31)

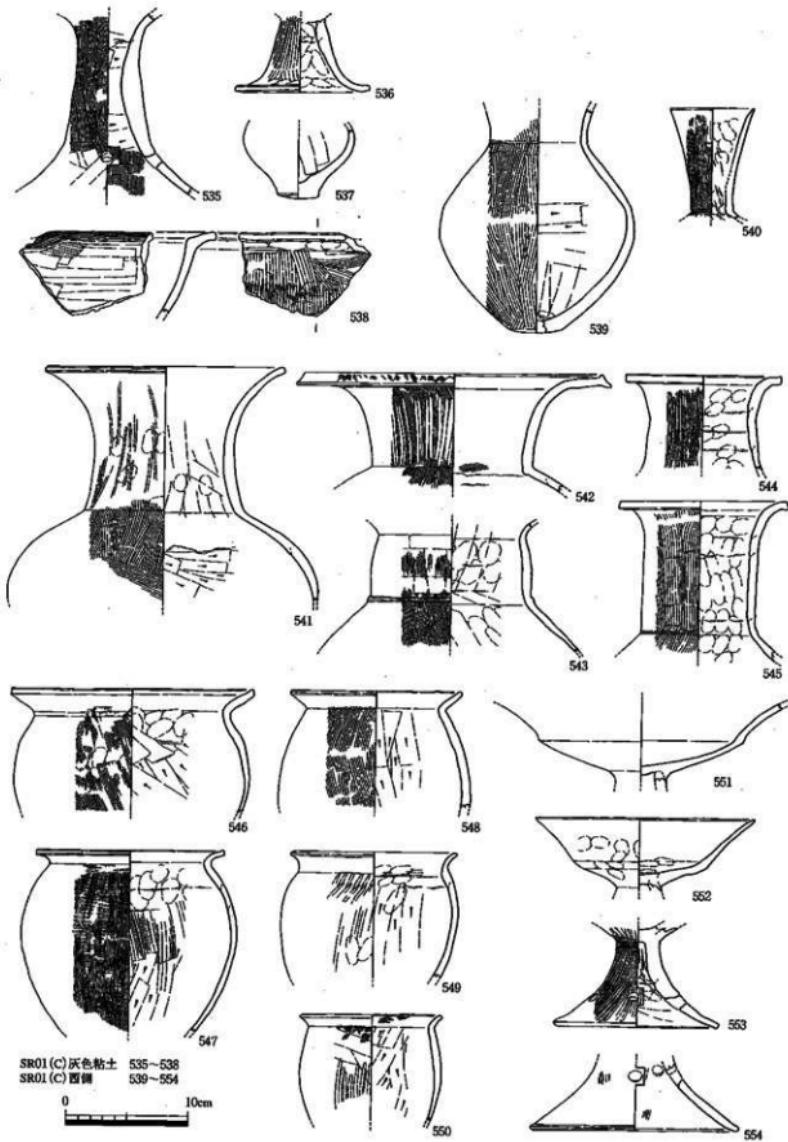
3区③西部で検出した。幅10m以上、深さ0.5m程度、主に褐灰色砂質土の大きい谷筋の上面を流路が2条走り、その上面に包含層が堆積し平坦地となる。流路に切られる谷筋の埋土からは摩滅の進んだ弥生土器が数点出土したが、遺物はあまり多くない。

西側の流路は上部では幅1.5m、深さ60cm、断面形は逆三角形で底の標高は11.7mである。埋土は灰褐色粗砂・細砂、黒褐色細砂などがラミナ状に堆積し、ある程度の流れがあったことがわかる。この流れは3区③の下流側では幅2.3m、深さ76cm、底の標高は11.6mと広がり、溝の断面からは東側にえぐれている様子が窺える。埋土には褐色~灰褐色砂層やラミナ状堆積の見られる層が目立ち、流れは急になるようである。埋土中からは主に弥生土器壺・鉢などが出土している。

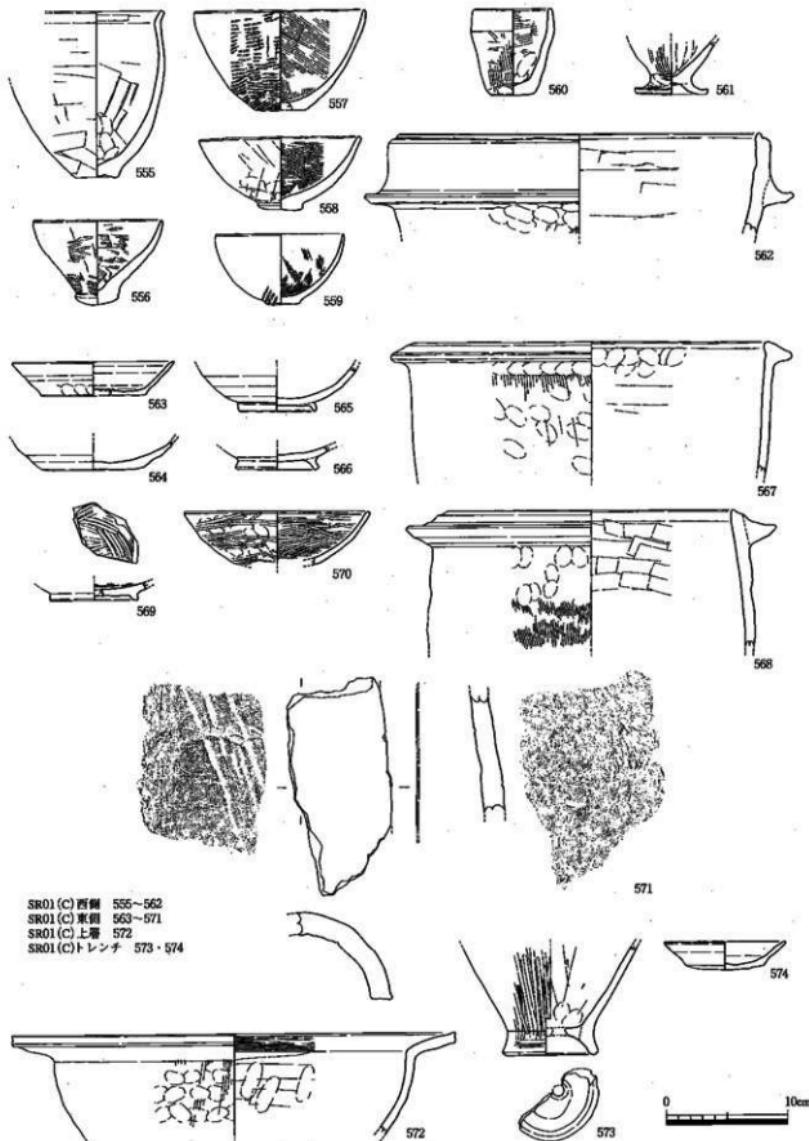
東側の流路では上部で幅1m、深さ70cm、底の標高は11.7m、断面形は逆台形で、灰褐色・褐灰色砂質土などが堆積し、急激に流れた様子はあまり窺えない。下流側では幅3.06m、深さ1.18m、底の標高は11.0mと急激に規模が大きくなり、断面形は西側へえぐれる形となる。暗灰色・暗褐色などの土が堆積し、流路が広くなり、最下層は滞水状態にあったようで、ベタベタの粘土である。埋土中からは10~13世紀代の遺物が出土し、流路の年代は13世紀頃と考えられる。遺物はあまり摩滅していないものが多い。

西側の流路が埋没した段階で概ね平坦地にはなっており、やや窪んだ地形となっていたが、それらの上面を上層が覆い、埋没が終了している。上層は灰色~暗灰色土で幅10m以上、深さは20cm程度であった。

531~538は3区③の上段の水田部分で出土した土器である。これらは西側・東側の流路が形成される前に堆積したと考えられる暗褐灰色砂質土及び青褐灰色砂混粘質土層から出土した。いずれも弥生土器で、摩滅が著しい。531~534は甕。531は外表面をハケで調整、532は外表面を口縁端部まで叩き上げ、内面はハケで調整する。533は口縁端部は丸く認め、外表面にはハケ、内面には指押さえ痕跡を残す。摩滅が著しい。534はくの字に曲がる口縁を持つ。内面はヘラ削りする。535・536は高坏脚部。535は外表面をハケ、内面はヘラ削りで、下部だけハケを施す。孔は3孔残存し、残存率から4孔あったと考えられる。537はミニチュア壺の底部か。摩滅により調整は不明瞭である。538は片口鉢。外表面はハケ、内面はハケ・板ナデである。ここから出土する土器は概ね弥生時代後期後半で、谷筋が埋没した時期もこの頃と考えられる。



第118図 SR01(C)出土遺物(2)(1 / 4)



第119図 S R01(C)出土遺物(3)(1 / 4)

539～562は西側の流路で、砂層のラミナ層が顯著に認められる流路から出土した土器である。539～561は弥生土器。539～545は壺。539・541・542・544・545は広口壺。541は長めの頸部に自然に拡がる口縁を持つ。542は太めの斜め上方に立ち上がる頸部に口縁部が急に拡がる。口縁端部は上下に拡張させ、端部に波状文を施す。544・545は長めの頸部に口縁端部が少し開く。口縁端部には面を持つ。頸部外面にはハケ、内面は指押さえで、粘土の織ぎ目を明瞭に残す。545は頸部と体部の境に段を持つ。540は細頸壺。下川津B類。543は頸部に膨らみを持ち、体部と頸部の境に凹帯が巡る。546～550は壺。概ね外面はハケ、内面はヘラ削りで調整し、口縁部は緩く屈曲する。549は外面体部上部に縱向きのタタキがわずかに残る。551～554は高杯。551・552は杯部。553・554は脚部。553は脚部の上端付近に沈線が3条巡る。穿孔は不均等に4ヶ所ある。554は穿孔が2ヶ所残存する。残存状況から4ヶ所に施されたと考えられる。555～560は鉢。555は口縁端部が外側へ開く。外面は板ナデで全体に平滑に仕上げて、調整痕跡はほとんど残さない。体部残存部分の歪みが著しく、反転復元はしなかった。556～559は椀形で、556だけやや小型で、丸みを持たない。概ね外面はタタキ、内面はハケで、556・557は外面にクラックを残す。558は外面をきれいに板ナデし、調整痕跡をほとんど残さない。560は手捏ね。内外面にハケで調整するが、成型時の凹凸をよく残す。561は製塙土器。562は土師器足釜。口縁端部に沈線を持つ。13世紀末～14世紀前半。この流路からは概ね弥生時代終末期2～3の弥生土器が多く出土するが、圓化しなかった13世紀代前後の土器も少なからず出土し、流路の形成自体はこの頃と考えられる。出土した土器はいずれもあり摩滅しておらず、周辺の集落にあった遺物を巻き込んだものと思われる。

563～571は東側の流路から出土した。563～568は土師器。563・564は杯。563は回転台土師器。体部下端部に指押さえ痕が残る部分がある。564は杯D。565・566は椀。565は高台の内部の貼付粘土が内側にまで及んでいる。ヘラミガキは認められない。吉備系土師器椀。567・568は羽釜C。567は鉢と口縁がほとんど一体となっている。569は縁釉陶器椀。土師質で高台は削り出し輪高台である。内面にはヘラミガキが残る。京都産。570は瓦器椀。内外面にヘラミガキを施す。和泉産。571は丸瓦。凸面はヘラ削りで調整するが、雑で繩叩き痕跡が残る。やや先細り気味で、行基葺きの瓦の可能性もある。概ね10世紀～13世紀までの遺物を含むようだが、12世紀後半～13世紀前半頃が中心である。

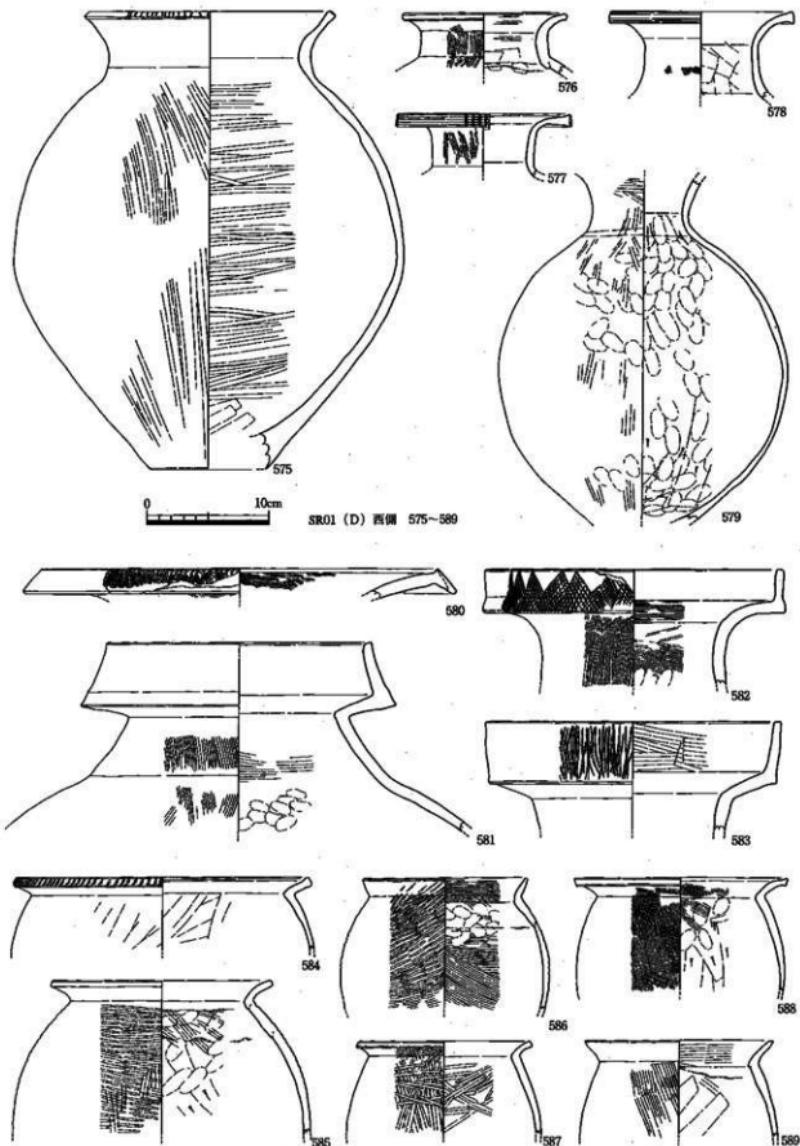
572は流路を覆う上面の包含層から出土した。土師器鍋。7世紀代。

573・574はトレンチから出土した。573は弥生土器甌。底部には高台状のものが付き、やや偏った位置に孔が1つ残存する。弥生時代中期後半。574は土師器皿。11世紀中葉頃。

S R01D (第114・115・120～132図、図版18・32～38・81・82・91)

1区①では、西側の流路は幅2.3m、深さ60cm、底のレベルは11.4mで、断面形は逆三角形、埋土は暗灰色砂質土や褐色粗砂である。中央付近では幅1.2m、深さ1m、底のレベルは10.4m、断面は逆台形となるが、一番平野側へ降りてくると該当する土層がなく、中央付近やや北側で東側の流路に吸収されるようである。埋土中からは弥生時代後期の土器を中心に一部弥生時代中期の土器や10世紀代の土器が出土した。

東側の流路では、S R01Cよりさらに流路の規模は大きくなり、幅4m、深さ80cm、底の標高は11.4m、埋土は灰色砂礫を中心とし、断面形は逆台形である。S R01Dの中央付近では幅3.6m、深さ62cm、底の標高は10.7m、断面形はなだらかな半円形を呈し、特に東肩が緩やかになる。埋土は暗灰色粘土系で流路がやや緩やかになる様子が窺える。最も平野側では幅3.2m、深さ45cm、底の標高は10.2m、埋土は褐色系の土がラミナ状に堆積する。断面形状は浅い崖み状となっている。埋土中からは弥生時代中期

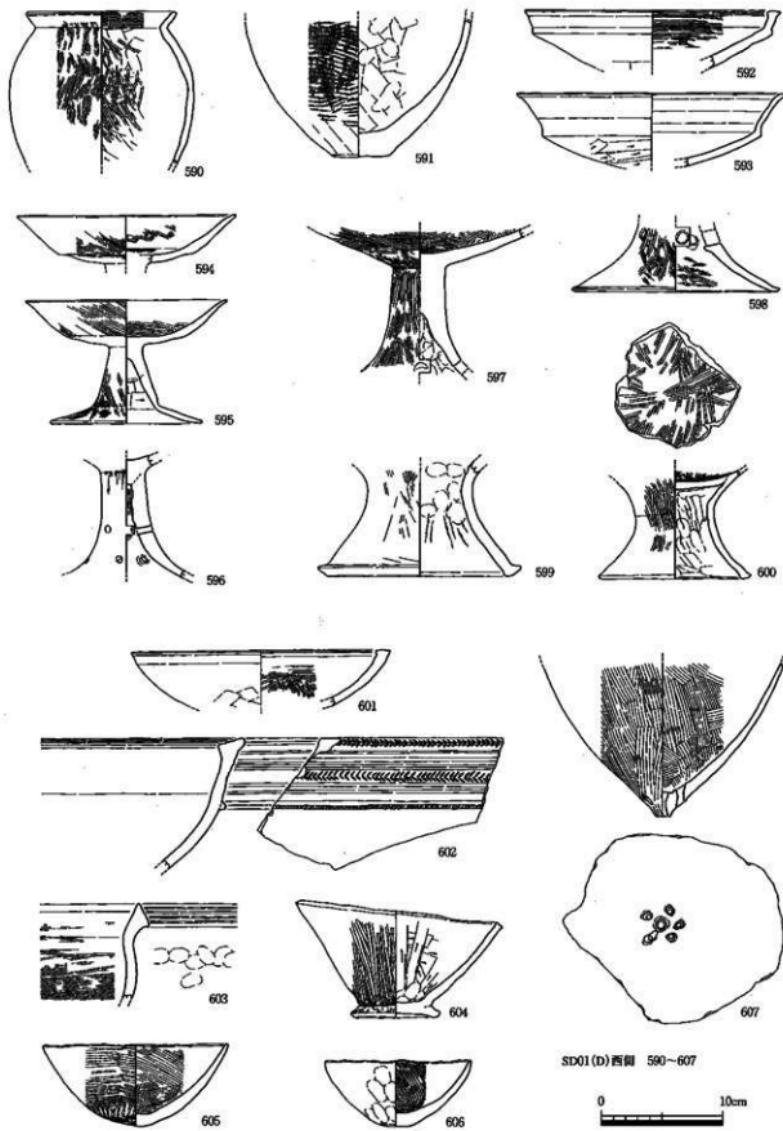


第120図 SR01(D)出土遺物(4)(1 / 4)

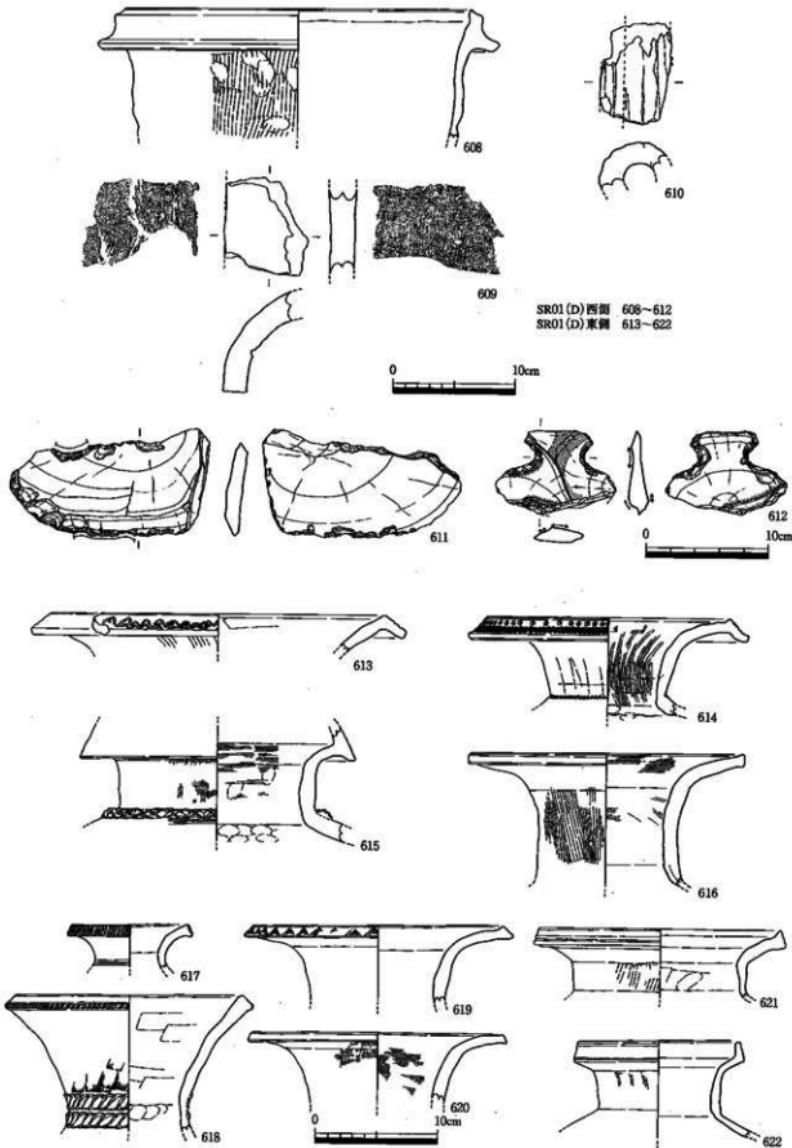
～後期の土器と10～12世紀代の土器が多く出土した。隣接する3区③微高地部分や3区②山側部分では遺構密度は希薄であったが、このあたりはビニールハウスなどの後世の擾乱等で破壊されていたことを勘案すれば、この付近に集落があったものが13世紀頃の土石流で破壊されたことが考えられよう。これらの流路の上面には暗茶褐色・暗褐色砂質土の包含層が80cm前後ほど堆積し、埋土中からは9～10世紀代の土器に混じって13世紀代の土師器が出土した。最終的な埋没はこの時期と考えられよう。

575～610は西側の流路から出土した土器である。575～607は弥生土器。575～583は壺。575は口縁端部に刻み目を入れ、内外面にヘラミガキを施す。弥生時代中期後半。576～578はやや短めでほぼ直立する頸部に急に開く口縁部を持つ。頸部外面にはハケを施す。577は口縁端部に凹線を施し、その後均等に4ヶ所に4本1単位の縱方向の刻み目を入れる。体部と頸部の境できれいに剥離している。580は口縁端部を上下に拡張させ、端面上部に半裁竹管文を、下部に波状文を施す。口縁部端面には粘土を薄く巻き付けて面を広くしたような剥離痕跡が残り、剥離面に指痕が残る。581～583は二重口縁壺。581は下川津B類。582は口縁立ち上がり部に鋸齒文を施す。583は口縁部立ち上がりの基部で剥離面がみられる。584～591は壺。584は口縁端部に刻み目を持つ。弥生時代中期後半。585・588は外面にタタキの後ハケを施し、内面体部上部にハケ、中位から下部はヘラ削りする。589・591も似たような調整を行っていたと思われる。592～600は壺。592は口縁端部に凹線が3条巡る。内面にはヘラミガキを密に施す。弥生時代中期後半。593は体部外面に横方向のヘラ削りがある。全体に摩滅する。下川津B類。594・595は杯部内外面とも横～斜め方向にハケを施し、杯部の屈曲は緩い。古墳時代初頭。596は脚部のうち筒部はほぼ完存する。穿孔は2段に5個所ずつ施される。597は杯部内外面に4分割程度の横方向のヘラミガキがある。脚部の穿孔は2ヶ所遺存しており、ほぼ均等に3ヶ所に穿孔するか、やや広めの2孔1対の穿孔になるとと思われる。599・600は底部に円形の剥離痕跡があり、底部を充填した様子が窺える。とともに弥生時代中期後半。601～606は鉢。601は口縁端部に面を持ち、内面はハケの後ヘラミガキを施す。602は大形の鉢。口径は50cmを越えると考えられる。口縁部外面に綾杉文+四線文3条+綾杉文+四線文+刻み目を施す。摩滅が進む。603は口縁部を外側へ軽く屈曲させ、口縁部端面には凹線文を4条施す。601～603は弥生時代中期後半。604～606は楕形の鉢。604は底部に粘土を足して明確な平底を作り出している。外面はヘラミガキを丁寧にする。605・606は内面に横～放射状のハケ、外面は605はタタキ、606は調整痕跡を残さない。607は有孔鉢。尖った底部には中心に1孔・その周囲に5孔の合計6個所を穿孔する。この場所で出土する弥生土器は中期後半～古墳時代初頭まであるが、後期後半が中心となると思われる。608は土師器羽釜C。口縁部内面に凹線が巡り、端部上面にも窪みができる。609は丸瓦。凸面の長辺の端面に近い方は縄目はほとんどナデ消されるが、頂部に近い方は縄目はよく残る。凹面は端面に近い部分は板ナデ調整をし、布目を全く残さない。失敗して余分な粘土を搔き取ったようである。610は輪羽口。溶融痕は残さないが、上部にわずかに灰色に変色している部分がある。611・612は石器。611はスクレイバー。刃部をわずかに加工する。612は石匙。刃部は加工されておらず、未製品と思われる。この流路では多量の弥生土器に混じり、上記の10世紀代の土器が出土した。

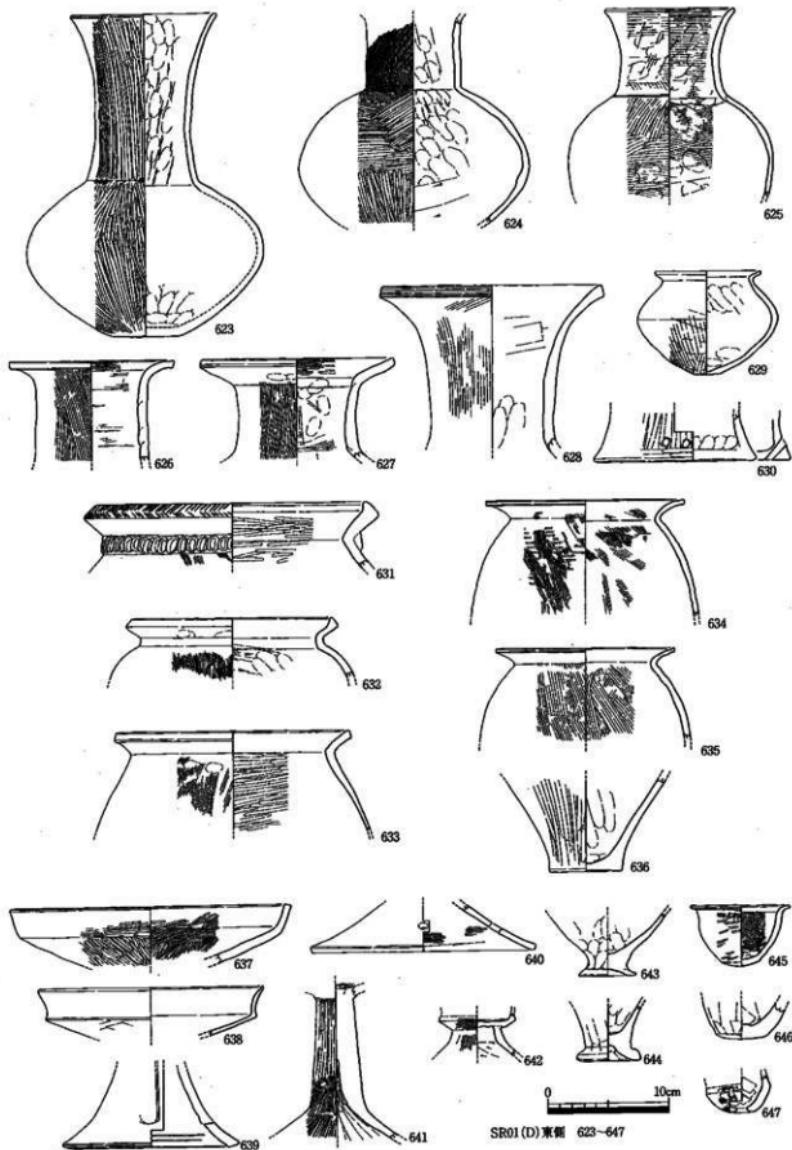
613～746は東側の流路から出土した。613～650は弥生土器。613～630は壺。613・614は斜め外側へ開く頸部から大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は下側へ拡張させる。613は口縁端面に波状文、614は上段に竹管文、下段に波状文を施し、頸部に刻み目を入れる。615・622は二重口縁壺。615は頸部に山形突帯を貼り付ける。616・619・620はやや太めの直立～やや斜め外側へ立ち上がる頸部から口縁部が大きく開くものである。619は口縁部端部に面を持ち、鋸齒文を施す。617は口縁端面に縱方向の刻み目を、



第121図 S R01(D)出土遺物(5)(1/4)



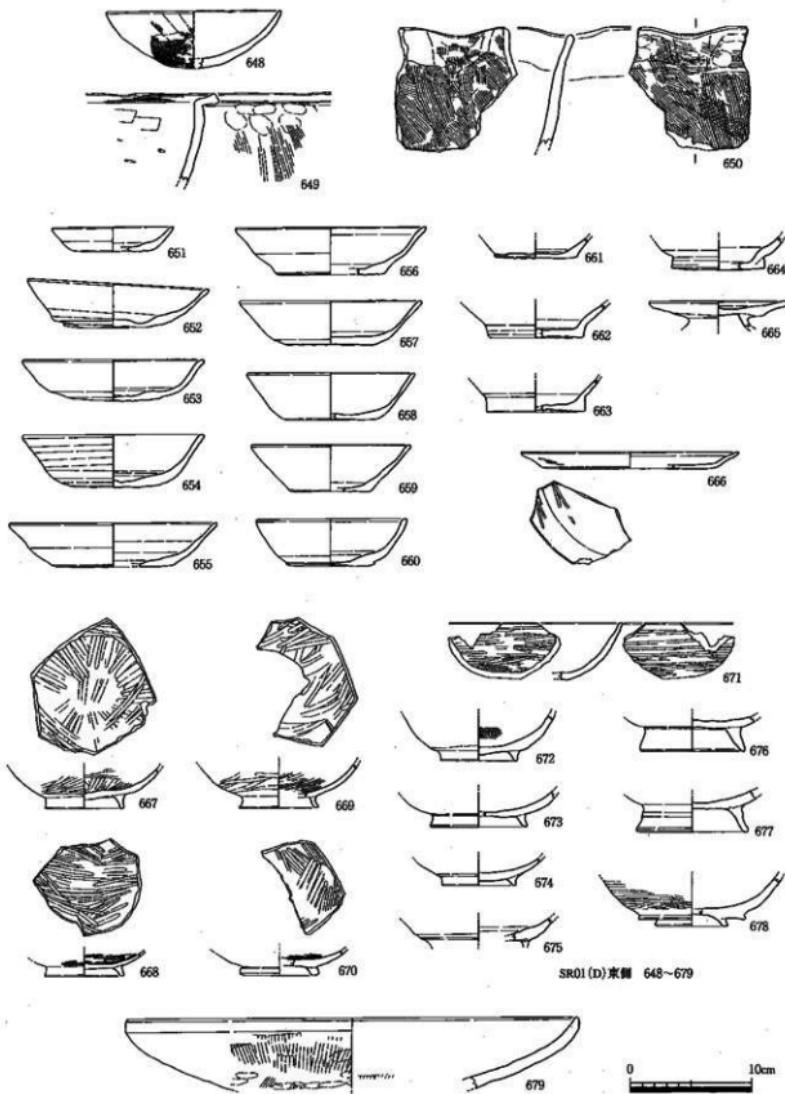
第122図 S R01(D)出土遺物(6)(1 / 4)



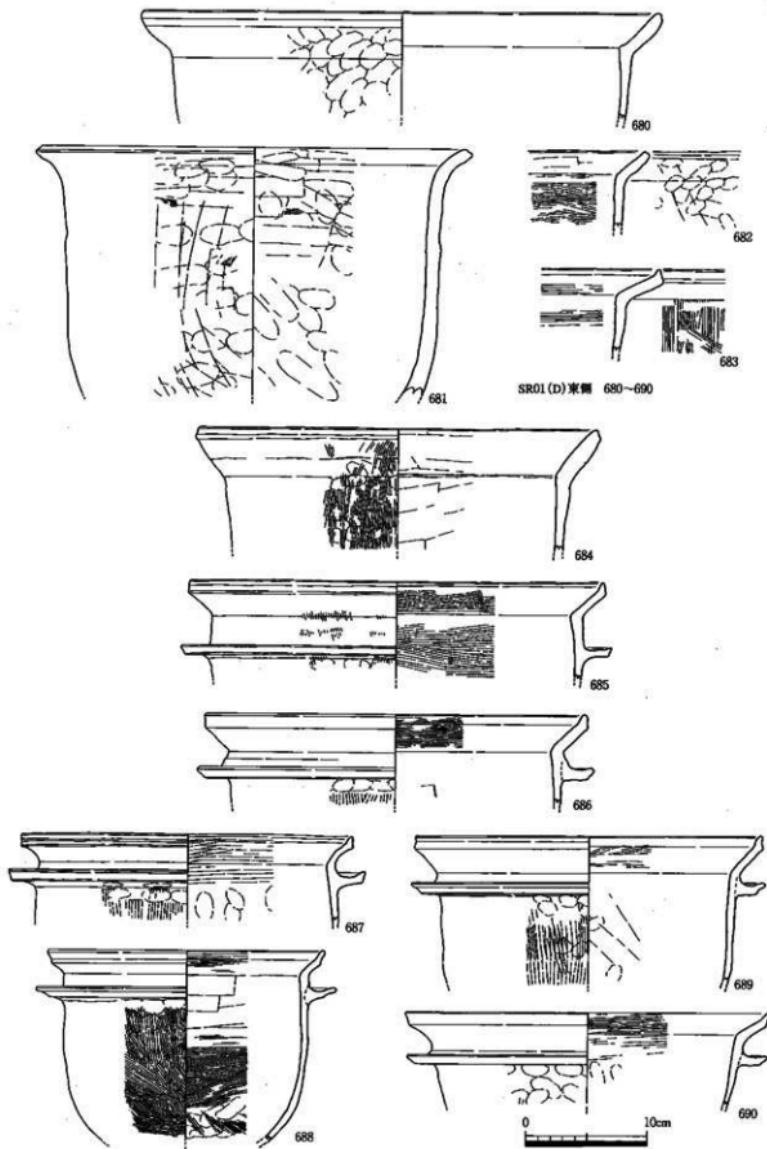
第123図 SR01(D)出土遺物(7)(1/4)

618は口縁端部外面に縱方向の刻み目を入れ、頸部には押圧突帯を二重に巡らせる。617・618は弥生時代中期後半。621は太く短い直立する頸部から口縁部が大きく開く。口縁端部には凹線が2条巡る。623～625・628は長く細めの頸部に口縁端部がなだらかに聞くものである。623は外面全面を縱方向に丁寧にミガキを施し、624は外面体部にハケの後上半部は横方向の4分割程度の、下半部は縱方向の丁寧なミガキを施し、頸部にはハケの後斜め方向に工具で模様を付けている。頸部と体部の境にはわずかに段を付ける。625は頸部と体部の境に緩い沈線が巡る。628は口縁端部に凹線を巡らせる。628は弥生時代中期後半。626・627は長めの直立する頸部に口縁端部が大きく開く。頸部内外面ともにハケを施す。629は短頸壺。体部中位が大きく張り、外面はヘラミガキする。630は壺の底部に2孔1対の穿孔がある。弥生時代中期後半。631～636は壺。631は口縁部端面に綾杉文を入れ、頸部には押圧突帯を貼る。632は口縁端部を上方へ引き上げ、内面にはヘラ削りする。633はあまり張らない体部で、内面には横方向にヘラミガキを密に施す。634・635は内外面をハケで調整し、やや長めの口縁部はきつく屈曲する。636は明確な平底で、外面は丁寧にヘラミガキする。631・633・636は弥生時代中期後半。637～641は高壺。637は杯部内外面とも体部を横方向、底部を縱方向のヘラミガキを丁寧に行う。弥生時代中期後半～後期初頭。639には脚部に長方形の透かしが2個所残存する。残存部分から4個所に透かしがあったと考えられる。640は穿孔が2孔残存し、全体では4孔が均等にあったと考えられる。642は台付鉢の接合部。上部には小型丸底壺のような器形のものがあったと考えられる。643・644は製塙土器。633はやや丸みのある体部、644はまっすぐ立ち上がる体部で、外面は板ナデで成形する。645～650は鉢。645は小型の鉢。外面にタキを施した後、全体にハケで仕上げる。646・647は手捏ねの後粗く調整を施している。647は焼成後に底部に穿孔がみられる。648はやや浅めの椀形の器形。649はきつく屈曲する口縁部を持つ。650は片口部分。全体をハケで調整する。ここで出土する弥生土器は弥生時代中期後半のものが一部出土するが、主には弥生時代終末期前後の遺物が多く出土する。

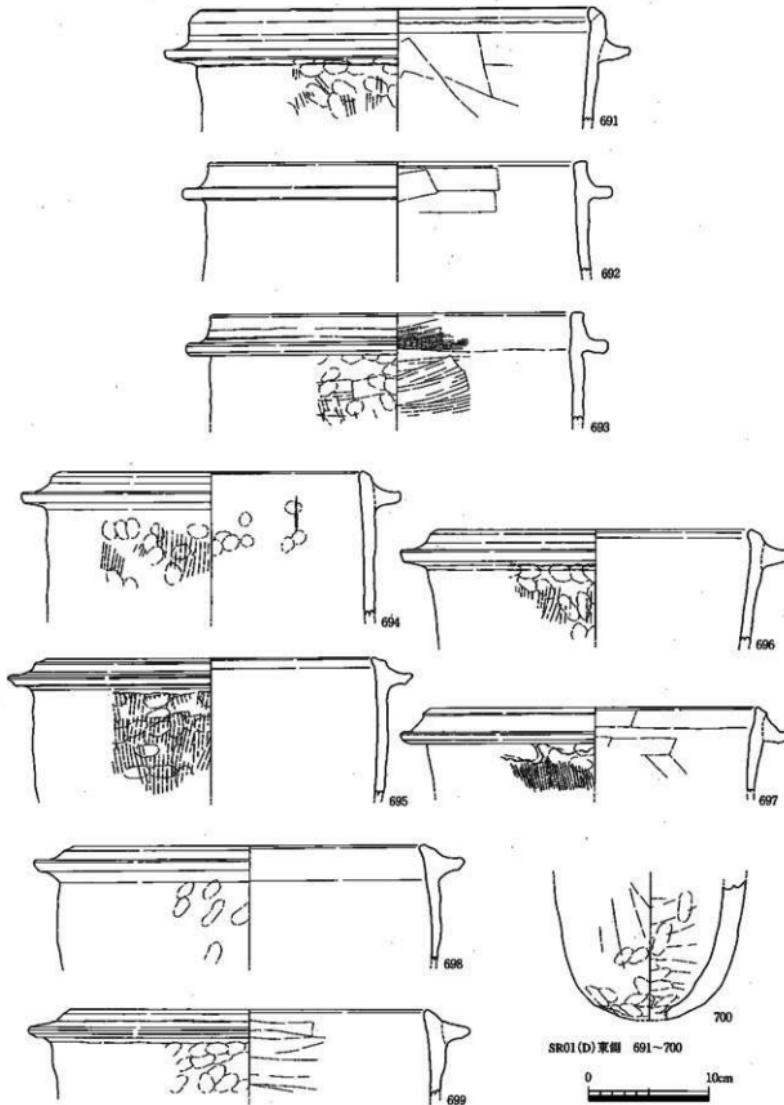
651～702は土師器。651は小皿。652～658・660は杯D。口径は14.5cm前後のものが多い。底部はすべてヘラ切りで、654には時計回りのヘラ切り痕が残る。654には体部に回転台を使用した際の凹凸が明瞭に残る。652は歪みが著しい。653は底部中心部に直径3.1cm程度の円盤状の剥離が見られる。この円盤を中心にして底部を作ったのか。12世紀後半～13世紀前半。659・661は杯A。回転台土師器。661には反時計回りのヘラ切り痕を残す。662～664は円盤状高台を持つ杯。とともに10世紀代。665は皿。小型で高い高台が付く。10世紀後半。666は口縁端部を丸くする。外面にわずかにヘラミガキが残存する。8世紀後半。内面の暗文はみられない。667～678は椀。667～669・671・673は吉備系土師器。673以外は内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。11世紀後半～12世紀前半。670は内面にヘラミガキを施し、外面の高台部分のすぐ外側には1段のヘラ削りを施す。672・674は高台部のすぐ外側にヘラ切り痕を残し、ヘラ削りは行わない。672には内面に横方向のハケが残る。670・672・674は西村産と考えられる。12世紀代。675は高台が欠損しているが、本来高台があったらしい場所には円弧状の刻み目があり、接合しやすくしている。676・677は高台が高い椀。10世紀後半。676は高台の作りが雑で、高台を輪状に丸くした接合部が裏側からはよく観察できる。677は高台部分が一部剥離し、その部分には円弧状の刻み目が見られた。接合の目安と接着面を広くすることが目的と思われ、676では円弧状の刻みが一部高台の外側に及んでいる個所もあった。677は摩滅が著しいものの、底部内面には放射状の圧痕が認められた。678は平高台の杯に高台が付いたような形態である。内面は摩滅がひどく調整は観察できなかったが、外面には密にヘラミガキが施される。680～684は壺。680・682・684は壺E。681は壺F。頸部に綾杉



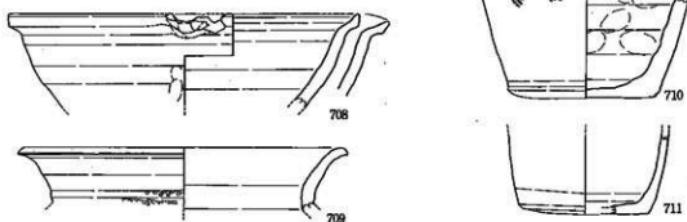
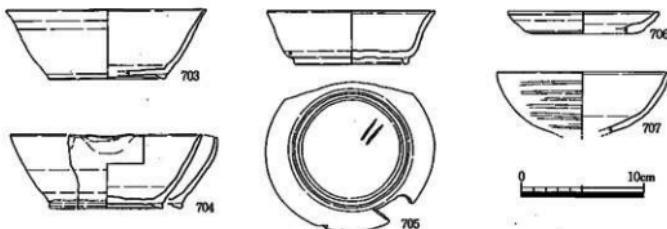
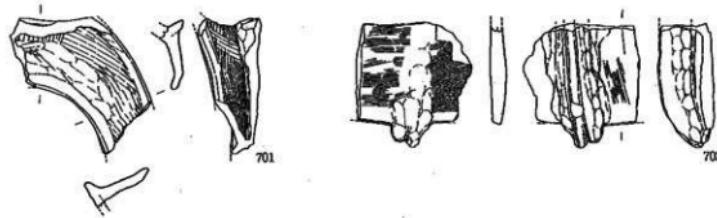
第124図 S R01(D)出土遺物(8)(1 / 4)



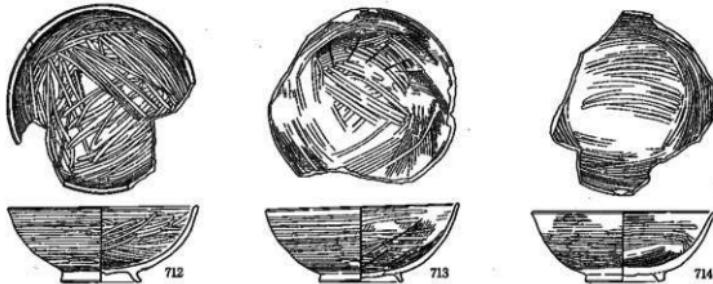
第125図 S R01(D)出土遺物(9)(1 / 4)



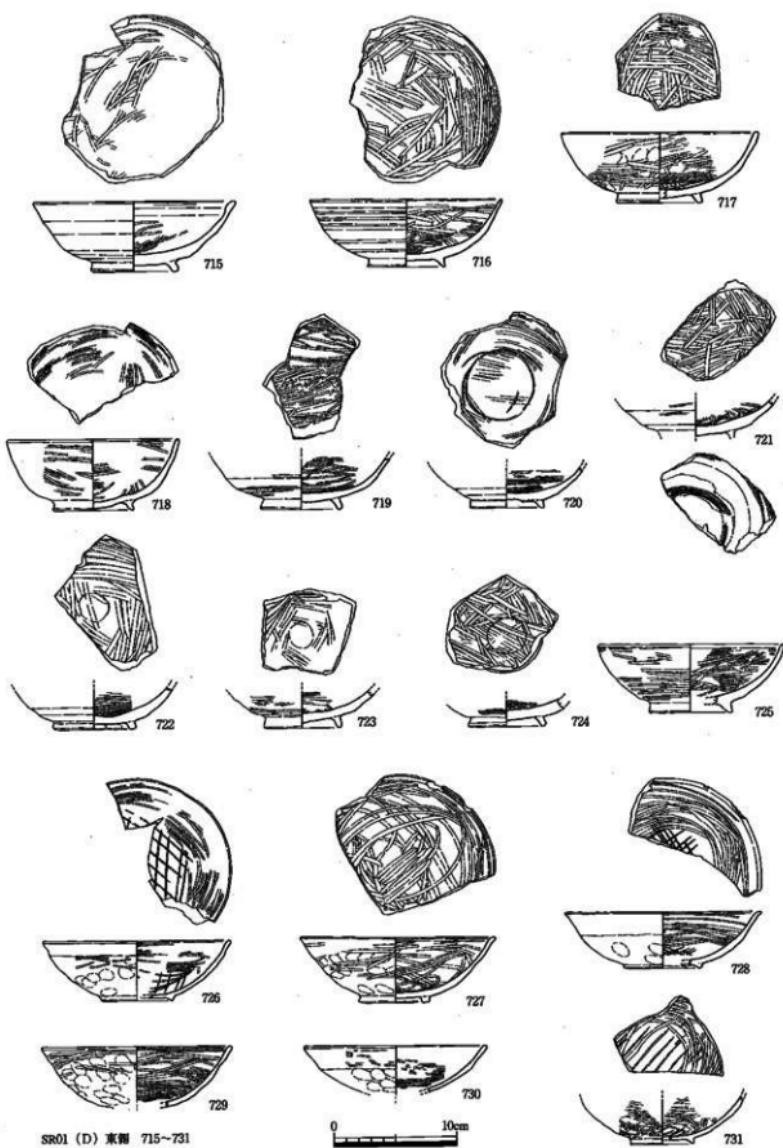
第126図 SR01(D)出土遺物10(1/4)



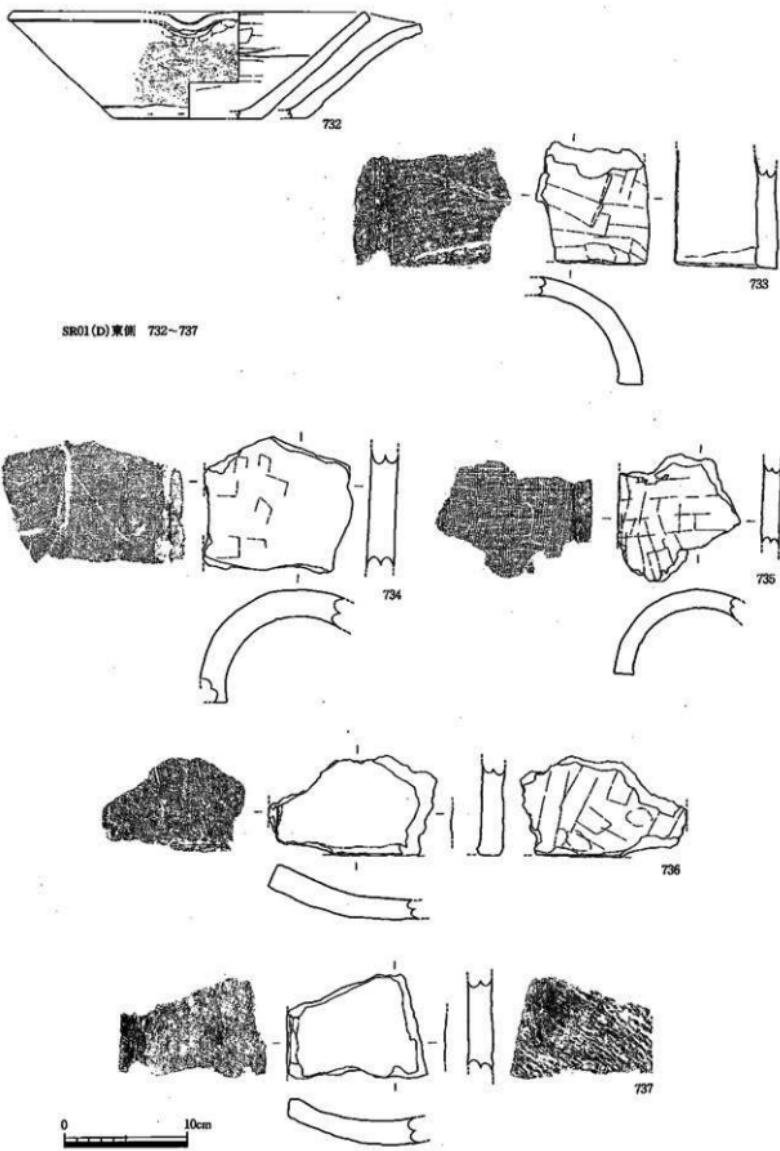
SR01(D) 東面 701~711



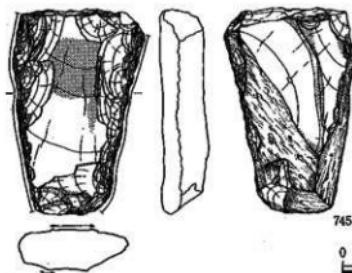
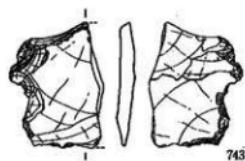
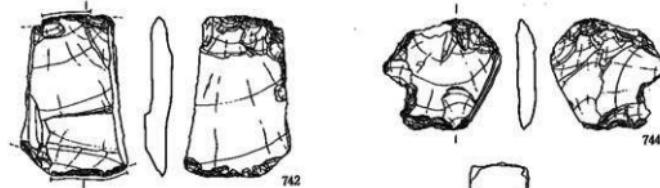
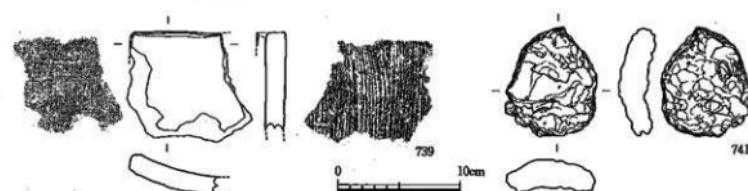
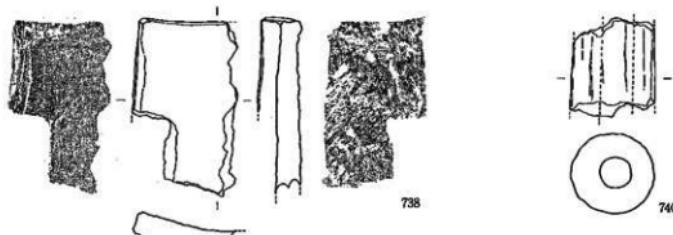
第127図 S R01(D)出土遺物(1)(1/4)



第128図 S R01(D)出土遺物12(1/4)



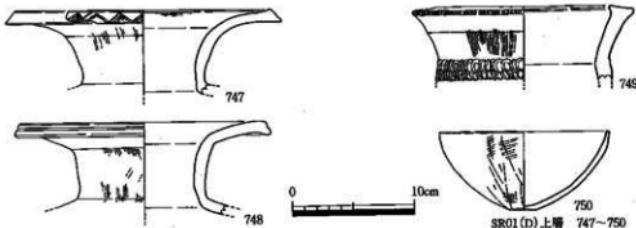
第129図 S R01(D)出土遺物⑬(1/4)



0 5cm SR01(D) 東側 738-746

第130図 SR01(D)出土遺物(4)(1/4、1/2)

持たず、なだらかに体部に至る。683は壺D。口縁端部を上部へ引き上げる。685～690は羽釜A。いずれも口縁端部を上方へ引き上げ、鉢端部は上方を尖らせる。内面は横ハケ、外面は縱ハケで調整する。691～699は羽釜C。口縁端部は四角くするもの（692・693）、尖らせるもの（694・696～699）、内側へ屈曲させ、内面に凹線を持つもの（691・695）があり、鉢端部は四角くするもの（691～694・696）と上側を尖らせるもの（695・697～699）がある。700は真蛸壺。厚手の作り。701は竈。鉢と受け口の一部が残存する。鉢端部は尖らせる。702は器種不明。外面に太めの突帯のようなものを縱方向に貼り付け、下方から直徑5mm程度の孔があけられる。この孔は1cm程度は上方へあいているが、上端部の割れている部分ではみられない。土師器の時期は8世紀後半の土師器皿を除けば10世紀後半～12世紀代である。703～711は須恵器。703～705は高台付杯。703・704はやや薄手で深めの杯に、体部と底部の境に短い高台が付く。704は口縁端部を1個所内側へ折り曲げている。意図したものかどうかは不明。9世紀中頃。705は体部がやや丸みを持ちながら立ち上がる器形。底部外面に2本の刻み目がある。706は皿。焼成不良の須恵器のような色調で、西村産と思われる。11世紀後半。707は須恵器碗。外面には横方向の粗いヘラミガキ、内面には板ナデを施す。西村産。12世紀後半。708は捏ね鉢。口縁端部は上方へつまみ上げ、片口部分は指で外側へ折り曲げて作る。11世紀後半。709は壺。頸部下端に格子タタキ痕が残る。左上がりのタタキを右から叩いている。710・711は壺底部。710は体部に疎らに左上がりの格子タタキ痕が残る。11世紀後半。須恵器は12世紀後半のものがあるものの、概ね11世紀後半頃である。712～725は黒色土器A碗。口径指数は37～42程度。口径は概ね15cm～16cmの間に収まるが、718だけ小振りである。調整は概ね体部外面を横方向のヘラミガキ、内面を4～5分割のヘラミガキをした後底部にヘラミガキをする。しかし、破片が小さかったり摩滅があったりで、それらの調整が不明瞭であったものもあった。715・722には外面のヘラミガキは認められず、722は体部と底部のヘラミガキが一体化していた。713は内面のヘラミガキがやや雑で、ハケの痕跡が明瞭に残る。715・718・719・722以外は外面の底部と体部の境にヘラ削りを1段程度施す。718はヘラ削りはないが、該当部分は丁寧に磨いて底部と体部の境が目立たないようにしている。720には見込み部分に直徑5.7cm程度の重ね焼き痕跡と思われる圧痕が、722～724には直徑2.5cm程度の粘土の繩目と思われる稜線がみられる。721は高台が剥離しているが、その部分には円弧状の刻み目が2周巡っており、接合面を増やす工夫をしていたと考えられる。黒色土器の年代は11世紀中葉～12世紀代と考えられる。726～731は瓦器。概ね口縁端部外面を横方向にナデて、体部には指頭痕を残す。しかし、外面にも疎らにヘラミガキ痕跡を残し、指押さえの凹凸は顕著ではない。726・728には見込みに格子状のヘラミガキが、731には直線状のヘラミガキがある。727・729は外面に一部焼されずに、728には内面に白っぽく残った場所がある。瓦器の年代は概ね12世紀代であろう。732は瓦器捏ね鉢。片口部をわずかに残し、外面下端部を幅1cmほどでヘラ削りし、上半部を左から右へ格子タタキをする。底部は一部剥離しており、その部分には指押さえ痕跡が残る。S R01 (E) から出土したものと接合した。13世紀後半。西村産。733～735は丸瓦。いずれも凸面に板ナデ痕、凹面に布目痕を残す。736～739は平瓦。736は凸面を板ナデし、タタキ痕を残さない。737は凸面に斜め方向の縄目が残るが、その縄目痕を一部ヘラ削りして消す。738は側縁が長方形に割れており、凸面はその上部と横部に指押さえ痕跡が残る。欠損ではなく、隅切瓦として利用した可能性もある。739は凸面に縱方向の縄目痕跡を明瞭に残す。740は轆羽口。溶融痕跡を残さない。741は椀形銀治溝。742～745は石器。742は楔形石器。上・下部とも敲打により潰す。743・744は石庖丁。いずれも側縁部に抉りを残すが大半は欠損する。745は打製石斧。両側縁は敲打痕が残る。746は鑿。銀治関連遺物とし



第131図 SR01(D)出土遺物(1/4)

て注目される。東側の流路から出土した遺物は一部弥生土器を含むが、概ね10~13世紀代の土器を多く含む。

747~765は上層部分から出土した遺物である。747~750は弥生土器。747・748は広口壺。太く短めの頸部で口縁部は大きく開く。747の頸部は斜め上方に、748はほぼ直立する。747は口縁端部に鋸齒文を施す。749は頸部と体部の境に2段の押圧突起貼り付け、口縁端部に刻み目を持つ。弥生時代中期後半。750は鉢。751~757は土師器。751は土師器杯。底部は糸切りである。13世紀前半頃。752は高台付杯。摩滅が著しい。口縁端部は外反し、高台は底部と体部の境付近に付く。753~755は壺。753・755は口縁端部を上方へ引き上げ、体部外面を縱ハケ、口縁部内面を横ハケで調整する。754は口縁端部を丸くし、体部外面を縱ハケ、内面は横向方向の板ナデをする。756は羽釜A。口縁部を内傾させ、端部にわずかに段を持つ。757は羽釜C。口縁端部・鋸端部とも先端を丸くする。758・759は須恵器。758は杯。外面には火薙がかかる。759は蓋。頂部はヘラ削りできれいにする。760は黒色土器A。内面体部に横向方向のヘラミガキをした後、底部には1方向のヘラミガキを施す。外面には高台部の直上に横向方向のヘラ削りがあり、疎らな横向方向のヘラミガキが施される。761は白磁碗。釉は外面玉縁部の下部にはかかるない。11世紀後半~12世紀前半。762は繡羽口。763・764は椀形鍛冶溝。小型のもので、763は上・下面に木炭痕を残す。ともに分析資料でその項を参照されたい。765は石窓丁。両側縁に浅い抉りを入れる。上部にはほとんど加工を施さず、刃部も簡単に作り出すだけである。

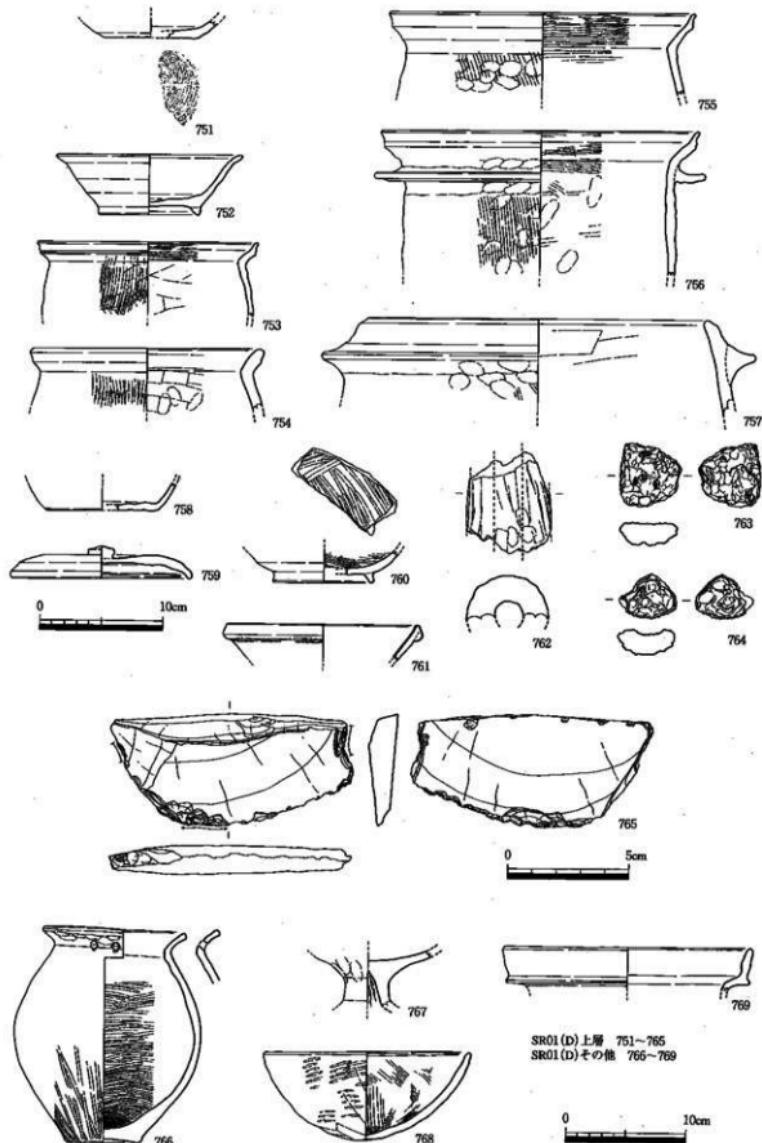
766~768は層位不明遺物である。すべて弥生土器。766は壺。内外面に丁寧にヘラミガキを施し、頸部に2孔1対の穿孔がある。767は高杯。768は椀形の鉢。外面にはタタキ、内面にはハケを施す。

769はSR01(D)の上部に堆積する包含層から出土した弥生土器。二重口縁壺。下川津B類。

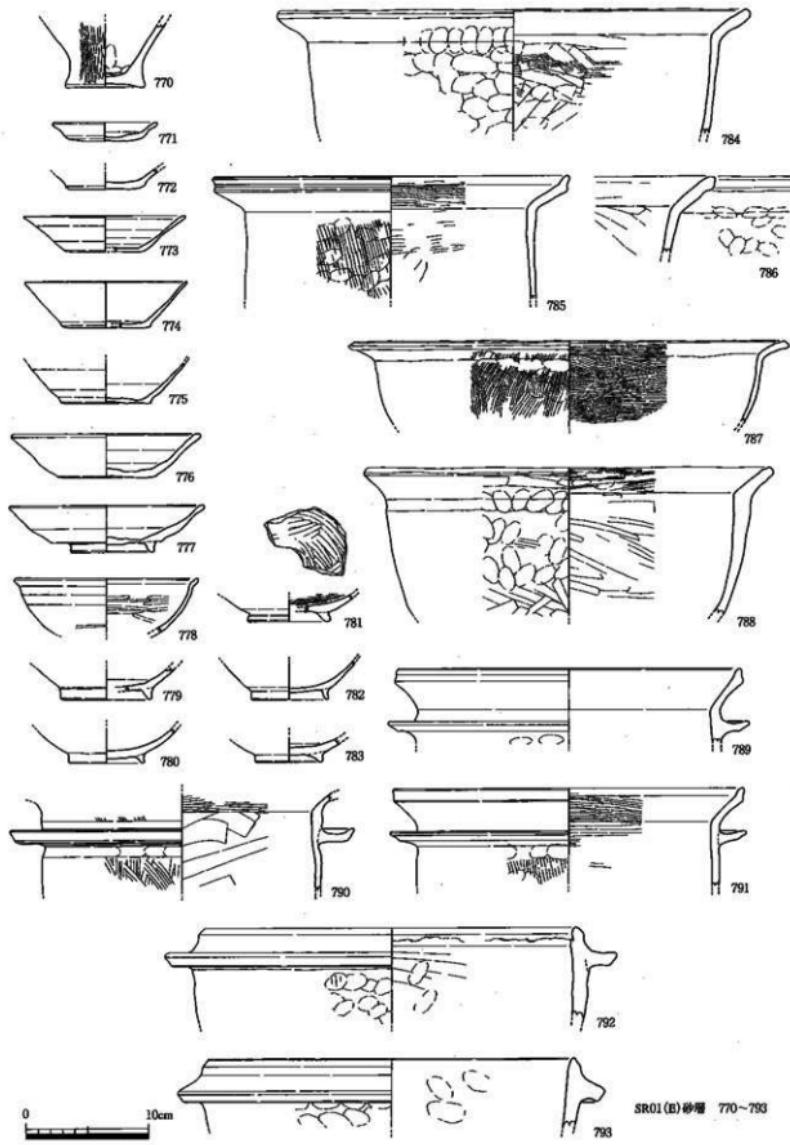
#### S R01 (E) (第116・133~136図、図版18・38・39)

1区②では東側流路しか認められない。幅2.5m、深さ1.1m、底のレベルは9.3mで、断面形は緩めの逆台形、埋土は砾を中心としたものからさらに下部では砂層と砾のラミナ状堆積となる。遺物は10~13世紀の遺物がほとんどである。

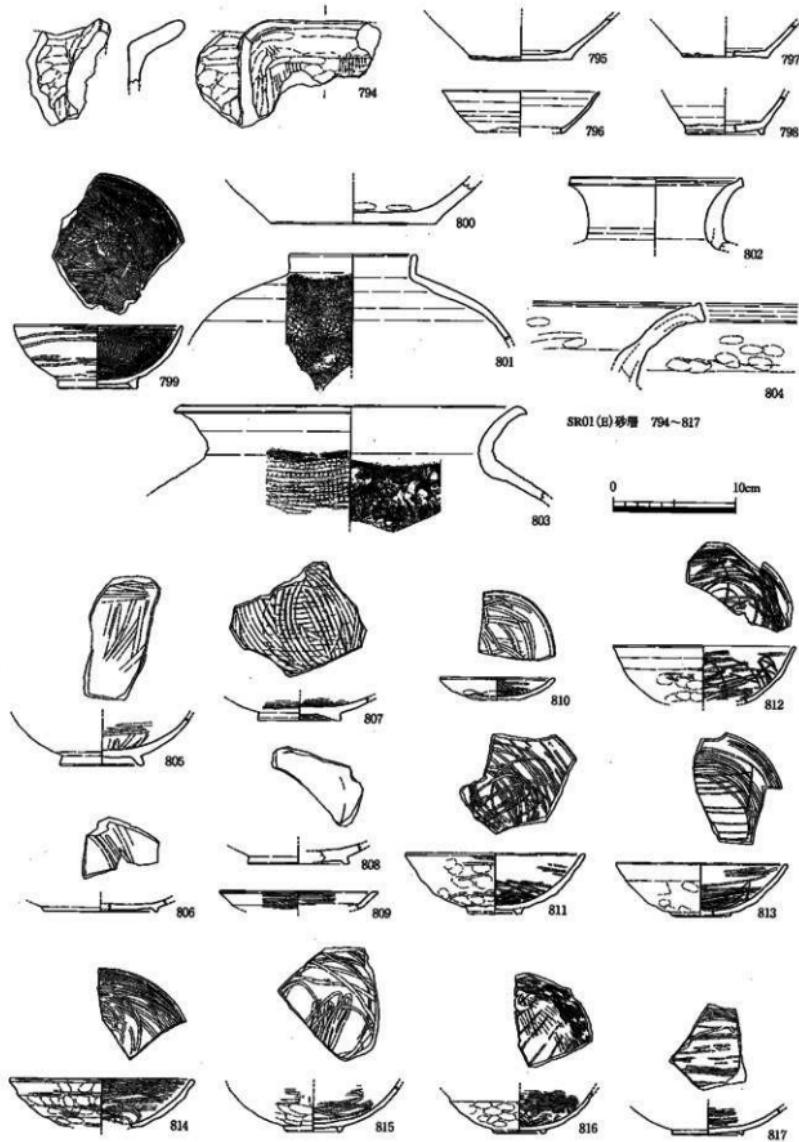
770~834はSR01(E)から出土した遺物である。770は弥生土器壺底部。しっかりした平底で外面は丁寧に磨く。弥生時代中期後半。771~794は土師器。771は小壺。772~775は回転台土師器。底部はいずれもヘラ切りで、775は反時計回りのヘラ切り痕跡が残る。10世紀前半頃。776は杯Dで全体に歪みがある。反時計回りのヘラ切り痕跡が残る。777~783は椀。777は杯の底部に高台を貼り付けたような器形である。778・780は吉備系土師器椀。778は口縁端部を外反させ、外面をヘラミガキする。12世紀代。779・782は杯に高台を付けた器形で、体部と底部の境に高台が付く。781は内面にヘラミガキを



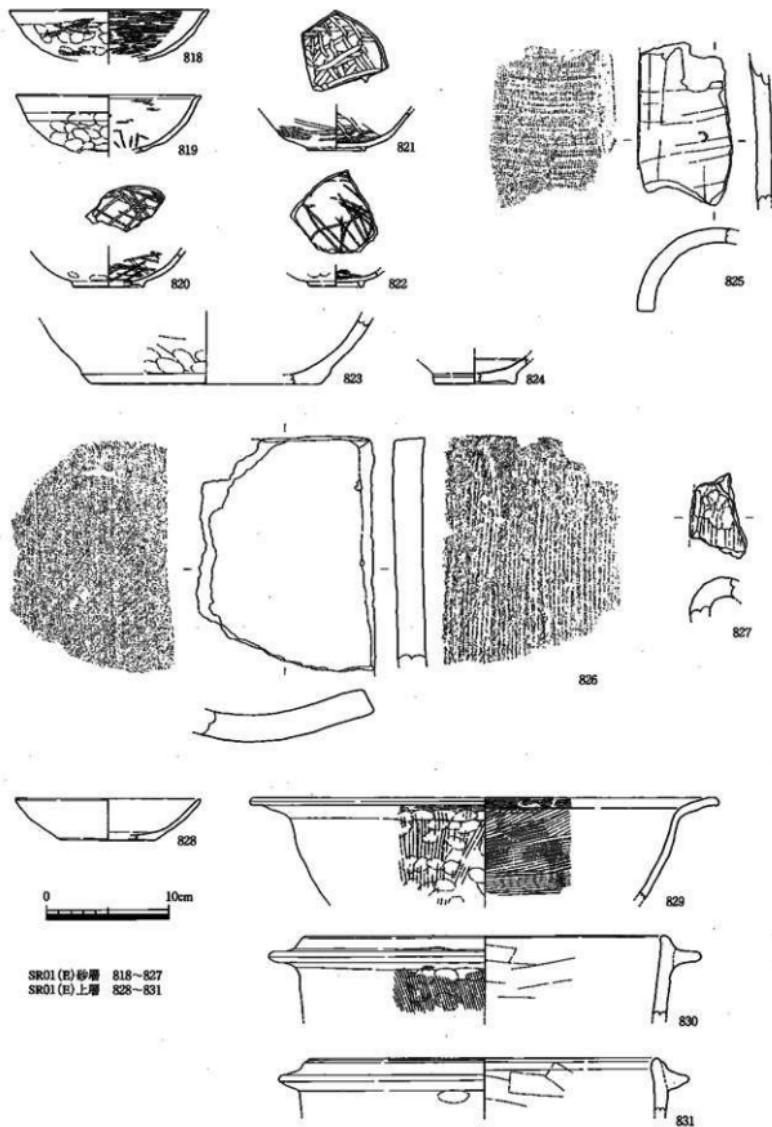
第132図 S R01(D)出土遺物(16)(1/4、1/2)



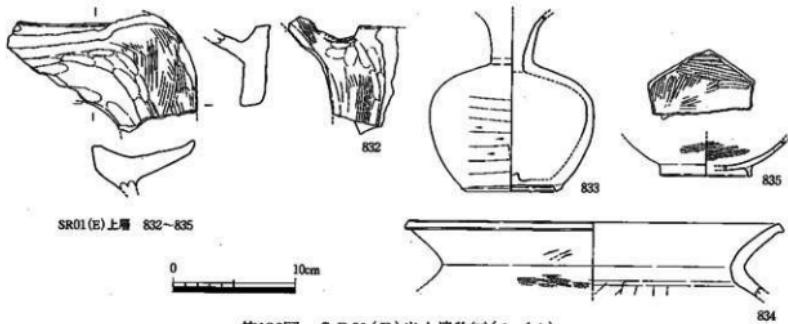
第133図 SR01(E)出土遺物(7)(1/4)



第134図 S R01(E)出土遺物(4)(1 / 4)



第135圖 S R01(E)出土遺物(1 / 4)



第136図 S R01(E)出土遺物20(1/4)

施し、高台直上付近にヘラ削りを施す。12世紀後半。784～786・788は壺。784・788は壺E。784は外面の口縁部と体部の境付近に煤が付着する。785は壺D。体部外面に煤が付着する。786は口縁端部が玉縁状になる。787は鍋。外面は継ハケ、内面口縁部は横方向の粗いハケ、体部は細かいハケを施す。789～791は羽釜A。いずれも鍋端部は上方へ引き上げて細くし、口縁端部もいずれも上方へ細く引き上げられると考えられる。790・791は体部外面に継方向のハケ、内面には横方向のハケで調整する。792・793は羽釜C。いずれも口縁端部は細く尖らせ、鍋端部は四角気味にする。792は口縁部内側に粘土のしづわが残る。794は壺。鍋の取り付きは上部から横部へ直角に取り付き、受け部は鍋部からの立ち上がりがない。全体に太く粗いハケが器面に残る。795～804は須恵器。795～797は杯A。いずれも火拂が残り、796には口縁端部に重ね焼き痕跡が残る。9世紀後半～10世紀前半。798は高台付杯。底部と体部の境に小振りの高台が付く。部分的に土師器に似た焼成状況を示す。799は碗。西村産。内面は横方向のハケで調整し、外面には疎らなヘラミガキを施す。見込み部分には直径約6cmの白い部分があり、重ね焼き痕跡と考えられる。12世紀後半。800は底部。801・802は壺。801は直立する頸部を持ち、頸部内外面から一部体部外面までゴマ状の降灰が及ぶ。体部上半部には左上がりの格子タタキ痕がある。10世紀前半。802は短い頸部で口縁端部はわずかに上方へ引き出される。頸部外面下半には砂が溶着している。内面には自然釉がかかる。803・804は壺。803は口縁端部が外反する。体部には横方向の格子タタキが残り、頸部には斜め方向のタタキが部分的にナデ消されずに残る。格子状タタキは継方向の刻みが横方向の刻みを切っており、元は平行タタキであったものが、使い込んで木目が浮き出ることにより格子状のタタキになったと考えられる。804は体部へ取り付く部分できれいに剥離し、断面から粘土を重ねて頸部を作った様子が観察できる。805・806は黒色土器A。805は内面にヘラミガキが観察できるが、外面調整は摩滅のため不明。806は高台径がやや広めで高台は断面3角形を呈し、形態的には楠葉産のものと類似するが、楠葉産とするには胎土に違和感があり、在地産とする方が妥当と思われる。807～809は縁釉陶器。807・808は高台は削り出しで京都産。807は内外面ともヘラミガキした後全面に施釉する。見込み部分には直径約6.5cm程度の円形の重ね焼き痕跡が残る。土師質の焼成である。808は釉が禿げ上がって緑色を呈しておらず、透明の釉の痕跡が残るだけである。内面のみ施釉し、外面は施釉しない。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。須恵質の焼成である。809は皿。須恵質の焼成で、内外面ともヘラミガキの後施釉する。810～822は瓦器。810は小皿。外面底部付近には粘土の継ぎ目の痕跡が残る。内

外面とも底部から体部下半にかけてはきれいに焼されず、白っぽい。直接重ねて焼成したと思われる。811～822は碗。体部外面に指頭痕を残し、811・812・814・815・818・821には粗いヘラミガキが残る。底部内面には細いヘラミガキで1方向に施すもの（813・816・819）、格子状に施すもの（820）、体部と同じ太さで円弧状に施すもの（811・812・814・815）等がある。817・818・820～822は完全に焼されずに白く残っている部分が多く、特に、818・820・822は焼されている場所が全然残っていない。瓦器の年代は概ね12世紀後半と考えられる。823は須恵器鉢底部。焼成は瓦質。全体に剥離が進む。824は白磁碗底部。見込みに1条の沈線を施す。施釉は残存部分では内面のみである。12世紀代。825は丸瓦。凸面は板ナデ痕跡が残り、凹面の布目ははっきりしている。826は平瓦。凹面には布目痕の下部に斜め方向の糸切り痕が残る。凸面には縦方向の縄目痕が残る。827は輪羽口。先端部は溶融し、その下部は全体に灰色に変色する。ここから出土した遺物は概ね10世紀前半後のものと12世紀代のものがみられるようである。

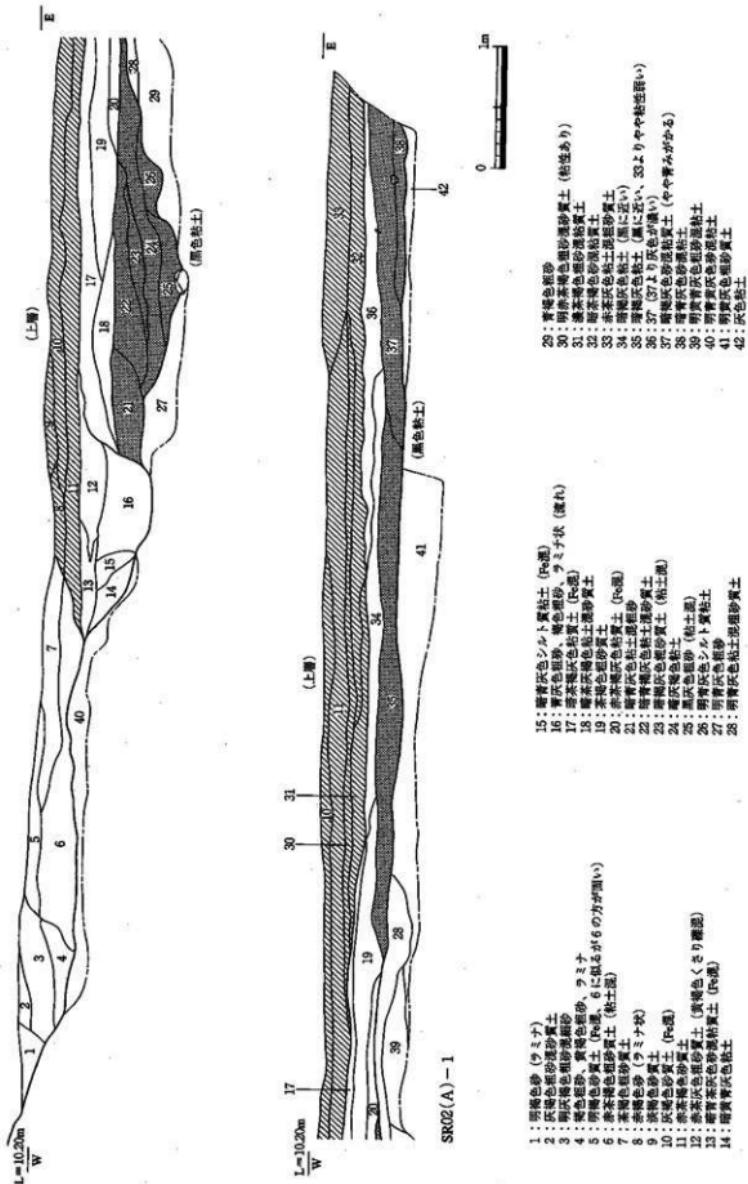
828～834は上層から出土した遺物である。828～832は土師器。828は土師器杯D。829は鍋。外面には縱方向のハケ、内面には横方向のハケがみられる。830・831は羽釜C。口縁端部・鋸端部とも丸くする。832は甌。受け口端部、焼き口端部、鋸端部とも四角く納める。外面は粗いハケ、内面は板ナデをする。833・834は須恵器。833は壺L。丸みを持つ体部に細長い頸部が付く。高台はほとんど体部と一体化しており、体部下半はヘラ削りする。体部の張りの強い部分のやや上側に外面から粘土のしわがみえる。ここが体部と頸部の接合部と考えられる。834は甌。外面頸部下部から体部にかけて平行タクキ痕がある。頸部のタクキ痕は右上がり、体部のタクキ痕はやや左下がりで、頸部のものはほとんどナデ消されている。体部内面は板ナデする。10世紀代。835は黒色土器A。内面には4～5分割のヘラミガキを行う。外面にも摩滅がすすむものの、ヘラミガキは観察できる。上層から出土した土器も10世紀～12世紀のものである。

#### S R02（第137～140図、図版19）

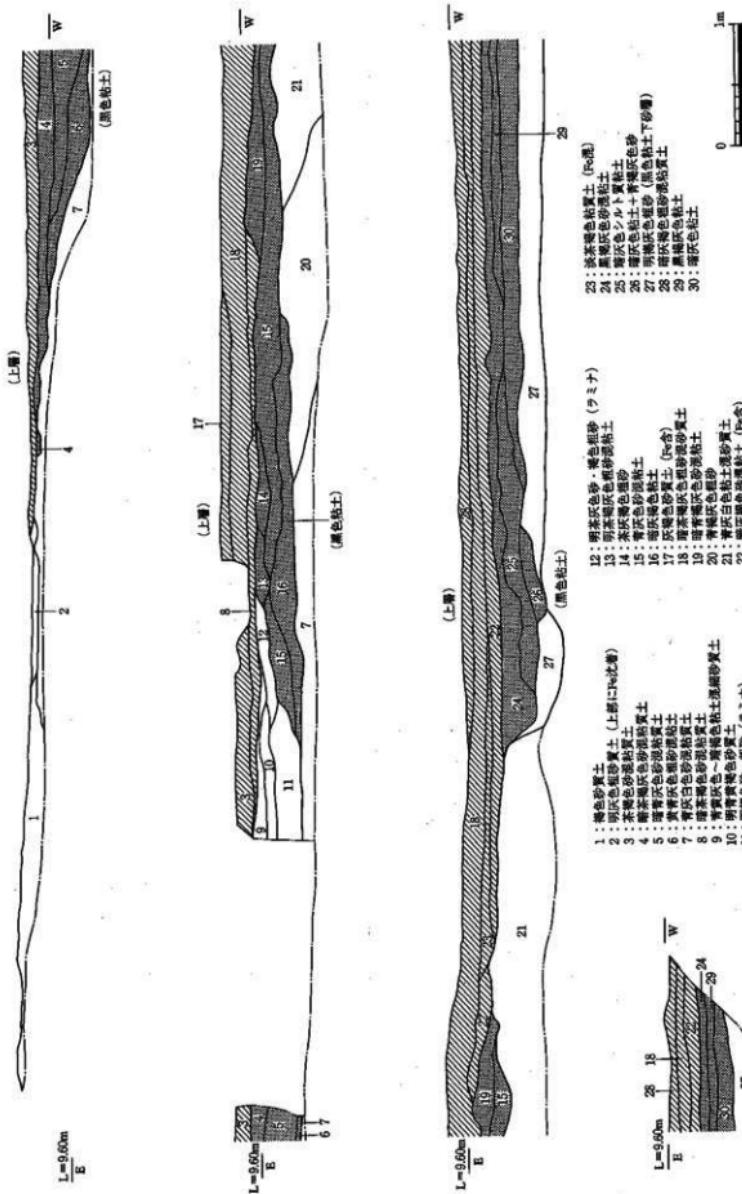
S R02は遺跡の北東側を限る湿地帯である。1区②西北隅から出現し、1区②△地・2区④・2区③・2区①・2区②から6区①へ続いていく。ここではS R02は2区②までしか掲載しておらず、6区①部分については位置的に重複するS R03の一部として報告した。流路の底のレベルは南東から北西へ向けて下がっているが、基本的には流れはほとんどなかったと考えられる。この湿地帯は2区①で一度上がっているが、同様の黒色粘土を基本とする層位は北側に隣接する川津一ノ又遺跡Ⅲ区・Ⅳ区でも検出されており、川津東山田遺跡Ⅰ区は川津一ノ又遺跡よりも標高が高いので、削平を受けた可能性もあり、この湿地帯は川津東山田遺跡一ノ又遺跡を限るものだったと考えられる。

遺物の取り上げは、S R01と同様、S R02も調査区ごとに層位を決めて層位ごとの取り上げに務めた。S R02はすべての調査区にわたって黒色粘土系の土層が堆積していたので、この層を基準として層位を決めていった。

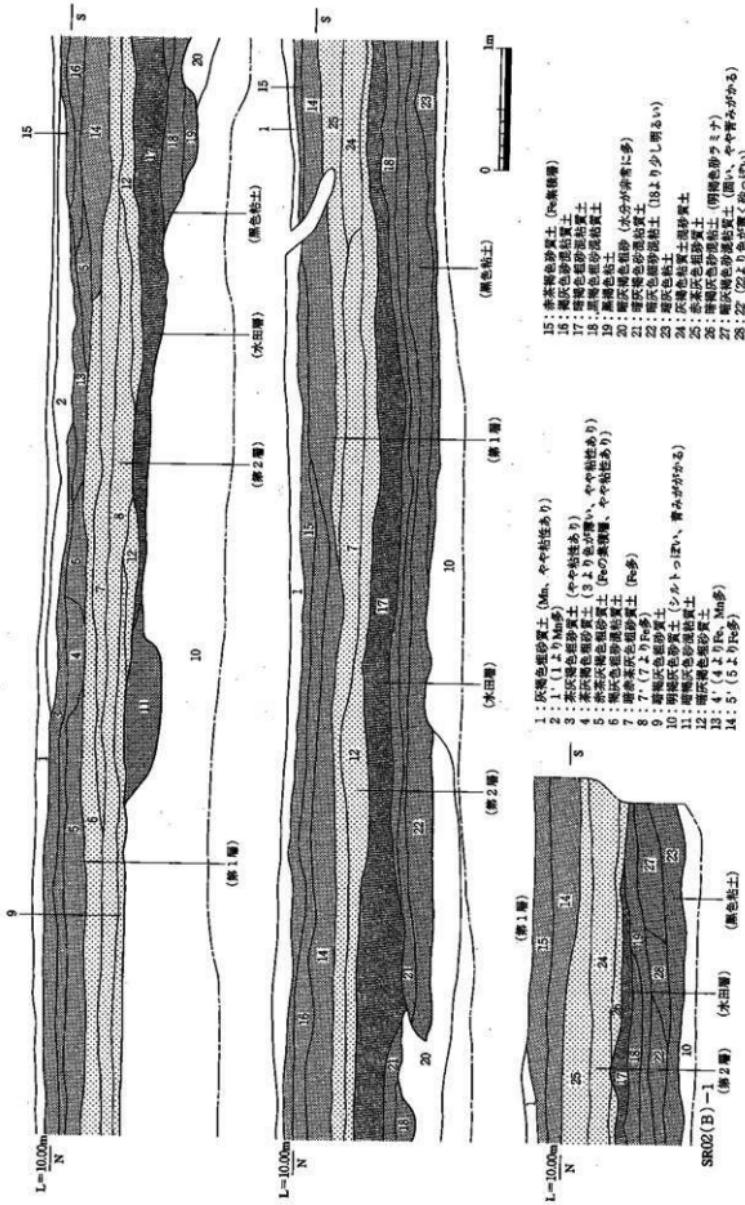
基本的な層序は、最上層に褐灰色系砂質土（厚さ25cm程度）、上層に灰褐色砂質土（35cm程度）、中層に黒色粘土層（厚さ50cm程度）が堆積する。その下層は、2区②部分では黒色粘土層の下部の青灰色砂層を中心とする層で弥生時代後期の遺物が数多く出土しており、この砂層はS R03の砂層へ続く。この層はS R02の北西部までは続かず、2区③・2区④・1区②△地ではみられない。黒色粘土層の下部には自然河川の堆積が2区②の東部から2区③～1区②△地へ向けて流れているが、この層は無遺物層で、川津一ノ又遺跡Ⅳ区の自然河川へつながると考えられる。土層の堆積は、黒色粘土層、包含層ともほぼ



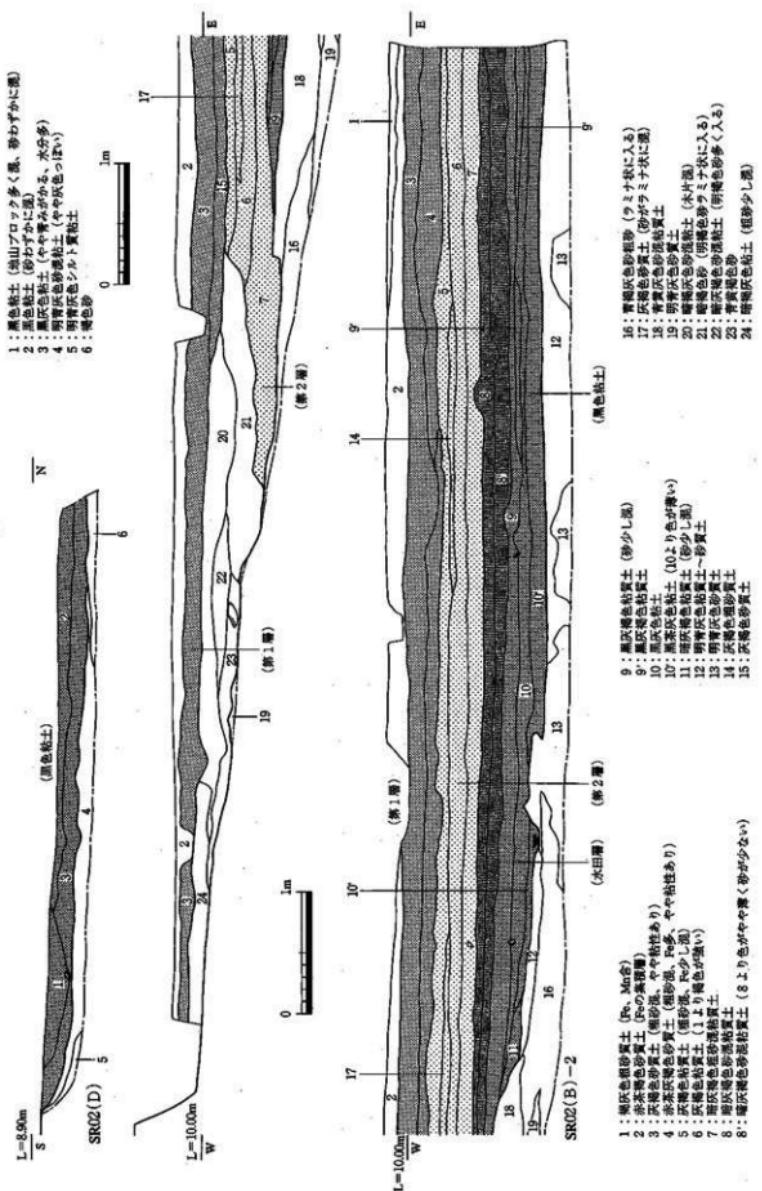
第137図 SR02(A)土壤圖(1)(1/40)



第138図 SR02(A)土層図(2)(1/40)



第139図 SR02(B)土層図(3)(1/40)



第140図 S RC02(B・D) 土層図(4)(1/40)

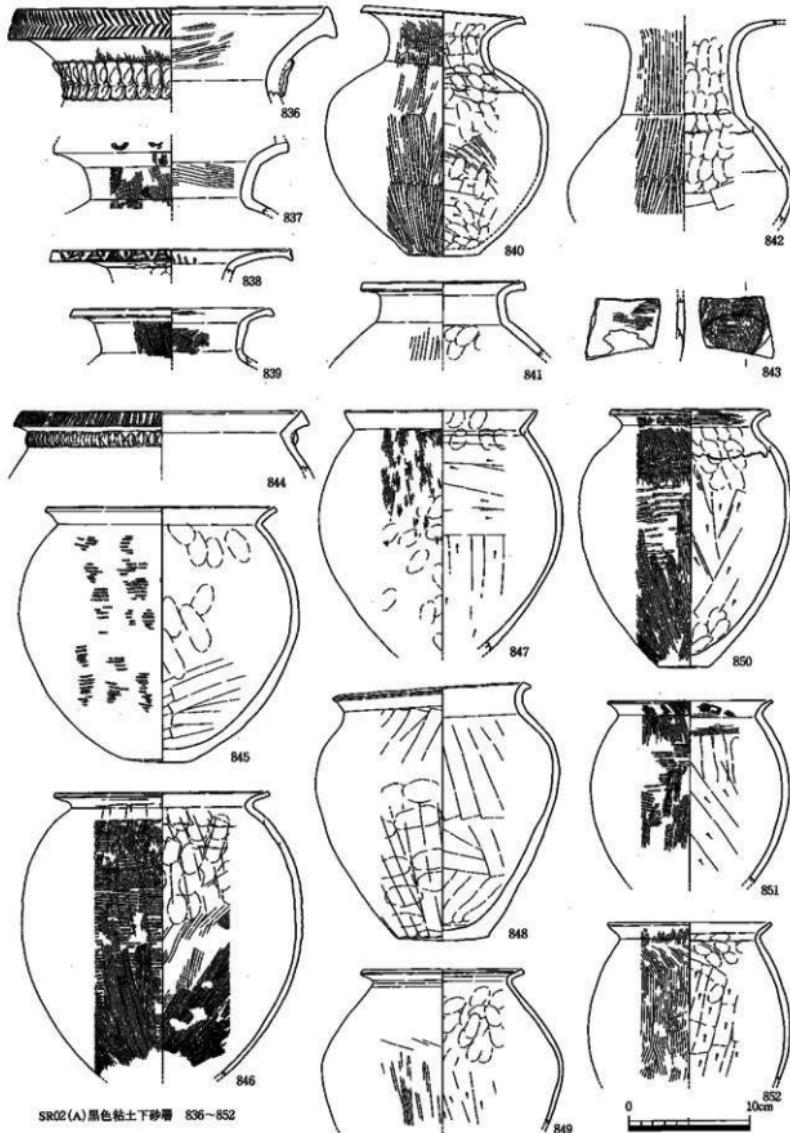
全体に水平堆積である。また、黒色粘土層や包含層を切って砂層を中心とする流路が流れる。

なお、遺物の取り上げは現場では概ね黒色粘土層をキーとして、上面の包含層、下部の砂層を分けて取り上げたが、整理作業を進めるうちに、黒色粘土層と上部の包含層の間に奈良時代の包含層と考えられる暗灰色系の土層があることが判明した。この層は2区④部分では黒色粘土層の上面に堆積し、なおかつ上部包含層がその上面に堆積するSD2401に切られる層であり、2区③部分では後述するように水田層が検出された層である。この層は2区④では厚さ約20cm、2区③でも同様に厚さ20cmで堆積する。2区②ではこの層は明確には認められない。2区③部分でプラント・オバールの分析を行った結果、最上層・上層・暗灰色粘土層の上層で水田跡があったことがわかった。このことは川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区の結果とも概ね整合するものとなった。

S R02 (A) 黒色粘土下砂層 (第137・138・141・142図、図版19・40・41)

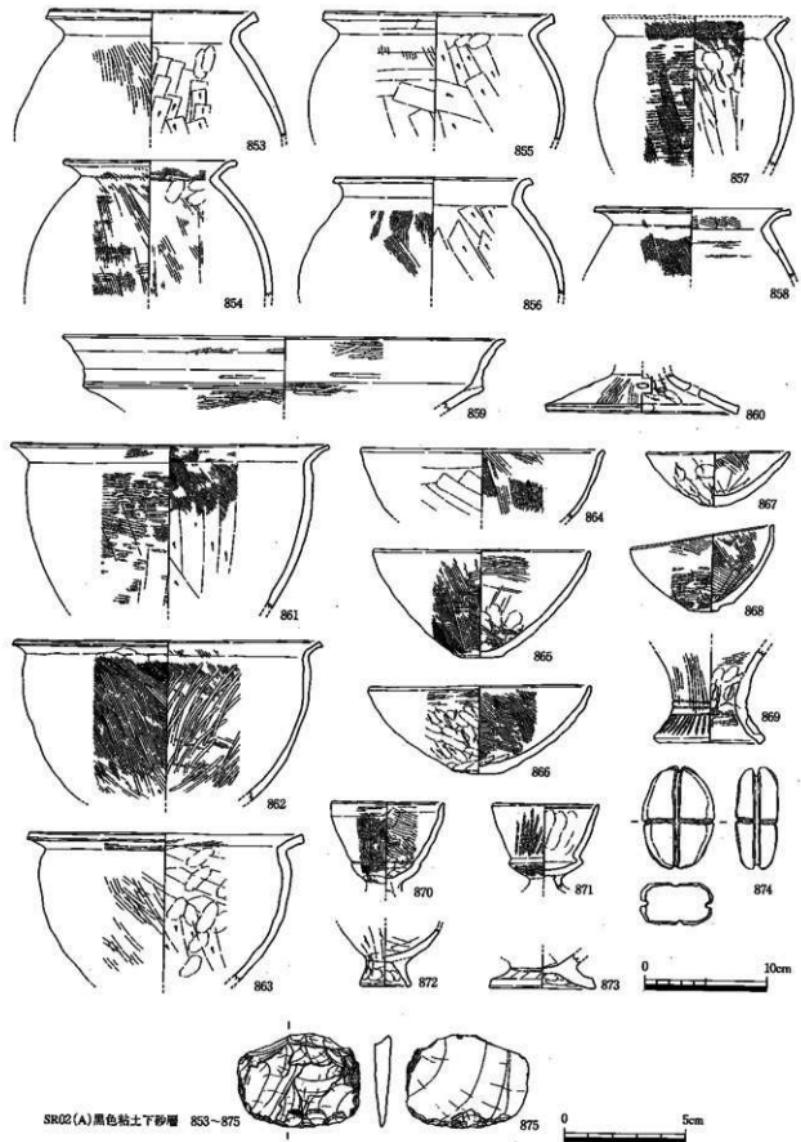
A部分(2区②)で検出した黒色粘土の下部に堆積する明青灰色砂層である。S R03から続く層位で、場所によって別々に報告しているが、同じ層位と考えられる。A部分を南東から北西方向へ抜け、C部分(2区②)の北東部をかすめながら北へ向かうと考えられる。幅は6m、深さ30~40cm、埋土は明青灰色~青褐色粗砂である。

836~843は壺。837~843以外は広口壺。836は口縁端部に綾杉状の刻み目文、頸部には2段の押圧が施された突帯文が付く。弥生時代中期後半。837は二重口縁壺。外面は縦方向のハケ、頸部内面は横方向のハケを施す。二重口縁の部分はきれいに剥離している。二重口縁部にはヘラ書きで鋸歯文または波状文状の文様を施す。胎土中に雲母が少し含まれる。838は口縁部が大きく開き、口縁端部にはヘラで波状文、その上部からさらに幾何学文様を施す。839~841は短めの頸部に大きく開く短めの口縁部が付く。口縁端部には面を持つ。839~841はほぼ直立する太めの頸部で、口縁部と頸部の境は稜線を持つ。840は完形に近い。頸部は丸みを持って立ち上がる。頸部は縦方向のハケ、体部は丁寧に磨く。842は長めの頸部を持ち、外面は丁寧に磨く。843は壺体部片。円弧状のヘラ書きがある。844~858は壺。844は口縁端部に縦方向の刻み目を持ち、頸部には押圧突帯を貼る。弥生時代中期後半。845~858は、調整は外面はタタキの後ハケ、内面は体部は主にヘラ削りで、体部上部や頸部にハケを併用するものや体部下半にハケを施すもの、(846・850・851・854・857・858)、又は外面にハケ調整、内面には体部上部にハケをし、中位から下部をヘラ削りするもの(847・852・853・855・856)が大半を占める。850は平底を持つ。845はほぼ完形であるが、摩滅が進む。丸い体部でわずかに平底状を呈し、体部はタタキ調整する。848はほぼ完形。やや摩滅する。内外面とも板ナデで仕上げる。頸部は短く直立気味に立ち上がり、口縁端部には面を持つ。底部は平底である。849は下川津B類。859・860は高壺。859は口縁部の小片。内外面とも横方向のヘラミガキをし、口縁端部は面を持つ。口縁部と体部の境には2条の沈線が巡る。この部分には剥離痕跡が見える。860は脚部。筒部はないが、筒部から大きく脚部へ広がる器形と考えられる。2孔穿孔が認められ、残存状況から4孔がほぼ均等に穿孔されたと考えられる。861~871は鉢。861~863は口縁部が屈曲する器形。口径は22~26cm程度、調整は外面は叩くもの(861)、ハケを施すもの(863)、ハケの後底部を削るもの(863)、内面は上半部をハケまたは板ナデし、下半部を削るもの(861・863)、ハケの後ヘラミガキするもの(862)がある。862のタイプには内面に朱が付着するものがある。864~868は楕円形の器形のもの。864~866は口径が17.5~20cm程度のもの。内面はいずれも横~斜め方向のハケ、外面は板ナデするもの(864)、タタキの後ハケをするもの(865)、あまり調整を加えないもの(866)があり、866には顯著に、また865にもわずかにクラックが残る。867・868は口径11.5cm前



SR02(A) 黒色粘土下砂層 836~852

第141図 S R02(A)出土遺物(1)(1 / 4)



第142図 SR02(A)出土遺物(2)(1/4、1/2)

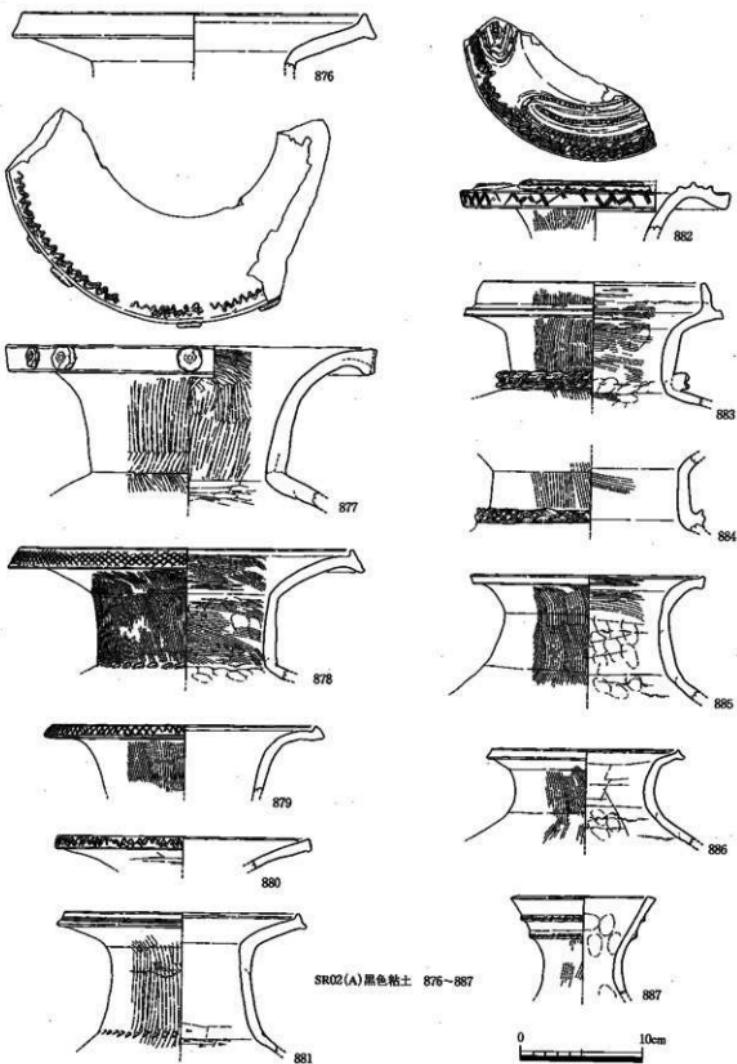
後のもの。いずれも内面は右下から左上の斜め方向にハケを施し、平滑にする。867は浅めで歪みがある。内面はハケ、外面は成形の痕跡があまりなく、クラックが残る。868はやや深め。外面は下部にタタキ痕を顕著に残し、上部にハケを施す。クラックがわずかに観察できる。外面底部はヘラ削りをしているが、非常に粗く周縁部を削っているだけで中心部分が盛り上がり、平らになっていない。869は台付鉢。底部はきれいに剥離して、やけムラ以外の痕跡を残さない。体部と脚部の境に3条の沈線を施し、脚部には内面まで達しない縱方向の刻み目を入れる。弥生時代中期後半。870・871は小型丸底壺に脚が付く器形。870はやや丸みを帯びた底部を持ち、底部と体部の境にわずかに段を付ける。871は下川津B類。外面をヘラミガキし、体部最大径部分に稜を持つ。872は製塙土器か。体部は開き気味で丸みを持ち、内外面とも調整痕をあまり残さない。873は台付鉢脚部。874は土錘。楕円形で扁平な形状を示し、側縁に1重、表裏面には十字に溝を入れる。側縁の溝の方が深い。875はスクレイパー。サヌカイト製。

黒色粘土下砂層の遺物の時期は、一部に弥生時代中期後半の資料が混じるもの、概ね弥生時代後期後半V-3~終末期2くらいの時期幅があると考えられる。

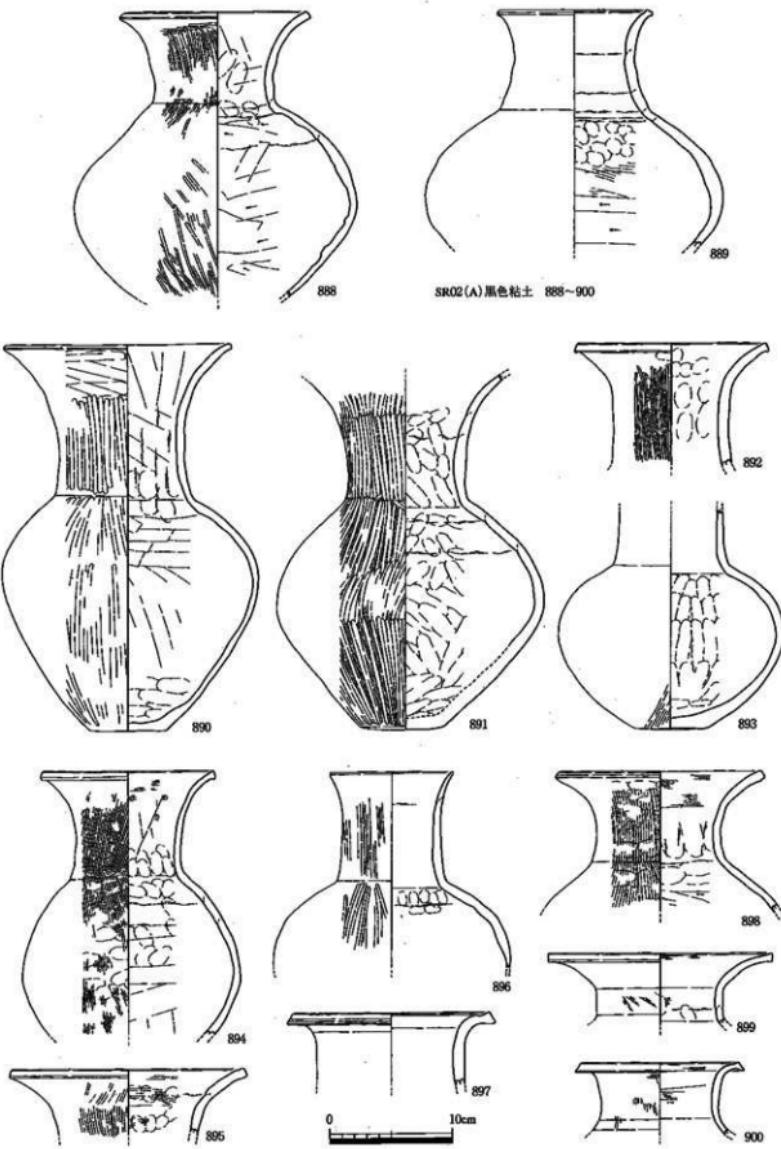
#### S R02 (A) 黒色粘土 (第137・138・143~153図、図版19・42~51・82)

A部分(2区②)のほぼ全面で検出した層である。概ね厚さ30cm程度の水平堆積である。

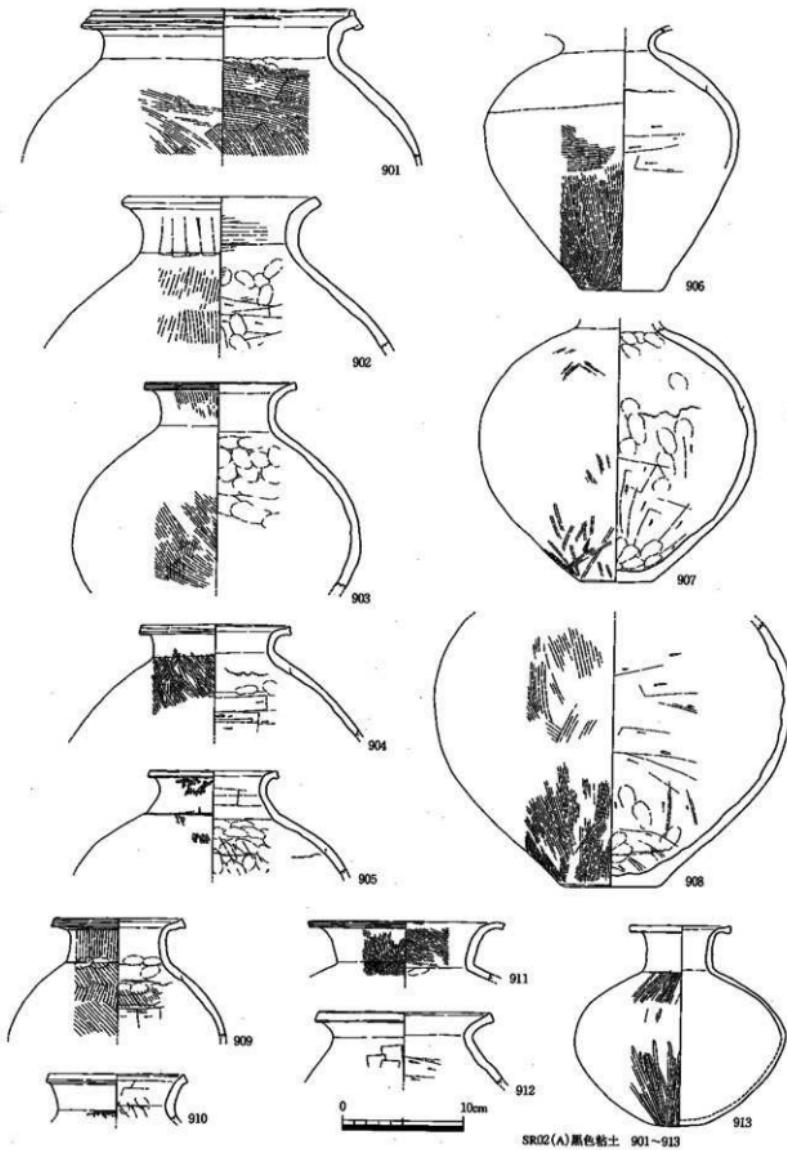
876~918は壺。877~881・899は直立または斜め方向に延びる頸部にやや長めの口縁部が大きく開くもの。口縁端部に面を持たせ、装飾を加えるものが多い。876は下川津B類。877は口縁端部に2個一単位の円形浮文を貼り付け、口縁部内面には波状文を描く。内外面とも丁寧にヘラミガキする。口縁端部下側を粘土を貼り付けて拡張させる。878・879は口縁端部を上部に拡張し、口縁端部に斜格子文を描く。878は頸部と体部の境に刺突文を入れる。881は頸部はやや長めで内傾気味に立ち上がり、体部と頸部の境に刺突文を入れる。882は内面加飾壺。口縁部内面に波状文、その内側に刻み目を付ける突帯を楕円形に巡らし、その内側にも刻み目を持つ突帯を貼り付けたものが少なくとも2単位ある。口縁端部には斜格子文を付ける。弥生時代中期中葉。883は二重口縁壺。頸部と体部の境に突帯を巡らせ、突帯にはまず斜め方向に刻み目を入れ、その後横方向に沈線のように凹ませる。884は頸部と体部の境に突帯を巡らし、そこに斜格子に刻みを深く付けている。口縁部は二重口縁壺になる可能性がある。885・886・897・900はやや長めの頸部に短めの口縁が急に大きく開くもの。口縁端部には面を持たせる。885・886・900はハケを施す。887は口縁端部は平らにし、頸部の上方に2条の刻み目突帯を貼り付ける。弥生時代中期後半。888~896・898は長めのほぼ直立する頸部に口縁部が緩やかに開くもの。外面調整は頸部から体部にかけてハケで調整するもの(823~825・828)とその後にヘラミガキを加えるもの(888・890・891・896)がある。底部は平底で、体部は丸いもの(893・894)と中位が張り気味のもの(888~891)がある。内面は、頸部から体部上半にかけて指押さえの痕跡を残し、下半はヘラ削りするものが多い。901・902・904~906・912・914は短めの頸部から口縁が開く。906・912は頸部がほとんどない。907・908は体部から底部。球形に近い体部に平底の底部が付く。外面はハケを施し、907には下部にヘラミガキも見られる。内面はヘラ削りする。903・909・913はやや長めの頸部に急激に屈曲する口縁部を持つ。やや小型品で口径は8~12cm前後である。913はほぼ完形で体部外面をヘラミガキする。体部下半部に直径7.5mm程度の焼成後の穿孔が1個所みられる。下川津B類。903・909は口縁端部に2条の沈線を巡らせ、外面はハケで仕上げる。910は頸部がまっすぐに伸びるもの。頸部はほぼ直立し、口縁部は開かない。915・916は小型のもの。915は丸い体部を持ち、頸部はほとんどなく口縁部に至ると思われる。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキし、最後に中位に横方向にヘラミガキする。916は体部中位



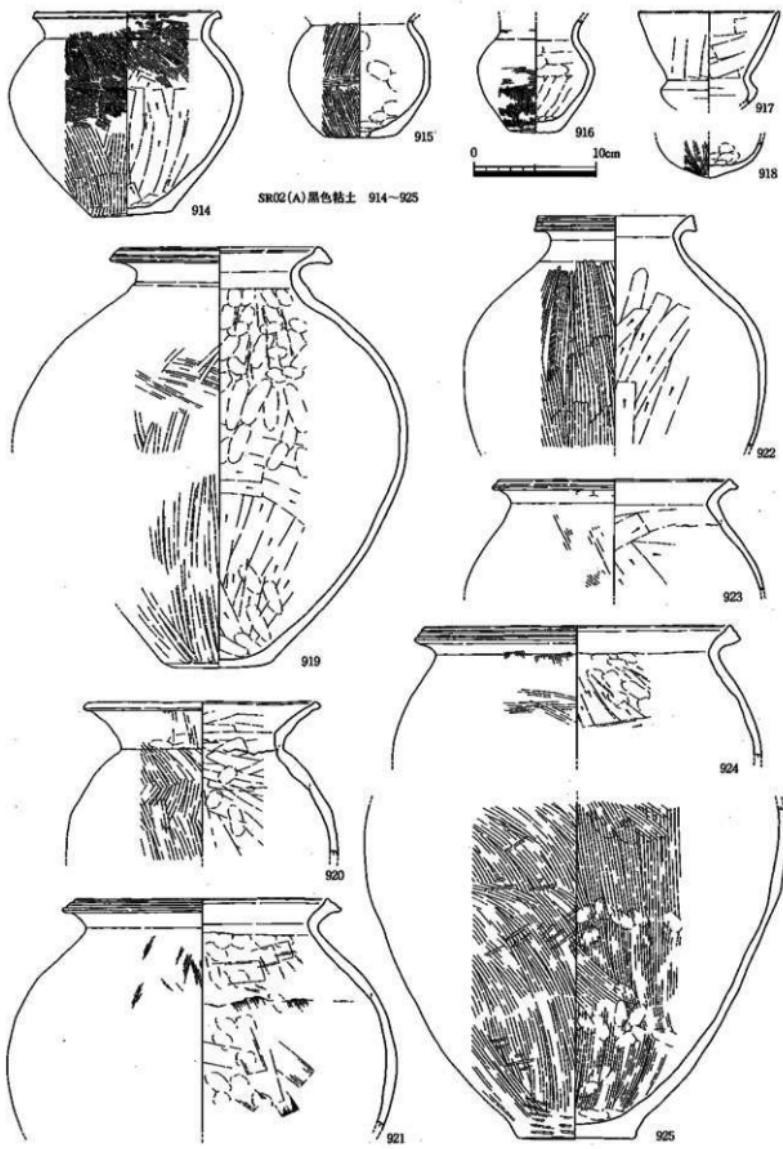
第143図 S R02(A)出土遺物(3)(1/4)



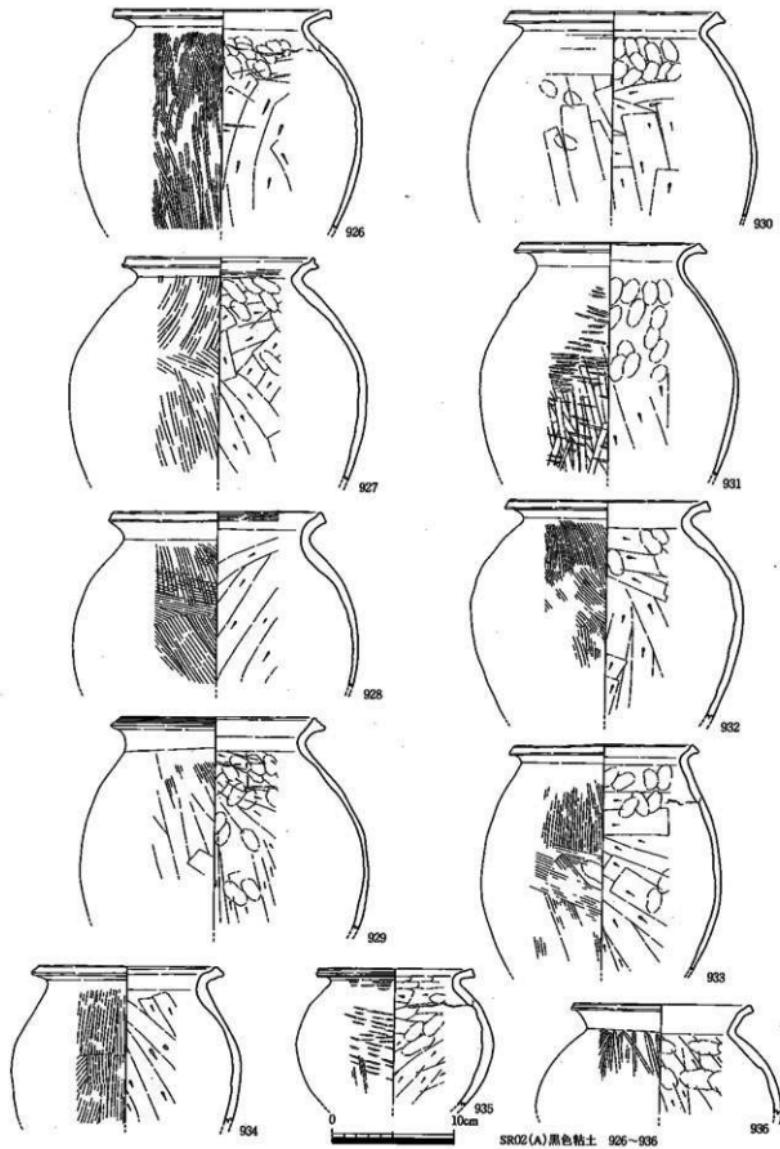
第144図 SR02(A)出土遺物(4)(1/4)



第145図 S R02(A)出土遺物(5)(1 / 4)



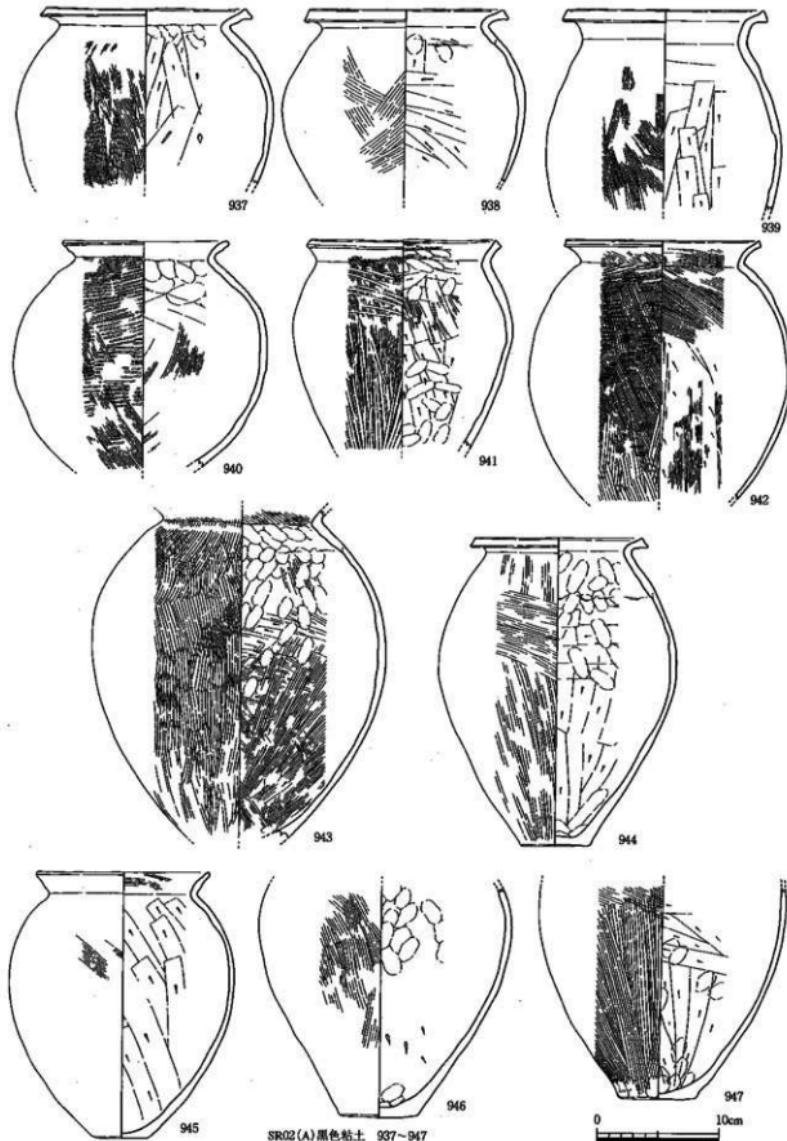
第146図 S R02(A)出土遺物(6)(1 / 4)



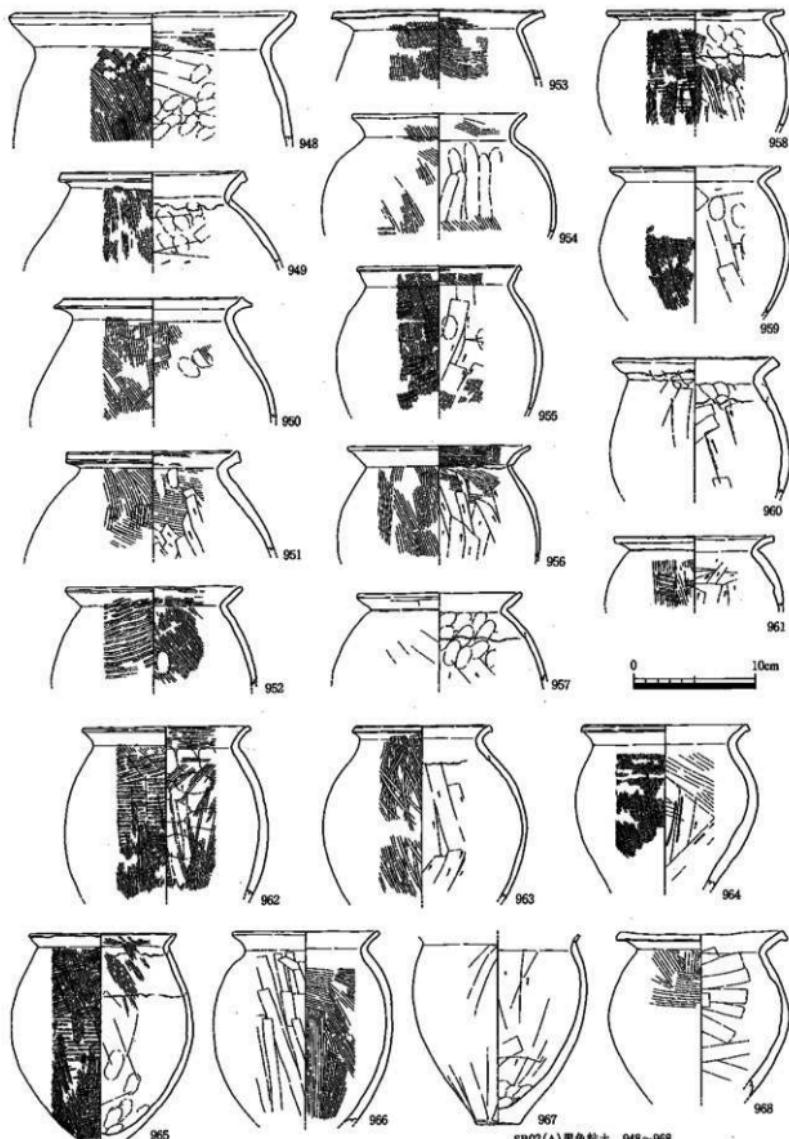
第147図 SR02(A)出土遺物(7)(1/4)

が張っており、頸部はやや伸びそうである。917は小型丸底壺。全体に調整痕は不明瞭である。底部の形骸化は進んでいない。

919～975は壺。919～924（920を除く）・929は口端部に凹線文を1～3条程度巡らせるものである。919・922は体部外面を丁寧にヘラミガキ、その他はハケを施す。内面は921がハケを施す他はヘラ削りする。925は体部から底部。しっかりした平底で、外側を叩いて成形した後、内外面ともハケを施す。926～951は一部を除き口径が14.5～17.5cm程度のものである。926・927・930・932は口径が15cm～17.5cm程度のもので、頸部が強めに屈曲し、端部に至る。端部には面を持つ。調整は外面はハケで（930は板ナデ）、内面はヘラ削りである。926は外面下半部にハケの後ヘラミガキする。944も類似する形態・調整方法を探るが、口径が小さい。928・931・933・934・939は頸部がやや間延びしたような器形で、928以外は体部もあり丸くならず、寸胴気味である。口径はだいたい14.3cm～16.7cmである。調整は外面をハケ、内面をヘラ削りするが、931はハケは丁寧には行われず、タタキ痕が明瞭に残る。935・937・938は頸部が強めに屈曲し、体部が球形を示す。口縁端部には面を持つ。937・938は体部外面をハケ、内面はヘラ削りし、935は外面にタタキ痕を明瞭に残す。935はやや小型。936・942・955は頸部をくの字に屈曲させ、口縁部はやや鈍角気味に付く。943も頸部の残り具合からこのような形態と思われる。外面はハケ、内面はヘラ削りし、942・943は内面をヘラ削りしたあと、ハケを施す。942はハケの下側にタタキ痕跡が観察でき、外面下半部には間隔の広いハケの原体を使っている。941は緩く屈曲する口縁部にあまり丸みを持たない体部を持つ。外面はハケの後体部上半を横方向の、下半を縦方向のヘラミガキをして、きれいにしている。946・947は底部。ともに平底で外面はハケ、内面はヘラ削りする。口径はだいたい15～17cm程度になると思われる。928・948はくの字に折れ曲がる頸部に長めの口縁部を持つ。948は古墳時代前期頃の紛れ込みか。949・951・963は頸部が丸みを持って屈曲し、口縁端部には面を持つ。丸みを持ちながら体部に至る。口径は950・952は14cm前後。963は11.1cmである。963は外面をハケの後ヘラミガキする。950はゆったりした頸部からなで肩状の体部を持つ。口縁端部には面を持つ。952・954～968は11.8～14cm程度のものである。952・955～959・962・965・966は概ねくの字に屈曲し、あまり鋭角的に付かない口縁部に丸みを持つ体部が付く。外面はタタキのみのもの（952）、タタキの後ハケを施すもの（955・958・962・965）、ハケのみが残るもの（956・959）、板ナデが残るもの（966）があり、内面はヘラ削りの後ハケを施すもの（955・956・962）、ハケのみのもの（952・966）、ヘラ削りのみのもの（959）がある。954は頸部にやや丸みを持たせながら口縁端部に至る。953はきつく頸部が曲がって、体部肩部が直線状に落ちるもの。弥生時代中期後半と思われる。960・964・968は口縁端部に面を持ち、体部中程がやや張り気味である。967はしっかりした底部で開き気味の体部を持つ。969・970は底部。971～973は口径が10.5cm程度でしっかりとした平底を持つ小型の壺である。外面はハケまたはタタキ痕を残し、内面は指ナデまたはヘラ削りである。974は口径8.8cmの小型の壺で、頸部の屈曲は緩い。975は頸部の屈曲は更に緩く、内面に粘土の雜ざ目の痕跡を明瞭に残す。976～994は高杯。976～982は杯部が残る。口縁端部は面を持つもの（976・978・979）、丸くぼてっとするもの（977）、丸く細いもの（980）、立ち上がりが長めのもの（982）がある。調整は980以外は全部杯部内面には底部に放射状のヘラミガキが見られる。杯部立ち上がり部には横方向にヘラミガキするもの（976～978）、縦方向にヘラミガキするもの（982）があり、外面は放射状にヘラミガキするもの（977～979・981・982）が大半を占め、その他ハケをするもの（976）もある。外面の立ち上がり部分には縦方向にヘラミガキをするもの（976・982）、横方向のヘラミガキをするもの（978）、連弧状のヘラミガキをするもの（977）がある。

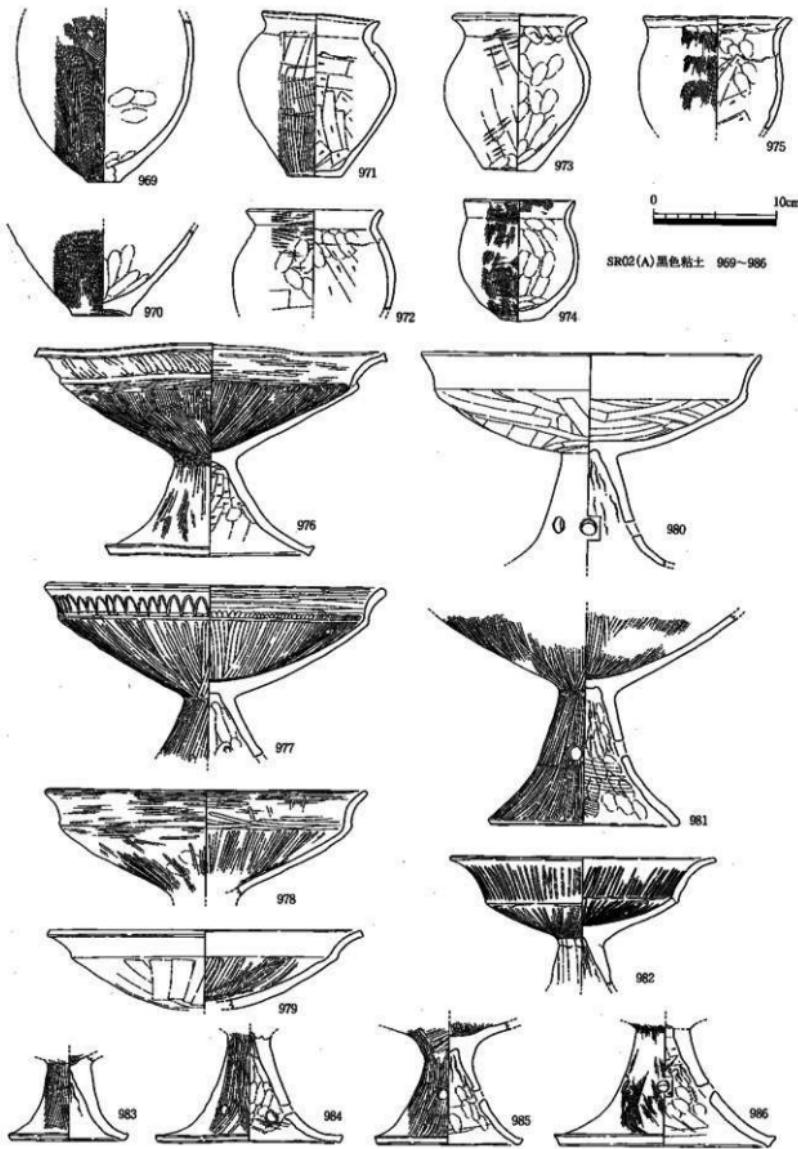


第148図 S R02(A)出土遺物(8)(1 / 4)

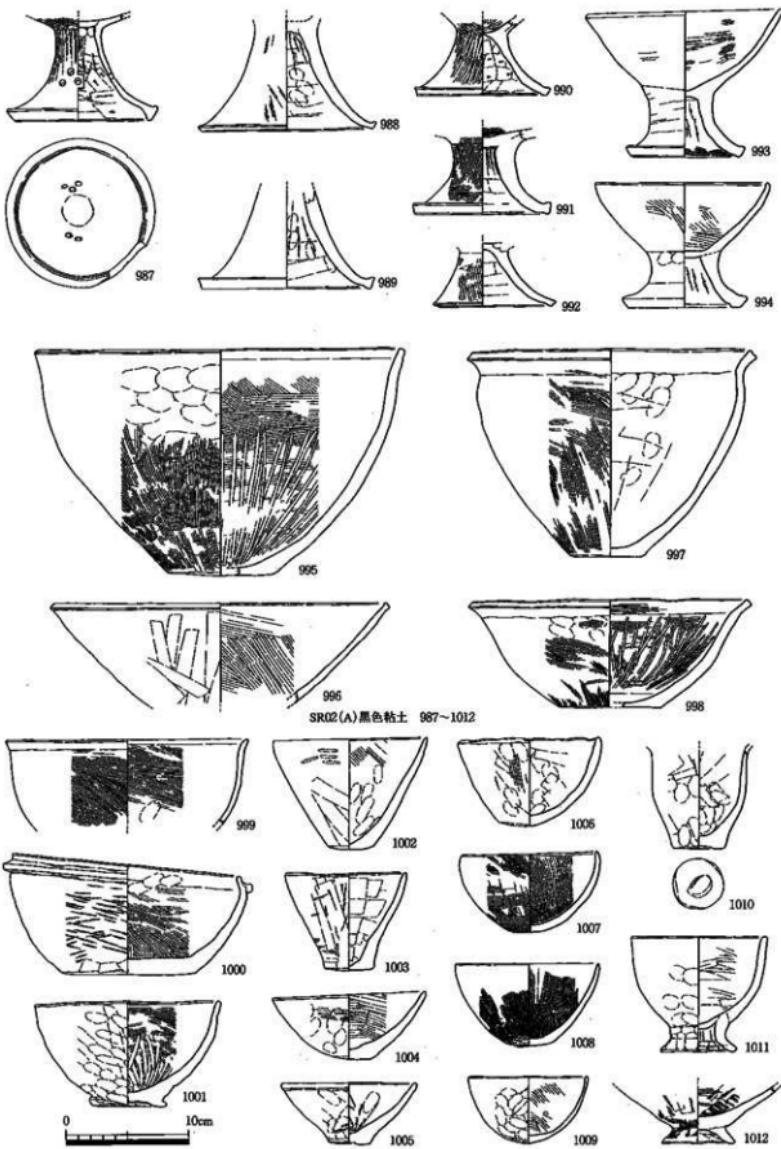


SR02(A) 黒色粘土 948~968

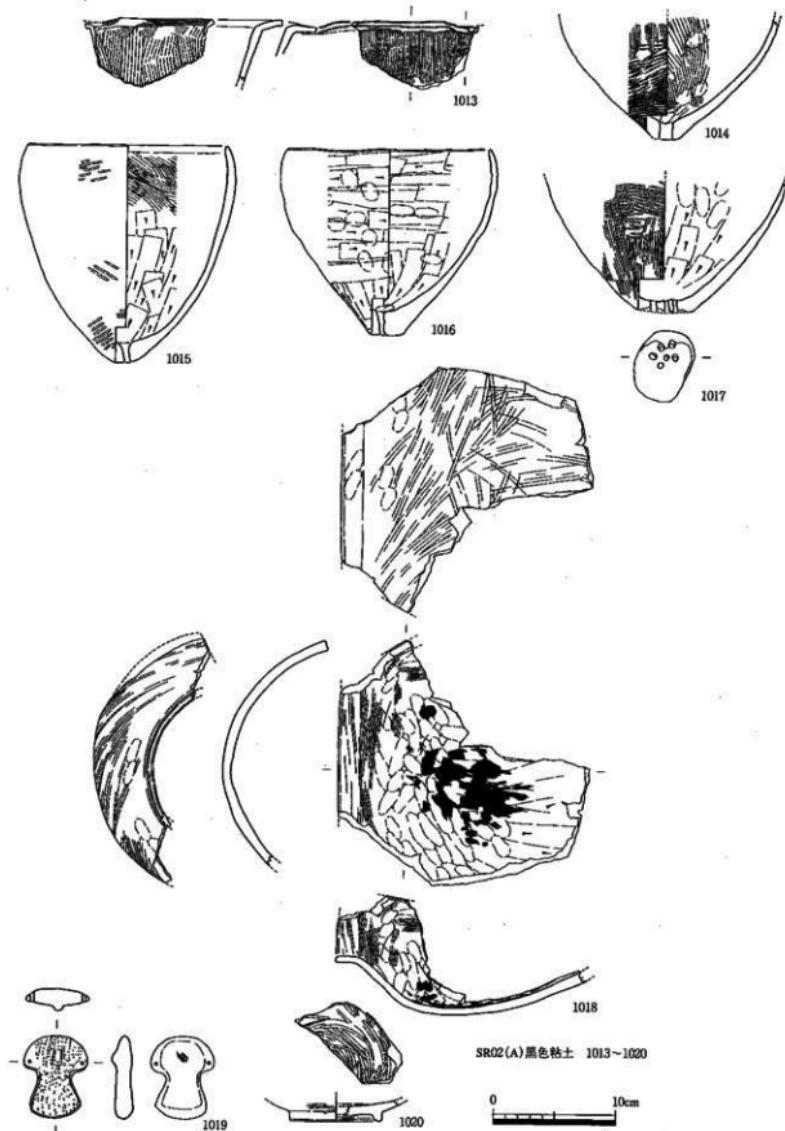
第149図 SR02(A)出土遺物(9)(1/4)



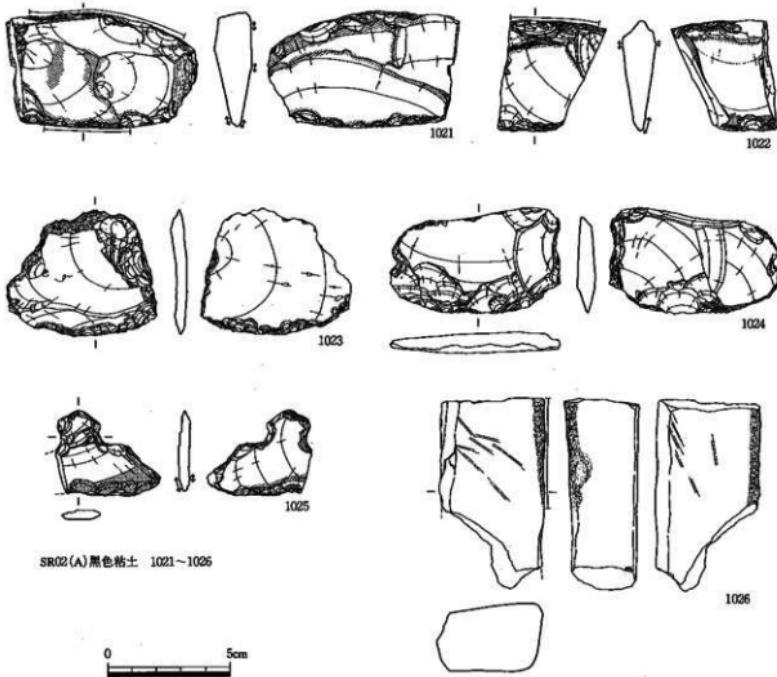
第150図 SR02(A)出土遺物10(1/4)



第151図 S R02(A)出土遺物(1)(1 / 4)

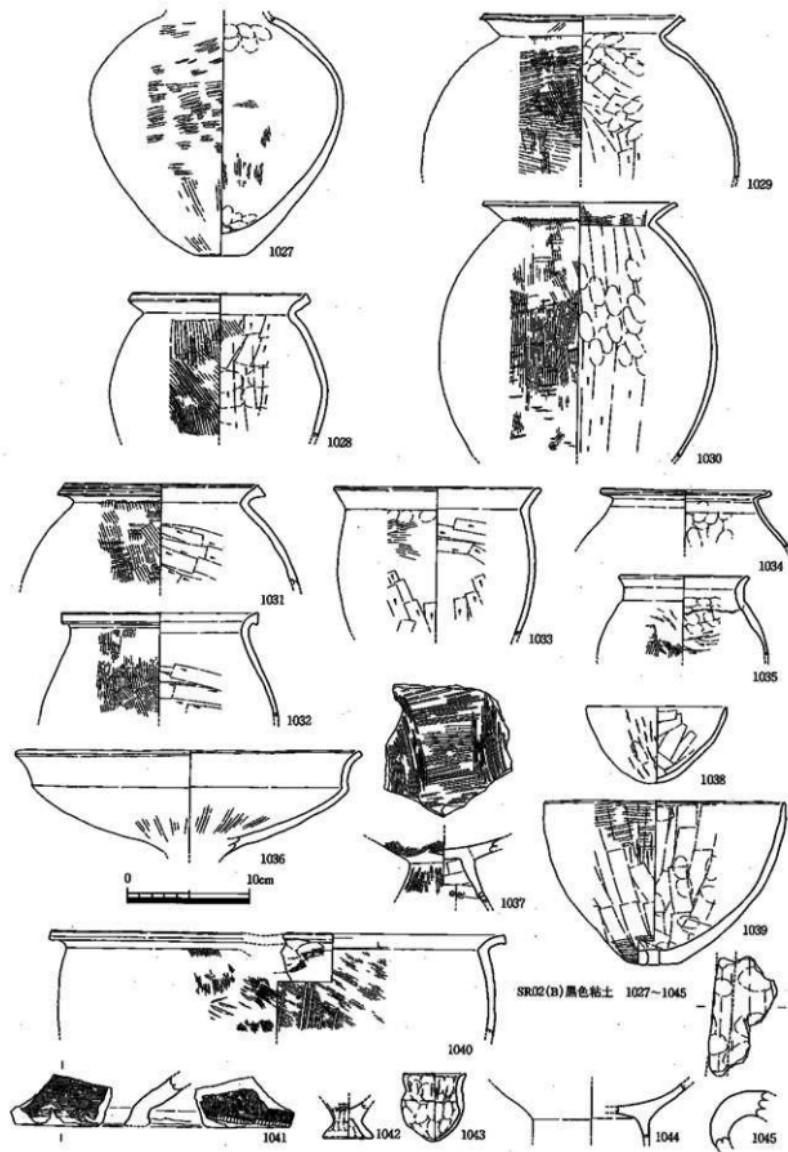


第152図 S R02(A)出土遺物(1 / 4)



第153図 S R 02(A)出土遺物(13)(1 / 4)

983～992は脚部。984～987は脚部に穿孔するもの。977・980・981の脚部にも穿孔が認められる。980・986・987以外は外面に2～3段程度のヘラミガキが密に観察できる。987は他のものとは形態が若干異なり、脚部内面は全体にヘラ削りして薄くし、脚端部は上下に肥厚させる。杯部と脚部の境は円盤状に割れており、円盤充填により底部を作ったと考えられる。穿孔は3角形状に3個所、横1列に2個所、合計5個所に施される。976・983・988～992は穿孔を持たない。983・990・991・992は短めの脚で、990は外面を丁寧なヘラミガキ、976は外面をハケで調整し、ともに内面をほぼ全面横方向でヘラ削りし、983・991・992は外面をハケ、内面にはあまり調整痕が見られない。988・989はやや長めの脚部で調整痕をあまり残さない。993・994は短めの脚部に碗状の杯部が付く。弥生時代中期後半。995～1012は鉢。995は深めの椀型。口縁端部はわずかに外側へ広げる。内面はハケの後粗くヘラミガキをする。996は口径27cm程度の椀型の鉢。997・998は口縁部が緩く外側へ屈曲する。口縁端部が四角くし、底部は平底、体部はあまり張らない。998は体部内面をハケの後ヘラミガキする。この器形の鉢には内面に朱が付着するものがある。999は口縁端部がなだらかに外側へ向くもの、1000は口縁部の下側に突帯を巡らせる。歪みが著しい。1001～1009は椀形の形態。1001は底部を捻りながら押し潰すようにして平底気味にし、外面は凸凹が顕著に残る。内面はハケをし、下半はヘラミガキする。1002・1003はやや深めで平底を持



第154図 S R02(B)出土遺物(1 / 4)

つ。調整痕をあまり残さない。1004～1009は内面をハケまたは板ナデで平滑にし、ハケの跡を顕著に残す。1007・1008以外は外面に調整痕跡はあまり残さず、クラックを残すものが多い。1010は口縁部は欠損するが、残存部から口縁端部は外側へ屈曲しそうである。底部外面中央部は指頭痕により少し窪ませている。1011・1012は台付鉢。1013は片口鉢。口縁部はきつく屈曲させ、内外面ともハケで仕上げる。1014～1017は瓶。1014～1016は底部に1孔のみ穿孔されるもの。1015・1016は口縁部を屈曲させない。1016は、粘土の継ぎ目が内外面に残る。1017は底部に穿孔が6個ある。底部は少し剥離する。1018は把手付広片口皿。片口部分と、側縁部分がわずかに残る。内面には朱がびっしり付着する。外面は全体が焼けている。1019は分銅型土製品。上半は半円状、下半は台形に近い、キノコのような形状で、上半部中央に突起を貼り付けて鼻を作る。上半部の両下端部には直径約3mmの孔を貫通させる。表面は細い棒状工具で突いて細かい孔を多数あける。1020は縁釉陶器。内外面ともヘラミガキをした後全体に施釉する。底部は削り出しの輪高台である。須恵質。京都産。混入と思われる。1021～1026は石器。1026以外はサヌカイト。1021・1023はスクレイバー。1021は上部を潰して刃部を簡単に成形する。1023は刃部のみ簡単に成形する。1022は楔形石器。上部は潰してある。1024は石庖丁。側縁を抉る。上部はほとんど加工しない。1025は石匙。1026は砥石。流紋岩。両面に擦痕がみられる。角の部分に敲打痕が顕著に見られ、敲き石としても利用されていたと考えられる。時期は弥生時代後期後半（V-2）～終末期～2項と考えられる。

#### S R02 (B) 黒色粘土（第139・140・154図、図版19・51）

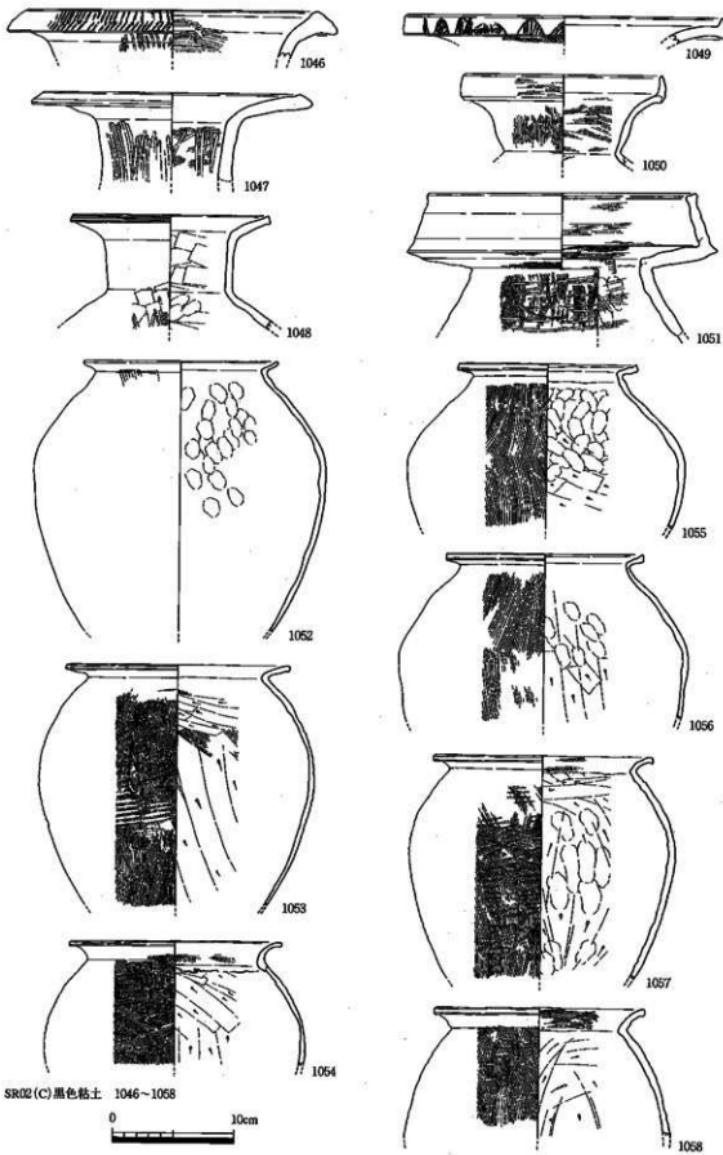
2区③部分で検出した黒色粘土層で2区②部分から続く。厚さ30cm程度の水平堆積で、西側が薄く東側で厚い。調査時はこの直上の暗灰褐色砂混粘土層も黒色粘土として取り上げたが、プラント・オパールの分析結果と遺物の出土状況からこの層は奈良時代の包含層であることが判明した。ここではこの層から出土したと思われる遺物は極力除去したつもりであるが、齧歛がある可能性がある。なお、他の地区に関しては遺物の出土状況や当時作成した土層図から概ねこのような間違いはなかったと考えられる。

1027～1045は2区③部分で検出した黒色粘土部分で出土した土器である。この地区では黒色粘土の下部の部分の土層はほとんどなく、土器の出土もない。

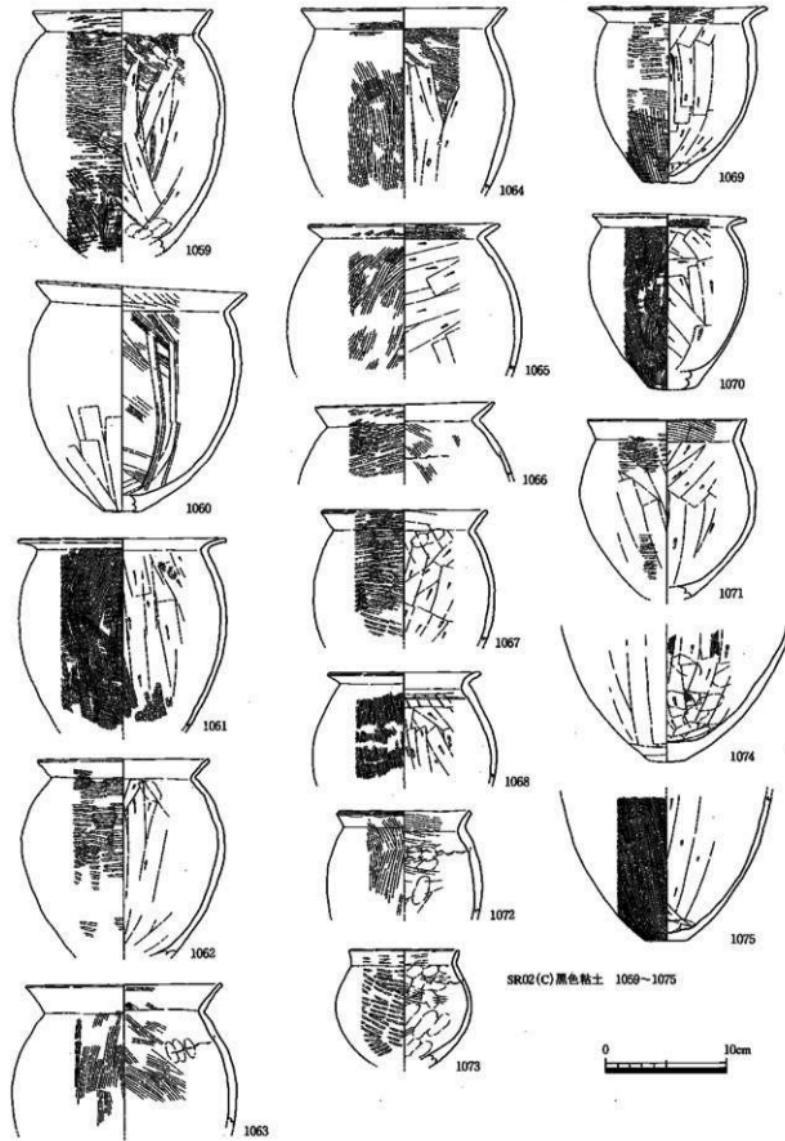
1027は壺の体部。1028～1035は壺。1028・1031は拡張気味の口縁をもち、1031は口縁端部に凹線が1条巡る。1029・1030はきつく屈曲する頸部に長めの口縁部が付く。外面にはタタキの後ハケを施し、内面はヘラ削りして薄くする。1032は口縁端部は緩く屈曲し、端部には面を持つ。頸部はあまり丸みを持たない。1033・1035は小型の壺。1034は下川津B類。1036・1037は高壺。1037は杯部と脚部の接合部分しか残存しないが、杯部外面には横方向に分割のヘラミガキが、内面にも4分割のヘラミガキが見られ、底部に一方向のヘラミガキがある。脚部には3カ所に穿孔があるが、そのうちの1カ所は内面まで穿孔が及んでいない。1038は鉢。楕型で内外面ともあまり調整痕を残さない。外面にはクラックが顕著に残る。1039は瓶。底部は平底で、口縁部は屈曲しない器形。外面は叩いて成形し、その後板ナデで消している。1040は片口鉢。頸部はきつく屈曲し、体部はあまり張らない。1041は器種不明。下端部にきれいに剥がれた剥離痕跡がある。外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケがある。剥離部分を水平にして圓化したが、傾きは不明である。1042は製塩土器。1043はミニチュアの壺。全体に手捏ねで作り、成型時の凹凸やクラックを残す。1044は土師器碗。1045は縁羽口。

#### S R02 (C) 黒色粘土（第43・155～157図、図版19・51）

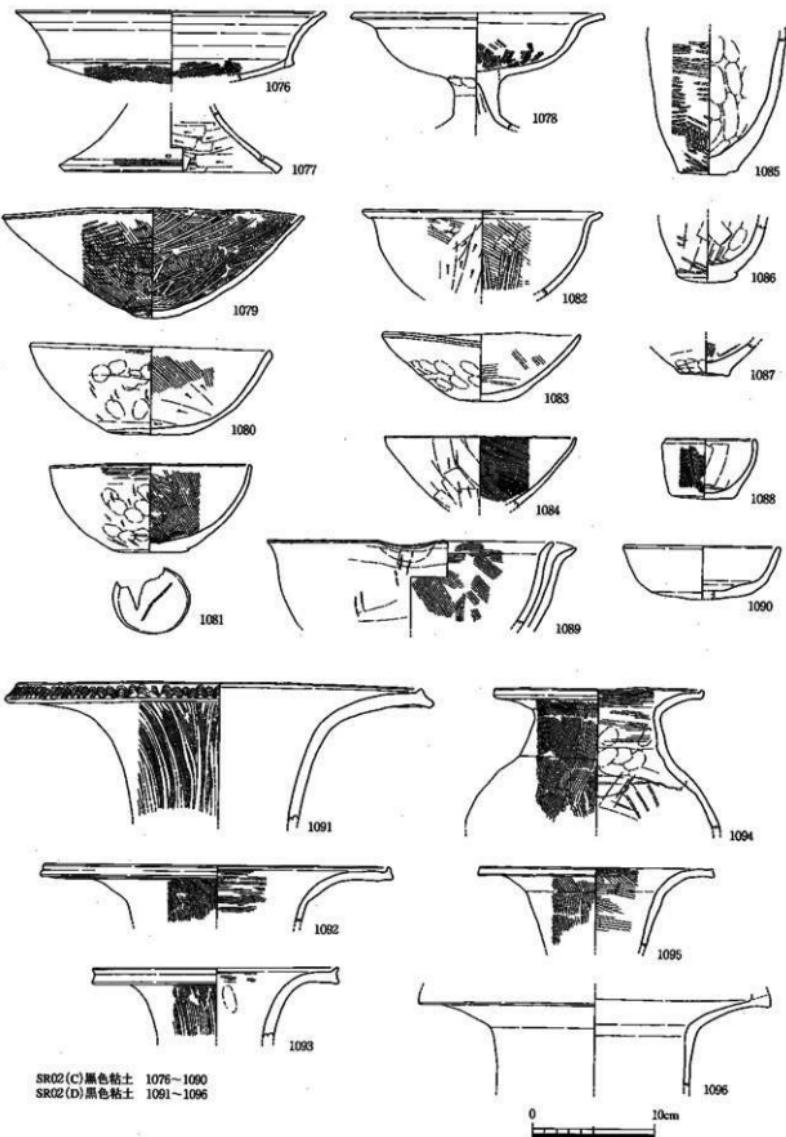
2区④部分で検出した黒色粘土層である。2区④東半部で厚さ30cm程度のほぼ水平堆積であった。



第155図 SR02(C)出土遺物(1/4)



第156図 S R02(C)出土遺物(1 / 4)



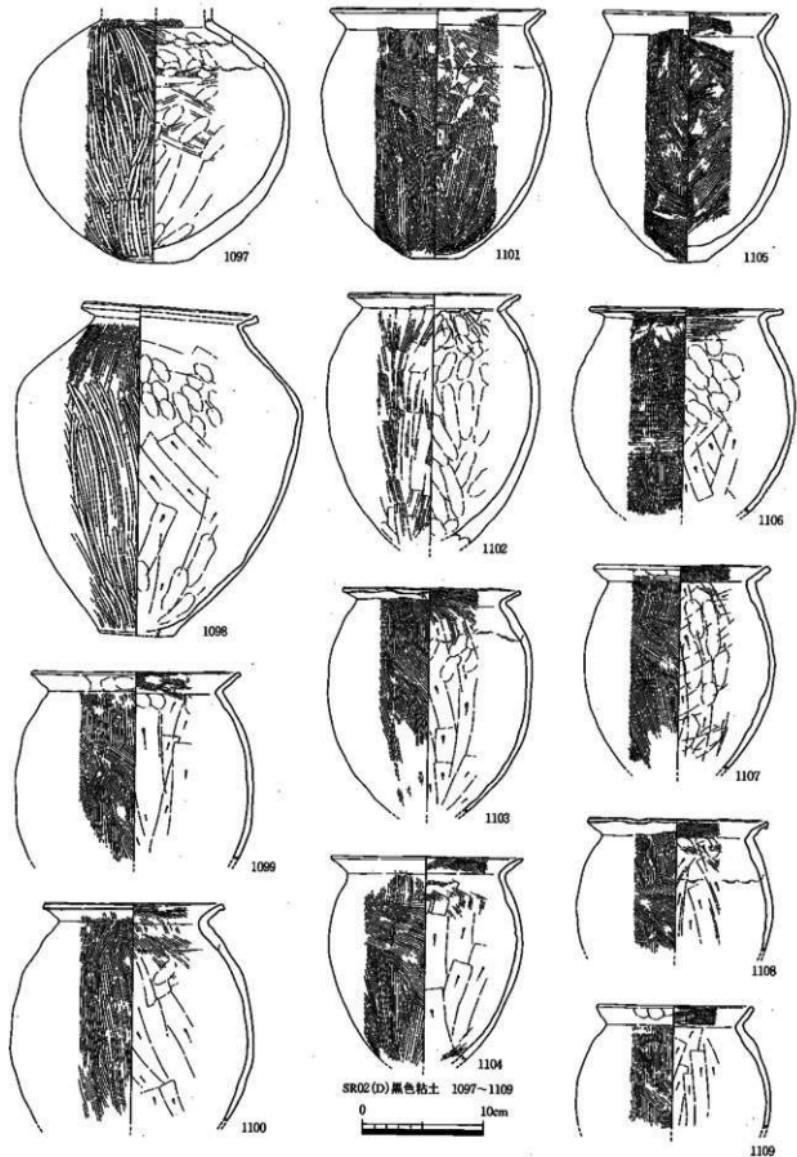
第157図 S R 02(C・D)出土遺物(17)(1／4)

1046～1051は壺。1046は口縁端部に綾杉文が崩れたような文様を刻む。弥生時代中期後半。1047～1049は広口壺。1047・1048はやや長めの直立する頸部に大きく開く口縁部を持つ。1047は口縁端部に斜めに平坦面を持ち、頸部外面は板ナデで平滑にする。1049は口縁端部を上方へ引き上げ、口縁部には鋸歯文や鋸齒文が崩れたような幾何学文様を刻む。1050・1051は二重口縁壺。1050は斜め上方に頸部が立ち上がり、二重口縁が付く。二重口縁部は口縁の角に貼り付ける。1051は口縁部の立ち上がりの根本部分で部分的に剥離する。頸部にはヘラ描きで文様を描く。1052～1075は壺。1052・1055・1056は下川津B類。口縁端部は上方へ少し引き上げる。1055・1056は体部外面にはハケ、内面の上半には指押さえ痕、下半はヘラ削りする。1052は摩滅が著しい。1053～1058・1061は頸部を鋸く屈曲させ、外面はタタキの後ハケ、体部内面はヘラ削りして、薄くする。1053は体部内面にもハケ、1054・1057・1058は頸部にハケを施す。1065はタタキ痕跡は残さないが、同様の形態を示す。1059～1071（1061・1065を除く）は口径が14～16cm程度で、頸部の屈曲が鋭く、口縁部があまり鋭角に付かないもの。外面はタタキまたはハケで、内面はヘラ削り、一部体部上半部から頸部にハケを施すものもある。底部まで残るものはわずかに平底を呈する。1072・1073は口径が10cm程度の小型の壺。口縁の立ち上がりは緩く、頸部もはっきりとした稜線を持たない。1072は外面をハケで、1073はタタキで調整し内面はともに粗いハケを施す。1074・1075は底部。退化気味の平底を持つ。1076～1078は高坏。1076・1077は下川津B類。1076は体部内外面とも四分割程度のヘラミガキをする。1077は脚部。脚部の下の方に5孔の穿孔がみられる。1078は丸みを持った杯部で、脚部は裾で外側へ屈曲する。杯部の中央部分には脚部を差し込んだ痕跡を示すように丸くひびが入る。1079～1088は鉢。1079は楕形のもの。口縁端部は四角くし、外面はタタキ+ハケ、内面はハケの後ヘラミガキを粗く2段に施す。1080・1081・1083・1084は楕形で口径16cm前後のもの。外面には調整痕をあまり残さず、クラックが目立つものが多い。内面は左上がり斜め方向のハケで（1081・1083・1084）、または下半部をヘラ削りし、上半部だけ他と同様のハケを施して（1080）、平滑にする。1081は底部をきれいに平底にし、ヘラ描きを入れる。1082は口縁端部を外側へ屈曲させる。1085は細長い形態で、外面には明瞭にタタキ痕跡を残し、内面には指押さえ痕跡が顕著である。歪みが著しい。1086も同様の器形になると思われる。1087は底部。体部の下端部を指押さえしてしっかりした底部を作り出す。内面に横方向のハケがみられ、鉢の底部と思われる。1088はミニチュア土器。歪みが著しい。1089は片口鉢。内面はハケで調整し、外面にはクラックが残る。1090は須恵器杯。混入と思われる。

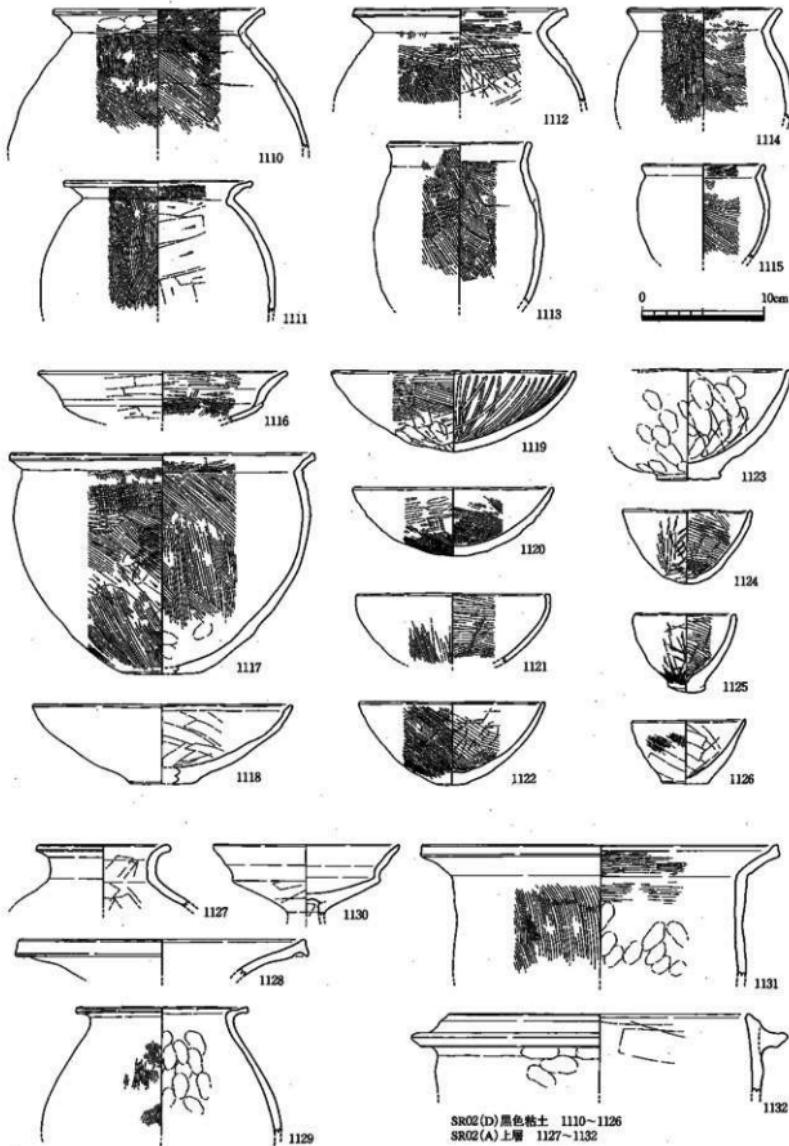
#### S R02 (D) 黒色粘土 (第140・157～159図、図版19・53～55)

1区②△地で検出した黒色粘土層である。厚さ30cm程度のは水平堆積であるが、北西側ほどわずかに厚い。

1091～1096は壺。1091～1093・1095は外傾して立ち上がる頸部に大きく開く口縁部が付く。1091～1093は口縁端部を上方へ肥厚させ、1091は端面に波状文を施す。頸部外面はハケで調整するが、1091・1093はその後でヘラミガキをする。1094は内傾して立ち上がる頸部に大きく拡がる口縁部を持つ。1096は二重口縁壺。摩滅が著しい。口縁端部の立ち上がり部分はちょうど基部の部分できれいに剥離する。下川津B類。1097は体部。球形に近い体部でわずかに底部を作る。外面を丁寧に磨く。1098～1115は壺。1098は下川津B類。歪みがある。口縁端部は上部へ引き上げ、体部のやや上位が張る。外面上半はハケ、下半は丁寧に磨く。内面は上部は指押さえ痕を顯著に残し、下半部はヘラ削りする。1099～1111（1101・1105・1106・1110を除く）は頸部を強く屈曲させ口縁部はあまり鋭角には付けない形態である。外面



第158図 S R02(D)出土遺物(1)(1/4)



第159図 S R02(D・A)出土遺物(1 / 4)

SR02(D)黒色粘土 1110~1126  
SR02(A)上層 1127~1132

はハケで調整し、内面は頸部を横方向のハケ、体部を縦方向にヘラ削りする。1101・1105・1110はこれらの壺とよく似ているが、体部内面全体にヘラ削りの後ハケで調整する。1106は口縁部が鋭角で取り付き、外面にはタタキ痕跡が観察できる。1113～1115は小型のもの。口縁部の立ち上がりは緩く、1115の外面は摩滅のため調整が不明瞭であるが、内外面ともハケで調整するようである。1116は高坏。内面には横方向のヘラミガキ、外面には横方向のヘラ削りをする。1117～1126は鉢。1117は口縁部が屈曲する器形。1118～1126は椀形の器形。1118・1119は口径20cm前後、器高6.5cm程度のもの。1118は摩滅のため調整が不明瞭であるが、1119は外面をハケ+ヘラ削り、内面をヘラミガキする。1120～1122は口径は15cm前後、器高6cm前後のもの、内面は横～左上がりの斜め方向のハケ、外面は縦方向のハケで1120は上部にタタキ痕跡が残る。1123は厚めの体部で平底を作る。調整痕はあまりなく、外面にはクラックが入る。歪みが著しい。1124～1126は口径10cm程度、器高5～6cm程度のもの。内面は左上がりのハケを密に施すが、外面のハケは疎らで、クラックが多く残る。時期は概ね弥生時代後期後半（V-4）～終末期2と思われる。

#### S R02 (A) 上層 (第137・138・159・160図、図版19・56)

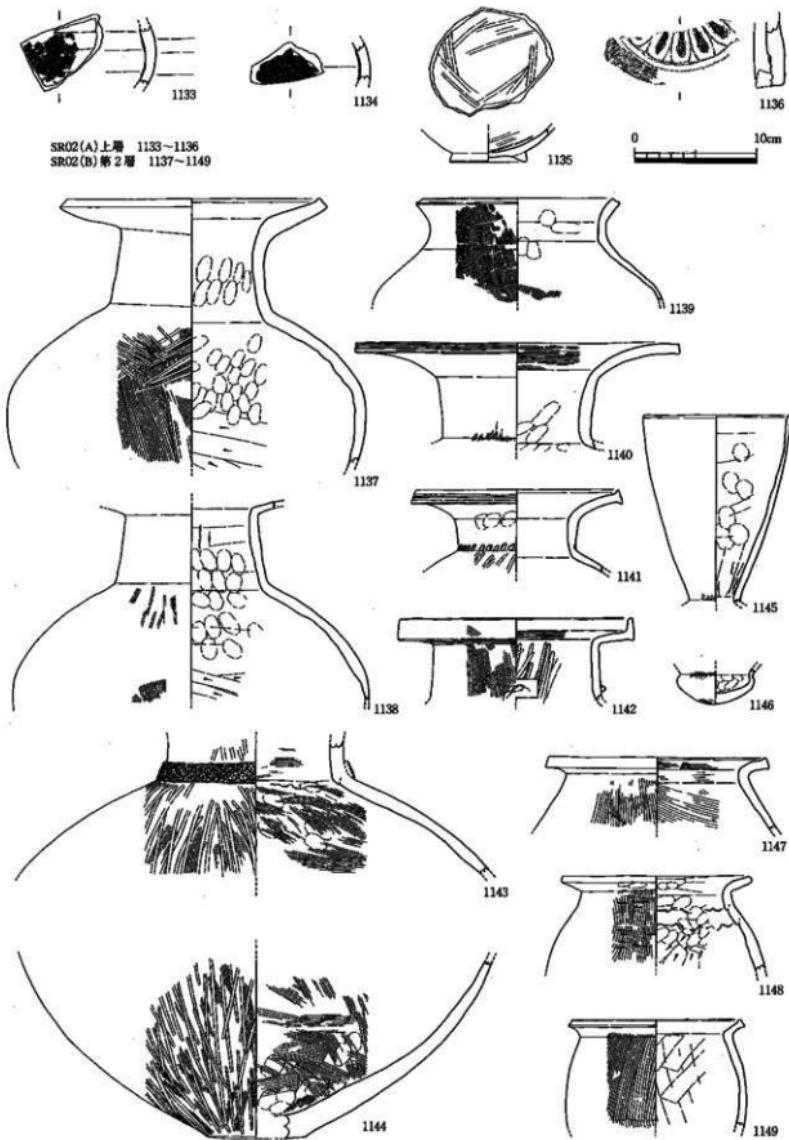
2区②部分で検出した黒色粘土上面に堆積する灰褐色・茶灰褐色系の粗砂・砂混粘質土である。厚さ30cm程度の水平堆積で、2区②の集落域以外のは全面を覆っている。

1127～1132は弥生土器。いずれも摩滅が著しい。1127・1128は壺。1127は直立する頸部に大きく開く口縁部が付く。1128は下川津B類。1129は壺。下川津B類。1130は高坏。1131・1132は土師器。1131は壺D。口縁端部をわずかに上方に引き上げる。1132は羽釜C。口縁端部・鰐端部とも先端を細くする。1133・1134は須恵器壺体部。小破片で傾きは不明。両者は同一個体と思われる。いずれも内面に漆が付着する。1135は黒色土器A。椀。内面に分割ヘラミガキがわずかに観察できる。1136は軒丸瓦。小破片で丸瓦の取り付け部は残らない。単弁で16弁前後と考えられる。蓮弁の外側には圓線が巡り、外縁は素縁で直立する。瓦当厚は1.3cmで薄い。中房の文様は不明であるものの、文様としては始覚寺で出土する細單弁16葉蓮華文と類似するが、製作技法は異なり、蓮弁もさらに退化している様子が窺える。時期としては暗文の施される土師器と対応する8世紀代に当たるのであろう。

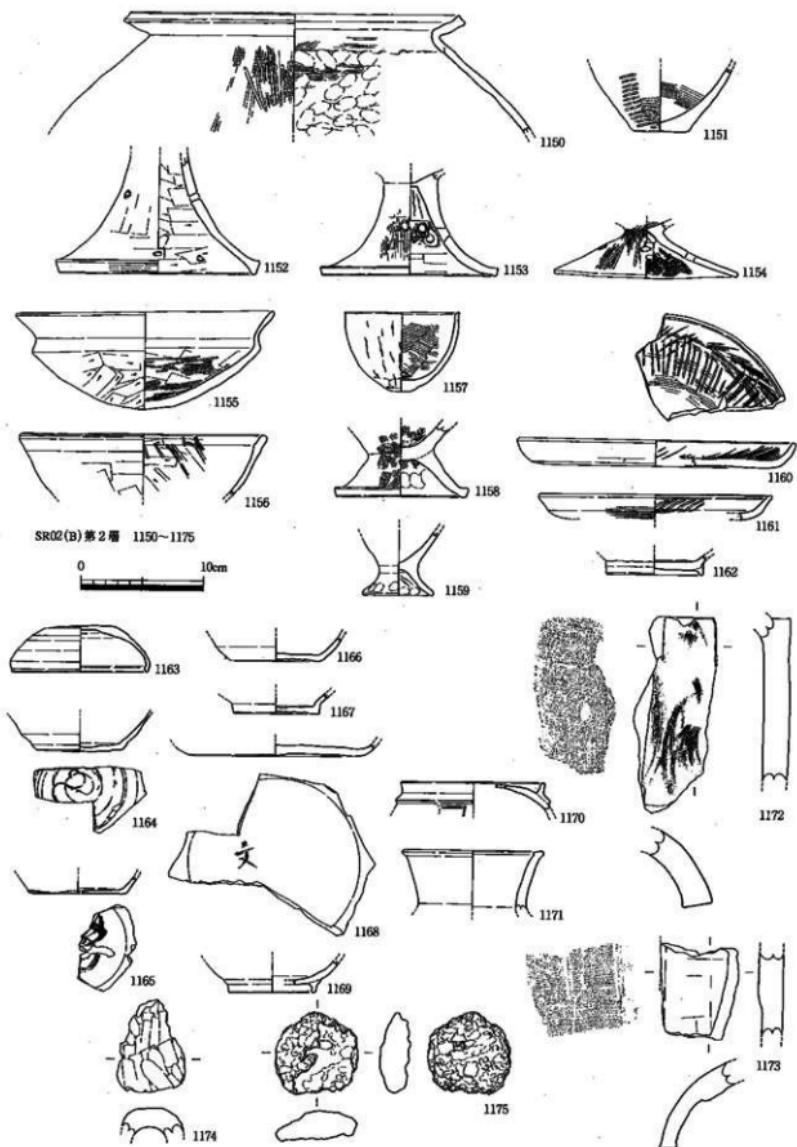
#### S R02 (B) 第2層 (第139・140・160・161図、図版19・56～58)

S R02 (B) 部分 (2区③) で取り上げた層位である。調査区の西端部を除くほぼ全面で検出したが、西端部は砂層を中心とする流路に切られている。厚さ約30cmの水平堆積で、灰褐色系の砂質土である。この層の中位から土壤分析の結果水田層が確認された。

1137～1159は弥生土器。1137～1146は壺。1137・1138・1140・1141は広口壺。1137・1138は内径気味の長めの頸部から口縁部が大きく屈曲して開くもの。体部は丸い。外面体部上半は横方向の分割ヘラミガキ、下半はハケ、体部内面は上半部は指押さえ、下半部は横方向のヘラ削りをする。1140・1141は直立する頸部に口縁部が大きく開く。ともに口縁端部に凹線が巡る。1141は体部と頸部の境に刺突文を入れる。1139は短めの頸部で口縁部はほとんど開かない。1142は二重口縁壺。体部と頸部の境に粘土塊が付着している。1143・1144は違う番号をとっているが、大きさや胎土・成形上の特徴から同一個体と考えられる。頸部に突帯を貼り、そこに斜格子状に強くヘラで模様を付けている。体部外面は丁寧にヘラミガキする。1145は細頸壺。調整はほとんどみられない。下川津B類。1146は小型丸底壺。外面はハケで調整する。1147～1150は壺。1147は口縁端部にやや面を持ち、肩部は直線的である。いずれも口縁端部に面を持ち、外面はハケを施す。1150は大型の壺で、外面にハケを施した後ヘラミガキをする。1151



第160図 S R02(A・B)出土遺物20(1 / 4)



第161図 SR02(B)出土遺物(2)(1 / 4)

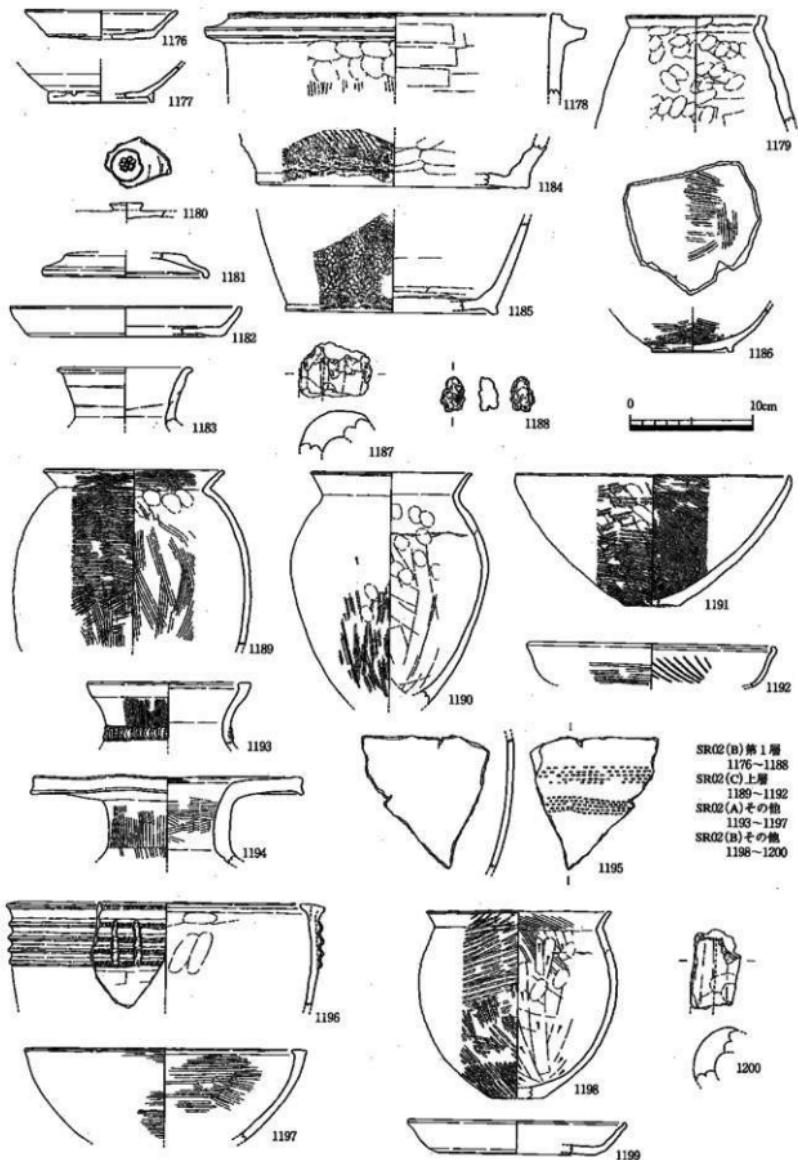
は底部。平底で外面はタタキ、内面は左上がりのハケがある。内面の調整から鉢の底部の可能性がある。1152・1153は高坏。1152は上下2段に穿孔をそれぞれ1ヶ所ずつ施し、内面はヘラ削りする。下川津B類。1153は脚部に2孔1組の穿孔を3箇所に穿孔する。1154は台付鉢脚部。脚部に4孔穿孔し、内外面ともハケで調整し、外面はその後粗くヘラミガキをする。1155・1157は鉢。1155は高坏の杯部と同じ形態で、底部外面は横方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラミガキがある。下川津B類。1156は口縁端部が肥厚する。1157は椀形の器形。内面は左上がりのハケ、外面はほとんど調整を加えず、クラックが多く残る。1158は台付鉢。弥生時代中期後半。1159は製塙土器。摩滅が著しい。

1160～1162は土師器。1160・1161は皿。いずれも体部内面に斜放射の暗文を施す。1161は外面にヘラミガキを施し、口縁端部は内側へ玉縁状に丸まる。1162は椀。平らな底部で底部と体部の境に高台を貼り付ける。部分的に高台は剥離するが、その部分はきれいに剥離しており、痕跡をほとんど残さない。内面には墨痕がびっしり付着する。1163～1171は須恵器。1163は杯蓋。上半部は回転ヘラ削りをする。1164～1167は杯。1164・1165は内面に火拂が掛かり、底部外面に墨書がみられる。1164は底部外面にはっきりとした細い墨書きでS字状の曲線を描く。1165は墨の濃い部分と薄い部分があり、どれが文字を構成する墨痕かはわかりにくい。内容は不明。1167は円盤状高台を呈する。1168は皿。底部外面中央附近に「文」の字の墨書土器がある。全面に火拂が掛かる。1169は椀。底部と体部の境に内傾気味の高めの高台が付く。1170は円面鏡。脚部の長方形の透かしがわずかに残る。外面には全面に自然釉が掛かる。1171は壺口縁部。瓦質の焼成を示し、外面は燻される。口縁端部は平らで内側をわずかに玉縁状にする。1172・1173は丸瓦。ともに凸面は板ナデ。1172は玉縁部分が僅かに残る。外面には焦げ茶色の墨痕？らしいものがある。墨痕らしきものには濃淡の差がかなりあり、その場所にはその方向と同方向の擦痕が顕著に残る。1174は轆羽口。溶融痕は残らないが、灰色に変色する。1175は椀形鍛冶溝。やや扁平な形状で、椀は浅い。上面には木炭痕跡が残る。第2層からは黒色粘土からの混入と思われる弥生土器を除けば、概ね8～9世紀の遺物が出土する。

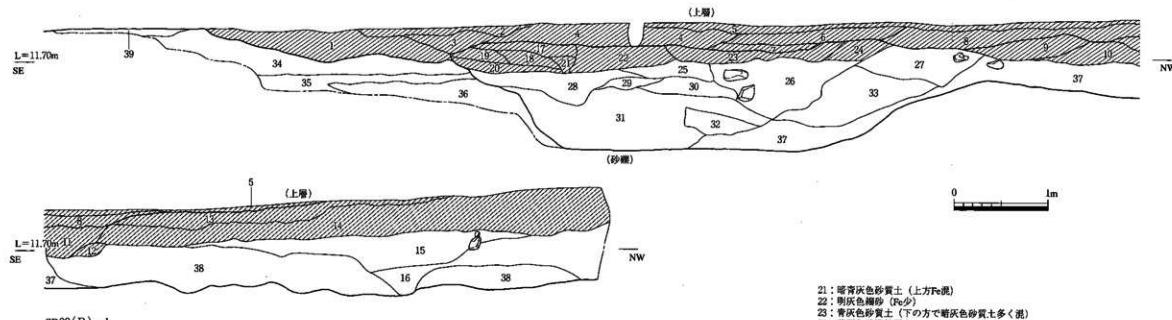
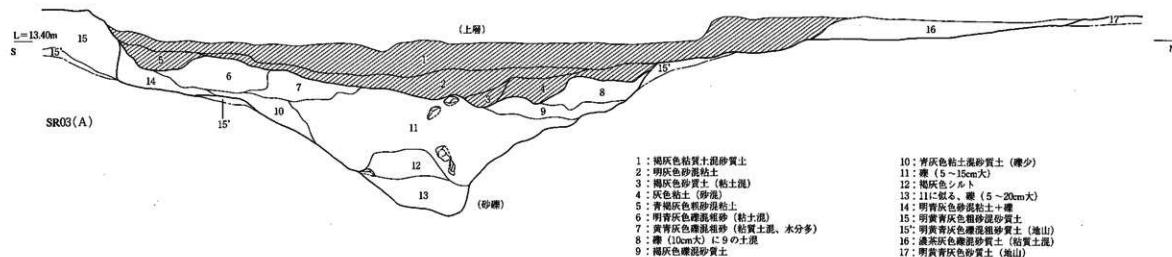
#### S R02 (B) 第1層 (第139・140・162図、図版19・58)

S R02B部分(2区③)で取り上げた層位である。調査区の西端部を除くほぼ全面で検出した。赤茶褐色系の砂質土の埋土で、厚さ約30cmの水平堆積であった。土壤分析の結果、この上部から稻のプラント・オパールが検出され、水田層であったことが確認された。

1176～1179は土師器。1176は皿。底部は中心部から直径1.5cmの円形で欠損している。土器を作る際の粘土の離ぎ目と思われる。1177は椀。底部はまっすぐで椀形を呈しておらず、体部と底部の境に高台が付く。見込みに重ね焼き痕跡がある。1178は羽釜C。外面はハケ、内面は板ナデ。口縁・鋸端部とも四角くする。1179は壺。内外面とも指押さえ痕跡が顕著に残る。1180～1185は須恵器。1180は蓋。つまみ部分。頂部はヘラ削りする。つまみ部分には中房+4弁の花模様が墨で描かれる。花弁の中央部には切れ込みが入る。花のモデルは不明。1181は蓋。頂部をヘラ削りし、体部は回転ナデをする。口縁端部は丸くする。1182は皿。1183は壺口縁端部をわずかに外側へ拡張させ、頸部の内・外面に粘土の離ぎ目が残る。1184は壺または壺の底部。外面は全面に自然釉が掛かり、外面には左上がりの平行タタキがある。内面の底部と体部の境付近には指ナデ痕が顕著に残る。1185は壺の底部。外面には右上がりの格子タタキが、やや粗く入る。体部と底部の境付近には高台が付く。1186は黒色土器A椀。内外面ともヘラミガキする。1187は轆羽口。先端部には溶融痕があり、その下部は灰色に変色する。1188は合鉄鉄滓。分析資料である。第1層中からは概ね9世紀前後の遺物が出土する。



第162図 SR02(A・B・C)出土遺物図(1/4)



- 1: 明赤褐色粘泥砂質土  
2: 淡茶褐色粘土混砂質土 (黒褐色土混)  
3: 淡茶褐色粘土質土混砂質土 (相砂質、Fe多)  
4: 淡茶褐色粘土質土混砂質土 (3に似るが3よりFe少)  
5: 淡色砂質土  
6: 明灰色砂質土 (Feやや多)  
7: 暗灰色砂質土 (Fe少)  
8: 暗灰褐色粘土質土 (砂少し混)  
9: 暗灰褐色粘土質土 (粗砂質)  
10: 黄褐色砂質土 (Fe少)
- 11: 暗灰褐色細砂混粘質土  
12: 黄褐色粘土・灰褐色土 (ブロックで入る)  
13: 明茶褐色粘土質土  
14: 暗褐色粘土質土  
15: 暗灰褐色粘泥砂質土  
16: 暗青褐色粘土質土  
17: 暗褐色砂質土 (4に似や類るが4よりFe少、粘り気なし)  
18: 暗褐色砂質土 (17に似る、17よりFe少)  
19: 灰色粘土質土混砂質土 (Fe混)  
20: 灰色砂質土

第163図 S R03(A・B)土層図(1)(1 / 40)

### S R02 (C) 上層 (第162図、図版19)

2区④部分で検出した。調査区の主に東半部で検出し、調査区の東端では厚さ45cm程度になる。概ね水平堆積で、埋土は暗灰色小礫混シルト層である。この層はS D2401の上面に堆積する。

1189～1191は弥生土器。1189・1190は壺。1191は大型の楕円形の鉢。外面はタタキ、内面はハケを密に施して調整する。1192は土師器杯。口縁端部は内側へ丸めて玉縁状にし、内面には斜放射暗文を施す。

### S R02 (A) その他 (第137・138・162図、図版19・58)

S R02 (A)(2区②)で出土した遺物である。

1193～1195は古代包含層を切る小さい砂層を中心とする流路から出土したと思われる。

全て弥生土器である。1198は壺口縁端部は平坦で、頸部には押圧突帯を貼り付ける。弥生時代中期後半。1194は広口壺。直立する頸部に大きく屈曲して開く口縁部を持つ。1196は鉢口縁部は内側に粘土を足して肥厚させる。口縁部外側に刻み目を付け、外面には4条の刻み目突帯を貼り付ける。その突帯をまたぐように縱方向に2条1単位の粘土紐を貼り付けたものが1ヶ所に残っていた。弥生時代中期後半。1197は楕。口縁端部は平坦にし、内外面とも横方向にヘラミガキする。弥生時代中期後半。1195は体部破片。横方向に5列1単位の列点文が2列施される。摩滅が著しい。

### S R02 (B) その他 (第139・140・162図、図版19・58)

1198～1200はS R02 (B)(2区③)の遺構精査中などで出土した遺物である。1198は弥生土器壺。口縁部はあまり鋭角でない角度で取り付き、底部はわずかに平底である。外面は口縁部から底部まで叩いて仕上げ、内面は上部はハケ、中位から下部はヘラ削りである。1199は須恵器皿。口縁端部はわずかに丸めて玉縁状にする。1200は輪羽口。

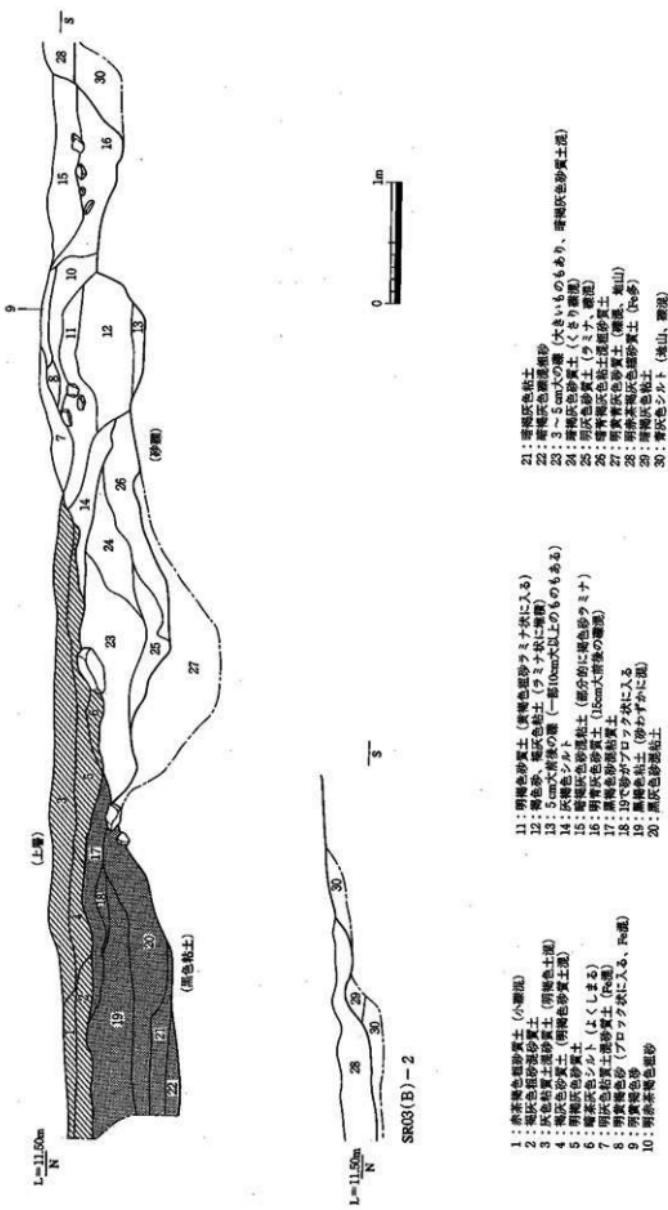
### S R03 (第163～166図、図版19)

調査区の東側を限る谷筋である。6区②から6区①にかけて検出した。6区で検出したものを一括してS R03としているが、一度に形成されたものではなく、また、一部S R02へ続く流路も含めているが、S R03のなかで報告した。土層序は各調査区で作成した壁面の断面図や土層観察用の畔の断面図をもとにした。発掘調査の際には自然河川の掘り下げに先だって設定したトレンチの土層から層位ごとに取り上げるように心がけたが、いろいろな小流路が錯綜している部分もあり、面的に掘り下げをしている際に掘り下げ層位が錯綜した場所もあったと思われる。図面を掲載する際には調査時の取り上げ層位をもとに土層図と照合しながらある程度層名を整理した。6区②部分に関しては層位が単純であったが、6区①に関してはここでは幅広く堆積する黒色粘土を鍾として層序を考えた。

6区②部分では幅6.4m、深さ1.4m、検出範囲の高低差は2.1mで、分厚い砂礫層の堆積がみられ、流れが激急であったことを窺わせる。礫は5～15cm程度で、上流側ほど礫の堆積は厚い。この礫中から弥生時代後期の土器が多く出土した。この部分は地山層も礫であったが、ここでは遺物を含まない。この礫層の上層には灰色砂質土を中心とする層が厚さ60cmで堆積する。これは流路が埋没した後に、堆積したものと思われる。

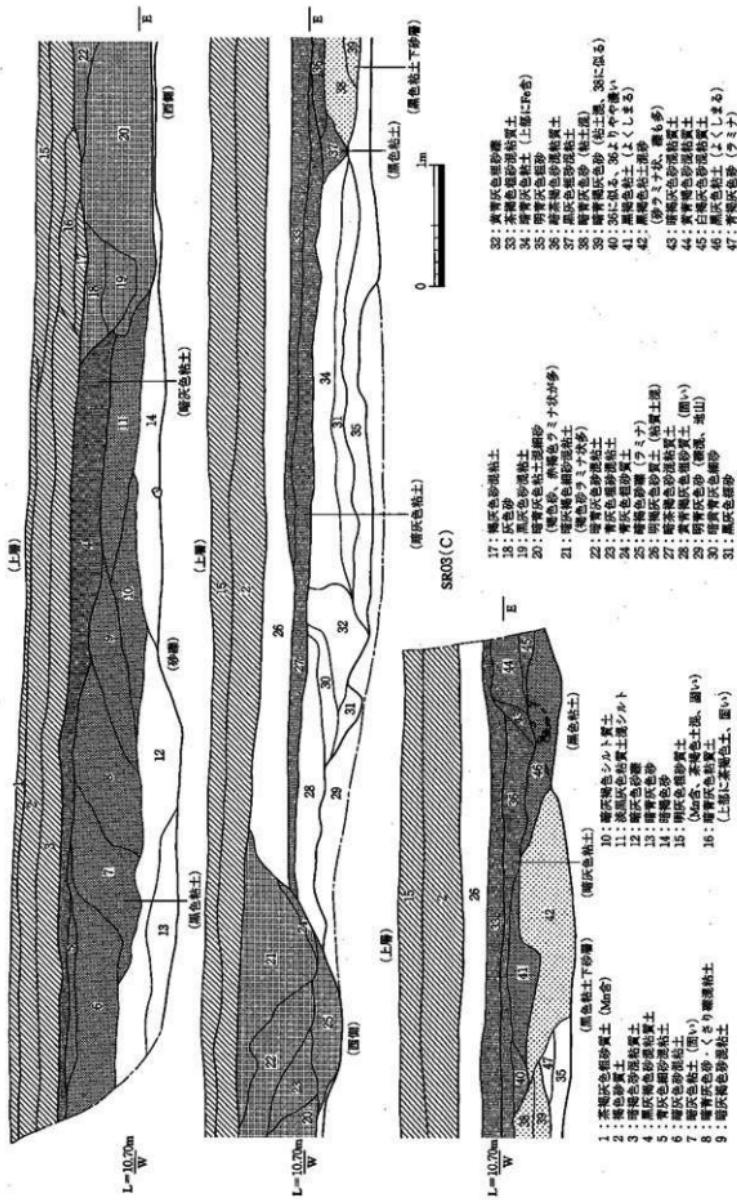
6区②北西部付近から黒色粘土層が出現する。この層は範囲が狭いが、S R02の黒色粘土層と同一の可能性もある。この層は6区①で広範に広がる層である。また、このあたりから小規模な、砂層を中心とする流路がいくつか見え始める。

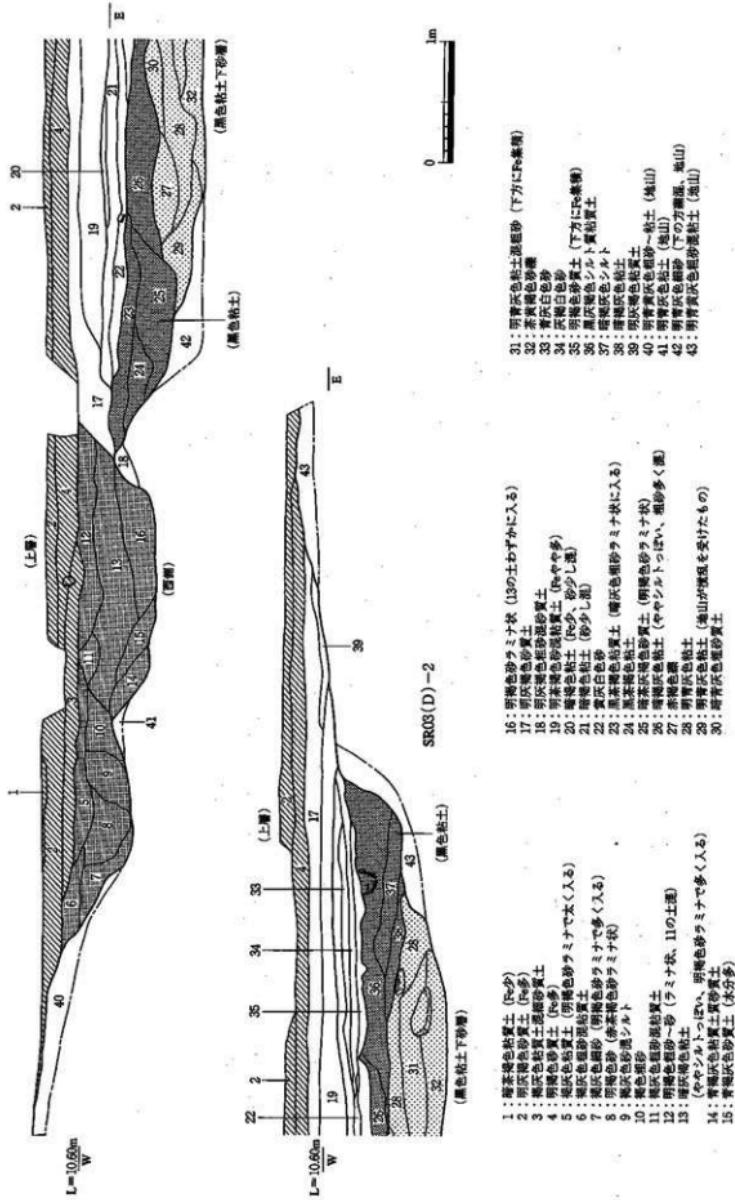
6区①では基本的な土層は下層から順に砂礫層→砂層→黒色粘土層→上層で、上層の上・下で小規模



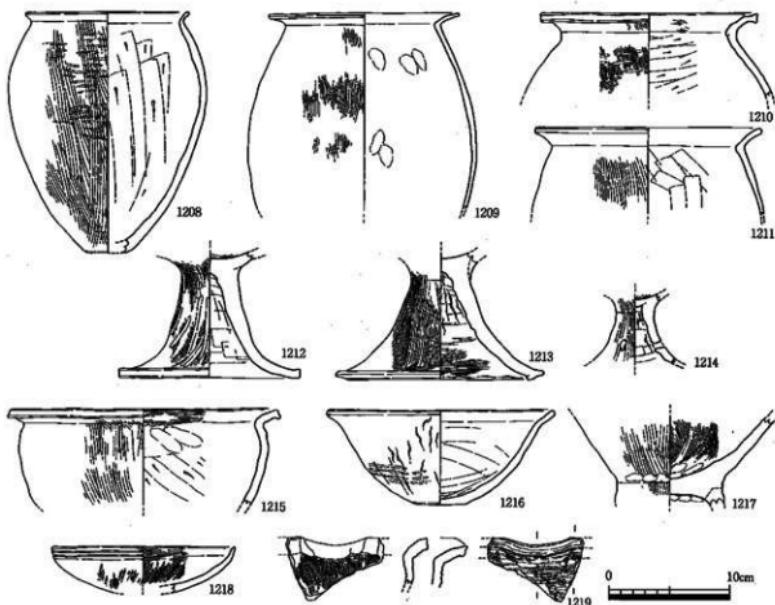
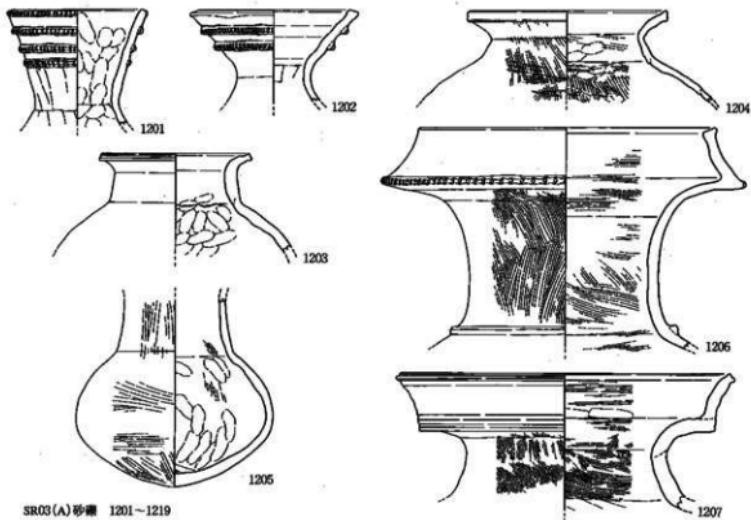
第164図 S R03 (B) 土壌図(2)(1 / 40)

第165図 S R 03(C) 土層図(3)(1/40)





第166図 S R03 (D) 土厚図(4)(1 / 40)



第167図 SR03(A)出土遺物(1)(1/4)

の砂層を中心とする流路がみられる。層位・遺物の説明は層位ごとに行い、その層位が複数に跨るときはさらに区別に行った。

#### S R03 (A) 砂礫 (第167・168図、図版59・84)

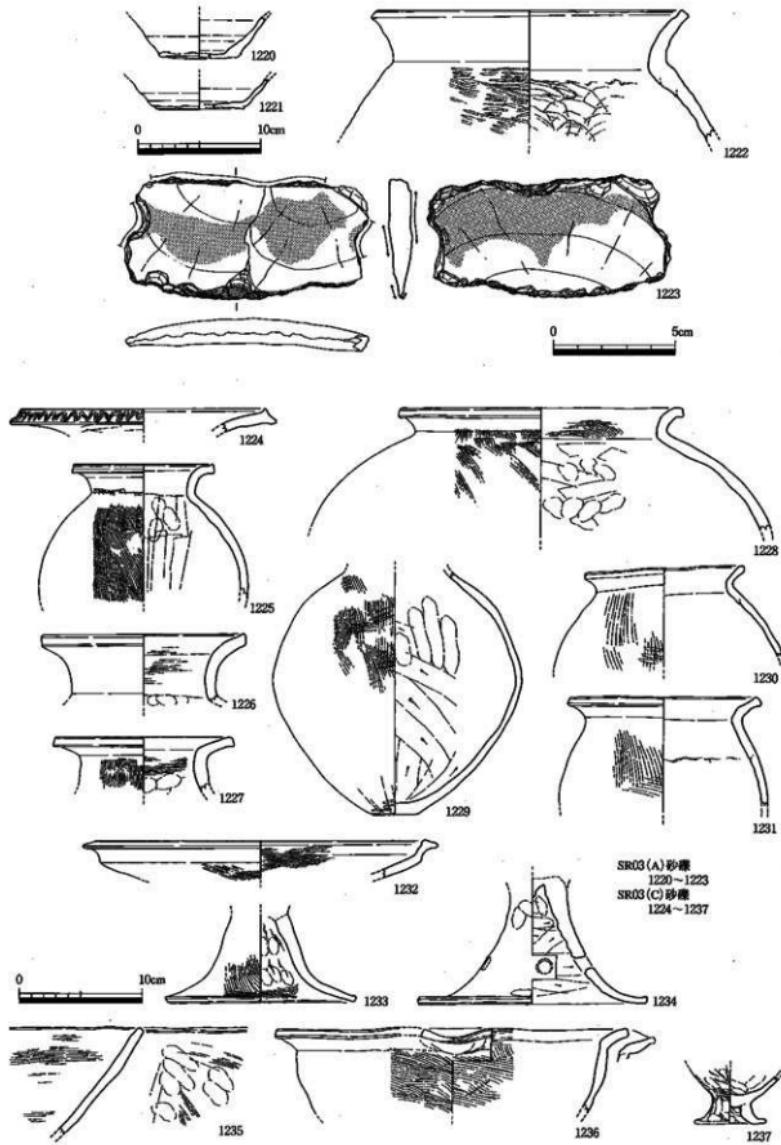
6区②南西から北東へ向けて流れ、6区①へ流れ込む流路である。南西端部分では深さ約1.3m、幅約3.5mにわたって堆積し、その上部には灰色土の包含層が堆積する。20mほど下った畔S R03 (B) - 1では礫は幅5.5m、深さ60cmほどになり、上面に流路の跡と思われる砂層のラミナ状の堆積がみられるようになる。6区②の一一番低い部分である北東の壁面土層S R03 (B) - 2では幅約3m、深さ約70cmとなり、ここでは北西部から流れ込んでくる黒色粘土に切られている。また、礫層の南部では流路の跡と考えられる砂層の堆積が礫層の上部でみられた。周辺の地形の傾斜は6区②山側よりは平野側の方がやや緩く、おそらく6区②山側付近で傾斜がやや緩くなり、多量の礫とともに土器が多く堆積していったと考えられる。

1201~1219は弥生土器。1201~1207は壺。1201・1202は頸部に突蒂を貼り付け、そこに刻み目を付ける。弥生時代中期後半。1203・1204は直立またはやや内傾する短めの頸部に口縁部が開く器形。1205は直立する長めの頸部を持つもので、丸い体部が付く。外面全体にヘラミガキする。1206・1207は二重口縁壺。1206は口縁部の立ち上がる部分に刻み目を入れ、頸部に突蒂を貼り付ける。1207は頸部の中位と口縁部の立ち上がる部分に剥離痕がある。1208~1211は壺。概ね外面にはハケ、内面はヘラ削りまたは板ナデで薄く仕上げる。1208・1210はハケの下部にタタキ痕跡を残す。1212~1214は高杯。1212・1213は脚部に穿孔をしない。1214は脚部に穿孔を3ヶ所均等にする。1215~1219は鉢。1215は口縁部をきつく屈曲させる。1216は口縁部を緩く屈曲させ、外面下部にはぼけたタタキ痕を残すが、タタキ痕がみえない個所ではクラックが顯著に残る。1217は低い脚部の付くものか。底部には脚部を貼り付けた痕跡がみえる。1218は小型の皿状の鉢で、体部内外面には放射状の、口縁部内面には横方向のヘラミガキがある。1219は片口鉢の口部分。1220は土師器杯。回転台土師器。内面全体と外面の一部に墨らしいものが付着する。1221・1222は須恵器。1221は杯。外面には火拂が掛かる。1222は壺。外面にはタタキ痕、内面には青海波紋の当て具痕跡が残る。タタキ調整は頸部から下部へ向かって円弧状にタタキ締められている。全体に自然釉が掛かり、外面には全体に砂利が釉に溶着する。1223は石庵丁。上面を潰し、両端に抉りを入れる。刃は磨滅する。サヌカイト製。出土遺物のうち土師器・須恵器はいずれも9世紀後半代と考えられるが、おそらく取り上げ時に上層のものが混入したと思われる。時期は一部弥生時代中期後半のものが混じるが、概ね弥生時代後期後半と考えられる。

#### S R03 (C) 砂礫層 (第168・169図、図版84)

6区①(C)の、主に畔S R03 Cの南側東半部分で検出した層位である。①の主に南側区画では、②に面した西側の壁面土層で黒色粘土層・その下部の青灰色砂質土層のさらに下部で、地山直上に厚さ約30cmの礫層がある。それは、南側の壁面土層の最下層を厚さ20cm前後で堆積し、一部では途切れるものの、概ね水平堆積をする。そして、その上部に土器が多量に出土した黒色粘土層や黒色粘土下部の砂層が堆積する。このような状況を考えれば、この砂層はS R03 C部分の区画を中心に西から東へ流路が向き、調査区外へ出るものと考えられる。

1224~1237は弥生土器。1224~1227は壺。1224は口縁部が大きく開く器形で、口縁端部に波状文を施す。1225~1227は短い頸部で、口縁部が開く器形。1227は割れている部分は剥離部分であり、ここで粘土の継ぎ目があったと考えられる。1228~1231は壺。1228は整理作業が終了する直前に1267と接



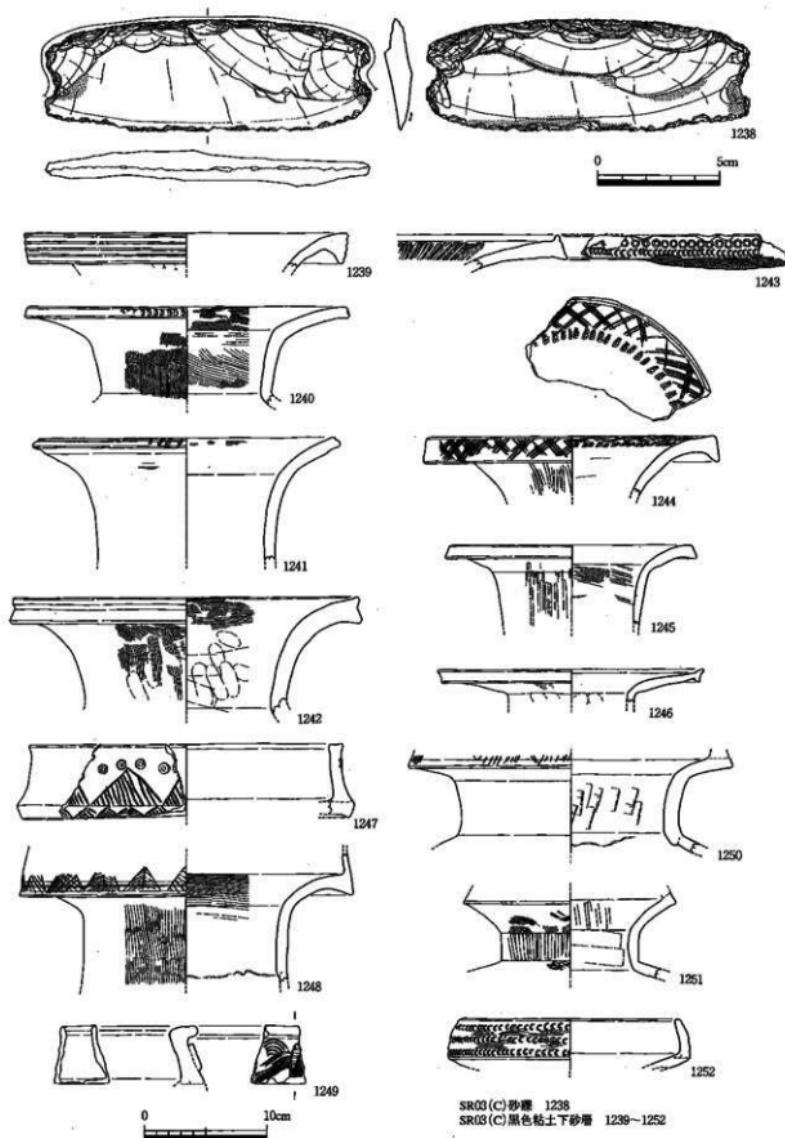
第168図 SR03(A・C)出土遺物(2)(1/4、1/2)

合することが判明した。1230・1231は頸部の屈曲は緩く、外面はハケで仕上げる。1232～1234は高坏。1232は杯部。口縁端部に平坦面を持ち、内外面にヘラミガキをする。弥生時代中期後半～後期初頭。1233は外面はハケ、内面は筒部には板ナデ、裾部にはハケを施す。脚部上端部の割れは剥離面で、ここで粘土の維ぎ目があると考えられる。1234は脚部に不均等に4孔穿孔がみられる。上端部分の杯部分は剥離痕跡が確認できる。1235は鉢。大型の椀形になるもの。1236は片口鉢。注ぎ口に煤が付着している。1237は製塙土器。外面はタタキの後指ナデする。1238は石庵丁。上部は漬し、両端に挟りを入れる。サヌカイト製。

S R03 (C) 黒色粘土下砂層(3) (第169～176図、図版59～61・83～85)

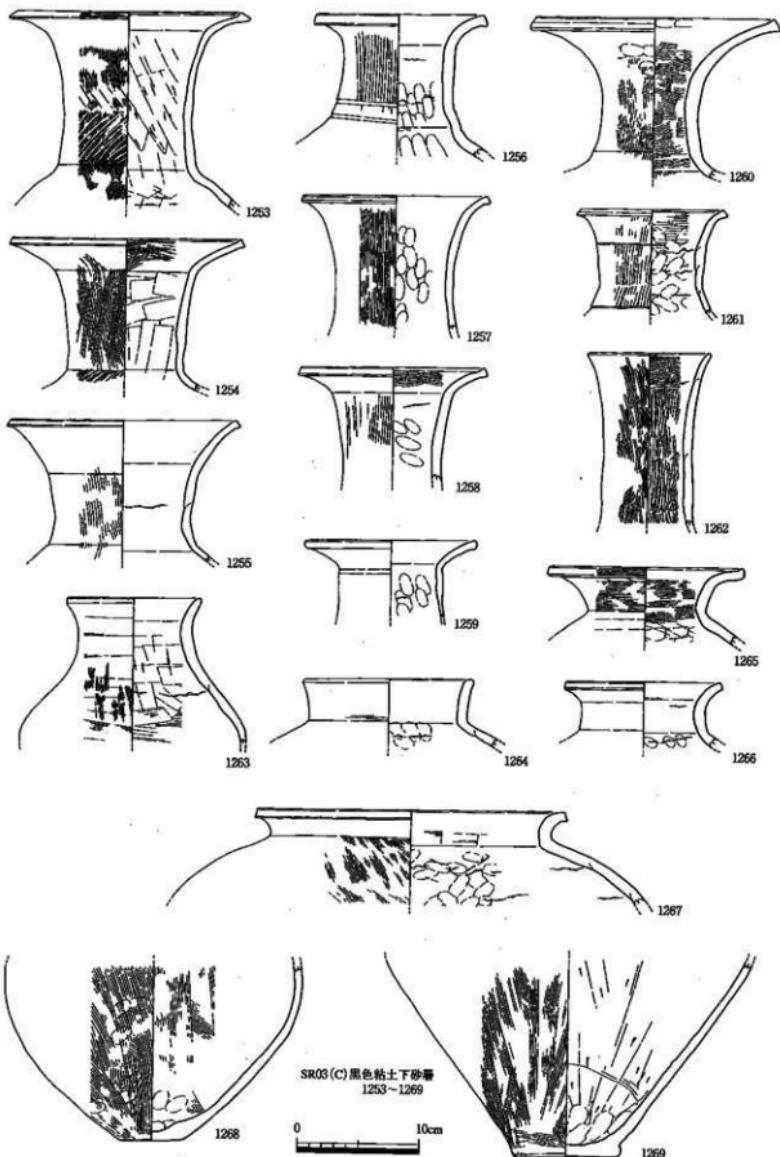
S R03C部分（6区①南）で検出した層位であり、出土した遺物である。S R03A・B部分では砂礫層の上部には該当するような堆積はない。S R03B部分東側壁面土層では黒色粘土の下に該当する層位は見あたらないが、予備調査の断面図では黒色粘土の下部に灰色砂層があり、黒色粘土の下部に堆積するものと考えられる。S R03Cの西側南半部から現れ、西半部分では南壁をかすめながら東北方向へ進路を変え、畔 S R03-Cでは東半部分で出現し、S R03D部分（6区①北）へ続く。S R03C部分西壁土層では黒色粘土層の下部、砂礫層の上部に堆積し、概ね西壁から南壁西半部にかけては厚さ40cm程度の水平堆積である。埋土は暗青灰色粘土混じり砂質土となっている。畔部分でも青みを帯びた暗灰色系の砂層で、全体に青みを帯びた粘土混じりの砂質土・砂層である。

1239～1267は壺。1239は口縁端部に凹線文を持つ。弥生時代中期後半。1240～1242・1245はほぼ直立する頸部に大きく開く口縁部が付く。1240は口縁端部に爪型文がある。残存部分は多くはないが、爪型文のない箇所もあり、全周はしないようだ。下川津B類。1241は口縁端部に沈線が1条巡り、刻み目を入れる。残存部分では刻み目は4個1単位で1箇所に残る。摩滅が著しい。1242は口縁部がやや外傾して立ち上がり、口縁端部には凹線が1条はいる。1243は口縁端部に竹管文と半裁竹管文を2段にして施す。内面はハケの後ヘラミガキする。下川津B類。1437と同一と考えられる。1244は口縁端部に斜格子文、内面には斜格子文を施し、その下に3段の列点文を入れる。1247～1252は二重口縁壺。1247は立ち上がった口縁部のみ残る。口縁端部には竹管文と2段の鋸歯文を施す。立ち上がりの基部部分には剥離痕跡が残る。1248は口縁端部に鋸歯文を施すが、鋸歯の中のヘラ描き文様は斜格子状、斜線のみのもの、樹木のようなものなどまちまちである。二重口縁部の立ち上がりは薄い。頸部下部に粘土紐の痕跡が残る。1249は二重口縁部の立ち上がり部分だけ残ったものである。下部に剥離痕が残る。端部は外側へ拡張させ、波状文と棒状浮文で飾る。棒状浮文には横方向の刻み目を入れる。1250は二重口縁部分が剥離し、立ち上がり部分は残らないが、口縁端部に鋸歯文の下部が残り、口縁端部を鋸歯文で飾るものと思われる。1251は二重口縁部分が完全に剥離するが、口縁端部内側が変色しており、この部分に口縁が立ち上がるらしい。口縁部は内傾気味に立ち上がる。下川津B類。1252は概ね立ち上がり部分のみである。壺本体との剥離面が下部に残る。口縁部は丸みを持って立ち上がり、そこには3段の半裁竹管文が施される。1253～1261は長めの頸部に口縁部が開くもの。外面は概ねハケで調整し、1253・1254はその後ヘラミガキを加える。1253は頸部外面の中央に左上がりのヘラ状工具痕、その下部には右上がりのヘラミガキ状の文様を施す。内面には絞り目を顯著に残す。1256は頸部下端部に2条の沈線を施す。1261は頸部と体部の境に段を持つ。頸部中位やや上よりにも沈線を1条持つ。1262は細壺壺。内外面はヘラミガキし、頸部に粘土の維ぎ目が観察できる。下川津B類。1264は頸部の短い壺。直立する頸部を持つ。1265・1266は短めの頸部で口縁端部が開くもの。1265は外傾気味の頸部で頸部内外面に横方向のハケが

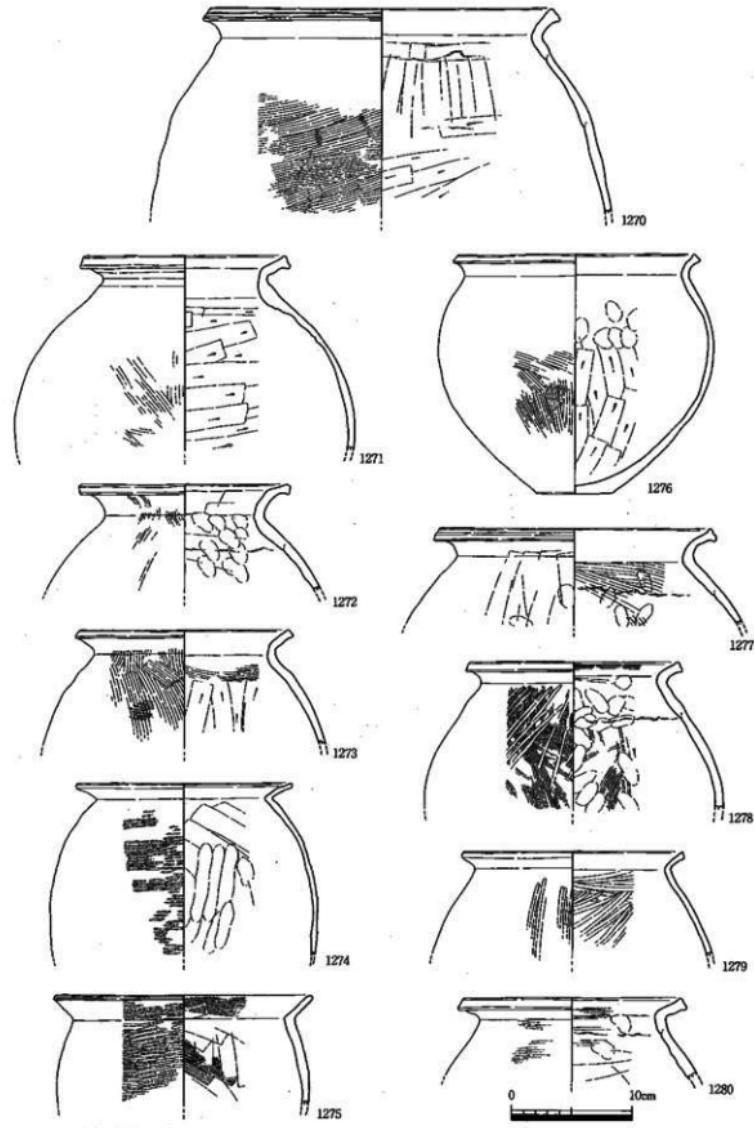


SR03(C) 砂層 1238  
 SR03(C) 黒色粘土下砂層 1239~1252

第169図 SR03(C)出土遺物(3)(1/4、1/2)

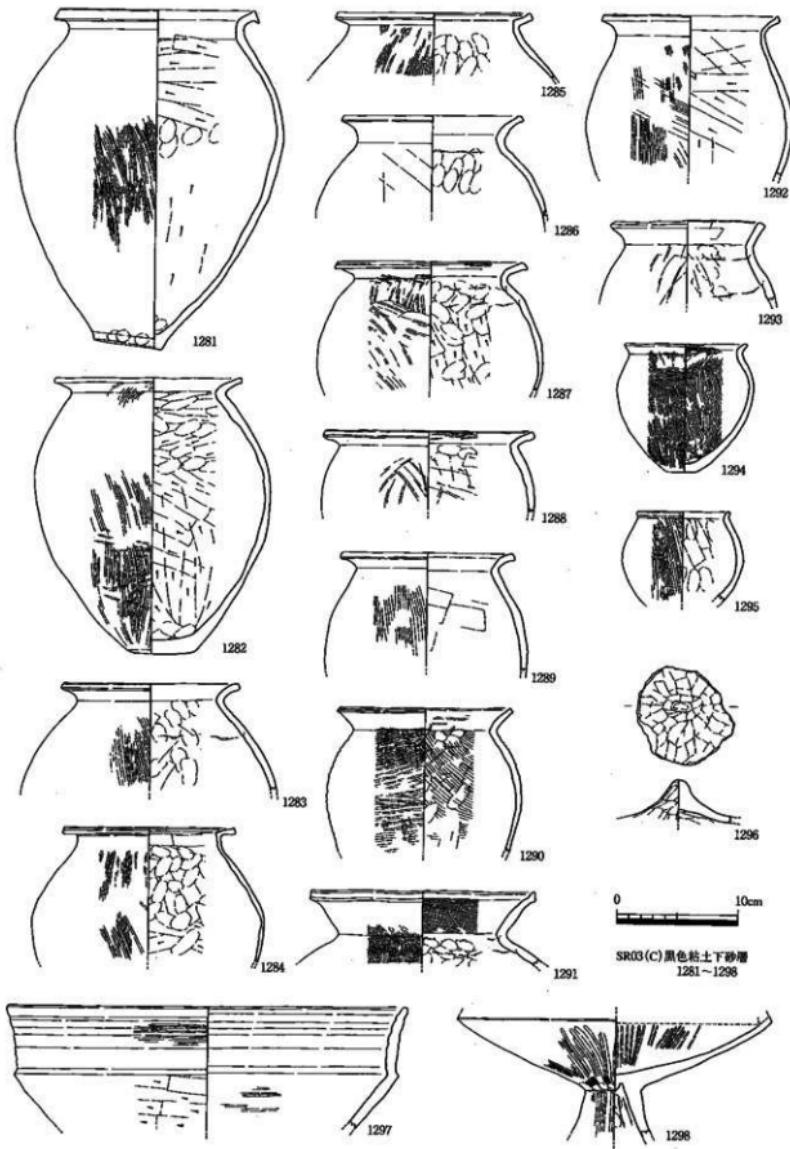


第170図 S R 03(C)出土遺物(4)(1 / 4)

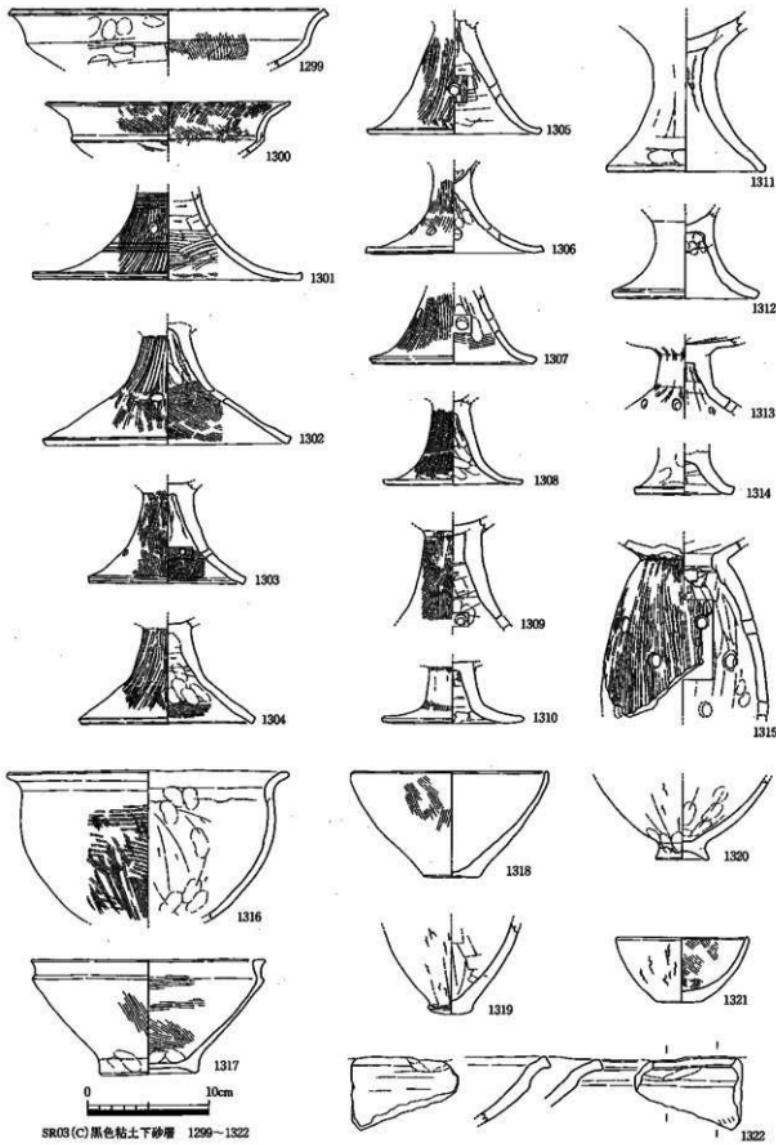


SR03(C)黒色粘土下移層 1270~1280

第171図 S R03(C)出土遺物(5)(1/4)

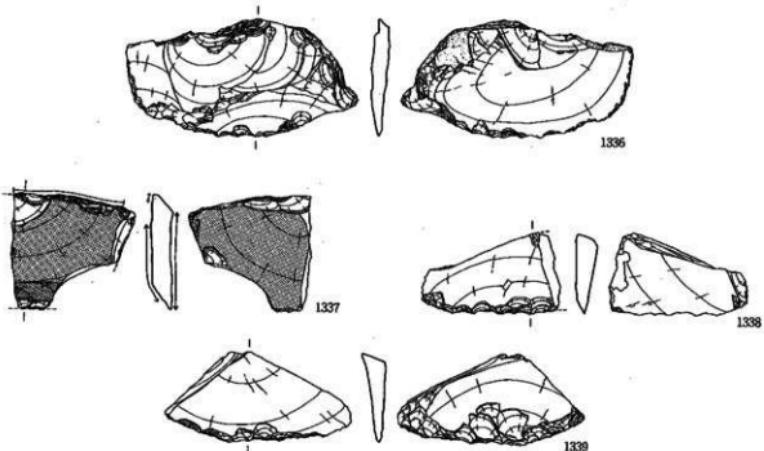
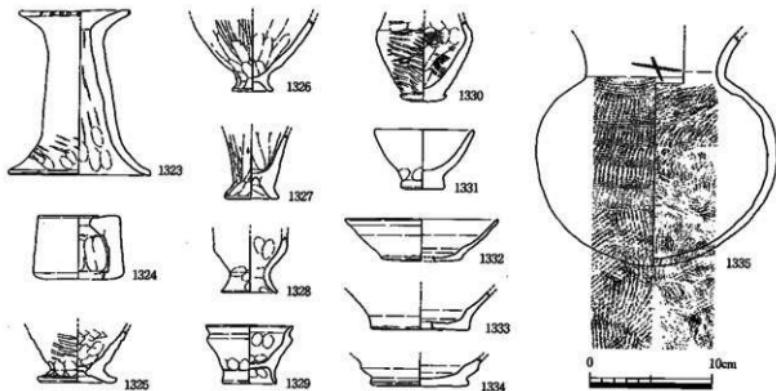


第172図 SR03(C)出土遺物(6)(1 / 4)



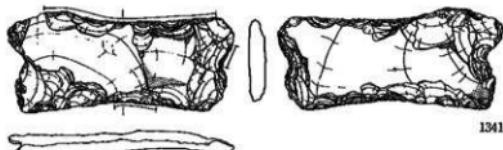
SR03(C) 黒色土下砂層 1299~1322

第173図 S R03(C)出土遺物(7)(1/4)

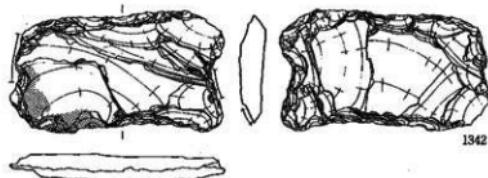


SR03(C) 黑色粘土下砂器 1323~1340

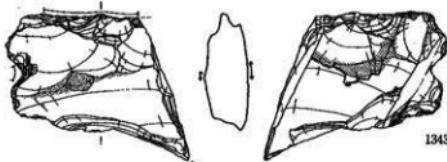
第174図 S R03(C)出土遺物(8)(1/4、1/2)



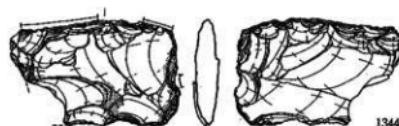
1341



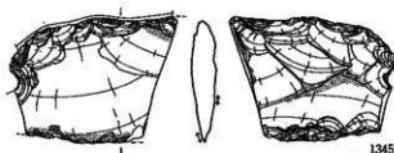
1342



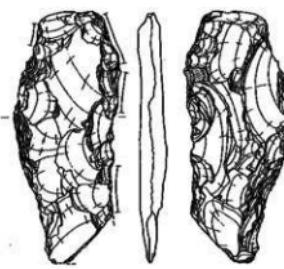
1343



1344



1345

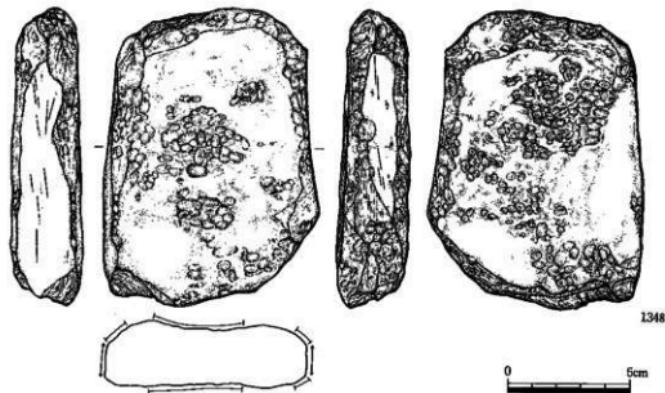


1347

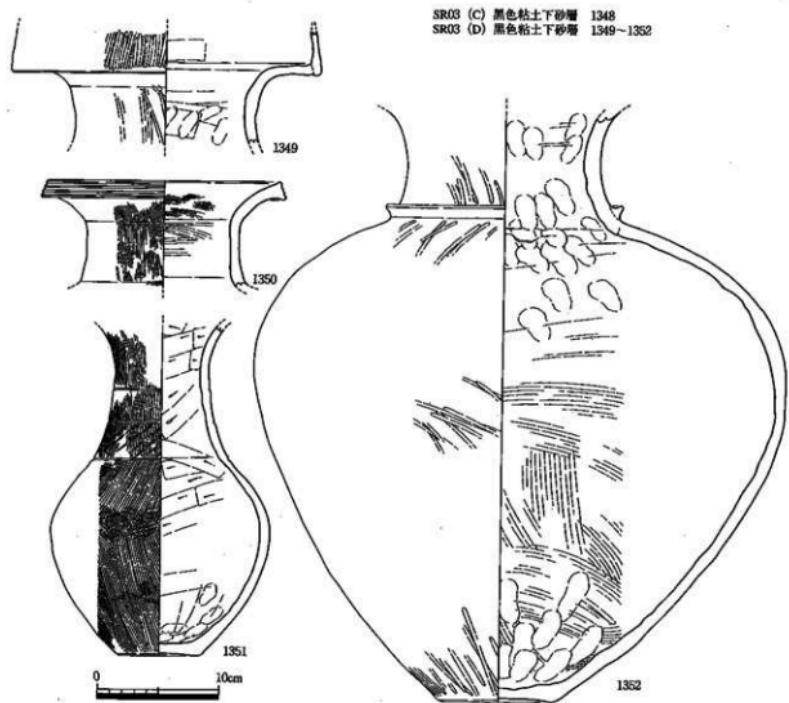
SR03 (C) 黒色粘土下砂層 1341~1347



第175図 S R03(C)出土遺物(9)(1 / 2)

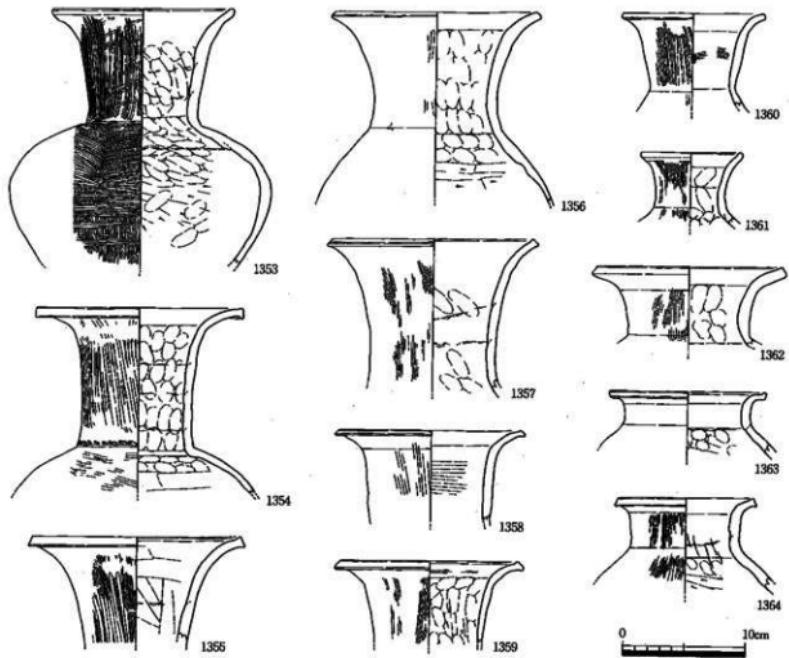


SR03 (C) 黑色粘土下砂層 1348  
SR03 (D) 黑色粘土下砂層 1349~1352

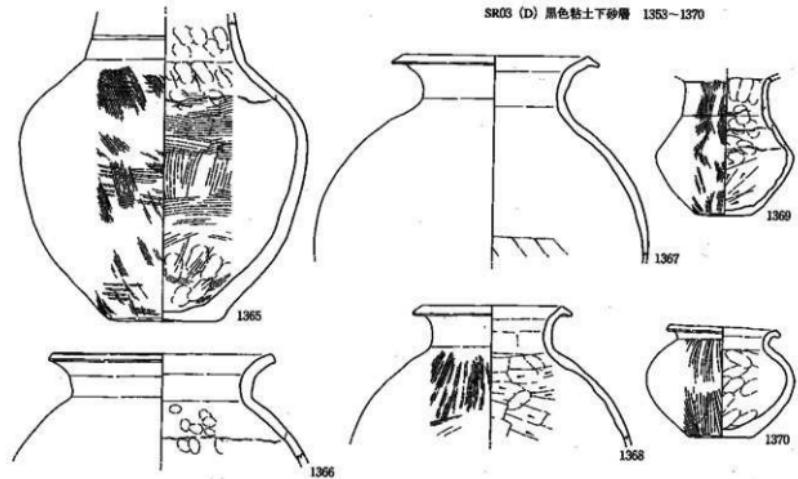


第176圖 SR03(C・D)出土遺物(1/4、1/2)

ある。1266は口縁端部の開きは小さい。1267は短い頸部で大きい体部が付く。1268・1269は底部。いずれも平底で、1268は丸みを持つ体部、1269は体部は直線的に延びる。1270～1295は壺。1270は口縁端部に凹線を持つ。弥生時代中期後半。1271・1276～1278・1280・1281は口縁端部が広めの平坦面を持ち、頸部の屈曲は緩い。1278は外面にハケを施した後、粗いヘラミガキをする。1279は内外面ともにヘラミガキを施す。弥生時代中期後半。1281はしっかりとした平底を持つ。1274・1275・1290は頸部が鋭く屈曲し、外面は叩いて成形するだけである。1275は口縁端部までタタキ痕跡が残る。1282・1283は外面をハケ、内面は板ナデまたはヘラ削りで、1282は体部外面にタタキ痕跡を残し、底部は平底状を呈す。1284・1285は下川津B類。外面はハケで内面には指押さえ痕跡が顕著にある。1284は体部中位の内面にはヘラミガキが、内面にはヘラ削りが施される。1287・1289は外面にナデに近い、痕跡をあまり残さないハケ、内面にはヘラ削りする。1291はくの字に開く壺でやや新しく、古墳時代前期まで下るもの。1294・1295は直径8～10cm程度の小型のもの。口縁部は短く、外面はハケ、内面はハケ(1294)、板ナデ(1295)する。1296は壺。外面には3段の板ナデ、内面には指ナデ痕を残す。1297は鉢。口縁部外面と底部内面にヘラミガキ痕跡を残し、底部外面には横方向のヘラ削りをする。下川津B類。1298～1314は高壺。1298は杯部内外面とともに放射状のヘラミガキを施す。脚部外面にもヘラミガキ痕を残す。杯部分の底部と体部の境はきれいに剥離している。1299・1300は杯部。1300は杯体部内面にハケの後縱方向のヘラミガキがある。1301～1313は脚部。1301は脚部の中位と下位に沈線を巡らせる。外面は縱方向に密に、内面には下部に横方向のヘラミガキを行く。穿孔は残存部分では2孔あるが、均等に孔があれば3孔であったと思われる。1302は外面上半部にヘラミガキ、下半部には内外面ともにハケを残す。穿孔は4個所にあった。杯部との境はきれいに剥離する。1303はやや不均等に4個所に穿孔し、上部の杯部との境はきれいに剥離する。1305は外面にヘラミガキし、内面はヘラ削りする。脚部上端部分には杯を接合した際の剥離痕跡がきれいに残る。穿孔は3個所残り、均等にあるとすれば4孔あったと考えられる。1306は杯部の底部に当たる部分が窪んでいる。穿孔は2孔1対のものが3個所あり、合計6個所の穿孔がある。1309は2個所に穿孔があるが全容は不明である。1311は丸みを持つ杯部が付き、底部を充填した痕跡がある。弥生時代中期後半。1313は脚部の中位で屈曲する。2孔残存しており、均等に穿孔があれば6～7個所に穿孔があったと考えられる。1315は器台脚部。外面はハケの後密にヘラミガキし、脚部に3段に穿孔がある。穿孔は残存部分から1段につき6個所程度と考えられる。1316～1321は鉢。1316は口縁端部を外側へ屈曲させる。1317は体部上部で稜線を持ち、口縁端部は面を持つ。底部は平底である。内外面にハケを施す。1318～1321は椀形の器形。1318は外面にわずかにハケがみえるが、きれいになでつけ、調整痕をほとんど残さない。1319は押さえつけたような底部で、外面にはクラックを残す。1320はわずかに台が付く。1321は底部内面に放射状のハケの工具痕を残す。外面にはクラックが残るが、平滑に仕上げている。1322は片口鉢。1323・1324は支脚。1323は上方がすぼみ気味の円筒形状で、上・下部ともラッパ状に開く。口縁端部には刻みが付く。1324は低めの円筒形のもの。上部には円形に孔があく。残存部では上面が若干傾斜しており、上部は傾斜する器形かもしれない。1325～1328は製塙土器。1325は外面はタタキ痕を顕著に残し、底部外面には指押さえ痕を顕著に残す。内面には横方向の板压痕を残す。1327は外面をヘラ削りする。1328は摩滅が進み調整は不明。底部は残らないが、一番くびれた部分は色が薄く、元々この部分に底部を充填していたと思われる。1329・1330はミニチュア壺。1329は摩滅が著しい。高台は薄く、接合部の内外面には指押さえ痕が残る。1330は底部を押し潰して作る。外面にはタタキ痕が明瞭に残り、内面にはハケを施す。1331はミニチュア鉢。椀形の器形。摩滅が著しい。



SR03 (D) 黒色粘土下砂層 1353-1370



第177図 SR03(D)出土遺物(1 / 4)

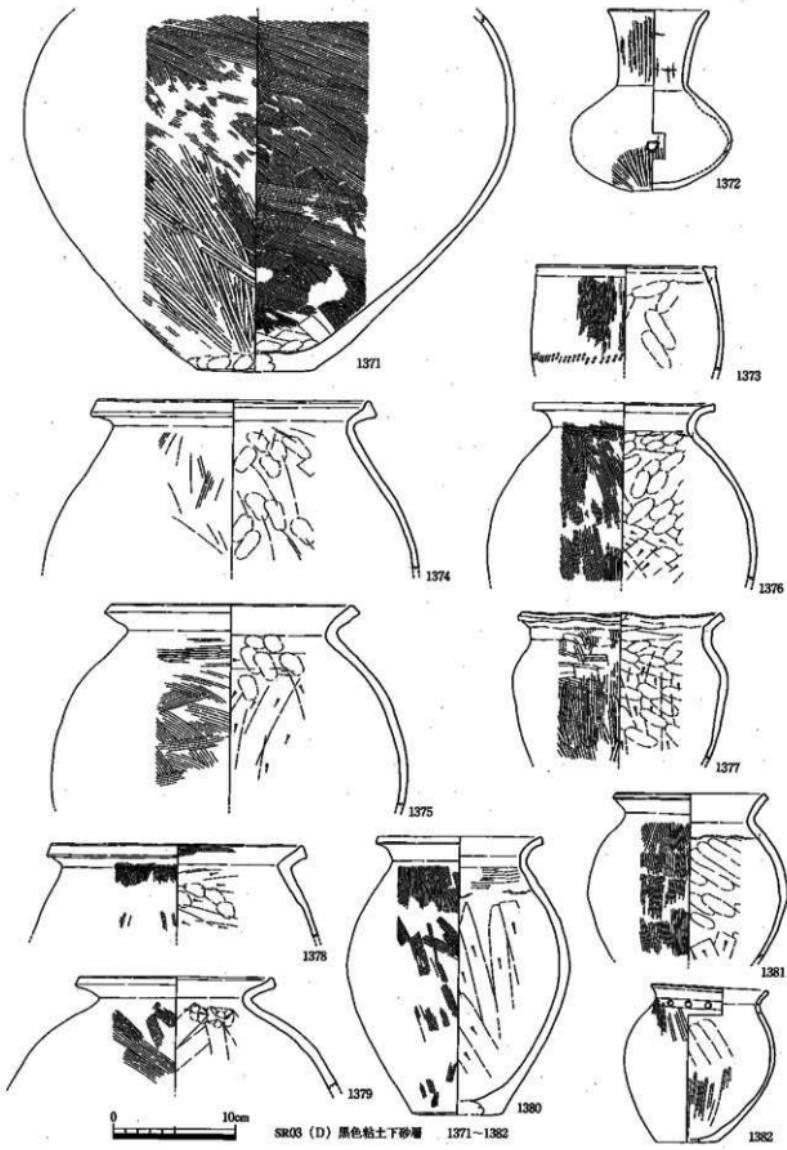
1332～1334は土師器杯。1332は回転台土師器。1333は円盤状高台を持つもの。1334は高台の少し上部に稜を持つもの。底部外面に板压痕がある。1335は須恵器壺。口縁端部を除いて完形。外面はタタキの後カキ目、内面には青海波紋を明瞭に残す。1336・1338～1340はスクレイバー。サヌカイト製。1337は楔形石器。下側一部は欠損。全体にローリングを受けるが、刃部の内側の稜線が特に磨滅する。1341～1346は石庵丁。1343は潰れのない錐がきちんと成形されておらず、未完成のまま折損したと思われる。1347は打製石斧。1348は叩き石。両面中央部付近と側縁部との境に敲打痕を残す。側縁の2個所に擦痕を残し、この部分は砥石として使用したようだ。鞍山岩製。

弥生時代中期後半～後期前半頃のものを多く含む。1332～1335は紛れ込みと思われる。

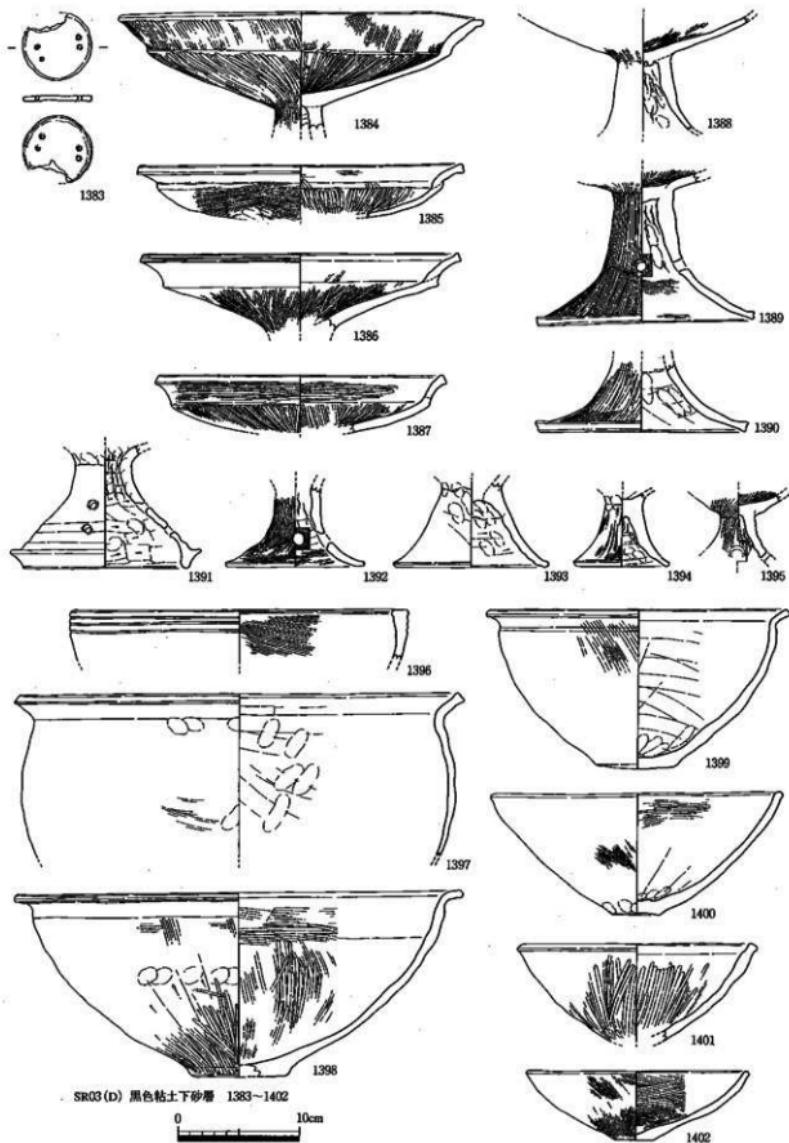
#### S R03 (D) 黒色粘土下砂層 (第176～181図、図版61～64・84・90)

S R03D部分（6区①北）で検出した砂質土層である。S R03C部分（6区①南）の黒色粘土下砂層に連続する層位である。S R03C部分とD部分の境付近の様相が不明瞭であるが、畔S R03 (D) 部分では黒色粘土層の下部の厚さ20cm程度の青灰色粘土・砂質土層が相当する。この層はS R03D部分の北壁土層では50～60cmの堆積となり、おそらく北壁土層に平行する方向に近い方向で東へ抜けると思われ、6区①東壁土層では中央付近でS R03の上がりがみられる。グライ化が著しい。遺物は多量に出土した。

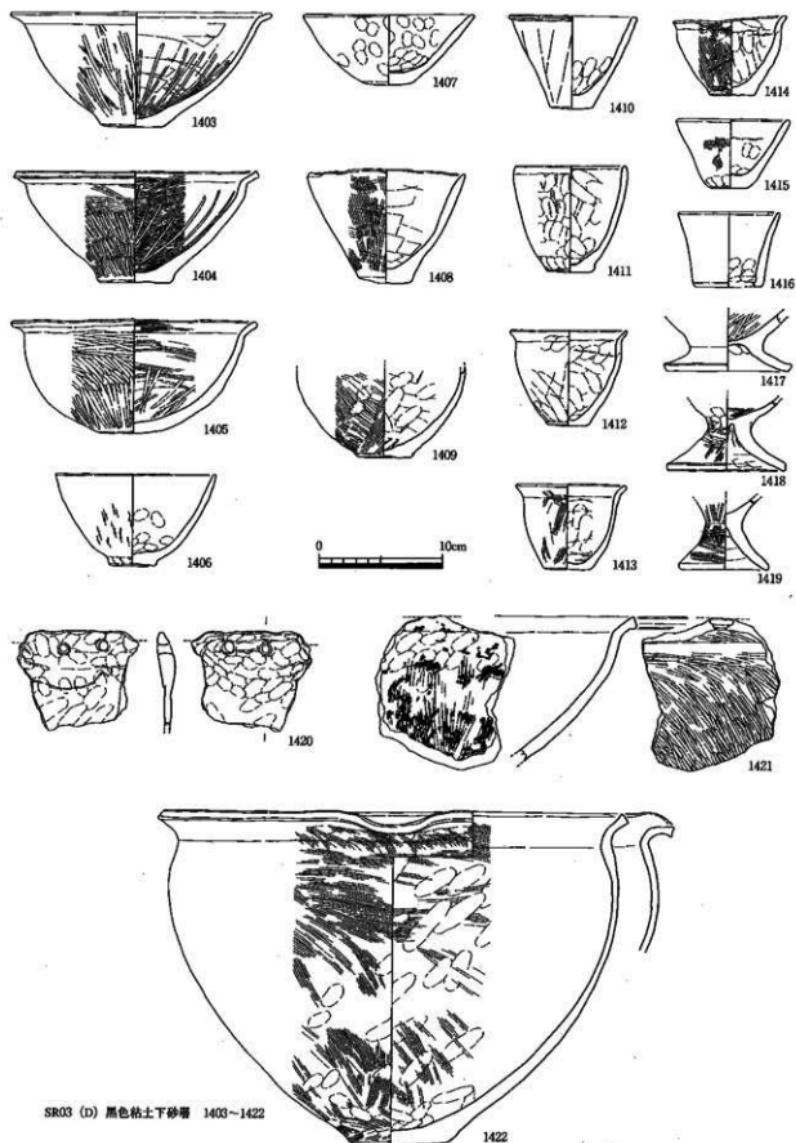
1349～1372は壺。1349は二重口縁壺。外面には縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデする。口縁立ち上がり部分は口縁の基部の上面ではなく外側に貼り付けて作る。胎土中に角閃石を多く含む。1352は大形の壺で頸部と胴部の境付近に突帯を持つ。1351・1353～1361・1365・1372は頸部の長い広口壺。1351は外面ほぼ全体をハケ調整し、頸部に2条、体部と頸部の境に1条の沈線を巡らせる。頸部の下部、沈線と沈線の間に右上がりの斜線文をヘラ状の工具を入れる。1353は外面をきれいに磨く。1354は頸部と体部の境に刺突文を施す。下川津B類。1356は摩滅が進むが、1353と同じ様なタイプであろう。1359は口縁端部を上方へやや拡張する。下川津B類。1365は頸部の下部に沈線が1条残る。1360・1361・1372はやや小型品。1361は外面をハケで、1360と1372は外面をヘラミガキで調整する。1372は体部中程に焼成後の穿孔がみられる。1350・1362～1364・1366～1370は短めの頸部から口縁部が広がる広口壺。概ね外面は縦ハケ、内面は頸部は指押さえまたはナデ、体部はヘラ削りである。1369・1370は小型のもの。1369は口縁部が欠損するが、同様の器形になると考えられる。体部の中央部が張り、平底を持つ。1370は体部外面をヘラミガキで仕上げる。1371は壺の体部。内面はハケ調整、外面はハケの後ヘラミガキする。1373～1382は壺。1373は体部中程に列点文を巡らせる。口縁端部外側に剥離痕跡があり、ここに口縁を付けてL字状にしていたと考えられる。弥生時代中期初頭。1374・1375・1378・1379は口縁部と体部の境が強く屈曲するもの。外面はハケ、内面はヘラ削りする。口縁端部を上方へ拡張するもの（1374・1379）、四角くするもの（1375・1378）がある。1376・1377・1380・1381は口縁部が緩くカーブしながら立ち上がる。外面はハケ、内面は1376は上半部を指押さえ、下半部をヘラ削り、1380は上半部を横方向のハケ、下半部をヘラ削りする。1377は頸部のようなものが付く。口縁部はガタガタで、体部も部分的にハケで調整した後余分な粘土を掻き取るように板ナデをする。1382は口縁部に穿孔するもの。残存部分で3孔1組の穿孔が一個所に残る。外面と内面下半部にヘラミガキし、底部は平底にする。1383は壺。2孔1対の穿孔が概ね対角線上に2個所につく。摩滅が著しく、調整は不明。1384～1395は高壺。1384～1387は杯部。いずれもヘラミガキを密に施すが、内外面とも縦・放射状にヘラミガキするもの（1384・1386）、内面は横／放射状（1385・1387）、外面は分割ミガキ（1385）、横／放射状ミガキ（1387）のものがある。1384は口縁端部内面にわずかに段を持ち、内面の口縁部と底部の境の屈曲部分に沈線を



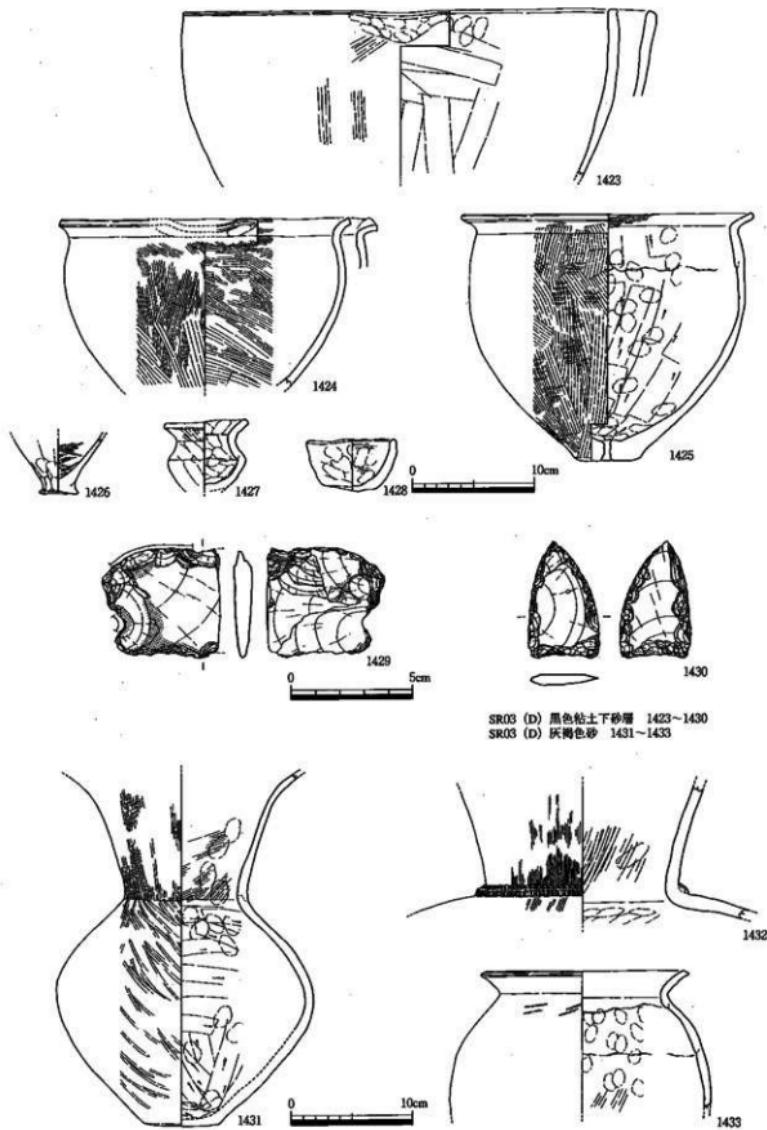
第178図 SR03(D)出土遺物(2)(1/4)



第179圖 S R 03(D)出土遺物(1 / 4)



第180図 S R03(D)出土遺物(1 / 4)



第181図 SR03(D)出土遺物(15)(1/4、1/2)

持つ。1388・1389は杯部の底部内外面に放射状のヘラミガキを施すものと考えられ、脚部はおそらく縱方向にヘラミガキをする。1388は杯部に脚部を押し付けた様な接合痕跡が脚部と杯部の境に残る。杯部の外側中央部付近（脚部に隠れる場所）には深い円形の窪みがある。1389は脚部にはほぼ均等に4箇所に穿孔を施す。1391は脚部端部を大きく拡張させ、脚部はやや膨らみながら内面をヘラ削りして薄くする。穿孔は上段4箇所、下段1箇所に残り、上・下段の穿孔はほぼ直線上にあける。おそらく上下2段に4孔ずつ穿孔があったのだろう。一番くびれた部分に底部が充填されていたと考えられるが、その痕跡には残らない。1392・1395は脚部筒部に縱方向のヘラミガキをし、1395は杯部に放射状のヘラミガキを残す。脚部にはほぼ均等に4孔の穿孔を入れる。1396～1424は鉢。1396は口縁端部を平らにし、外面に凹線を3条施す。弥生時代中期後半。1397～1399・1403～1405は口縁端部が外側へ屈曲するもの。1397はやや胴が張り、臺を浅くしたような器形。1398は口径37cm前後になる大型の鉢。内外面ともにハケの後ヘラミガキする。1403～1405は口径20cm前後のもの。外面には密なヘラミガキ、内面にもやや粗な縱方向のヘラミガキをする。1400～1402・1406～1409は楕形のもの。1400・1401は口径20～24cm前後の楕形の鉢。1400は外面を縱方向のハケ、内面を横方向のハケを、1401は内外面にヘラミガキをする。1400は体部に粘土の継ぎ目がある。1406～1408は口径13cm前後の楕形の鉢。1406・1407は指押さえやナデ以外の調整痕跡はほとんど観察できず、1406は外面にクラックを顕著に残し、底部は押し潰すようにして作る。1408は外面はタタキ後ハケで調整する。1410～1413は口径9cm前後、器高7～9cmとやや深めのものの。口縁部は楕形のもの（1410・1411）と口縁端部を外側へ屈曲させるもの（1412・1413）がある。1413が外面にハケ調整を残すほかは、あまり調整痕跡がない。1411は外面にクラックが目立つ。1412は黒色粘土層との接合資料である。1414～1416は口径8～9cm、器高6cm程度の小型のもの。1416は底径と口径のあまり差のない器形。1417～1419は脚付の鉢。1420は口縁端部は屈曲せず、2孔の穿孔がある。穿孔の周囲は指押さえ痕跡が顕著に残る。1421はやや大型と思われる鉢。口縁端部を屈曲させ、内外面ともにヘラミガキを密にする。内面には赤色顔料（水銀朱）がべつとり付着する。1422～1424は片口鉢。1422・1424は口縁端部を折り曲げるもので、内外面ともハケで仕上げる。1424は上半と下半ではハケの原体を変えている。1423は口縁端部をまっすぐに終わらせるもの。1425は瓶。1426は製塙土器。1427・1428はミニチュア土器。指押さえの凹凸が顕著で口縁部はガタガタである。1429は石窓。半分は欠損。表面・刃部が磨滅する。1430は石礫。平基式、ともにサヌカイト製。

この層位から出土した土器は概ね弥生時代後期前半～中葉頃が主である。

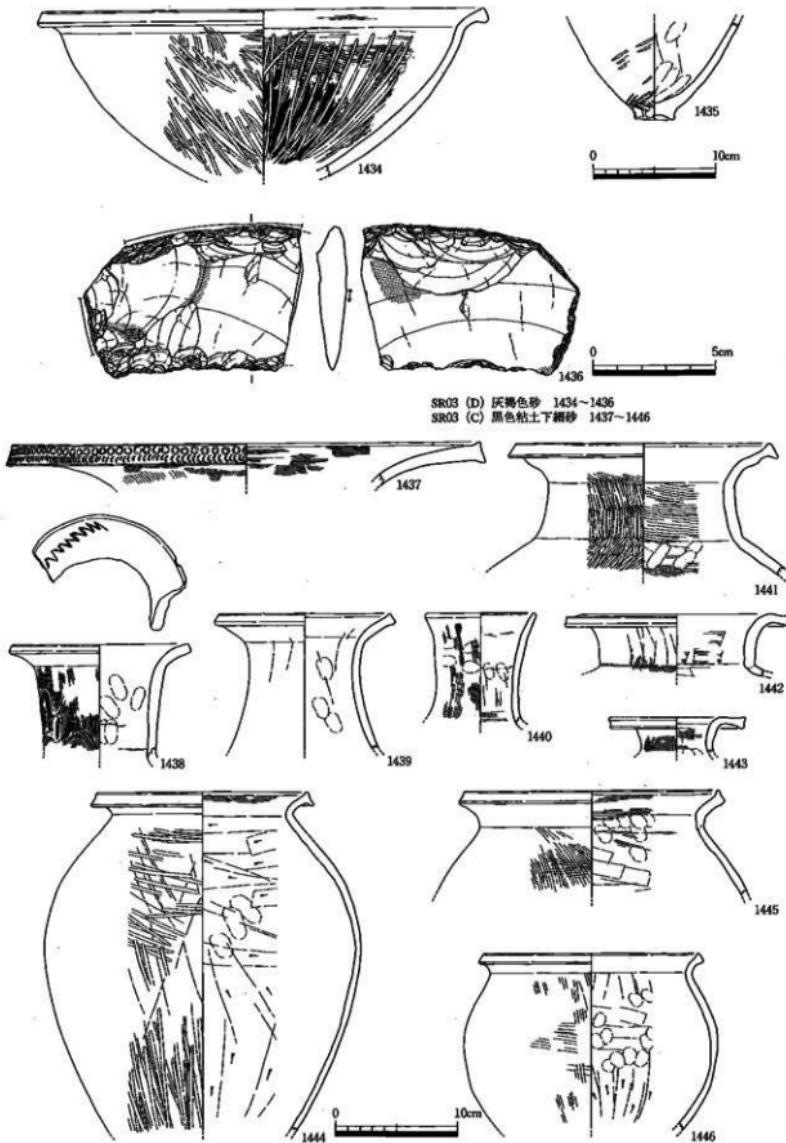
#### S R 03 (D) 灰褐色砂（第181・182図、図版64・65・83）

S R 03D部分（6区①北）の東肩付近で検出した層位である。検出した範囲は狭い。黒色粘土の下部に堆積する。この層が認められる場所では黒色粘土下に堆積する青灰色砂層の上層に堆積するが、基本的には青灰色砂層と同一層位と思われる。

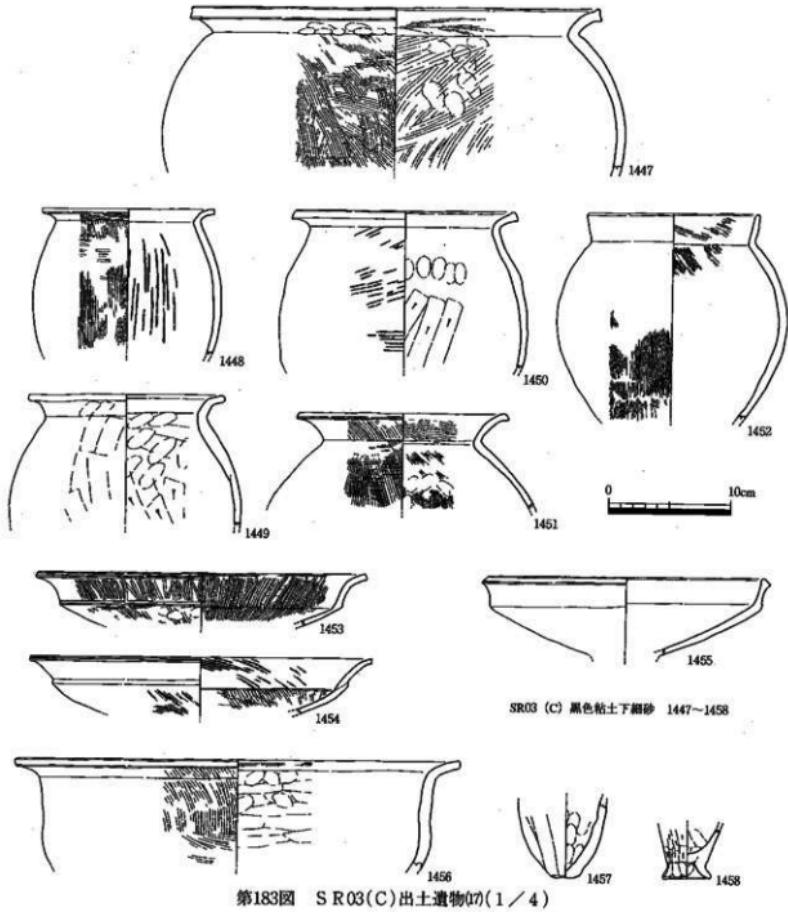
1431～1435は弥生土器。1431・1432は壺。1431は長めの頸部に緩やかに開く口縁部を持つ。外面は頸部はハケ、体部はヘラミガキをする。1432は頸部に突帯を貼り付け、そこに2段の刻みを付ける。1433は壺。1434・1435は鉢。1434は口縁部を外側へ屈曲させる器形で、外面は密なヘラミガキ、内面はハケの後やや粗なヘラミガキをする。内面には赤色顔料（水銀朱）が付着する。1436はスクレイバー。上縁と側縁を潰し、下縁に刃部を付ける。サヌカイト製。

#### S R 03 (C) 黒色粘土下細砂（第182・183図、図版65）

S R 03C部分（6区①南）で検出した層位である。黒色粘土の下部、砂層の上部に厚さ10cm程度堆積



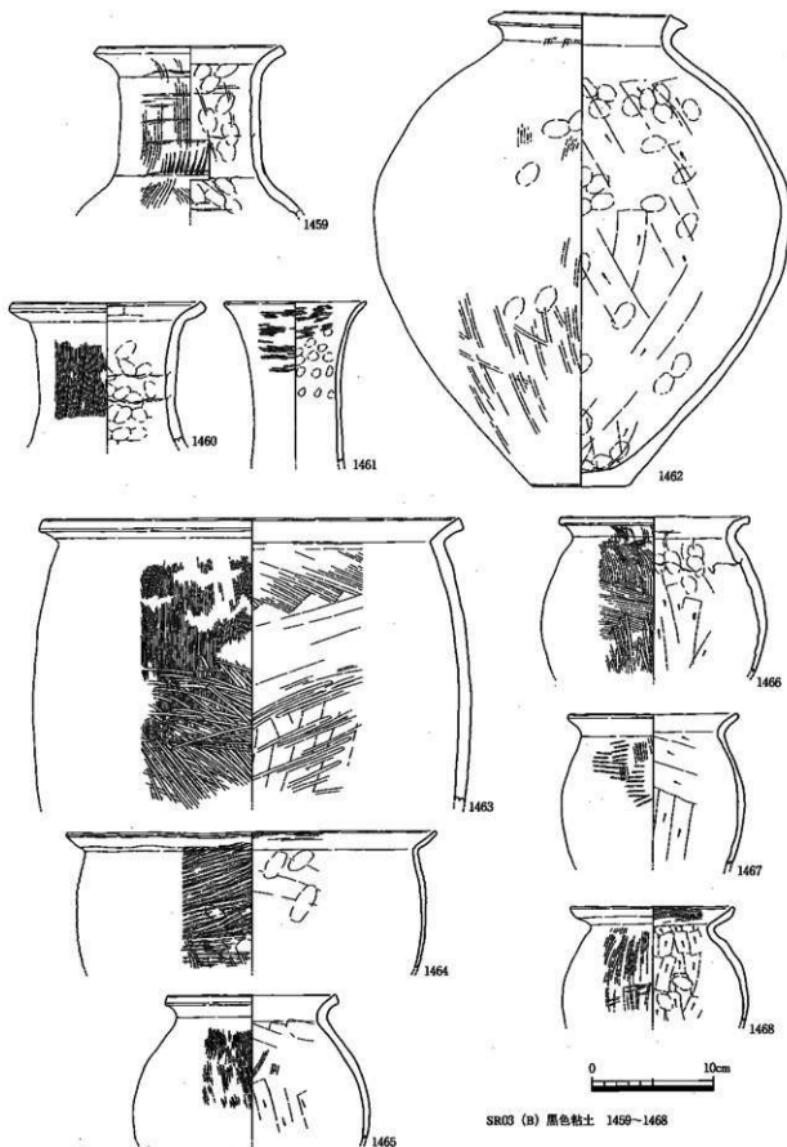
第182図 SR03(D・C)出土遺物(1/4、1/2)



第183図 SR03(C)出土遺物07(1/4)

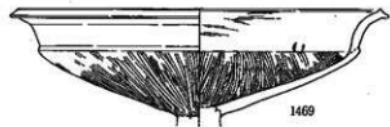
する。基本的な層位は黒色粘土層と同一と考えられる。

1437～1443は壺。1437は大きく開く口縁部で直立または外傾するやや短めの頸部が付くと考えられる。口縁端部には上部に竹管文、下部に半歳竹管文が連続的にスタンプされる。1243と同一個体と考えられる。1438・1439は長い頸部に口縁部が開くもの。1438は頸部に波状文が2段に施され、口縁部内側にも部分的に波状文が施される。1440は頸部はほぼ直立する長めの頸部で、口縁端部はほとんど開かない。1441～1443はほぼ直立する短めの頸部に口縁端部が大きく開く器形。外面は縦方向のヘラミガキ(1441)またはハケ(1442・1443)、内面は横方向のハケをする。1444～1452は甕。1444は口縁端部に面を持ち、外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りする。1448は内面にヘラ状の圧痕が縦方向に数条みられる。1451は

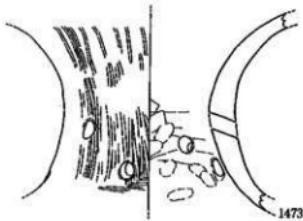


SR03 (B) 黒色粘土 1459~1468

第184図 S R03(B)出土遺物(8)(1 / 4)



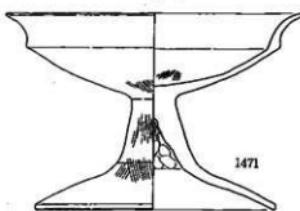
1469



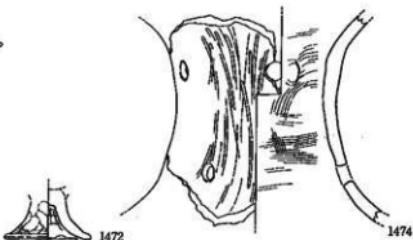
1473



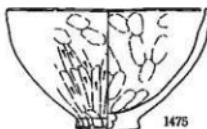
1470



1471



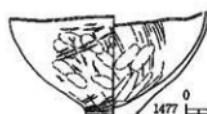
1474



1475

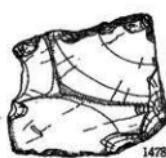
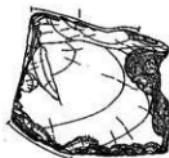


1476



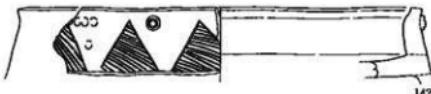
1477

10cm

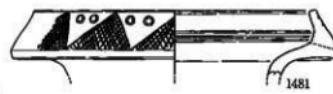


1478

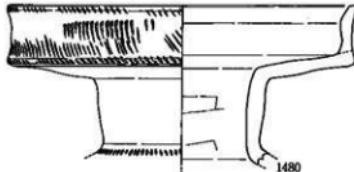
0 5cm



1479



1481



1480



1482

SR03 (B) 黒色粘土 1469~1478

SR03 (C) 黒色粘土 1479~1482

0

10cm

第185図 S R03(B・C)出土遺物(1/4、1/2)

口縁部がやや長めのもので、やや後出するもの。1452は口縁部が直立するもの。ほぼ球形の体部で内外面ともハケで仕上げる。1453~1455は高坏。1453・1454は内外面に概ね縱方向のヘラミガキを施す。1455は杯部の口縁部がほぼ直立して立ち上がり、端部は面を持つ。1456・1457は鉢。1456は口縁部が外側へ屈曲し、体部は真下に下がる。1458は製塙土器。外面はヘラ削りする。

#### S R03 (B) 黒色粘土 (第184・185図、図版65)

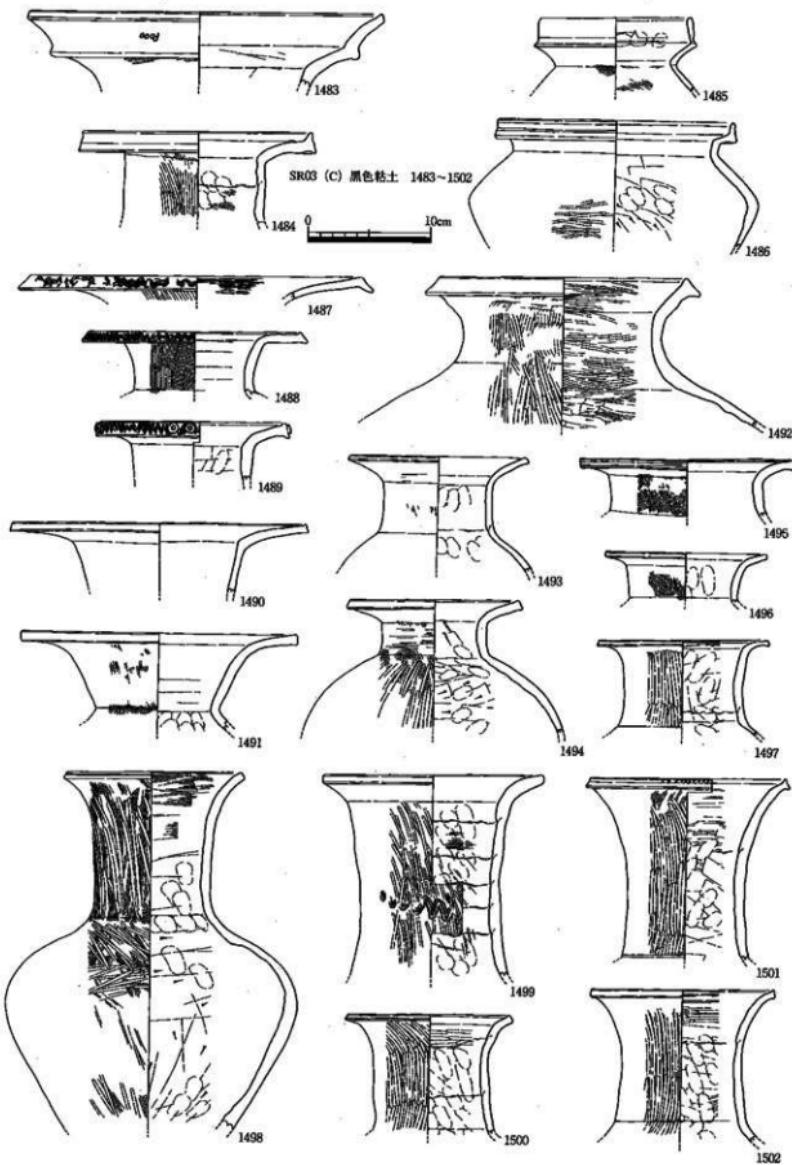
S R03B部分 (6区②南) の北西隅で検出した層位である。S R02に連続する層位とも考えられるが、幅は広くても10m程度と狭い。この層位は S R03C (6区①南)・D (6区①北) 部分では広範な範囲で認められるものとなる。この層から出土した土器は全て弥生土器である。

1459~1461は壺。1459・1460は直立する長めの頸部から口縁部が開くもの。外面はハケ、内面は指押さえで粘土の雜ぎ目痕跡が顕著に残る。1459は頸部の下端付近に部分的に縱方向のヘラ状の圧痕がある。1462~1468は壺。1462は大型のもの。口縁端部位は広めの面を持ち、外面下半部はヘラミガキ、内面はヘラ削りする。1463は内外面ともハケの後中位以下を丁寧にヘラミガキする。体部は丸みを持たない。弥生時代中期後半。1464は薄い作りで口縁端部まで叩き出して成形する。1466・1467は頸部の屈曲が弱く、口縁端部に面がある。外面はハケで、1466には下半部にヘラミガキが観察できる。内面は中位より下側をヘラ削りする。1467・1468は頸部がやや鋭く屈曲するもので、外面はタタキの後ハケ、内面は体部上位からヘラ削りをする。1469~1472は高坏。1469・1470は杯部内外面を放射状にヘラミガキし、1470は口縁部内面も横方向にヘラミガキする。1471は摩滅が著しいが、杯部内面にわずかに放射状と思われるヘラミガキが観察できる。1472は手捏ねと考えられる。杯部は欠損する。指押さえの凹凸が顕著で内面に絞り目が残る。1473・1474は器台。外面をヘラミガキし、内面は板ナデまたはハケを施す。1475~1477は鉢。いずれも楕形で、口径は14cm~17cmのもの。1475はしっかりした平底を持ち、外面はヘラ削りする。1477は外面にタタキ痕跡を残すが、クラックを多く残す。歪みが著しい。1478はスクレイバー。サヌカイト製。上縁と下縁の一部を潰している。

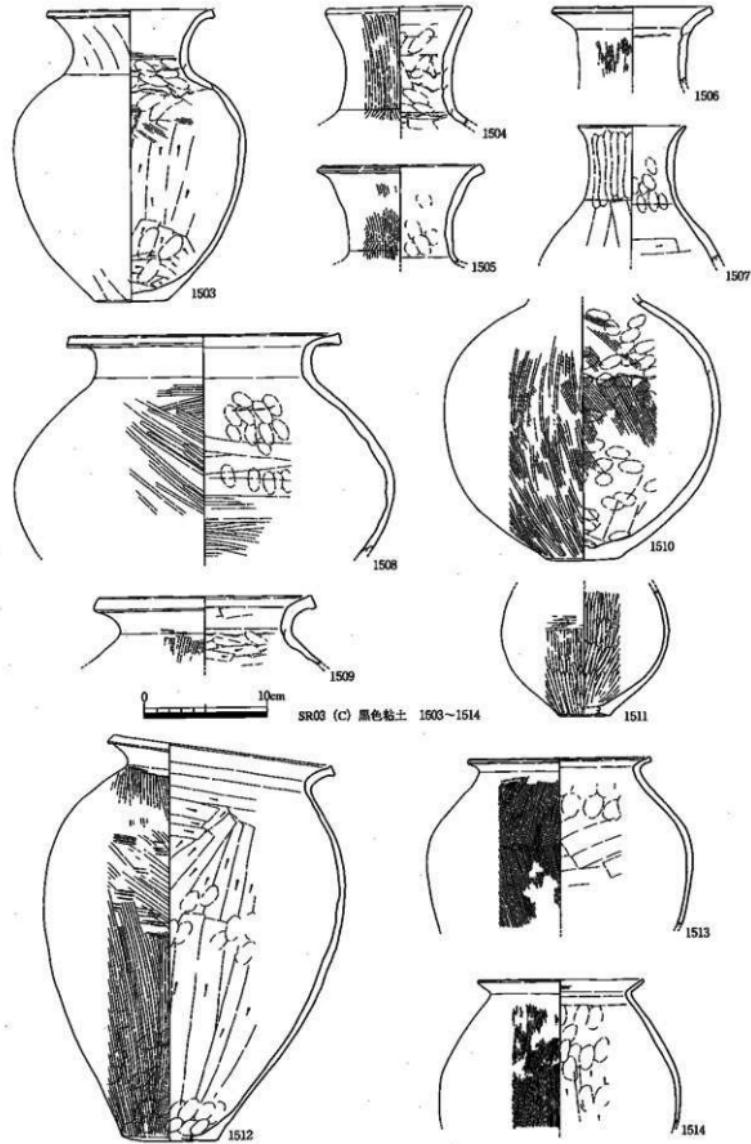
#### S R03 (C) 黒色粘土 (第185~192図、図版66~69・85・86・91)

S R03C部分 (6区①南) ではほぼ全面で認められるものである。S R03B部分の北東隅から入り込み、ほぼ西半部で厚さ約50cmにわたって堆積していた。これは S R03D部分 (6区①北) に流れ、最後には S R02へ続くと考えられる。

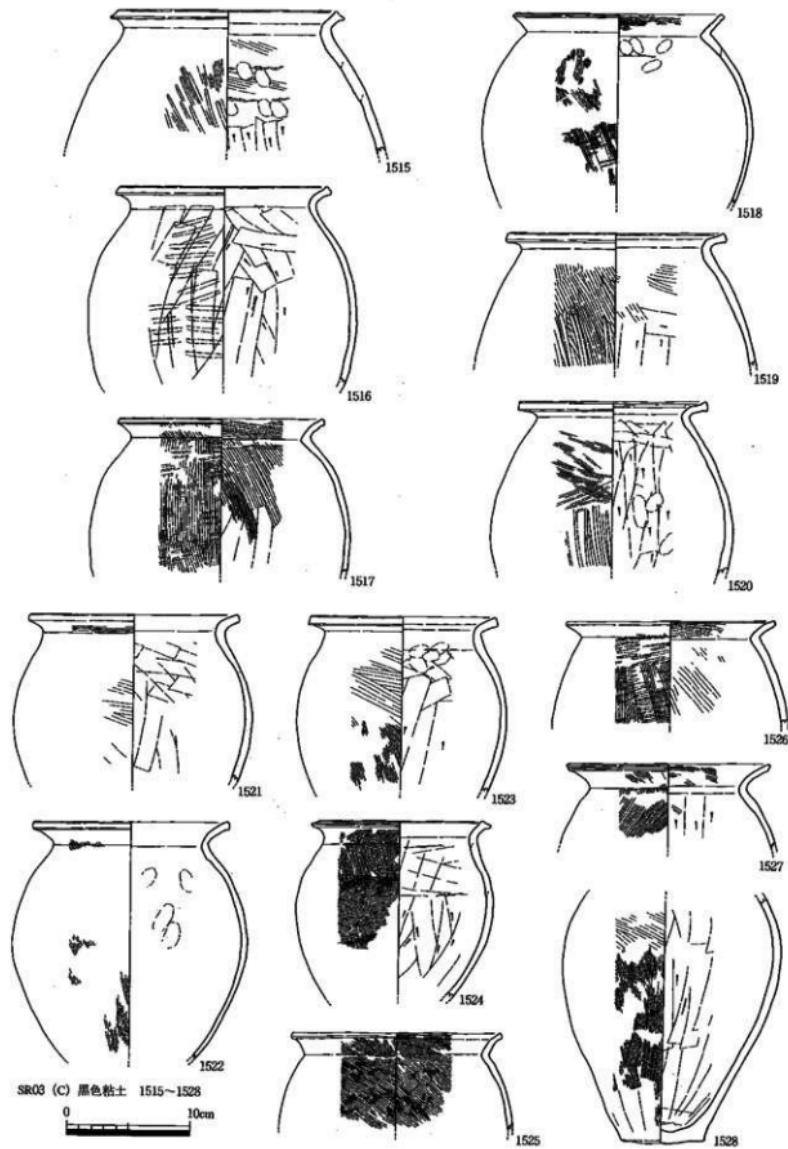
1479~1511は壺。1479~1483・1485は二重口縁壺。1479は口縁部に鋸歯文を飾り、その間には円形浮文や竹管文・薄い竹管文が施される。口縁部の下部にも粘土を貼り付けて拡張した痕跡がみられる1480は口縁部の上方と下方に刻み目を付け、頸部と体部の境にも刻み目を付ける。1481は内傾する口縁部に鋸歯文を描き、鋸歯文と鋸歯文の間に竹管文を2個ずつ施す。1486は算盤型の体部に短い直立する頸部が付く。口縁部は直立し、凹線が施される。体部には横方向のヘラミガキがある。1484・1487~1497は直立または外傾する頸部に大きく開く口縁部が付く。1484はやや長めの頸部で口縁端部は上下に拡張させる。1487は口縁部は大きく開き、口縁端部を下方へ大きく拡張させ、そこに波状文を施す。1488・1489は口縁端部に波状文を描き、1489には2個1単位の円形浮文を4ヶ所に張ると考えられる。1490・1491は頸部が外傾して立ち上がるもので、やや後出するもの。1492は大形の壺で頸部から上はハケ、下部は外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りする。1497はやや長めの頸部を持ち、口縁部を短く鋭く屈曲させる。外面はヘラミガキする。1498~1507は長めの頸部から口縁部が緩やかに開くもの。1498~1502・1504では頸部に縱方向の密なヘラミガキが観察され、1505・1506ではハケが施される。1499は頸部中程



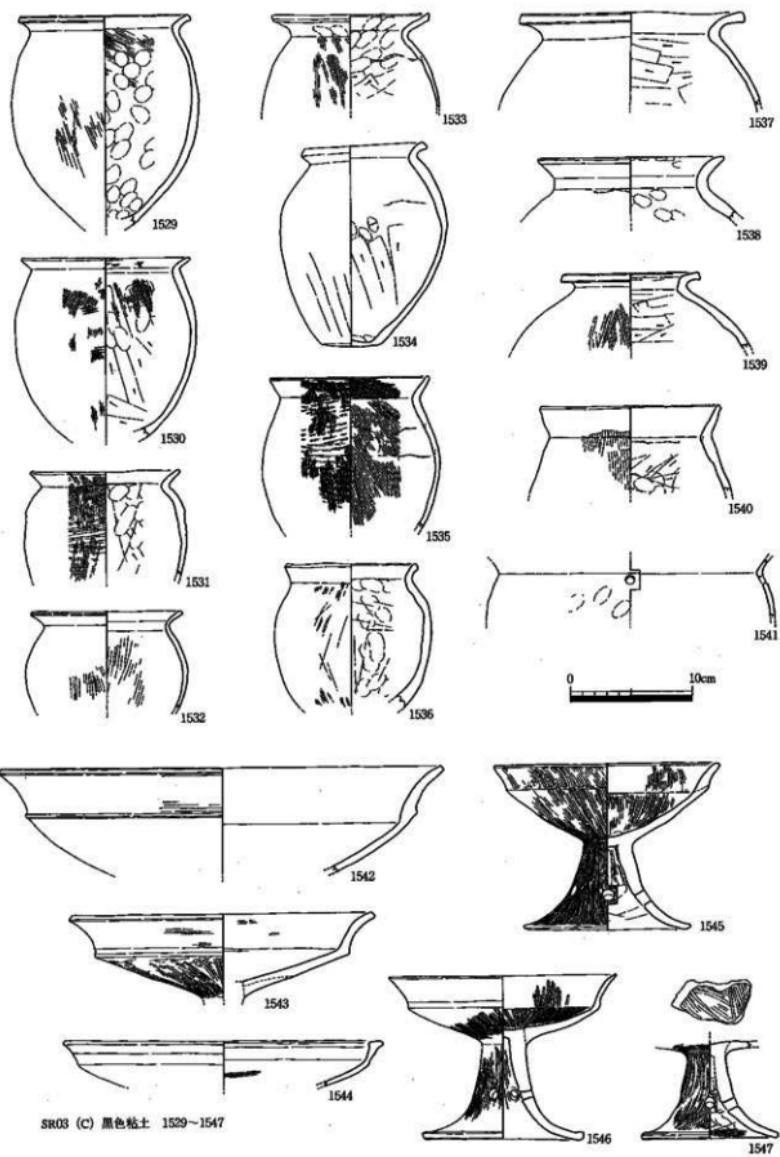
第186図 SR03(C)出土遺物20(1 / 4)



第187図 SR03(C)出土遺物(2)(1/4)

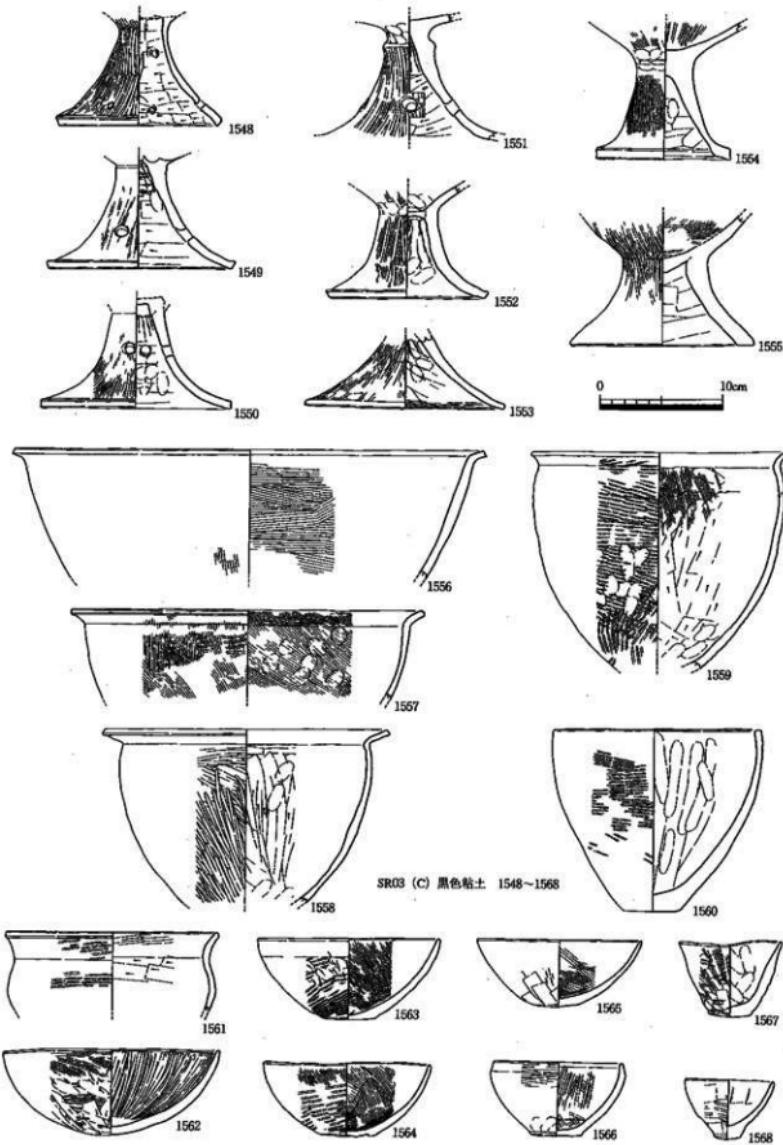


第188図 SR03(C)出土遺物(2)(1/4)

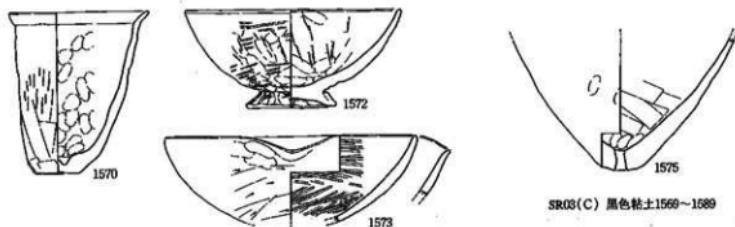
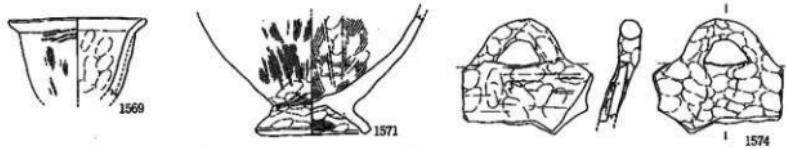


SR03 (C) 黒色粘土 1529~1547

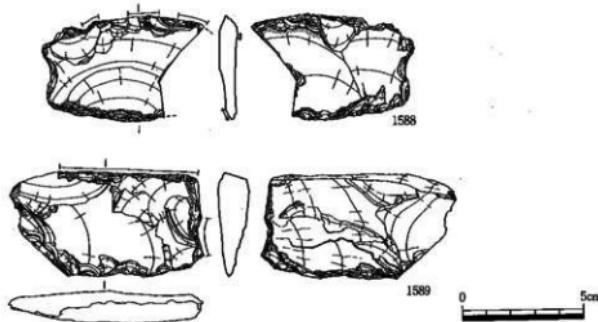
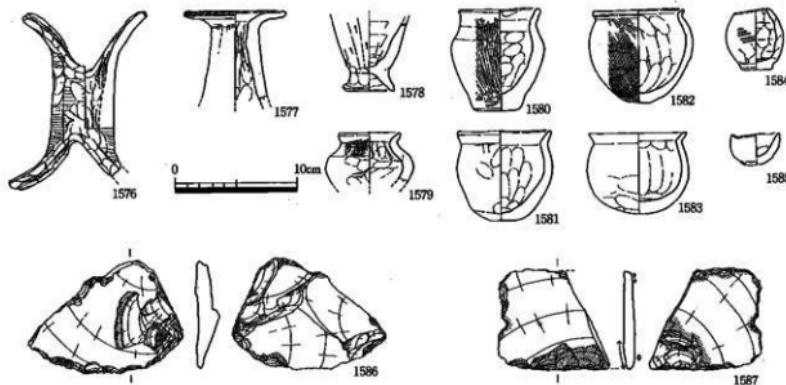
第189図 S R03(C)出土遺物(1/4)



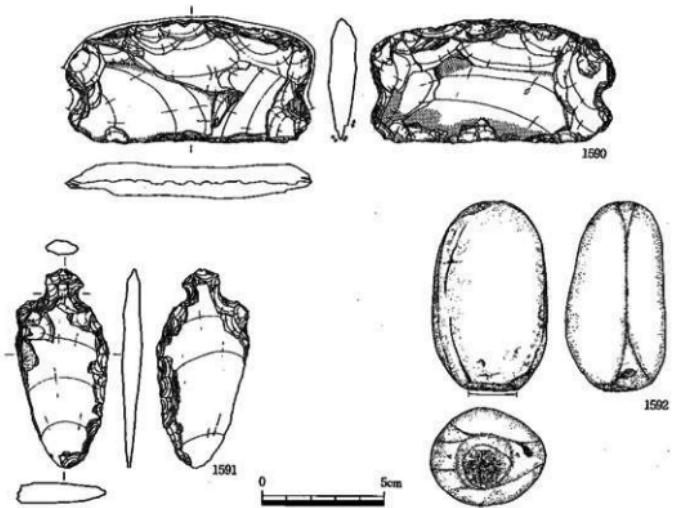
第190図 SR03(C)出土遺物24(1/4)



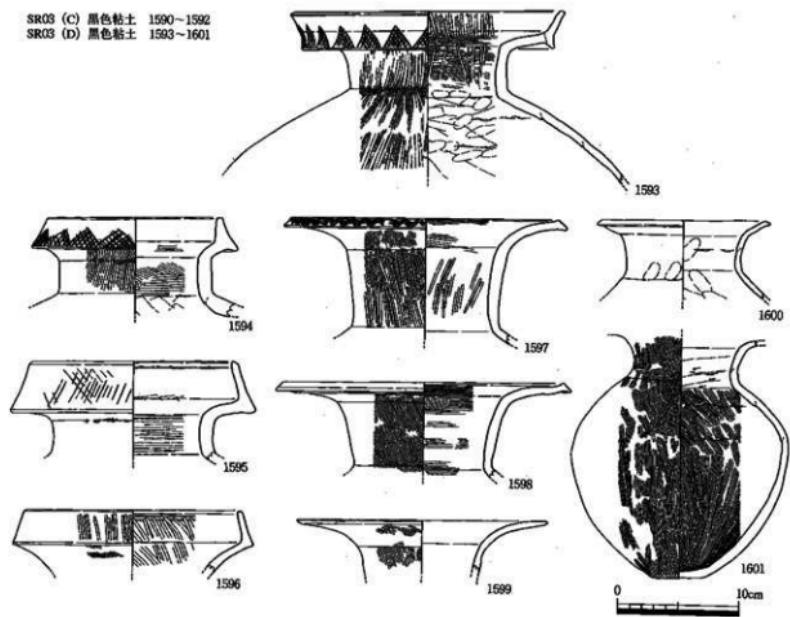
SR03(C) 黒色粘土 1569~1589



第191図 SR03(C)出土遺物(1/4、1/2)

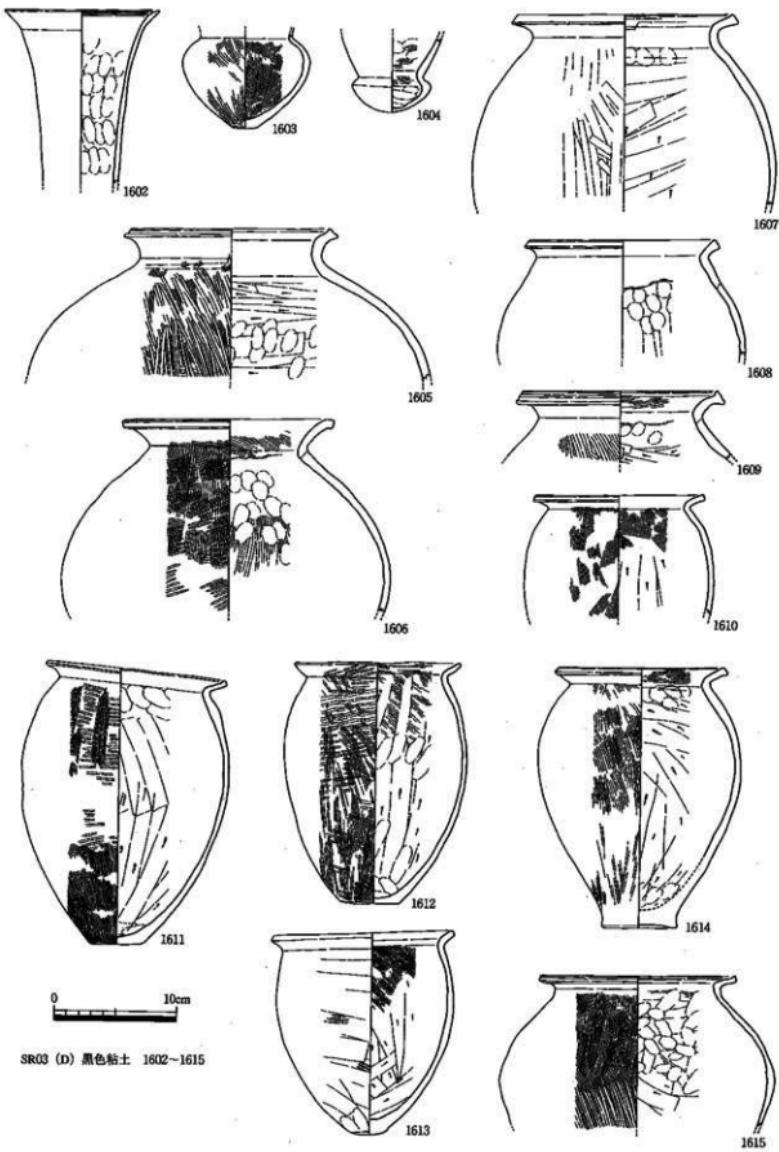


SR03 (C) 黒色粘土 1590~1592  
SR03 (D) 黒色粘土 1593~1601



第192図 SR03(C・D)出土遺物(1/4、1/2)

に一部に波状文が施される。1501では口縁端部に部分的に刻み目が入れられる。1508・1509は短い頸部で口縁端部が大きく開くもの。1510・1511は体部。球形に近い体部で退化気味の平底が付く。1510は外面に、1511は外面に縱方向のヘラミガキがある。1512～1541は壺。1512は歪みが著しい。1513は下川津B類。1512・1515・1519・1520・1539は口縁端部に面を持つ。外面はハケの後ヘラミガキ、内面は上半部をハケ、下半部をヘラ削りするものと全体にヘラ削りするものがある。1539は頸部がやや長めで面を持つ。1524も口縁端部に面を持つが、やや小型で、外面はハケ調整だけである。1517・1518・1525・1526は頸部を強く屈曲させ、内外面にはハケを施す。外面にはハケ調整前のタタキ調整が残るものもある。1527・1533はやや長めの口縁部を持つ。1528は底部。しっかりととした平底で、体部はあまり張らない。外面のハケは体部上半と体部下半では密度が異なり、ハケの原体が違うと考えられる。1529・1530は口縁部がやや短めで外面と内面の上半部はハケを施す。1531・1535は外面の口縁部までタタキ痕が残り、その後ハケで仕上げる。1541は摩滅が著しい。頸部に1ヶ所穿孔されている。1542～1555は高坏。1542・1543は口縁端部に面を持つ。ともに摩滅するが、1542は口縁部外面に横方向のヘラミガキ、1543は口縁部内外面に横方向のヘラミガキ、底部外面に放射状のヘラミガキがある。1544は口縁端部がほぼ水平で面を持つもの。弥生時代後期前半。1545・1546は口縁端部は丸く、杯部のヘラミガキは体部・底部とも放射状を呈する。脚部はともに4孔の穿孔があり、内面は絞り目を残すのみ、外面は1545は縱方向の密なヘラミガキ、1546はハケが観察できる。1545は口縁端部は厚く、口縁部と底部の屈曲は緩い。1547は杯部はほとんど残らないが、外面には放射状のヘラミガキが、内面には2方向程度のヘラミガキが観察できる。脚部はハケの後、縱方向の2段のヘラミガキを施し、4ヶ所に穿孔する。1548は壺部が内傾する脚部で、上段2ヶ所、下段4ヶ所、合計6ヶ所に穿孔し、外面は縱方向に2段のヘラミガキ、内面は横方向にヘラ削りする。杯部外面にもわずかに縱方向のヘラミガキが確認できる。1549・1550は外面に縱方向のハケ、内面には横方向のヘラ削りがある。脚部には1594には3ヶ所、1550には4ヶ所に穿孔が認められる。1551は脚部と杯部の境が極端にくびれ、指頭痕が顕著に残る。この部分には本来接合粘土があったと考えられる。1552・1554はやや寸胴気味の脚部にやや深めの杯部が付くと考えられる。ともに脚部外面はハケで、1552には粗いヘラミガキが観察できる。杯部外面にもわずかにハケが観察でき、1554は内面に放射状とみられるヘラミガキがある。1552には底部を充填した様子が見える。1555は弥生時代中期後半。1556～1574は鉢。1556～1559は口縁端部が屈曲するもの。体部が直線的で浅めの器形から、体部に丸みを持ち、深めの器形がある。1560は椀形で深めの器形。外面にはタタキ痕が残る。1562～1566は椀形の器形。内面は右下から左上へのハケ、または縱方向のヘラミガキ、外面はタタキだけ（1563）、タタキの後ハケ（1563・1564）で、やや大きめの1562は底部をヘラ削りする。1563・1565は外面にクラックが残る。1566はしっかりとした平底で口縁はやや内傾気味に付く。外面は横方向のヘラミガキである。1567・1568は小型で作りが粗く、歪みがある。外面にはタタキ痕が残り、1567はその後にハケを施す。1569・1570は口縁端部を外傾させるもので、作りが粗く、歪みが著しい。1570は外面にクラックが顕著に残り、底部内面は窪んでいる。1571・1572は台付鉢。1571は外面の底部と脚部の境付近にタタキ痕が残る。1572は外面杯部から脚部にかけてタタキ痕が残り、全体に叩き出した様子が分かる。外面にはクラックが顕著に残り、内面は右から左へ板ナデした際の圧痕が残る。1573は片口鉢。外面はヘラ削り、内面はヘラミガキする。1574は把手の付く鉢。残存部分では全面に指押さえ痕跡が残る。1575は壺。1576・1577は支脚。1576は上部・下部とともに二股に分かれたXの様な器形で、中空、外面全体にタタキ痕が残る。1577は下部に対して上方がややすっぽり気味の器形で、壺部が大きく開く



SR03 (D) 黒色粘土 1602~1615

第193図 SR03(D)出土遺物(1 / 4)

もの。下部は緩やかに広がる。端部には刻み目が付く。1578は製塩土器。体部外面全体に縦方向にヘラ削りする。1579～1585はミニチュア土器。1579は厚めの体部で外面にはタタキやハケの痕跡が残るが、調整はしっかりと行われず、指押さえ痕跡がよく残る。1580は外面全体に縦方向のヘラミガキを施す。厚手で歪みがある。1581・1583は指押さえでのみ調整する。1584・1585はごく簡単な作りである。1584はわずかにタタキ痕があるが、内面に粘土の継ぎ目を明瞭に残し、指押さえも雑である。1585は口縁部もガタガタで、ほとんど成形痕がない。1586・1587はスクレイバー。1588～1590は石庵丁。いずれも上縁部から側縁部を削している。1590はほぼ完全形。1591は石匙。片面には刃部の加工が施されていない。1592は叩き石。下部に敲打痕が顕著に残る。花崗岩製。

#### S R 03 (D) 黒色粘土 (第192～194図、図版69～71・86)

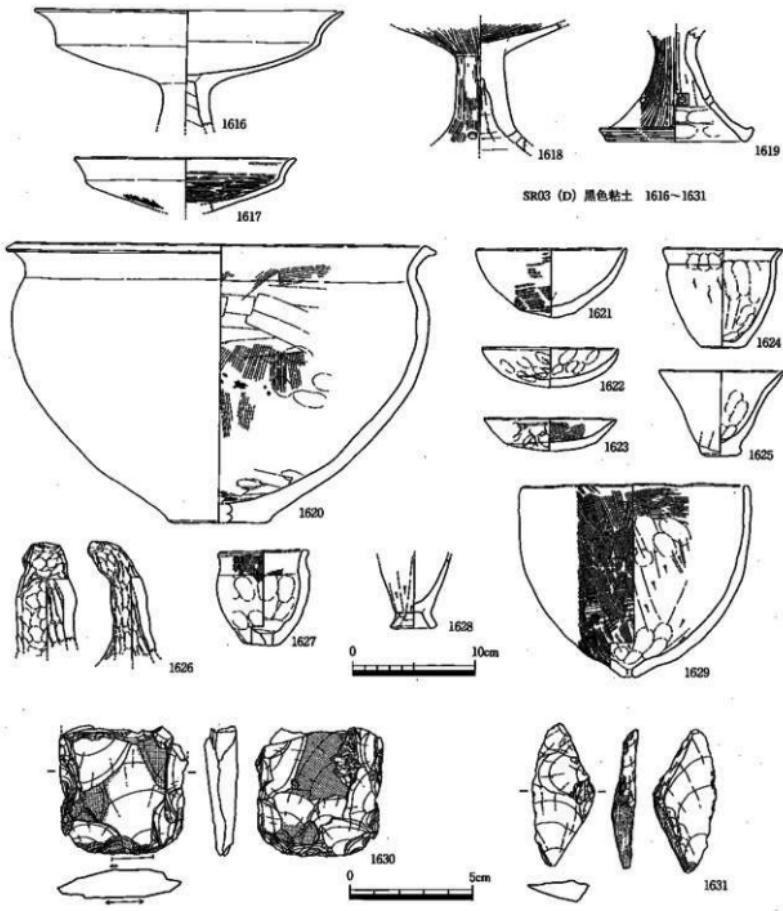
S R 03 D部分 (6区①北) で検出した黒色粘土層である。南側から S R 03全体に広がって流れ込み、畔 S R 03 (D) - 1 では厚さ20cm程度、おもに黒褐色・暗褐色砂混じり粘土層が堆積し、北東へ向くが、畔から北側では黒色粘土層の堆積はほとんどみられず、南東隅部分では S R 03自体が上がる。黒色粘土の堆積は S R 03部分の南半部で1度なくなるようだ。

1593～1604は壺。1593～1596は二重口縁壺。1593・1594は口縁部外面に鋸歯文を施す。頸部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケで、1593には縦方向の粗いヘラミガキがある。1593は二重口縁の立ち上がりを外側へ付ける。1597～1599は直立から外傾する頸部に大きく開く口縁部を持つ。1597は口縁端部に波状文を施す。1600・1601はやや短めの口頸部に開く口縁部が付く器形。1601では丸い体部に平底を付ける。1602は細頸壺。下川津B類。1603は小型の壺で、内外面にハケを残す。1604は小型丸底壺。底部の形骸化はあまり進んでいない。内面には横方向のハケが残る。下川津B類。1605～1615は甕。1605・1607・1609はやや広めの口縁端部を持ち、頸部の屈曲は緩い。外面はハケまたは板ナデで、1605はその後ヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラ削りまたは板ナデをする。1606はやや長めの口縁部を持つ。1610～1614は概ね口縁部をくの字に屈曲させ、外面にはタタキ痕とハケ、またはハケの痕跡を残す。底部は平底を呈す。内面は頸部や体部上半部にハケを施すものが多い。1615は下川津B類。1616～1619は高坏。1616は底部を充填した様子が窺える。1616には、摩滅が進むものの、杯部外面に放射状、内面には分割と思われるヘラミガキがあり、1618には杯部内外面とも放射状のヘラミガキがある。脚部には3ヶ所の穿孔がみられる。1619は脚部端面に2条の沈線がみられ、ほぼ均等に5ヶ所に穿孔がある。1620～1625は鉢。1620は大型で口縁部が外側へ屈曲する器形、底部は平底。1621～1623は楕円形のもの。1622・1623は浅く、外面の整形はほとんどせず、クラックが入る。1624は口縁部外面を屈曲させるもの。ほとんど成形痕が観察されず、内面には緩い指押さえ痕が、外面にはクラックが残る。1625はまっすぐの口縁部にしっかりした平底で、あまり調整痕を残さない。1626は支脚。下部は欠損するが、ラッパ状の形態になるとされる。上部は一方へ緩く折り曲げられ、中空である。内外面には指押さえ痕が顕著に残る。1627は底部に穿孔する。1628は製塩土器。外面にはヘラ削り痕跡を残す。1629は甕。底部は完存しないが、孔は1つと考えられる。1630は打製石斧。1631は翼状剥片。いずれもサヌカイト。

遺物の時期は弥生時代後期前半頃のものも出土するが、終末期のものが目立つようになる。

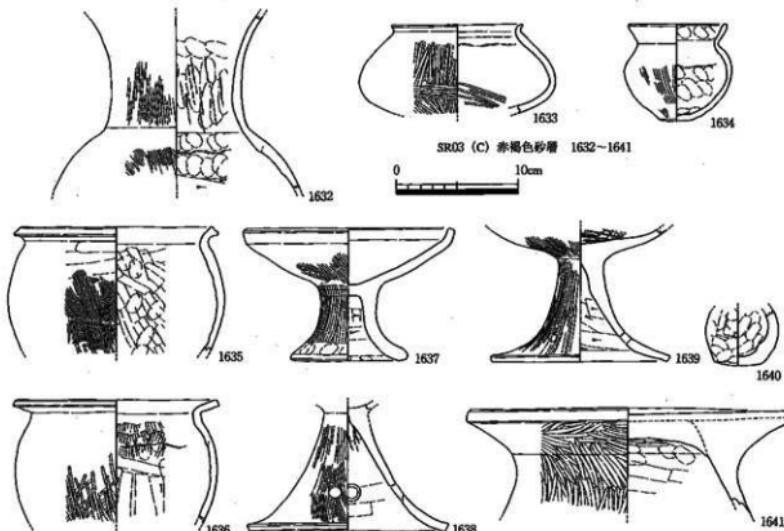
#### S R 03 (C) 赤褐色砂層 (第195図、図版72)

S R 03 C部分 (6区①南) で検出した部分的な層位で、畔 S R 03 (C) でしか検出していない。黒色粘土の下部に堆積する砂層を切っており、黒色粘土の上の暗灰色粘土の下部に堆積する。黒色粘土との前後関係は明らかではないが、黒色粘土下砂層と同じ範疇のものかもしれない。



第194図 SR03(D)出土遺物23(1/4、1/2)

1632～1634は壺。1632は直立する長めの頸部で、開く口縁部が付くと思われる。1633は算盤型の体部に短い口縁部が着く。外面はていねいに磨く。1635・1636は壺。口縁端部は四角くし、内面はヘラ削り、外面はハケ（1635）やヘラミガキ（1636）で仕上げる。1637～1639は高壺。1637は厚手で杯部の口縁部は短くほぼまっすぐ立ち上がる。脚部内面は横方向にヘラ削りする。1638は脚部上端付近に剥離痕が残り、ここから杯部が付いたと思われる。脚部にはほぼ均等に4孔の穿孔がある。孔の内側は焼成後に打ち欠いて削ったよう少しきたない。1639は杯の外面を放射状の、内面を横方向分割ヘラミガキし、脚部の内面は横方向にヘラ削りする。脚部には3孔の穿孔がほぼ均等に配される。1640はミニチュア土



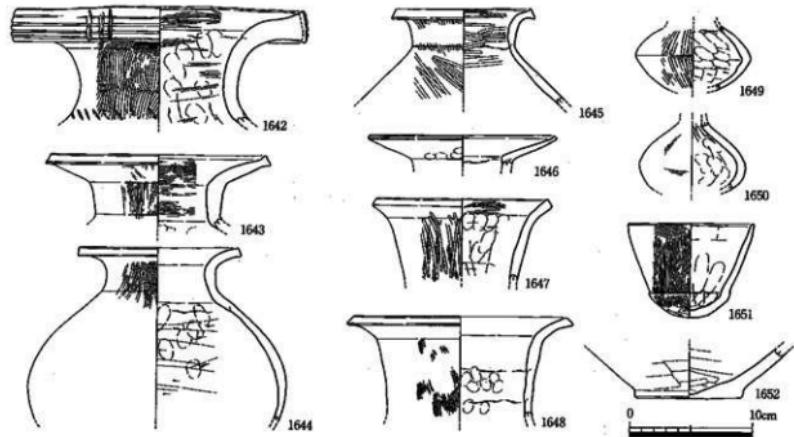
第195図 SR03(C)出土遺物(29 (1 / 4))

器壺。指押さえ痕が顕著で全体に指押さえ痕跡が残る。1641は台状土器。台の部分は剥離が著しく、何層にも剥離している。外面はヘラミガキを密に行う。

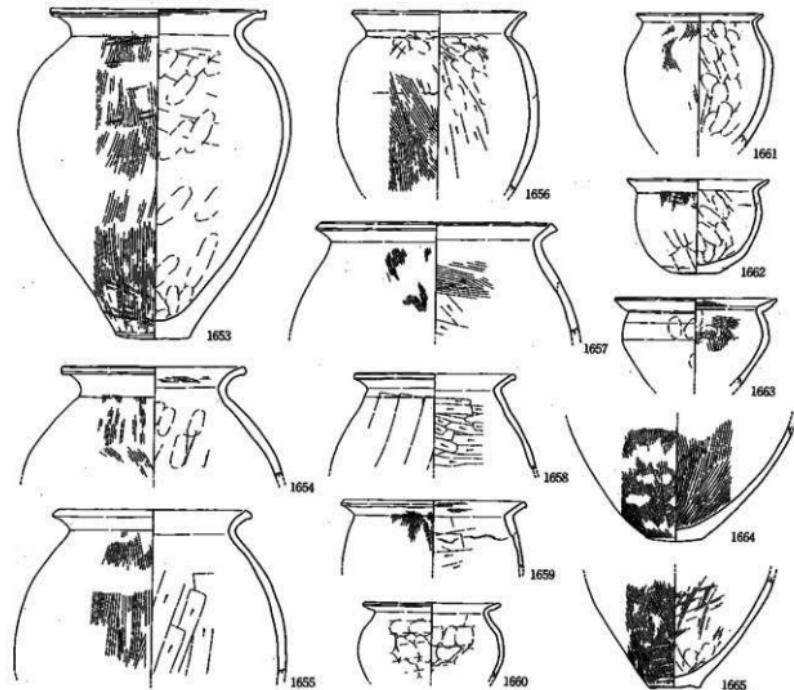
#### SR03 (C) 暗灰色粘土 (第196・197図、図版72・73・75)

SR03C部分 (6区①南) で検出した層位である。黒色粘土の上部に堆積し、東半部全体に10cm程度堆積するが、東端付近では流路状または窪み状になり40cm程度と深く堆積する。この窪み状の部分はSR03Cの東端をかすめてSR03D部分 (6区①南) へ向かうようだ。

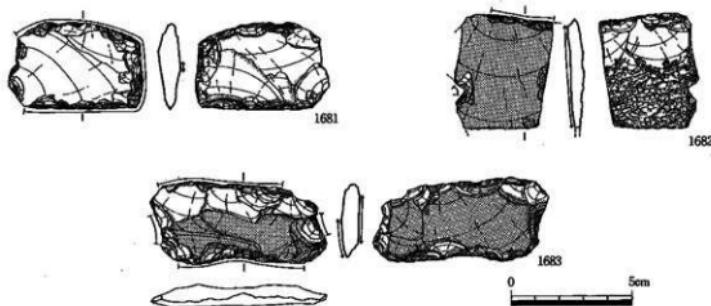
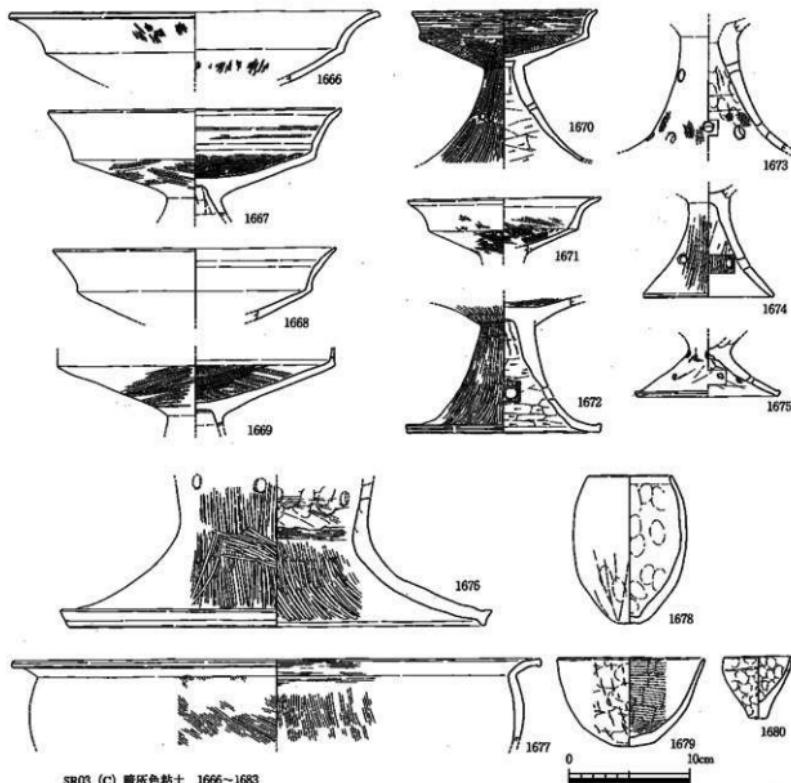
1642~1652は壺。1642~1644は直立する短めの頸部から口縁部が大きく広がるもの。1642は口縁端部をさらに粘土を外側へ貼って拡張し、そこに凹線を4条、その上からの縦方向の3条1組の刻み目が1個所残存する。頸部には斜め方向の刻み目がある。1645は短めの直立する頸部に短く聞く口縁部が付く。体部はややなで肩気味に下がる。1647~1648は長めの頸部で口縁端部が緩やかに聞くもの。1649~1651は小型丸底壺。体部と底部にはわずかに段を残し、形骸化が進む。下川津B類。1652はしっかりとした平底を呈する。壺の底部と思われる。1653~1665は壺。1653~1655・1657は口縁部と体部の境の屈曲が緩いもの。概ね外面はハケ、内面は板ナデまたはヘラ削りする。1656~1658・1659はやや小型。屈曲部はややきつい。1660~1663はさらに小さい。1664~1665は壺底部。1666~1675は高杯。1666~1672は杯部が残る。1666は口縁端部を四角くし内外面には放射状のヘラミガキを施すと思われる。1667~1669・1670は杯部内外面に横方向の分割ヘラミガキを施す。いずれも下川津B類。1667~1670は口縁端部内面に段が認められる。1672には外面に2段の放射状のヘラミガキがある。1672~1675は脚部。1672は全体に縦方向の



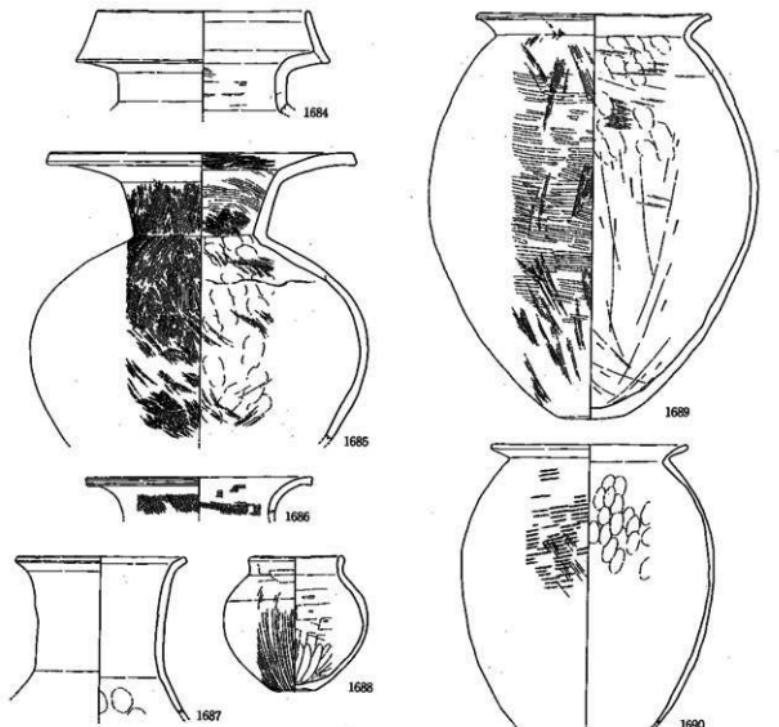
SR03 (C) 暗灰色粘土 1642~1665



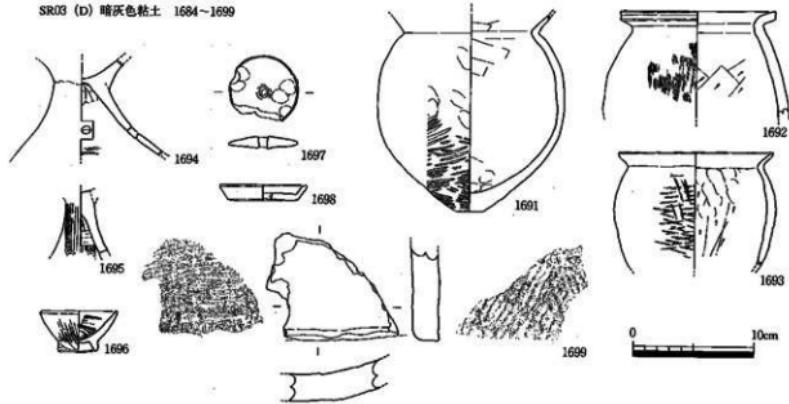
第196図 S R03(C)出土遺物(1 / 4)



第197図 SR03(C)出土遺物30(1/4、1/2)



SR03 (D) 暗灰色粘土 1684~1699



第198図 S R03(D)出土遺物(1/4)

ヘラミガキを施し、4個所に均等に穿孔が入る。1673は脚部に上段5個所、下段8個所、合計13個所に穿孔を施す。脚部上端部には本来杯底部があったと考えられる場所に剥離痕があり、底部は何らかの形で充填したと思われる。1674は脚部に穿孔が4個所残存するが、やや不均等である。残存状況から2孔+3孔で施したかもしれない。1675は低脚のもの。脚部の穿孔はやや不均等に6個所ある。その他に6孔のうち1孔は最初の位置決めを失敗したらしく、外側から少しあけかけて位置をずらして穿孔している。1676は器台。外面と内面据部を丁寧にヘラミガキし、7個所に穿孔する。1677～1680は鉢。1677は大型で、口縁部が外側へ屈曲し、体部は丸みを持つ。1679は外面にクラックが多く残る。1680は手捏ねで歪みがあり、指押さえ痕が顕著に残る。1681はスクレイパー。腹面の稜部分には磨滅痕が残り、石窓丁の可能性もある。1682は側縁にわずかに抉りの様なものがある。刃部はあまり作っていない。1683は石窓丁。上・下部ともに潰しており、側縁部には抉りを入れる。全体にローリングを受けているが、特に稜の部分が磨滅が著しい。

#### S R03 (D) 暗灰色粘土 (第198・199図、図版74・85・86)

S R03D (6区①北) で検出した層位である。黒色粘土の上部に堆積し、厚さは10cmほどである。埋土は暗灰色粘土で砂が少し混ざる。おそらくこの層位はS R03Cの東端をかすめて北へ向き、S R03Dの東端をかすめながら調査区外へ延びると思われる。遺物はおもにS R03東肩付近や畔S R03 (D) から南側で出土した。

1684～1688は壺。1684は二重口縁壺。口縁部の外側に二重口縁壺口縁部の立ち上がりを貼り付ける。大部分が頸部と体部の焼付近で剥離する。下川津B類。1685は斜めに立ち上がる頸部から大きく開く口縁部が付く。やや新しい。1687は長めの頸部にわずかに口縁端部が開くもの。1688は頸部が短く直立する。外面はヘラミガキできれいにする。1689～1693は壺。口縁部と体部の屈曲はきつく、外面調整は概ねタタキの後ハケであるが、ハケは粗雑でタタキ痕はあまり消えていない。1694・1695は高坏。1694は脚部に3個所の穿孔が残存し、残存部分からほぼ均等に4個所に配したと考えられる。1695は脚部に縱方向のヘラミガキをし、脚部上端外面に剥離痕を残す。この部分に杯部を付けたか接合粘土を付けたかどちらかであろう。杯底部となる部分は残っている。穿孔はやや近接して2孔残存するが、全容は不明。1696はミニチュア鉢。高台のようなものが付き、全体をハケで調整する。1697は紡錘車。1698は土師器小皿。1699は平瓦。凹面には布目、凸面には繩タタキ目を残す。タタキ目は斜めに交差しており、両側から叩いていたと考えられる。平安時代に綾南町陶近辺で製作される平瓦に多用される技法。1698・1699は上層からの紛れ込みと考えられる。1700はスクレイパー。1701は石窓丁。いずれもサヌカイト製。時期は弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。

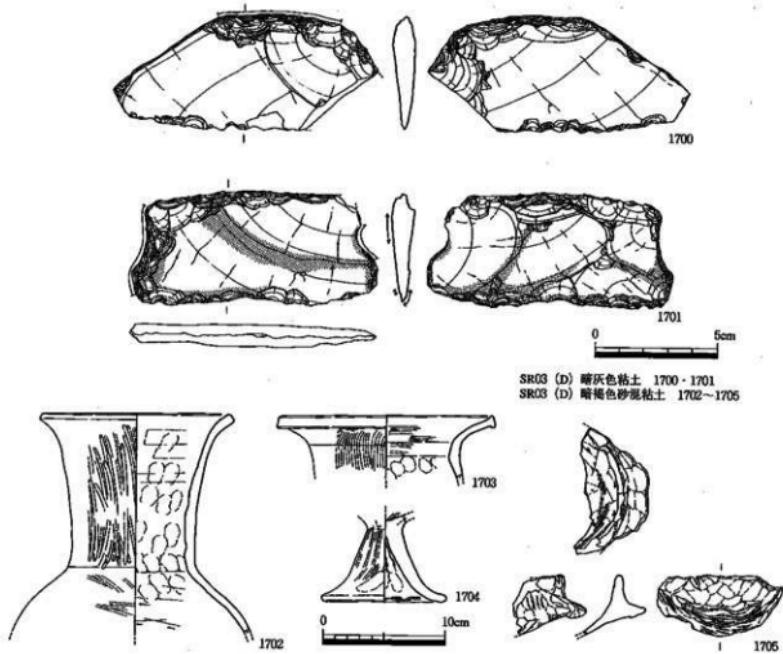
#### S R03 (D) 暗褐色砂混粘土 (第199図、図版74)

S R03D (6区①北) で部分的に検出した層位である。畦S R03D-2部分の東半部で、砂層をはさんで黒色粘土の上面に厚さ15cmにわたって堆積する。

1702・1703は壺。1702は直立する長めの頸部に丸い体部が付く。外面はヘラミガキできれいにする。1703は直立する頸部に開く口縁が付くと思われる。1704は高坏。1705は把手付広片口皿。把手部分。内面に赤色顔料（水銀朱）が付着する。胎土の類似性から1018と同一個体の可能性がある。

#### S R03 (C) 灰色砂質土 (第200図、図版74・90)

S R03C (6区①南) で検出した層位である。黒色粘土層の上面に堆積し、西側流路に切られる。畔S R03Cで厚さ20cmほど堆積し、埋土は明褐色砂質土である。この層は西壁土層の南半部・流路の南



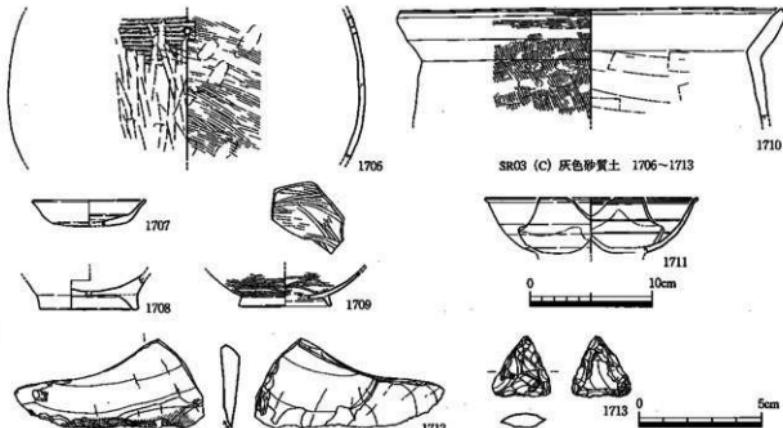
第199図 SR03(D)出土遺物(1/4、1/2)

側、南壁土層の全面、北壁土層の東半分・流路の東側で同様の堆積状況を示しており、この層を切る西側流路以外の部分ではほぼ全面に堆積していると思われる。これは2区③の奈良時代包含層へ連続するかもしれないが出土遺物はやや新しい。

1706は弥生土器。壺か。体部や上部に穿孔が1個所ある。1707～1710は土師器。1707は小皿。内面の底部と体部の境付近に煤が少し付着する。1708・1709は瓶。1709は吉備系土師器瓶。1708は摩滅が著しく、底部中央付近に直径約5mmの穿孔がある。1711は灰釉陶器。口縁端部は外反し、内外面とも概ね体部中程まで浸け掛けで施釉する。遺物は弥生土器を除けば10世紀後半～11世紀後半くらいのものがあるようだ。1712はスクレイバー。刃部をわずかに加工する。1713は石礫。平基式。ともにサヌカイト製。SR03(C) 西側流路 (第201～203図、図版75・87)

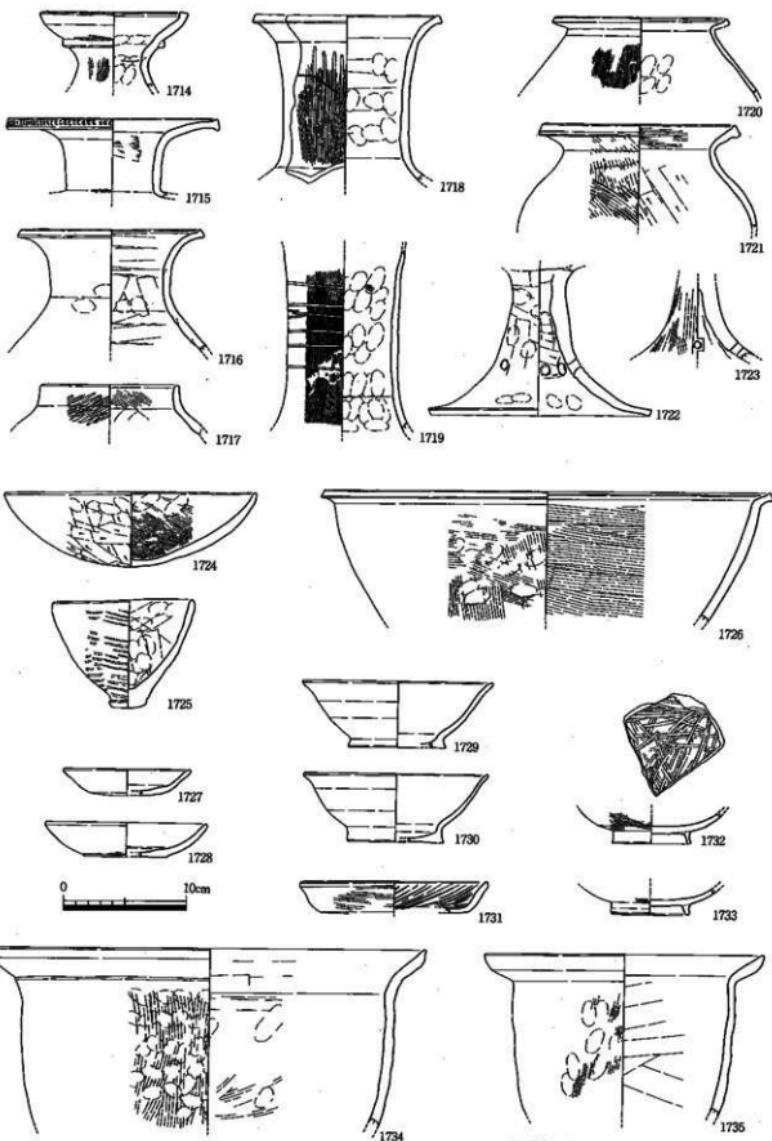
SR03B (6区②北) 平野部側から出現し、SR03C (6区①南) の西部を流れてSR03D (6区①北) の西側へ流れ込む流路である。幅4m、深さ1m前後で埋土は暗褐色・黒褐色系の下からラミナを含む砂層・シルト層・粘土層である。

1714～1726は弥生土器。1714～1719は壺。1714は弥生時代中期後半。口縁端部・尖端部とも若干摩滅があるので、刻みは観察できない。1715は直立する頸部に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部に半裁竹管文を連続して押す。1717は短く太めの口縁部が直立する。体部は圓化した部分できれいに全体に

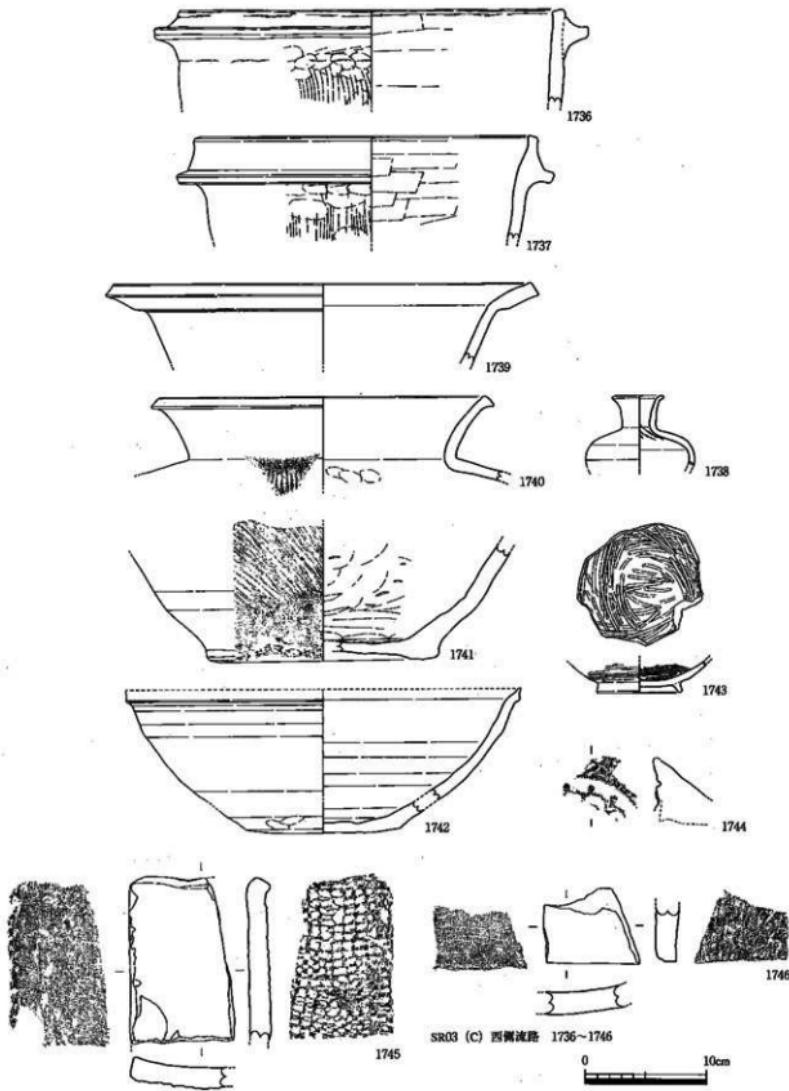


第200図 S R03(C)出土遺物(1/4、1/2)

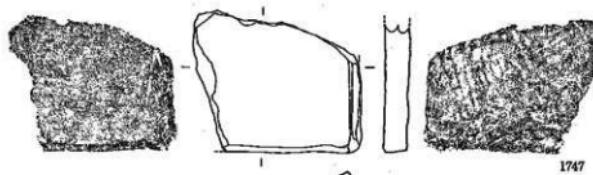
剥離しており、粘土の継ぎ目であったと考えられる。1718は直立する長めの頸部に開く口縁部が付く。頸部に4~5条の縱方向のヘラ描きがほぼ対角線上の2ヶ所にあり、そのうち1ヶ所にはその上から斜め方向のヘラ描きがある。1719は下川津B類。外面は全体にハケを施し、所々横方向に沈線状の深めのヘラミガキをする。1720・1721は壺。1720は下川津B類。内面の指押さえの部分に横方向に凸線が平行に走る。それは指押さえのない部分にも及んでいるが、指押さえ部分に特に強く残っており、指押さえの際に何か当てて指押さえをしたのかもしれない。1722・1723は高壺脚部。1722は杯部の底部を円盤充填する。穿孔は6孔残存するが、間隔はやや不均等である。全体では7~8孔あったと思われる。1723は上端と上端側縁側に剥離痕跡がみえる。間隔が不均等に3個所に穿孔が残存するが、残存範囲からこれ以上はないと思われる。1724~1726は鉢。1727~1737は土師器。1727・1728は杯。1729・1730は円盤状高台を持つ杯。1731は内面に斜放射の暗文をもち、外面はヘラミガキする。端部は丸く収める。1732・1733は壺。1732は吉備系土師器碗。外表面にヘラミガキする。1734・1735は壺。1734は口縁端部を上方へ引き上げて細くし、1735はまっすぐに丸く収める。1736・1737は羽釜C。いずれも口縁端部・鋤端部とも四角くする。1738~1742は須恵器。1738は壺。外面に自然釉が掛かる。1739~1741は壺。1739は1844と接合はないが、よく似通っており、同一個体の可能性が非常に高い。1740は口縁端部を外側へ拡張し、外面には格子タキを施す。1741は底部。全体に自然釉が掛かる。内面にはわずかに右から左への青海波文の當て具痕跡が残る。底部外面には須恵器片が接着している。1742は捏ね鉢。先端部がわずかに欠損する。口縁部内外面に重ね焼き痕跡がある。1743は黒色土器A碗。内面には体部5分割+見込みのヘラミガキがあり、外面はおそらく回転式ではない横方向のヘラミガキがある。底部外面には板压痕を残し、高台貼付部分には1~2重の円弧状の刻み目がある。見込みには直径3.2cmの圧痕が観察できる。1744~1748は瓦。1744は軒丸瓦。複弁8葉蓮華文と思われる。外縁は傾斜するタイプで素文、外区には珠文を配する。弁と弁の間にはわずかに間弁が付く。丸瓦がちょうど剥離しており、接合粘土だけが残っているが、接合粘土は厚く、丸瓦の取り付け位置はかなり低かったと思われる。間弁はT字型



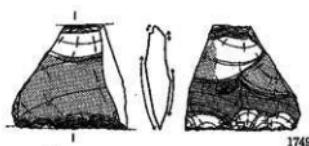
第201図 S R03(C)出土遺物(1 / 4)



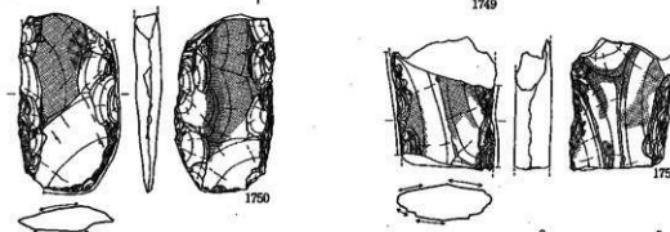
第202圖 SR03(C)出土遺物(1 / 4)



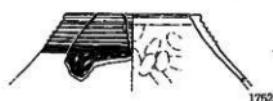
0 10cm



1749



5cm



1752



1753

0 10cm



1754



1755

第203図 SR03(C・D)出土遺物(1/4、1/2)

でわずかに入るだけである。強いていえば讃岐国分寺 S KM07と似た文様構成で鋸歯文が省かれるものか。S KM07には10世紀中頃の年代観が与えられている。1745～1748は平瓦。1745は格子タタキ痕を凸面全体に明瞭に残す。1746～1748は外面は縄タタキで形成するが、いずれもタタキ痕を明瞭に残さない。1747には縄タタキを両側から交互に施した痕跡がみられる。1749は楔形石器。1750はスクレイバー。1751は石斧。上・下部は欠損。いずれもサヌカイト製。

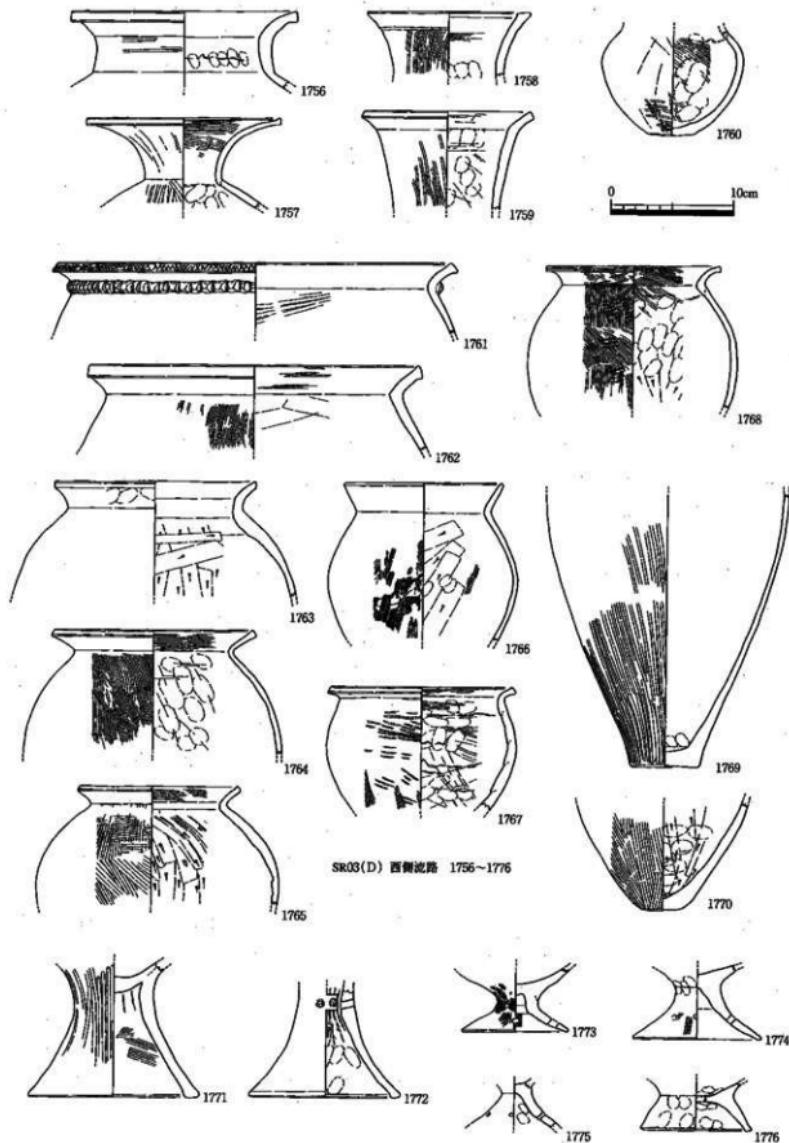
出土遺物は弥生時代後期前後くらいを除けば8世紀代のものが少しで、あとは10世紀後半頃のものを中心であるようだ。

#### S R03 (D) 西側流路 (第203～207図、図版75・76・86～88)

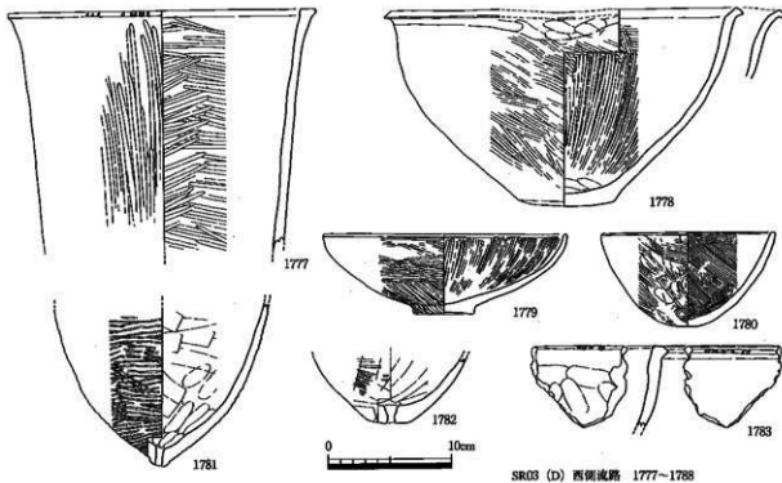
S R03C (6区①南) から流れ込む流路である。S R03DではS R03の西端を北東へ流れる。幅10m、深さ0.6m、埋土は暗灰褐色粘土で多量の砂がラミナ状を示す。出土遺物の中には8世紀～10世紀のものが出土したが、全体に弥生土器に残存状況のよいものが多かった。しかし土層図からはS R03Cの西側流路から続くものと考えられる。

団化したものは全て弥生土器である。1752～1760は壺。1752は無頸壺。口縁部には多条の沈線を施し、その下部には斜格子文様を入れる。弥生時代中期後半。1753は口縁端部に半截竹管文をやや疊らに入れ、下川津B類。1754は口縁端部上面に約2cm幅で剥離痕があり、二重口縁壺になると考えられる。頸部に突帯を巡らせる。1755は外傾気味に立ち上がる短めの頸部に大きく開く口縁部が付く。1758・1759は長い頸部に口縁部がわずかに開く。口縁端部に面を持つ。1760は体部、割れの部分はわずかに上方へ向いており、頸部へつながっていくと思われる。1761～1770は甌。1761は頸部に押圧突帯を巡らせ、口縁端部には斜格子文様を入れる。1761・1762は弥生時代中期後半。1764～1766・1768は概ね外面をタタキの後ハケ、内面口縁部付近をハケ、体部をヘラ削りし、薄くする。1769・1770は底部。1769はしっかりした平底で外面はきれいに磨き上げる。弥生時代中期後半。1771～1774は高坏。1771は弥生時代中期後半。1772は脚部の上端付近に2孔1対の穿孔が1個所に残る。1773は低脚で杯底部は丸い。脚部の穿孔は2孔残存し、残存部分からだいたい均等に4孔の穿孔があったと考えられる。1774も低脚の高坏。脚部の穿孔は3孔が残存するが、間隔は不均等で、全体には4～5孔があつたと考えられる。1775は脚部に5孔の穿孔が残存しており、全体では10孔前後があつたと思われる。脚部内面上端部には直径5mm程度の孔がある。1776は台付鉢脚部。全体に指押さえがみられる。1777～1783は鉢。1777は口縁端部に刻み目を持ち、内外面は丁寧にヘラミガキする。1778は片口鉢。口縁端部を四角くし、内面をヘラミガキする、赤色顔料が付着するものと同じタイプであるが、摩滅のせいかもしれないが赤色顔料は観察できなかった。黒色粘土層出土のものと接合する。1779・1780は椀形の鉢。1779は内外面をきれいにヘラミガキし、しっかりした平底を作る。やや浅め。1781・1782は甌。ともに底部に穿孔を1孔する。1782は底部はやや平底気味である。1783は縄文土器鉢。口縁端部に刻み目を持つ。晚期。1784～1788はスクレイバー。1784・1785は剥片の端部に簡単な刃を付けただけのようなもの。1788は刃部が著しく磨滅し、光沢を持っている。1790～1792は打製石斧。1792には擦痕が顎著に残る。1793は大型蛤刃石斧。下部は欠損するが、割れ口に敲打痕が残されており、欠損後に叩き石などに再利用したと考えられる。閃緑岩製。1794は砥石。使用した面が1面のみ残存し、残りは割れ口である。線状の使用痕がみられる。流紋岩。

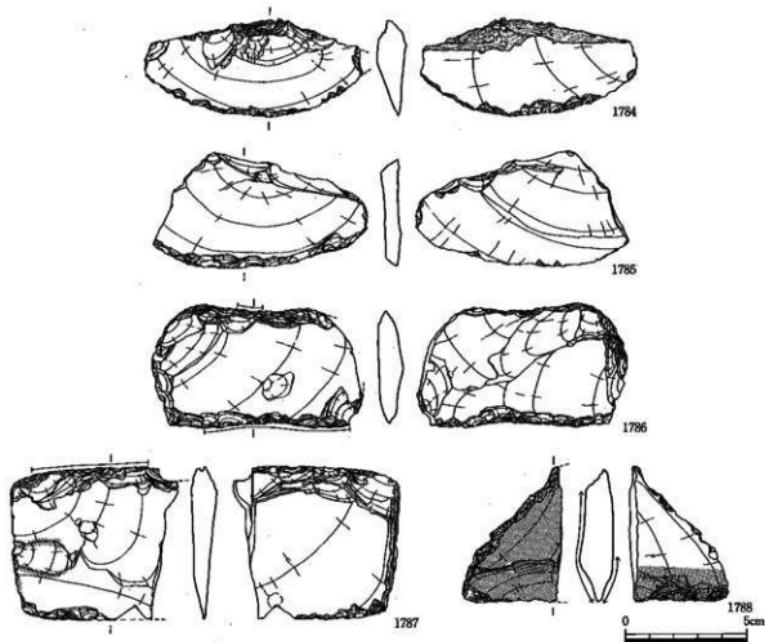
この部分の出土遺物は弥生時代後期後半～終末期を中心とするものであるが、層位からみれば黒色粘土などを切っており、出土遺物はこれらの層のものを巻き込んだものと考えられる。



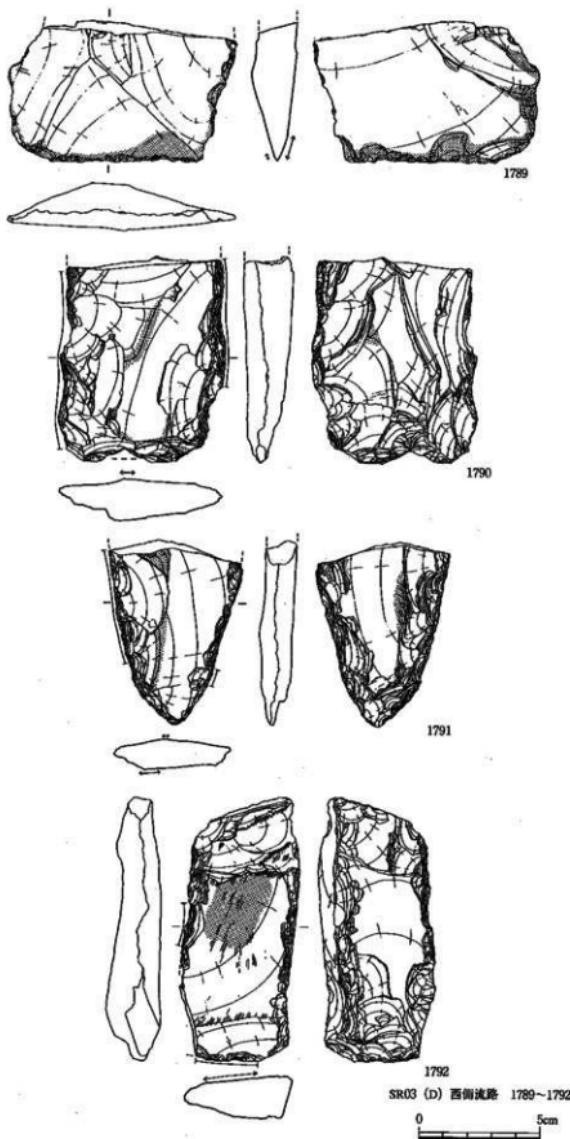
第204図 S R 03(D)出土遺物(1 / 4)



SR03 (D) 西側流路 1777~1783



第205図 SR03(D)出土遺物39(1/4、1/2)



第206図 SR03(D)出土遺物(1 / 2)

S R03 (D) 支流 (第208図)

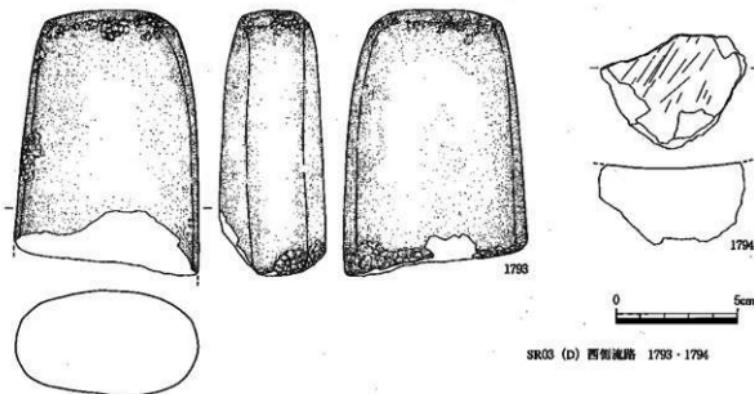
S R03 D (6区①北)で検出した。幅1.4m、深さ40cm、埋土は砂層の上面に明茶褐色砂質土が堆積し、S R03西側流路の西側にはほぼ平行して検出した。

1795～1798は土師器。1795は小皿。1796は杯。1797は椀。1798は足釜。短い鉤が付く。1799は平瓦。須恵質の焼成。凹面には格子タタキ痕がみられる。

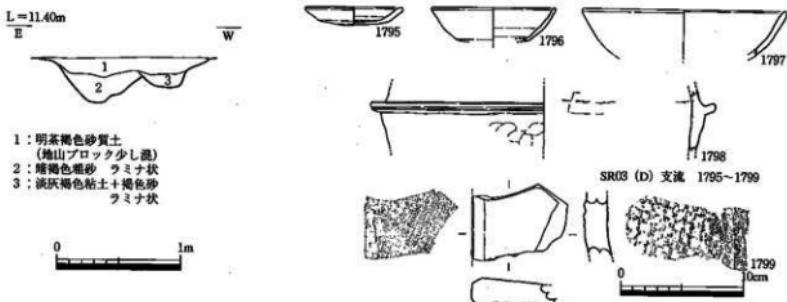
S R03 (A・B) 上層 (第209・210図、図版7)

S R03 A・B (6区②)の最上層である。範囲は概ね S R03 と重なる。埋土はおもに灰色粘土・砂質土で、深さは30～60cm前後である。

1800～1811は弥生土器。1800～1803は壺。いずれも弥生時代中期後半。1800は口縁端部を下方へ大きく拡張し、端部に斜格子文、内面上端部に斜格子文とその下部に列点文を入れ、口縁端部に刻み目を施す。1802は頸部に押圧突帯を貼る。1803は頸部に4条の突帯を貼り、そこに刻み目を付ける。1804～1808は壺。いずれも弥生時代中期後半。いずれも頸部の屈曲が明瞭で、胴部はあまり張らない。外面はヘラミガキ、内面もヘラミガキするものが多い。1804は体部中位付近に2個1組の列点文が1周する。底部はしっかりした平底である。1809は高坏。胸部外面はヘラミガキ、杯部内面にもわずかに分割されたヘラミガキが観察できる。1810は鉢の底部。内外面ともに縱方向のハケをする。1811は甌。平底でやや偏った位置に穿孔を1個所にする。1812～1820は土師器。1812～1814は杯。いずれも口径10.5cm前後、器高2.5cm前後である。11世紀中～後半。1815・1816は円盤状高台を持つ杯。1817・1818は椀。1818は吉備系土師器椀。1819は羽釜A。外面に指捺さえ以外の調整痕はない。1820は羽釜C。1821～1823は須恵器。1821は杯身。外面下半部はヘラ削りする。1822は蓋のつまみ。円環状のもの。1823は甌。1824・1825は黒色土器A椀。1824は内面にわずかに分割ヘラミガキの痕跡がみえ、底部外面の高台部分に少しずれてわずかに円弧状の刻みがみえる。1826は黒色土器B椀。外面は横方向のヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキを行う。1827は丸瓦。1828は平瓦。凸面は左右両側から交互に繩タタキをする。1829はS R03部分を表土剥ぎしたときに出土した遺物である。土師器小皿。外面は回転糸切りにより切り離す。13世



第207図 S R03(D)出土遺物(1/4)



第208図 SR03(D)断面図(1/40)出土遺物(1/4、1/2)

紀半ば。埋土中からは時期は弥生時代中期後半～後期後半の遺物が多く出土した他、11世紀～13世紀代まで出土遺物の時期幅があるが、13世紀代が最終的な埋没時代と思われる。

#### S R03 (C) 上層 (第210・211図、図版77・88・90)

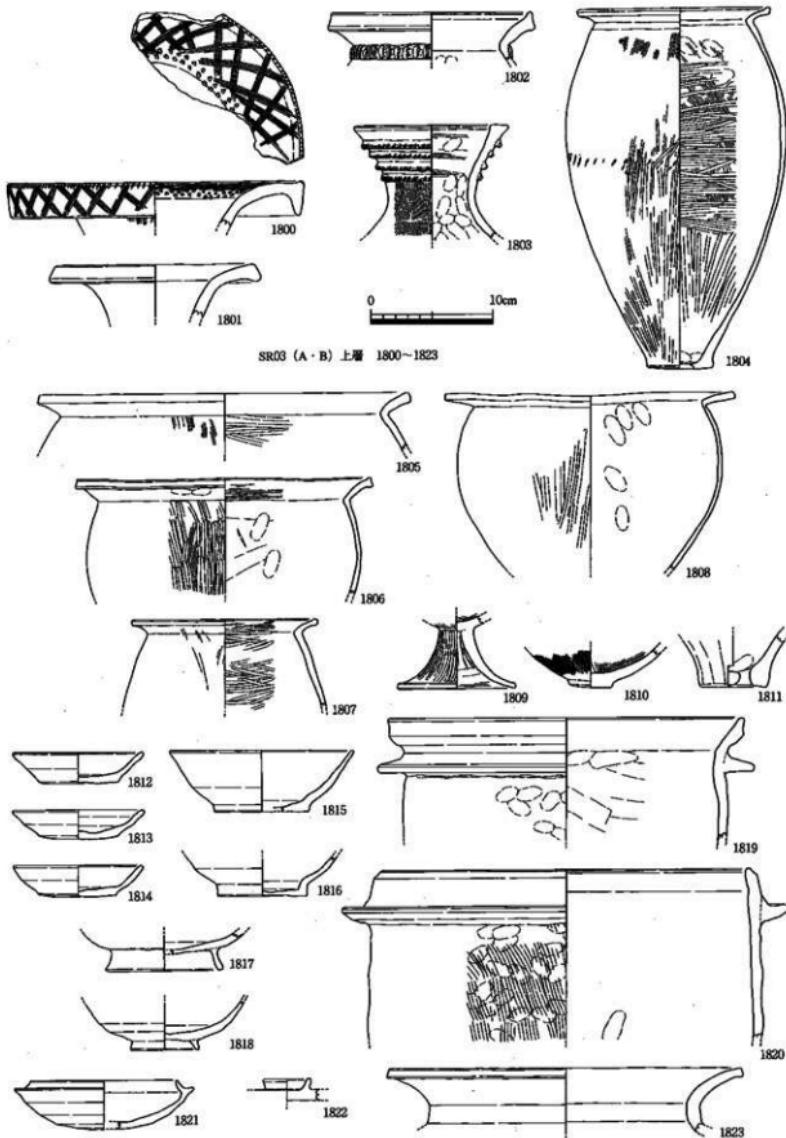
S R03C (6区①南) の最上層である。厚さ約40cmにわたって堆積し、埋土は概ね褐色または灰色砂質土である。

1830・1831は弥生土器。1830は壺。小型で口縁端部は緩く外反する。1831は器台。1832～1843は土師器。1832～1836は杯。口径が12cm前後のものと10.5cm前後のものがある。13世紀前半～中頃。底部はすべてヘラ切りで、1833・1834には板压痕が残る。1835には反時計回りのヘラ切り痕が残る。1837～1840は碗。1837は外面に指押さえ痕を顕著に残す。1838・1839は内面にヘラミガキがある。1839は吉備系土師器碗。1840は底部にヘラ切り痕が見える。焼成状況は土師器であるが、底部の形態は1848などに類似する。1841は壺F。1842・1843は羽釜C。いずれも口縁端部を内側に屈曲させる。11世紀代のものが多い。1844・1845・1848・1849は須恵器。1844は壺。全面に自然釉が掛かる。1739と同一個体と考えられる。1845は捏ね鉢。12世紀前半。西村産。1848・1849は碗。西村産。外面にヘラミガキはなく、内面にハケにも見えるナデが放射状に施される。13世紀半ば頃。1846は黒色土器A碗。1847は黒色土器B碗。摩滅で内面の調整は不明。外面は横方向のヘラミガキをする。1850は青磁碗。外面に錦運弁を飾る。13世紀前半。1851は白磁。碗底部。底部外面には施釉していない。12世紀代。1852は平瓦。凹面には布目、凸面には格子タタキ目が明瞭に残る。1853～1858は石器。1853～1855はスクレイバー。1853は上部・下部ともに刃を付けている。1854・1855は下部の刃部に刃を片側にしか付けていない。1856は石庖丁。1857は石鎌。平基式。1858は砥石。上部・下部が欠損するが、直方体のものと思われる。中程が凹んでおり、3面に使用痕が残る。砂岩製。遺物は弥生土器を除けば、11世紀～13世紀頃のものが主に含まれ、S R03 (A・B) 部上層と似た様相を示す。

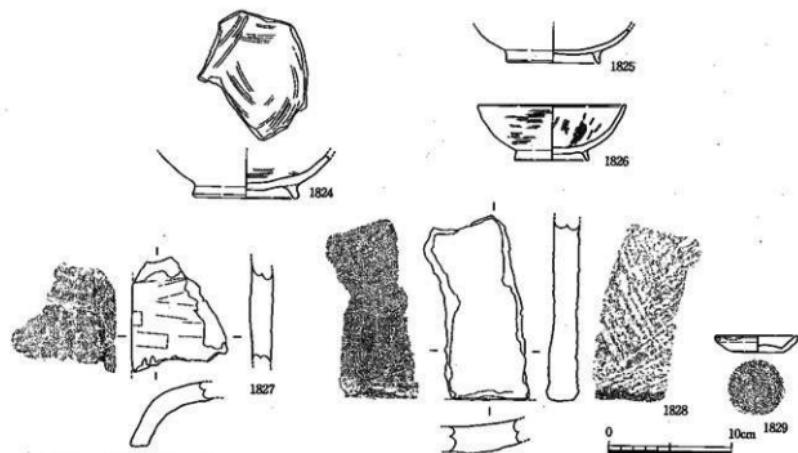
#### S R03 (D) 上層 (第212図、図版89)

S R03D (6区①北) の上面に堆積する灰褐色砂質土・粘質土系の埋土である。厚さ約30cm程度である。

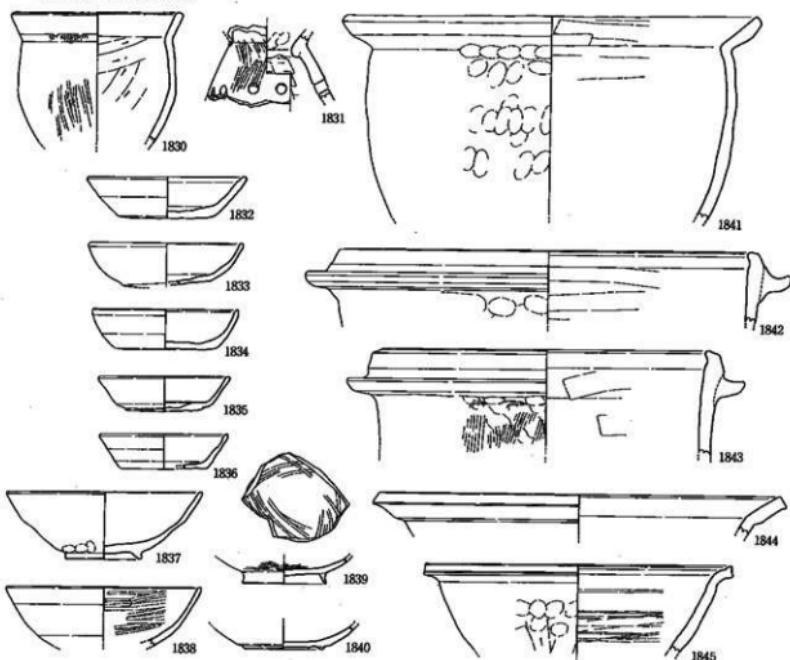
1859は弥生土器。壺。弥生時代後期後半。1860～1863は土師器。1860は杯。外面に回転ナデの痕跡を



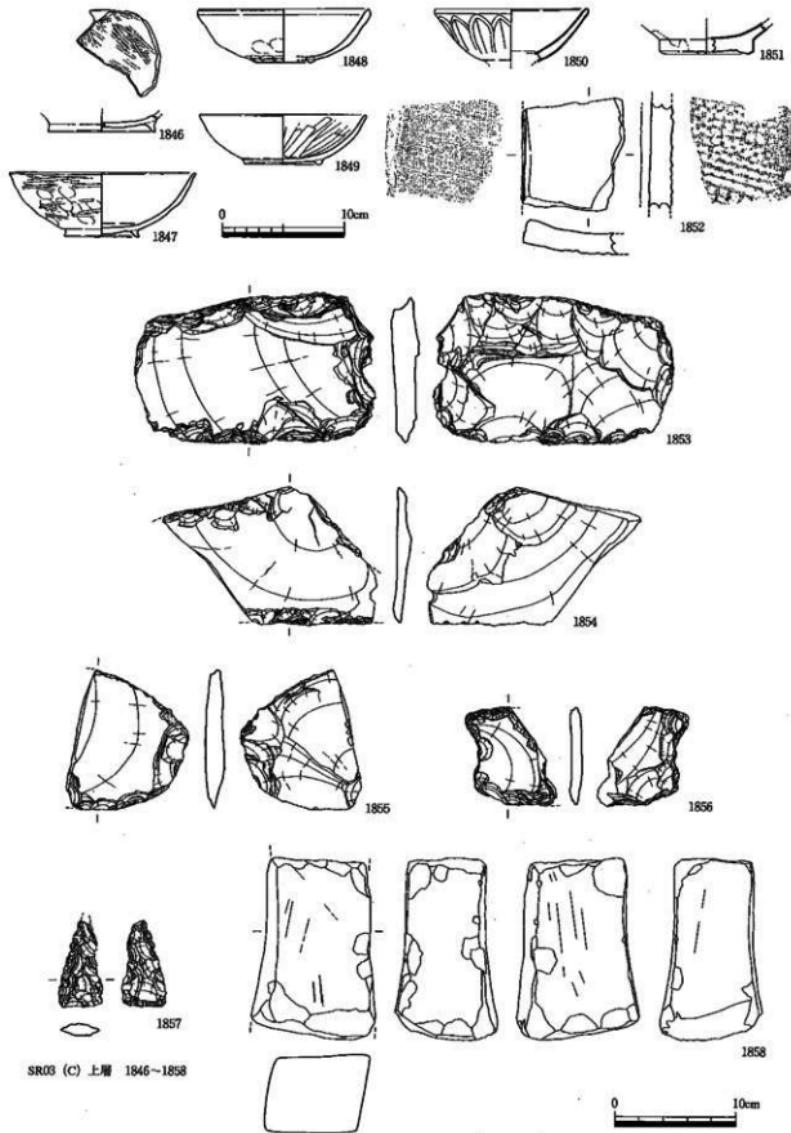
第209図 S R03(A・B)出土遺物(3)(1/4)



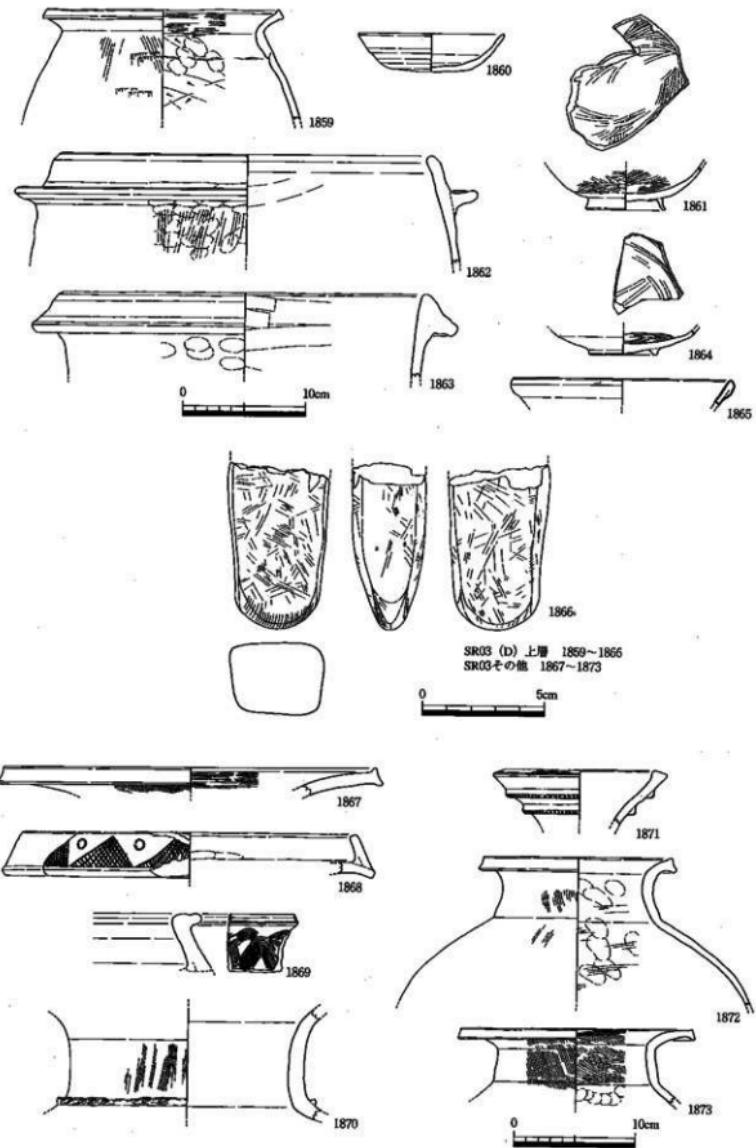
SR03 (A・B) 上層 1824～1829  
SR03 (C) 上層 1830～1845



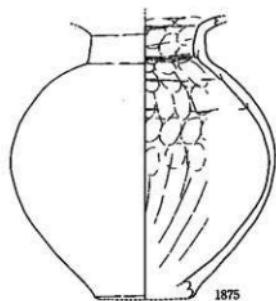
第210図 SR03(A・B・C)出土遺物(4)(1/4)



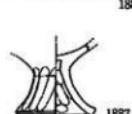
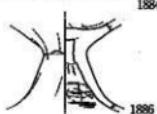
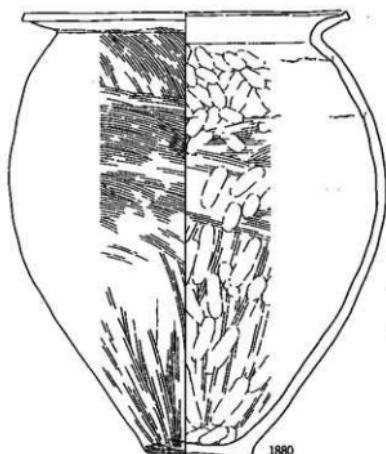
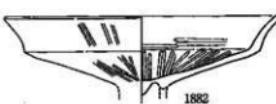
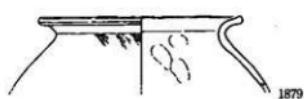
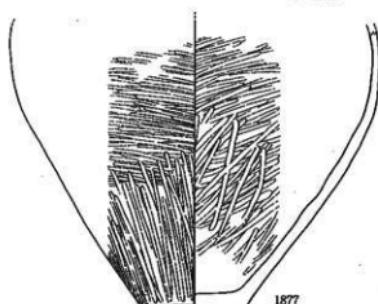
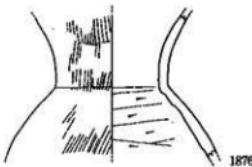
第211図 SR03(C)出土遺物(9)(1/4、1/2)



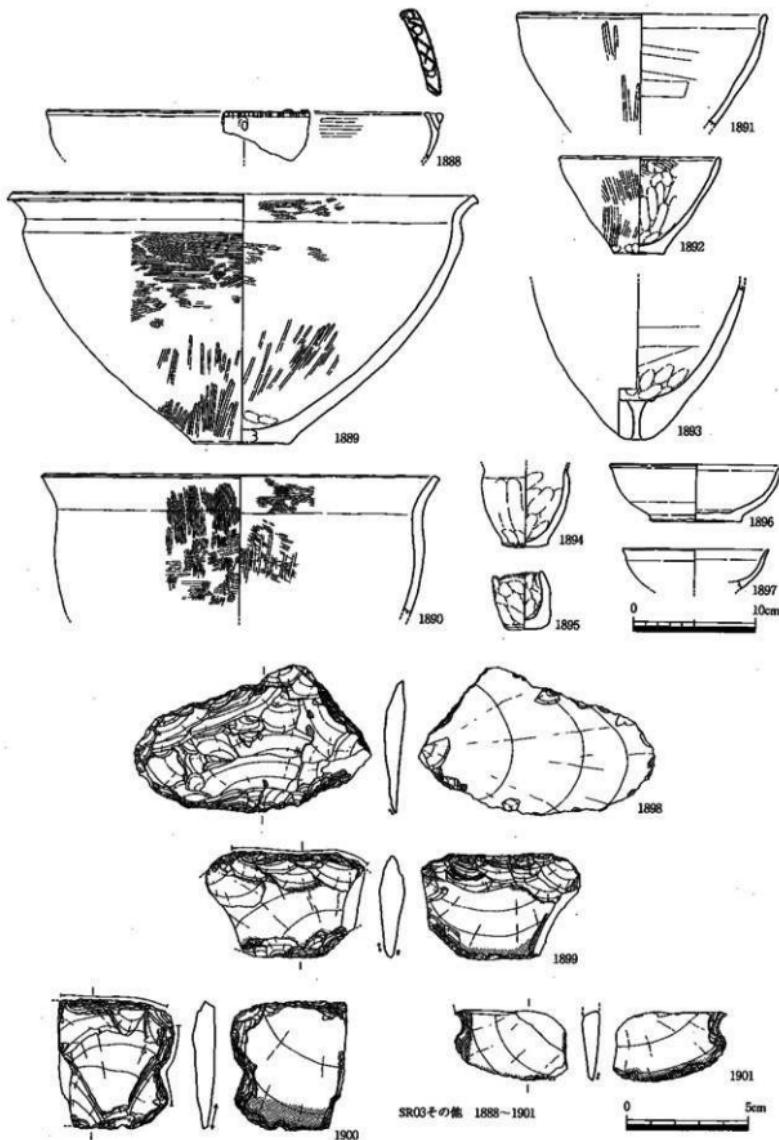
第212図 SR03(D)出土遺物(6)(1/4、1/2)



SR03-その他 1874～1887  
0 10cm



第213図 SR03出土遺物(7)(1 / 4)



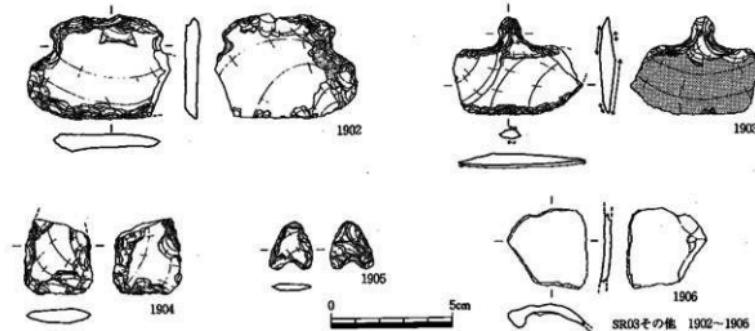
第214図 S R 03出土遺物(48(1/4、1/2)

明瞭に残し、底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。13世紀代。1861は椀。外面にヘラミガキをする。吉備系土師器椀。11世紀後半頃。1862は足釜。1863は羽釜C。鉢は下側を向き、口縁端部と鉢は一体化に近い。1864は須恵器。椀。1865は白磁碗。12世紀代。1866は砥石。上端は欠損し、下端は細くする。3面に使用痕がみられる。流紋岩製。

S R 03 その他 (第212~215図、図版77・78・85・86・89~91)

その他トレンチなどで出土した遺物である。

1867~1895は弥生土器。1867~1876は壺。1868~1869は二重口縁壺。1868は口縁の上端部に粘土を足して二重口縁部を作る。口縁部を鋸歯文で飾り、鋸歯文の間には竹管文を1個ずつ配す。1869は二重口縁壺の立ち上がった部分。下端部に剥離痕跡がみられ、外面には波状文がある。1870は壺の頸部。頸部と体部の境に突帯を巡らせ、そこに刻みを入れる。1871は頸部に突帯が付くもの。弥生時代中期後半。1867~1872~1875は広口壺。1872~1873はやや内傾気味の頸部に口縁部が大きく開く。1874は外傾する頸部に口縁部が大きく開く。1875は口縁部は欠損するが、直立する頸部に口縁部が大きく開くと考えられる。1876は長い頸部を持つ壺。1877は底部。しっかりした平底で外面とも体部中位は横方向、下部は縱方向のヘラミガキをする。弥生時代中期後半。1878~1880は壺。1878は頸部に押圧突帯を付け、口縁端部に斜め方向の刻み目を入れる。1882~1887は高坏。1882は内面体部を横方向の、その他を縱方向にヘラミガキする。底部中心付近には円形に脚部が割れた痕跡があり、中心部は出っ張っている。1883は全体にヘラミガキする。底部が抜けっていて、粘土で充填していたものが剥がれ落ちた痕跡と思われる。1884は脚部内面を横方向にヘラ削りする。穿孔は均等に3箇所に残存し、4箇所に均等に配していたと考えられる。1885は脚部に穿孔が3孔均等に配される。1888~1892は鉢。1888は口縁端部に穿孔し、上面に円形浮文を張る。弥生時代中期後半。1889は赤色顔料が付く鉢と同じタイプの鉢と思われるが、赤色顔料は観察できなかった。1893は瓶。1894~1895はミニチュア土器。いずれも指頭痕が顯著。1896は須恵器椀。平底で、体部は丸みがあり、口縁部は外反する。播磨産に似た形態。1897は綠釉陶器椀。土師質で濃い緑色の釉を掛ける。近江産。1898~1899はスクレイパー。1898は裏側はほとんど加工しない。1899は刃部に磨滅痕を残し、上部は漬して加工する。1900~1902は石庵丁。1900は上部を漬して加工する。1901は両端に挟りを入れる。1903は石匙。1904~1905は石鎌。1904は平基式、1905は凹基式。1906は不明金属製品。



第215図 S R 03出土遺物(1 / 2)

## 7. 包含層

### 3区①包含層（第216・217図、図版78・89・90）

おもに3区①西半部で検出した、ベース面の上面に堆積していた層である。暗褐色砂混粘質土・暗灰褐色砂質土を呈し、厚さ20cm前後である。石器や青磁碗を除けば概ね9世紀後半～10世紀前半のもので、銀治関連遺構群の遺構検出の際に出土したものが多い。

1907～1913は土師器。1907～1909は杯。すべて回転台土師器。9世紀後半～10世紀前半。1910は椀底部。1911は土師器壺D。口縁端部を上方へつまみ上げる。1912は羽釜A。口縁端部・鋤端部とも上方へ引き上げる。1913は蛸壺。全体になでて仕上げる。真蛸壺。1914は須恵器杯。外面に火拂が掛かる。1915は須恵器壺。体部外面には上から下、左から右の格子タタキ痕が残る。タタキは壺の肩部を持って上から下へ叩くので、下部へ下がるに従い、タタキの方向は斜めになる。口縁部はほとんど横ナデで消しているが、わずかに格子タタキ痕跡が残る。1916は黒色土器B椀。摩滅により調整は不明。1917は綠釉陶器皿。須恵質で内外面ともヘラミガキを密に行った後に施釉する。口縁端部にはわずかに沈線が入る。京都産と考えられる。1918は青磁碗。龍泉窯系。内面と外面高台部付近まで施釉する。見込み部分には「金玉満堂」の銘がある。12世紀半ば～後半。1919は丸瓦。四面に布目が残る。凸面には板ナデの後わずかにヘラミガキの痕跡がある。1920は平瓦。四面には粗めの布目が、凸面には繩タタキ痕が斜め方向に残る。左右交互からタタキを行ったと考えられる。1921・1922は鍍羽口。ともに溶融痕跡は残らないが、先端方向が灰色に変色する。1923・1924はスクレイバー。1923は刃部をわずかに加工して作る。1924は2方向に刃を作る。1925は石匙。1926は縦長洞片。1927は石鏃か。左半分は欠損する。上面はつるつるで擦痕が多数残る。欠損後に砥石として再利用したのか。

### 3区②包含層（第218図、図版78）

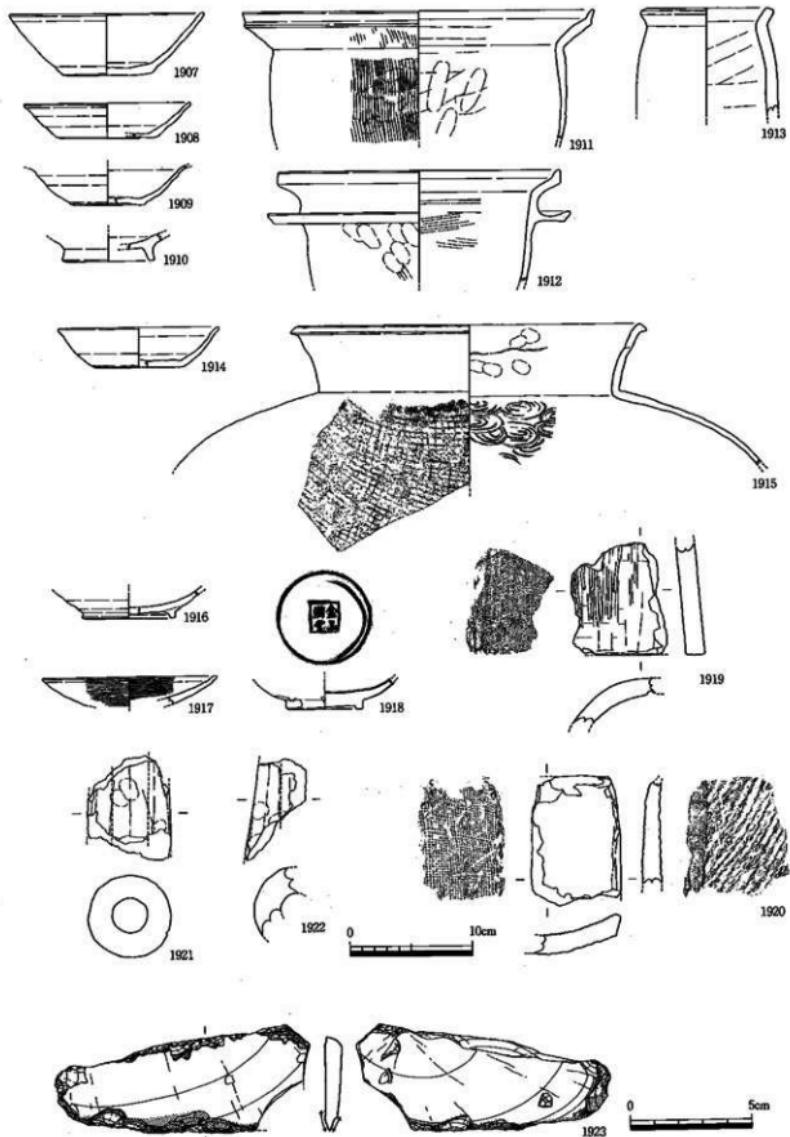
3区②で遺構検出時に出土した遺物である。1929のみ中央付近の攪乱層を除去した際に出土したもの、残りは黒色粘土層から出土したものである。黒色粘土層は、3区①S R01部分で中央部分に黒色粘土層が厚さ10cmほど堆積しているので、その延長部分に少し堆積していたのかもしれない。この黒色粘土は2区を中心に堆積する黒色粘土層の縁辺部と考えられる。

1928～1930は弥生土器。1928は広口壺。直立する頸部に口縁部が大きく開く。口縁端部には円弧状に粘土を貼り付け、そこに刻み目を入れるものと3個所に貼り付けている。端部には波状文を描く。1930は壺。口縁端部が上部へ立ち上がる。1931は楔形石器。サヌカイト製。

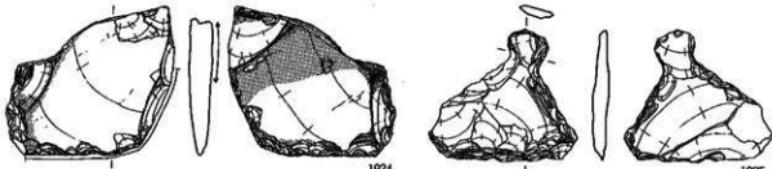
### 3区④包含層（第219図、図版90）

3区④上面精査などの際に出土した遺物である。1932・1933・1936～1939はSH07付近から出土したもので、もともとSH07の上部包含層に由来する可能性が高い。1934は壁切り中、1935は遺構精査中である。

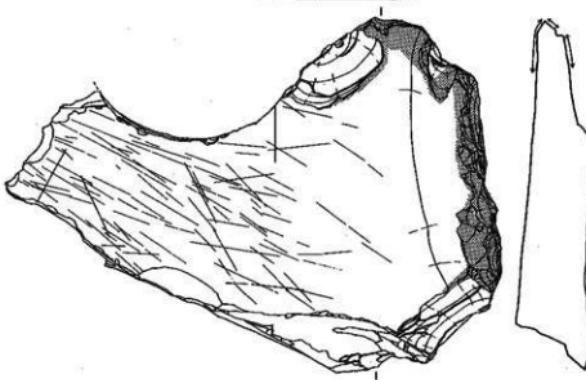
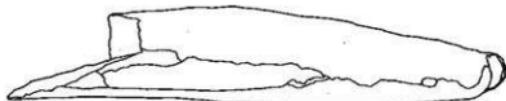
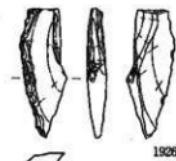
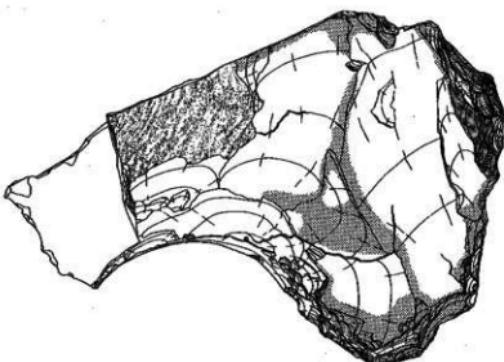
1932～1934は弥生土器。1932は二重口縁壺。口縁部の立ち上がり部分は欠損する。1933・1934は鉢。1933は内外面ともハケ、1934は外面にタタキ痕、内面には板压痕を残し、底部は平底をしっかり作る。1935は土師器碗。口縁端部に僅かに面を持つ。1936は土師器杯。円盤状高台を持つ。1937は打製石斧。両端部に抉りを入れる。1938・1939は石鏃。1938は平基式。1939は凹基式。



第216圖 3区①包含層出土遺物(1)(1/4、1/2)

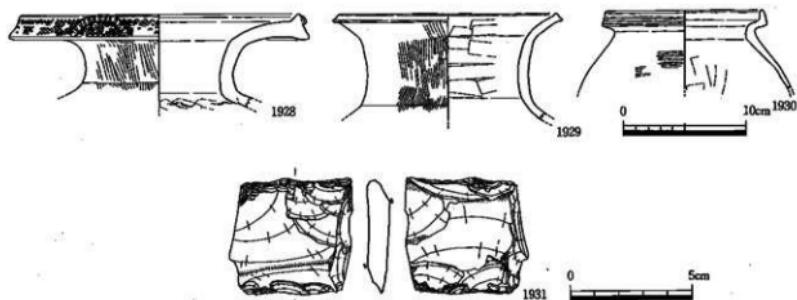


0 5cm

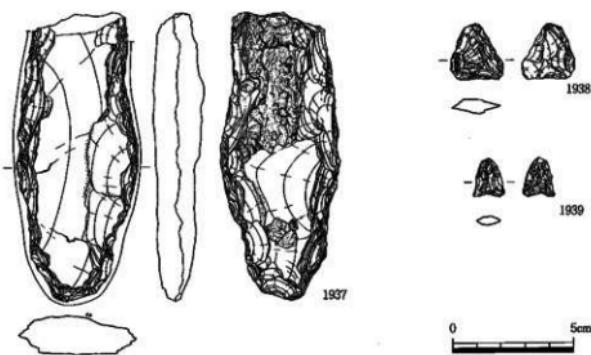
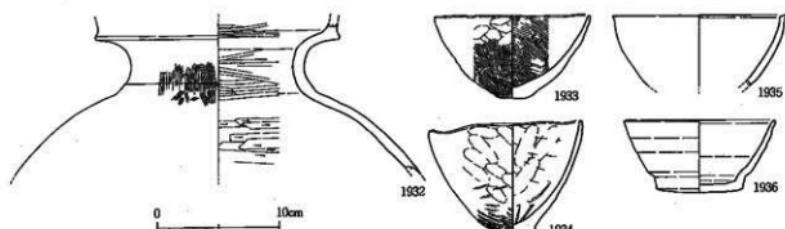


1927

第217圖 3區①包含層出土遺物(2)(1／2)



第218図 3区②包含層出土遺物(1/4、1/2)



第219図 3区④包含層出土遺物(1/4、1/2)

# 第4章 自然化学分析の調査結果

## 第1節 川津東山田遺跡I区のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

川津東山田遺跡 I 区の発掘調査では、土層壁面の調査において畦畔状の盛り上がりが複数認められることから、これらが当時の水田跡である可能性が推定された。そこで、プラント・オパール分析を行い、水田耕作層の検査を試みることになった。

### 2. 試料

試料採取地点は、調査区北東部の2区③中央畦（S R02B - 2）南側壁面である。分析試料は、上位より粗砂混じり灰褐色砂質土（試料1）、鉄分を多く含み赤茶色を呈する粗砂混じり灰褐色砂質土（試料2）、鉄分を少量含む粗砂混じり灰褐色砂質土（試料3）、粗砂混じり灰褐色砂質土（試料4）、褐色の強い灰褐色砂質土（試料5）、暗灰褐色粗砂混じり粘質土（試料6）、暗灰褐色砂混じり粘質土（試料7a）、色調が薄く砂分の少ない暗灰褐色砂混じり粘質土（試料7b上、7b下）、砂が少し混じる黒灰褐色粘質土（試料8a、8a下）、灰色の強い黒灰褐色粘質土（試料8b）、黒灰色粘土（試料9a）、黒茶灰色粘土（試料9b上、9b下）の各層準より採取された計15点である。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約 $40\mu\text{m}$ 、約0.02g）  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（ $20\mu\text{m}$ 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数（試料 1 gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-6}$  g）を乗じて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はスキ、タケア科について数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ 2.94（種実重は 1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48 である（杉山・藤原、1987）。

#### 4. 分析結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族（ヒエ属型）、ヨシ属、ウシクサ族（スキ属型）、タケア科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類の各分類群である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 3、第 220 図に示した。おもな分類群については顕微鏡写真を示した。

#### 5. 考察

##### （1）川津東山田遺跡 I 区の稻作跡

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行うにあたって、稻作の行われていた可能性が高いと判断されるのは、通常、イネのプラント・オパールが試料 1 g あたりおよそ 5,000 個以上の密度で検出された場合である。また、当該層においてプラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくいことから、密度が基準値に達していない場合であっても稻作跡である可能性が考えられる。これらのこととを基準として稻作跡の可能性について検討を行う。

イネのプラント・オパールが検出されたのは、上位より試料 1～8 a、9 a および 9 b の各層準である。したがって、これらの層準において稻作が行われていた可能性が考えられる。このうち、試料 1 の層準ではプラント・オパール密度が 6,100 個/g 以上と高い値である。また、試料 7 b の層準では上部は 2,800 個/g とやや低いものの、下部は 5,900 個/g と高い密度である。なおかつ直上層の試料 7 a が低密度であることから上層からの混入は考えにくい。試料 2 では 5,000 個/g 弱と比較的高い密度である。よって、これらの層準については耕作層であった可能性が高いと判断される。また、試料 4 の層準ではプラント・オパール密度は 3,700 個/g とやや低い値であるが、明瞭なピークが認められることから上層からの混入である危険性は考えにくい。こうしたことから、当該層準についても稻作跡である可能性が高いと考えられる。なお、畦畔状の盛り上がりが認められた 7 a、8 a、9 a の各層準では、いずれもプラント・オパール密度が 1,000 個/g 前後と低い値である。よって、分析的にはこれらの層準を稻作跡と肯定することは難しい。仮にこれらの層準で稻作が行われていたとしたならば、プラント・オパール密度の低いことの原因としては次のようなことが考えられる。1) 耕地として利用された期間が短かった、2) 休耕期間（休閑）があった、3) 田畠輪換が行われていた、4) 稲葉の多くが耕作地の外に持ち出されていた、5) 稲の生産性が低かったなどである。

##### （2）プラント・オパール分析から推定される環境

おもな分類群の推定生産量（図の右側）をみると、各層準ともネザサ節型の卓越が顕著である。このことから、調査区および周辺は比較的乾いた環境であったと推察される。ただし、試料 1～5、7 a～

8 b、9 b の層準ではヨシ属も優勢であることから、近傍にはヨシの生育する湿地が存在したと推定される。また、このことは(1)で推定された稻作跡が水田であった可能性を示唆する。試料 9 b 下以外ではススキ属型が検出されていることから、各層準とも近傍にススキ属も生育していたとみられる。とくに試料 2、3、5、7 b、8 a の各層準では比較的多かったと推定される。なお、試料 2、7 b 下および 8 a からはヒエ属型とみられるプラント・オパールが検出されている。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない(杉山ほか、1988)。したがって、ここでヒエが栽培されていたかどうかは不明であるが、検出された層準はいずれも稻作層と判断されたところであり、さらにいざれも密度は 1,000 個/g 前後と低いことから、これらは雑草のイヌヒエあるいは水田雑草のタイヌヒエである可能性が高い。

## 6.まとめ

川津東山田遺跡 I 区においてプラント・オパール分析を行い、稻作跡の探査を試みた。その結果、上位より試料 1、試料 2、試料 4 および試料 7 b の層準で稻作が行われていた可能性が高いと推定された。なお、畦畔状の高まりが確認されていた試料 7 a、8 a および 9 a の各層準については、稻作跡であることを積極的に肯定することはできなかった。

## 文献

- 杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析.赤山-古環境編一.川口市遺跡調査会報告、10、281-298.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追究のための基礎資料として-.考古学と自然科学、20、p.81-92.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-.考古学と自然科学、9:15-29.
- 藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O.sativa L.*)生産総量の推定-.考古学と自然科学、12:29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査一.考古学と自然科学、17:73-85.

検出密度(単位: ×100個/ε)

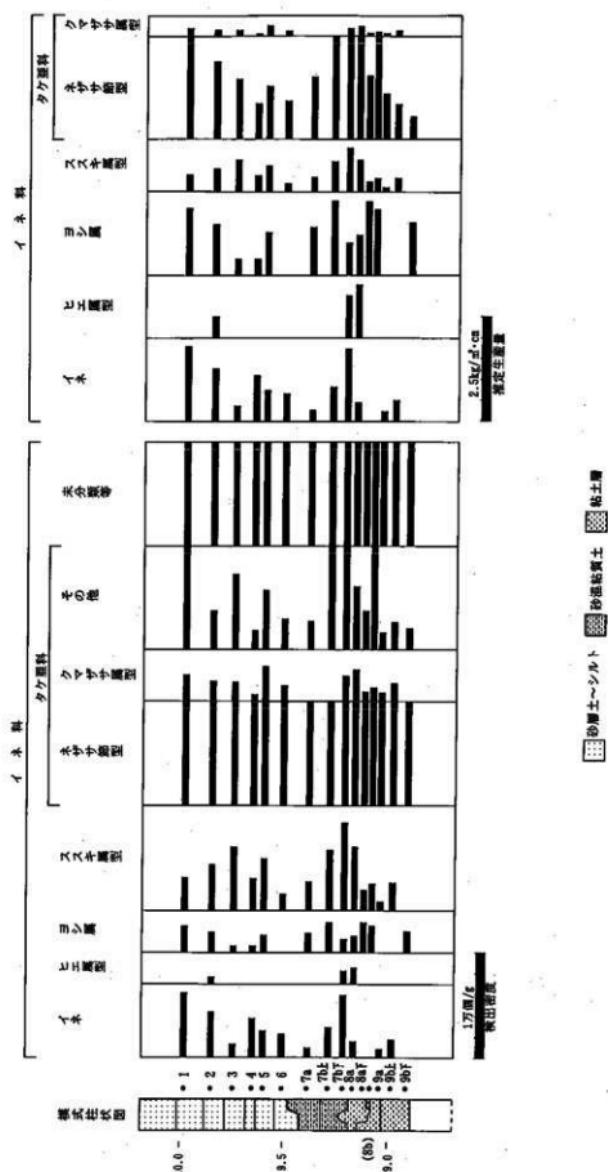
分類群(和名・学名)	土層	2区③中央堆							
		1	2	3	4	5	6	7a上	7b下
イネ科 Gramineae (Grasses)									
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	61	43	12	37	25	22	9	28	59
ヒエ属 <i>Echinochloa</i> type		6						12	15
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	25	19	6	6	16	18	28	12	15
ススキ属 <i>Miscanthus</i> type	31	43	60	30	49	15	27	57	83
タケ亜科 <i>Pooidiatae</i> (Bamboo)									
ネササ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nerazzia</i> type	479	389	299	177	263	189	311	509	920
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> ) type	25	19	18	6	33	15		24	30
その他 Others	154	37	72	18	57	29	27	141	106
未分類等 Unknown	1093	611	717	402	689	408	778	1245	1840
プラント・オハール總数	1806	1117	1172	640	1108	655	1162	1981	2984
								2181	1092
								1964	1051
								840	

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)

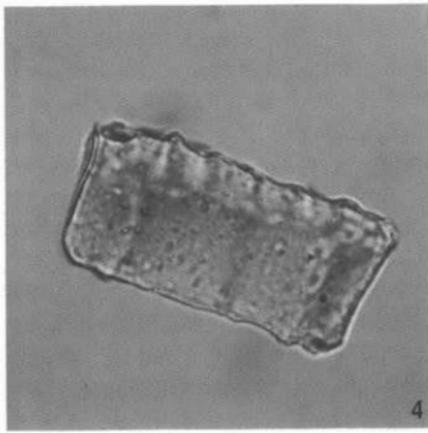
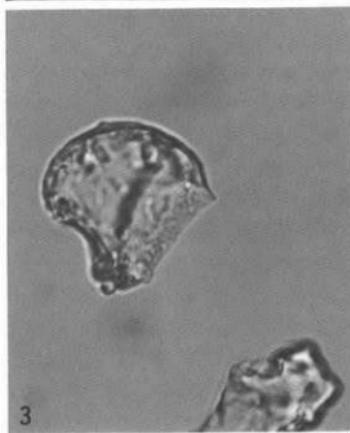
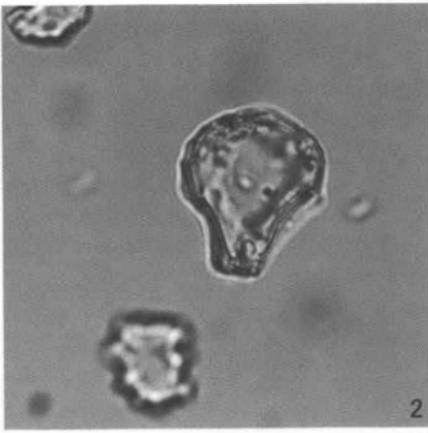
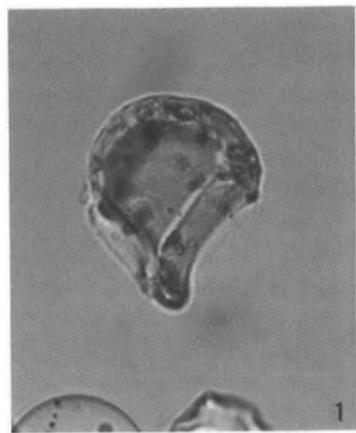
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.81	1.27	0.35	1.08	0.72	0.64	0.27	0.83	1.73	0.44	0.24	0.51
ヒエ属 <i>Echinochloa</i> type		0.62							0.99	1.25		
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	1.55	1.17	0.38	0.38	1.04		1.15	1.79	0.74	0.94	1.77	1.58
ススキ属 <i>Miscanthus</i> type	0.38	0.54	0.74	0.38	0.61	0.18	0.34	0.70	1.02	0.74	0.23	0.31
ネササ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nerazzia</i> type	2.30	1.87	1.43	0.85	1.26	0.91	1.49	2.44	4.42	3.08	1.52	2.40
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> ) type	0.18	0.14	0.13	0.05	0.25	0.11		0.18	0.22	0.07	0.09	0.06

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表3 川津東山田遺跡I区のアラント・オバール分析結果



第220図 川津東山田遺跡I区におけるプラント・オバール分析結果

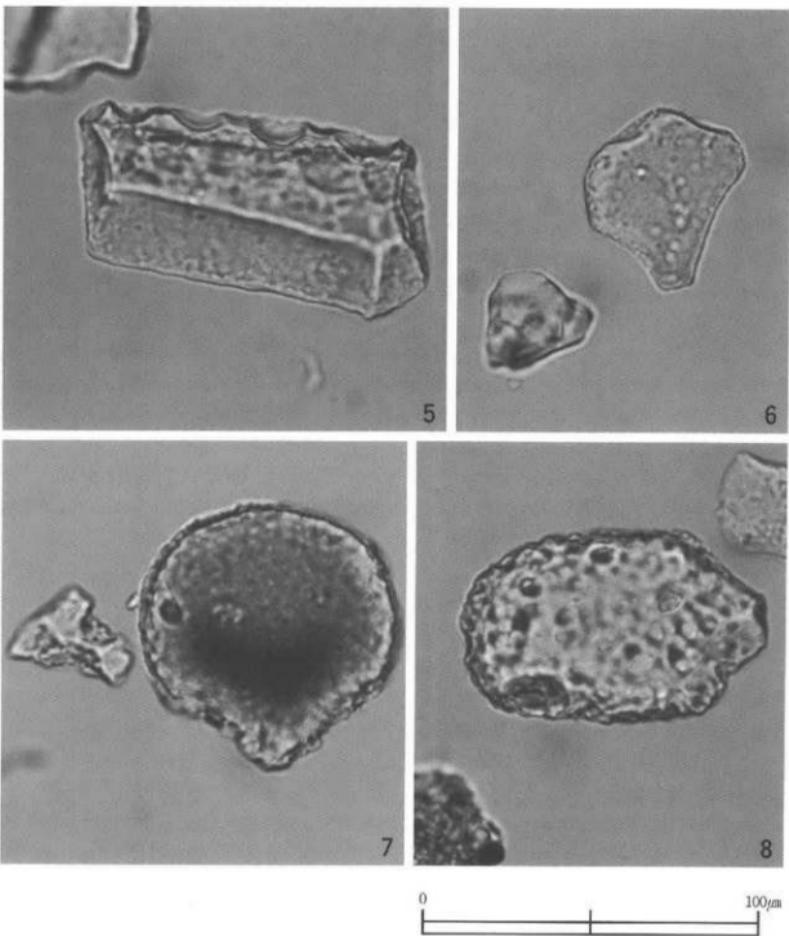


0 100 $\mu$ m

- |   |   |            |
|---|---|------------|
| 1 | イ | ネ          |
| 2 | イ | ネ          |
| 3 | イ | ネ          |
| 4 | キ | ビ 属 (ヒエ属型) |

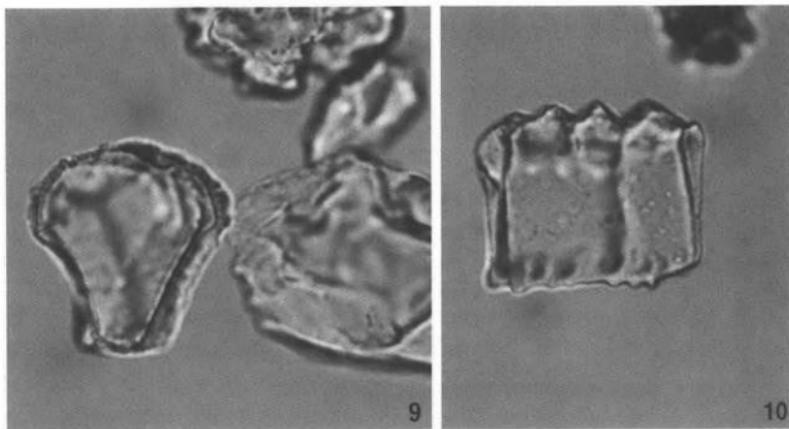
- |          |
|----------|
| 試料 1     |
| 試料 4     |
| 試料 7 b 下 |
| 試料 7 b 下 |

写真1 プラント・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真(1)



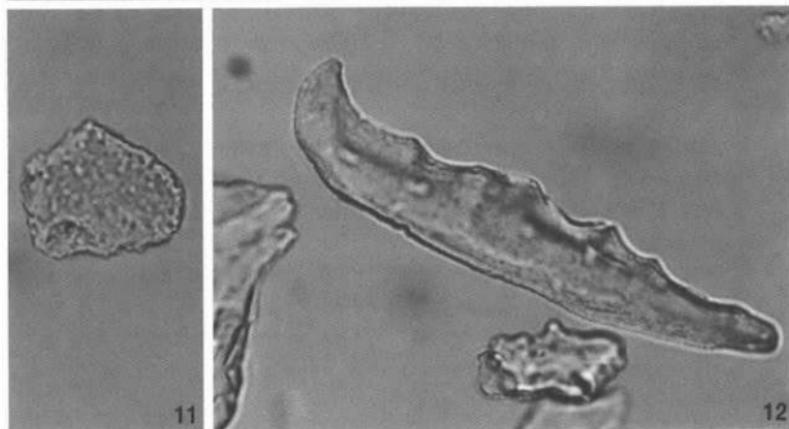
- |   |             |         |
|---|-------------|---------|
| 5 | キビ属(ヒエ属型)   | 試料8 a   |
| 6 | ウシクサ属(ススキ属) | 試料7 b 下 |
| 7 | ヨシ属         | 試料7 b 上 |
| 8 | ヨシ属         | 試料8 a 下 |

写真2 プラント・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真(2)



9

10



11

12



- |    |              |          |
|----|--------------|----------|
| 9  | タケ亜科（ネザサ節型）  | 試料 7 b 下 |
| 10 | タケ亜科（ネザサ節型）  | 試料 8 a   |
| 11 | タケ亜科（クマザサ属型） | 試料 5     |
| 12 | その他（樹木起源？）   | 試料 8 a   |

写真3 プラント・オバール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(3)

## 第2節 川津東山田遺跡 I 区出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

### 1 いきさつ

坂出市川津町の飯野山北麓に位置する川津東山田遺跡 I 区では、10世紀前半に比定される造構から焼形鍛冶滓・羽口・含鉄鐵滓・鉄塊系遺物などの鍛冶関連遺物が出土している。このため当遺跡における鉄器生産の実態について検討する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

### 2 調査方法

#### 2-1 供試材

表4に示す。鍛冶関連遺物計9点の調査を行なった。

#### 2-2 調査項目

##### (1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

##### (2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

##### (3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の $3\text{ }\mu$ と $1\text{ }\mu$ で仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクリル（ピクリン酸飽和アルコール液）で、フェライト結晶粒は5%ナイタル（硝酸アルコール液）で、腐食（Etching）している。

##### (4) ピッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行なった。試験は鏡面研磨した試料に $136^\circ$ の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

##### (5) CMA (Computer Aided X-Ray Micro Analyzer) 調査

EPMMA (Electron Probe Micro Analyzer) にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名X線マイクロアナライザとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

#### (6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 ( $\text{SiO}_2$ )、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化カルシウム ( $\text{CaO}$ )、酸化マグネシウム ( $\text{MgO}$ )、酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化ナトリウム ( $\text{Na}_2\text{O}$ )、酸化マンガン ( $\text{MnO}$ )、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )、五酸化磷 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

#### (7) 耐火度

耐火度の加熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

### 3 調査結果 ( ) は報文番号

#### KWT-1 羽口 (331)

① 肉眼観察 : 先が僅かにすぼまる形状の羽口片である。先端・基部側は欠損する。胎土は硬質で緻密な粘土質で、初を少量混和する。外面先端側の色調は被熱のため灰白色に変色している。地の色調は淡い橙色である。

② 顕微鏡組織 : Photo. 1 ①～③に示す。①は羽口胎土である。鱗片状の粘土鉱物 (Cerisite) 中に微細な角張った形状の砂粒が混入する。②③は外面表層部分で、熱影響を受けて粘土鉱物がやや非晶質化する。

③ 化学組成分析 : Table. 2 に示す。強熱減量 (Ig loss) 8.45%と熱影響は少なく結晶構造水の飛散はあまりない状態での分析である。鉄分 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) は 5.44% と高く軟化性に問題のある数値であった。酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) は 15.60% と低く耐火性に不利である。

なお自媒剤となる塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) は 1.58% であった。胎土中への砂鉄の混入はあまりなく、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は 0.63% 止まりである。

④ 耐火度 : 胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片を作り、1 分間当たり  $10^{\circ}\text{C}$  の速度で  $1000^{\circ}\text{C}$  まで温度上昇させ、以降は  $4^{\circ}\text{C}$  に昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度が  $1090^{\circ}\text{C}$  であった。成分系を反映してか耐火性の低い性状であった。

#### KWT-2 槌形鍛冶滓 (大) (336)

① 肉眼観察 : 平面不整六角形を呈する槌形鍛冶滓である。側面 6 面は全面鏡面であるが完形に近い試料である。全面黄褐色の酸化土砂が固着しており、地の観察が困難であるが、上面は平坦気味でガラス質滓の凸部が 1 個所認められる。羽口溶融物の垂下痕であろう。下面側は幅 1 cm 程の木炭痕が散在し、ごく薄く灰白色の鍛冶炉床粘土が付着する。滓の地は灰色で風化氣味である。そのためか全面に細かい亀裂が認められる。

② 顕微鏡組織 : Photo. 1 ④～⑧に示す。④は表層部分で、淡灰色木ぎれ状結晶ファイアライト ( $\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、白色樹枝状結晶ワスタイト (Wustite :  $\text{FeO}$ ) が基地の暗黒色ガラス質滓

中に晶出する。⑤⑥も④と同様の鉱物組成であるが、こちらは結晶の形態が明瞭である。⑦⑧白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO) が凝集気味に晶出する個所を示す。鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶津の晶癖である。

③ ピッカース断面硬度 : Photo. 1 ⑧に白色粒状結晶凝集部分の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は 447Hv であった。ヴスタイトの文献硬度値 450~500Hv (注 1) の下限を僅かに下回るが、誤差の範囲内といえよう。ヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析 : Table. 2 に示す。脈石成分 ( $TiO_2$ 、V、 $MnO$ ) の低減した成分系である。全鉄分 (Total Fe) 40.63% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.04%、酸化第 1 鉄 ( $FeO$ ) 41.36%、酸化第 2 鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 12.07% の割合であった。ガラス質成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) 40.50% で、このうちに塩基性成分 ( $CaO + MgO$ ) 2.26% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) 0.29%、バナジウム (V) 0.01% と低く、酸化マンガン ( $MnO$ ) も 0.13% と低値で、銅 (Cu) は 0.002% であった。鍛錬鍛冶津の成分系である。

#### KWT-3 梶形鍛冶津 (中) (337)

① 肉眼観察 : 厚手でやや歪な形状の楕形鍛冶津である。上下で中心がややずれた 2段楕形鍛冶津の可能性がある。また、風化のため分かりづらいが側面 2 面は破面と考えられる。全面に細かい木炭痕がやや密に認められる。津の地は灰色で細かい気孔が散在する。

② 顕微鏡組織 : Photo. 2 ①~③に示す。①は表層の錫化鉄部を示す。微かにパーライト組織痕跡が認められて亜共析鋼 (0.77%C 以下) 止まりである。②③は津部で白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイアライト (Fayalite :  $2FeO \cdot SiO_2$ ) が基地の暗黒色ガラス質津中に晶出する。鍛錬鍛冶津の晶癖である。

③ ピッカース断面硬度 : Photo. 2 ③に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は 469Hv であった。ヴスタイト (Wustite : FeO) の文献硬度値の範囲内で、ヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析 : Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) 51.64% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.19%、酸化第 1 鉄 ( $FeO$ ) 45.34%、酸化第 2 鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 23.17% の割合であった。ガラス質成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) 24.66% で、このうちに塩基性成分 ( $CaO + MgO$ ) 1.51% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) 0.52%、バナジウム (V) 0.02% と低く、酸化マンガン ( $MnO$ ) も 0.33% と低めで、銅 (Cu) 0.002% であった。鍛錬鍛冶津の成分系である。

#### KWT-4 梶形鍛冶津 (小) (763)

① 肉眼観察 : 小型で偏平な楕形鍛冶津である。側面 1 面が大きく破面。上面側は部分的にやや気孔が集中する個所が認められ、周間に細かい木炭痕が散在する。下面でも細かい木炭痕が散在し、1 個所小さく光沢のある黒色ガラス質津部分が認められる。津の地は灰色で、一部表層にガスが抜けきらないような細かい気孔が集中する部分があるが、全体に緻密な津である。

② 顕微鏡組織 : Photo. 2 ④~⑧に示す。④は津表面に固着した酸化土砂中に多數混入する鍛造剝片である (注 2)。これは赤熱鉄素材の鍛打で剥落した酸化膜で鍛錬鍛冶を実証する。⑤⑥は津中の錫化鉄部分である。微かにフェライトと層状のパーライト痕跡が残存しており、極低炭素鋼に分類される。⑦⑧は津部で白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファ

イヤライト ( $\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が基地の暗黒色ガラス質津中に晶出する。鍛錬鐵治津の晶癖である。

- ③ ピッカース断面硬度: Photo. 2 ⑧に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は463Hvであった。ヴスタイト ( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ ) に同定される。
- ④ 化学組成分析: Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) 52.54%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.14%、酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) 46.56%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 23.18%の割合であった。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) 24.31%で、このうちに塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) 2.02%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 0.63%、バナジウム (V) 0.02%と低めで、酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) も0.12%と低く、銅 (Cu) 0.007%であった。鍛錬鐵治津に分類される。

#### KWT-5 梶形鍛冶津 (小) (764)

- ① 肉眼観察: 偏平で小型の含鉄梶形鍛冶津片である。淡褐色の酸化土砂が分厚く固着するため地の観察が困難な個所があるが、周囲の側面5面は破面と考えられる。そのうち2面は新しい破面で、一部茶褐色に鈍化した含鉄部が確認される。金属探知器での反応はなかった。試料上面は凹面を呈し細かい木炭痕が散在する。津の地は光沢のある黒灰色で表層側に細かい気孔が散在する。
- ② マクロ組織: Photo. 7 に示す。やや不定形の気孔が特に上面側に散在する。また表層に沿ってごく小さな鈍化鉄部分がみられる。ヴスタイト ( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ ) 結晶粒が全体的に小さく枝状に晶出するが、特に下面側では微細である。1個所木炭を噛み込んでいる。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 3 に示す。①～④は表層の酸化土砂中に混入する鍛造剥片である。鍛造剥片の被膜構成は、表層は極薄のヘマタイト ( $\text{Hematite} : \text{Fe}_2\text{O}_3$ )、中間層マグネット (Magnetite :  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、内層ヴスタイト ( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ ) の3層分離型である。いずれも内層ヴスタイトが非晶質化した鍛打工程の後半段階の派生物と考えられる。⑤～⑨は津部で白色粒状結晶ヴスタイト ( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ )、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト ( $\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が基地の暗黒色ガラス質津中に晶出する。なおヴスタイト粒内に微小析出物が認められる。ウルボスピネル ( $\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ) 系の析出物と推測される。
- ④ ピッカース断面硬度: Photo. 3 ⑤に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は503Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の上限を僅かに上回るが、誤差の範囲内といえよう。析出物が硬化の要因となった可能性もあるかもしれない。

#### KWT-6 含鉄鉄津 (1188)

- ① 肉眼観察: 小型不定形津で破面をもたぬ完形の含鉄鉄津である。津は黒灰色のガラス質分の高そうな軽い質感のもので、部分的に茶褐色の鈍化による変色部分が認められる。各面には小さな木炭痕が僅かにみられる。端部で金属探知器H (○) での反応がある。
- ② マクロ組織: Photo. 7 に示す。試料先端の $12 \times 7 \text{ mm}$ 程の鉄部を中心に示している。共析鋼 (0.77%C) クラスで全面パーライトで黒色層状で少々見ずらい状態にある。細かい気孔が多数散在し、周囲より鈍化が進行している。また周囲の津部の風化も顕著である。
- ③ 顕微鏡組織: Photo. 4 に示す。①は津部で白色粒状結晶ヴスタイト ( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ ) がやや凝聚気味に晶出する。風化の影響が著しいので、前にみてきた結晶とはいささか異なった印象を与

えている。鉱物相から鍛冶系の含鉄鉄滓と判断される。②～⑨は金属鉄を5%ナイタルで腐食して現れた組織である。②③はパーライト基地に初析フェライトが針状や網目状に析出する亜共析組織の個所である。④はほぼ全面パーライトの共析組織部分、⑤はマルテンサイト組織部分を示す。パーライト組織の素地中にブロック状にマルテンサイト組織を呈する個所が認められ、パーライトが析出する共析温度(727°C)以下の温度領域から急冷されたものと考えられる。

④ ピッカース断面硬度：Photo.4⑥～⑨に金属鉄組織の硬度測定の圧痕を示す。⑥は針状フェライトが析出する個所で、硬度値は130Hvであった。⑦はパーライト基地に初析フェライトが析出する個所で硬度値は290Hv、⑧は全面パーライト部分で硬度値は332Hv、また⑨はマルテンサイト部分で硬度値は930Hvであった。各組織の硬度値は相対的な差異でもって対応するが、各値はやや高め傾向にある。

#### KWT-7 鉄塊系遺物 (292)

① 肉眼観察：平面不整梢円形でやや偏平な鉄塊系遺物である。表層には僅かに薄く灰色の滓が付着する。全体に放射割れが顯著で、一部表層が剥落している。吸炭の進んだ鍛冶系鉄塊系遺物と考えられる。金属探知器H(○)での反応がある。

② マクロ組織：Photo.8に示す。錆化が進行して端部の一部に金属鉄が遺存するのみであるが、まとまりのよい鉄塊であった。組織的にはパーライト素地に針状セメンタイトが析出する過共析組織から白鈍鉄およびねずみ鉄組織が混在する。

③ 顕微鏡組織：Photo.5に示す。①表層のごく僅かに固着する滓部は暗黒色ガラス質滓の素地中に淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル(Ulvospinel: 2FeO·TiO<sub>2</sub>)が晶出する。また共存する錆化鉄には、針状セメンタイトが析出する過共析組織痕跡が認められる。②は鉄中非金属介在物で、黄褐色微小異物は硫化鉄(FeS)である。③～⑨は金属鉄を5%ナイタルで腐食して現れた組織を示す。③の写真左側は片状黒鉛を析出するねずみ鉄組織、右側は蜂の巣状のセメンタイトとオーステナイトの共晶であるレアブライ特が認められる白鈍鉄組織である。④⑤はまだ十分に成長しきっていない亜共晶組成白鈍鉄組織を示す。含有炭素量がやや低いためパーライトの面積率が大きい。⑥も亜共晶組成白鈍鉄部分である。こちらは成長の進んだ組織である。

④ ピッカース断面硬度：Photo.5の⑦～⑨に金属鉄組織の硬度測定の圧痕を示す。⑦は板状セメンタイトに囲まれたパーライトが晶出する個所で、硬度値は412Hvであった。また⑧はセメンタイト部分で硬度値は504Hv、⑨はレアブライ特部分で硬度値は680Hvであった。それぞれが組織に対応した値である。

⑤ CMA調査：Photo.10に表層僅かに固着する滓部の特性X線像と定量分析値を示す。

C O M P (反射電子像)に1の番号をつけた不定形結晶の定量分析値は55.1%FeO-28.6%TiO<sub>2</sub>-8.9%V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-2.2%Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>であった。また3の番号をつけた不定形結晶の定量分析値も56.4%FeO-29.4%TiO<sub>2</sub>-8.6%V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-1.6%Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>と近似する値を示した。いずれもウルボスピネル(Ulvospinel: 2FeO·TiO<sub>2</sub>)に同定されてCrの固溶が注目される。2は素地部分で定量分析値は60.9%SiO<sub>2</sub>-14.8%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-2.8%CaO-3.1%K<sub>2</sub>O-16.6%FeO-3.8%TiO<sub>2</sub>-1.6%Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>であった。珪酸塩系でここでもTiやCrを固溶する。

ウルボスピネル(Ulvospinel: 2FeO·TiO<sub>2</sub>)が確認されたことから砂鉄系を原料とする製錬生成

物であることが明らかになった。さらにバナジウム（V）、クロム（Cr）が検出されたことが特徴的である。

最近四国における製鉄・鍛冶関連遺跡調査の結果、四国地域に賦存する砂鉄はクロム（Cr）を比較的多く含有することが明らかになっている（注5）（注6）（注7）。このため当試料も在地に賦存する砂鉄が原料である可能性が考えられる。現状では該期の四国地域における製鉄に関してほとんど分っていないが、当地域周辺における製鉄遺跡の存在を示唆しうるものとして注目される（注8）。

#### KWT-8 棒状鉄片（291）

- ① 肉眼観察：全体が褐色の酸化土砂に分厚く覆われた棒状の鉄器破片である。両端は破面で5×4mm程の隅丸長方形の破面が認められる。錆化が進行しており金属探知器での反応はない。
- ② マクロ組織：Photo. 8に示す。断面形は方形状。錆化により金属鉄は遺存しない。中核部は空洞になり外装は層状に剥離を起こしておらず鍛造品と判断される。
- ③ 顕微鏡組織：Photo. 6①～③に示す。金属鉄は遺存しないが、微かにフェライト粒と少量のパーライト痕跡が認められる個所がある。この痕跡から含有炭素量は0.1%以下の極軟鋼と推定される。

#### KWT-9 板状鉄片（290）

- ① 肉眼観察：全体が褐色の酸化土砂に分厚く覆われた厚さ5mm程の板状の鉄器破片である。錆化が進行しており金属探知器での反応はない。
- ② マクロ組織：Photo. 8に示す。断面はもともと紡錘形といおうか、凸レンズ状と表現すべく両端が窄まり、錆化により中央部が膨らんだ形状を呈する。剣先が想定できようが定かでない。錆化により金属鉄は遺存しない。層状の剥離を起こしておらず鍛造品と推定される。
- ③ 顕微鏡組織：Photo. 6④～⑥に示す。金属鉄は遺存しないが、微かにフェライト粒と少量のパーライト痕跡が認められる個所がある。こちらは含有炭素量は0.1%前後の極軟鋼と推定される。板状と表現しているが鉄器の器種ははっきりしない。

#### 4まとめ

（1）鉄塊系遺物（KWT-7）の表層に僅かに固着する滓の鉱物組成から、塩基性砂鉄を始発原料とする製錬生成鉄が鍛冶原料として撒入されていたことが明らかになった。更に滓中に晶出するウルボスピニル結晶のCMA調査の結果、クロム（Cr）が少量検出された。前述したように四国地域に賦存する砂鉄はクロム（Cr）を比較的多く含有する傾向が判明しているので、この試料も在地に賦存する砂鉄を原料に近接地域で鉄製錬が行われ、当遺跡に撒入された可能性が考えられて貴重な資料となった。10世紀代に四国の在地砂鉄製錬の間接証明となる。当地域における分析試料の蓄積が望まれる所である。

また、この鉄塊系遺物（KWT-7）は小振りであるが鉄はよくまとまっており、不純物の少ない高品位の鍛冶原料鉄といえる。なお鍛冶系の含鉄鉄滓（KWT-6）中の鉄部も小さなもので、こうした小振りの鉄塊が鍛冶原料として供給されたものと推測される。

- 〈2〉 梶形鍛冶津の化学組成（KWT-1～4）はいずれも脈石成分（ $TiO_2$ 、V、 $MnO$ ）が低値であった。先に述べたように不純物の少ない高品位の製錬生成鉄を原料として、鍛冶作業が行われたことを示すものと考えられる。その鍛冶は鍛造剥片が証明するように鉄器製作などの鍛錬鍛冶が主体である。荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の成分調整や不純物除去の精錬鍛冶津は、今回の調査試料の中にはなかった。
- 〈3〉 鉄片（KWT-8・9）はどちらも炭素含有量の少ない極軟鋼の鍛造品であった。共に銹化して金属鉄は遺存せず、金属組織からみた熱処理技術などを検討する情報は得ることができなかつた。
- 〈4〉 鍛冶羽口（KWT-1）は鉄分や塩基性成分が多く、アルミナは少なく耐火性に不利な成分系を示し、耐火度は1090°Cと低めであった。

(注)

- (1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968磁鉄鉱は530～600Hv、ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピニルは硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピニルと同定している。
- (2) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状津の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる（注3）。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite： $Fe_2O_3$ ）、中間層マグネット（Magnetite： $Fe_3O_4$ ）、大部分は内層ヴスタイト（Wustite： $FeO$ ）の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを越えると存在しなく、ヴスタイト相は570°C以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される（注4）。鍛造剥片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite： $Fe_2O_3$ ）は腐食しても侵されず、中間層マグネット（Magnetite： $Fe_3O_4$ ）は黄変する。内層のヴスタイト（Wustite： $FeO$ ）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト（Wustite： $FeO$ ）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。
- (3) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」「千葉県立房総風土記の丘年報15」（平成3年度）千葉県房総風土記の丘1992
- (4) 森岡ら「鉄鋼腐食科学」「鉄鋼工学講座」11朝倉書店1975
- (5) 大澤正己「具同中山遺跡出土、鉄津の金属学的調査」平成10年8月16日 パリノ・サーヴェイ株式会社作成報告書記載
- (6) 大澤正己・鈴木瑞穂「入野南山ノ陰遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」～高知県香美郡土佐山田町所在～「入野南山ノ陰遺跡発掘調査報告書」（土佐山田町埋蔵文化財報告書第1集）土佐山田町教育委員会 2001
- (7) 大澤正己・鈴木瑞穂「矢野遺跡出土鉄製品・砂鉄等の金属学的調査」「矢野遺跡（I）～徳島南環

状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』(徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第33集) 徳島  
県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局 2001.

- (8) 大澤正己・鈴木瑞穂「高知県内製鉄関連遺物の金属学的調査」土佐山田町教育委員会への提出原  
稿 平成13年2月8日

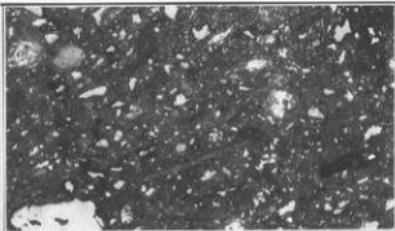
表4 供試材の履歴と調査項目

符号	通路名	通称名	構文番号	通称名	鑑定年代	計量値	主な目			調査
							大きさ(cm)	シルバーコロイド	ジオラム	
KWT-1	川津山田	SD01	31	男口	10C前半	124.80×28	267.9 g/L	○	○	○
KWT-2	川津山田	SD01	308	骨格遺物大	10C後半	113.61×42	917.2 g/L	○	○	○
KWT-3	川津山田	SD01	307	骨格遺物中	10C前半	74.97×39	277.0 g/L	○	○	○
KWT-4	川津山田	SR010(上層)	703	骨格遺物小	10C前半	61.50×19	67.6 g/L	○	○	○
KWT-5	川津山田	SR010(上層)	704	骨格遺物小	10C前半	36.48×17	31.7 g/L(A)	○	○	○
KWT-6	川津山田	SR020(下層)	1188	全骨	10C後半	27.30×15	6.0 g/L(O)	○	○	○
KWT-7	川津山田	SD01	232	骨格遺物	10C後半	23.26×19	15.5 g/L(O)	○	○	○
KWT-8	川津山田	SD01	281	海牡貝	10C後半	5.59×19	13.9 g/L(A)	○	○	○
KWT-9	川津山田	SD01	290	底状地質	10C前半	30.22×26	7.9 g/L(A)	○	○	○

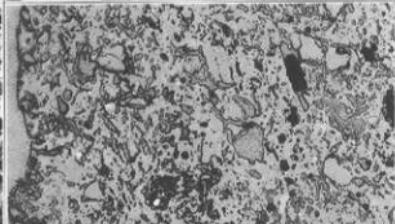
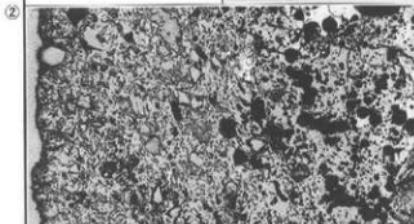
表5 供試材の組成

符号	通路名	構文番号	通称名	全分量	重素	酸化	二酸化物			鐵	銅	鉄火度	調査成分	$\Sigma_{\text{Fe}}$
							(Molar)	(Molar)	(Molar)					
KWT-1	川津山田	331	男口	4.61	0.21	0.77	5.44	61.24	15.60	0.91	0.57	2.10	1.48	0.22
KWT-2	川津山田	338	骨格遺物大	40.63	0.04	41.49	12.07	36.61	5.44	1.78	0.46	1.27	0.92	0.13
KWT-3	川津山田	337	骨格遺物中	51.64	0.19	45.36	23.17	16.09	3.88	1.14	0.97	0.74	0.53	0.23
KWT-4	川津山田	743	骨格遺物小	57.54	0.14	44.50	23.16	16.93	3.90	1.40	0.55	0.64	0.76	0.12

KWT-1  
羽口 (331)  
①×100 羽口胎土：粘土  
鉱物 (Cerisite)  
混入鉱物  
②×50 ③×100 外面表層  
粘土鉱物 被熱により  
非晶質化

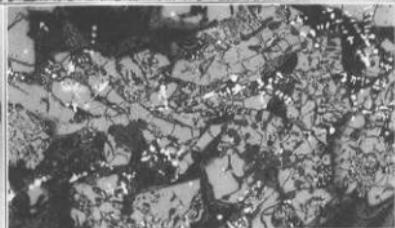


①

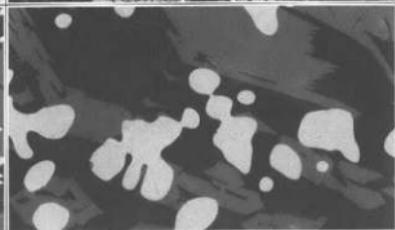
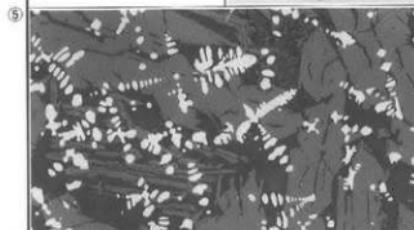


③

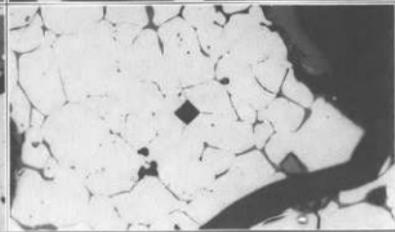
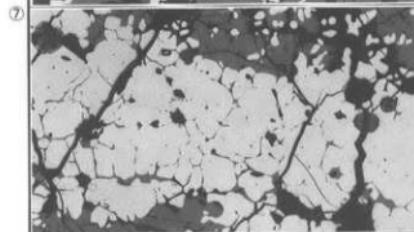
KWT-2  
楕形鍛冶滓 (336)  
④×100 表層個：ファイヤライ  
ト・ファイヤライト  
⑤×100 ⑥×400 ヴスタイ  
ト・ファイヤライト  
⑦×100 部分的のヴスタイ  
ト凝集  
⑧×200 硬度圧痕: 447Hv



④



⑥



⑧

写真4 羽口・楕形鍛冶滓の顕微鏡組織

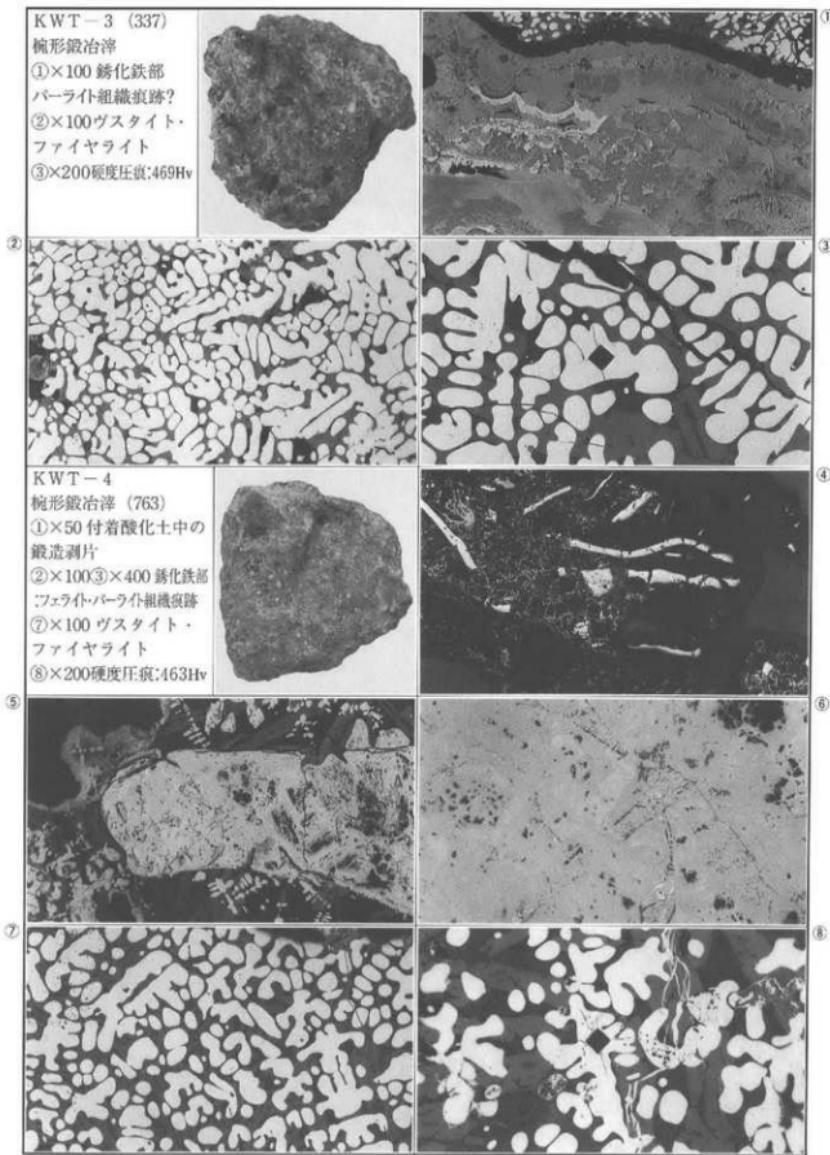


写真5 楢形鍛冶津の顕微鏡組織(1)

KWT - 5  
 楠形鍛冶津 (764)  
 ①×100 ②③×400 付着酸化土中の鍛削片  
 ④×100 同上  
 ⑤×200 硬度圧痕: 503Hv  
 ⑥×100 ⑦×400 グラウト  
 (粒内折出物あり)・ファイライト  
 ⑧×100 ⑨×400 同上

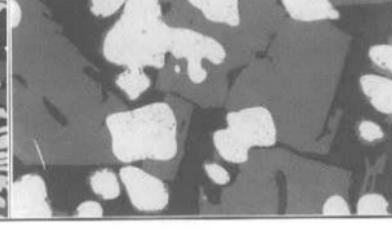
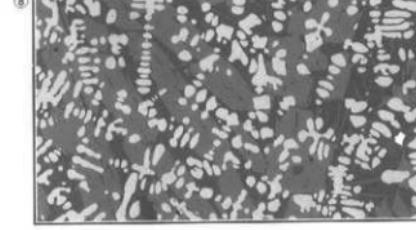
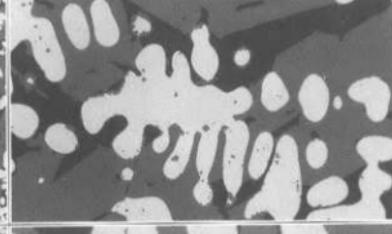
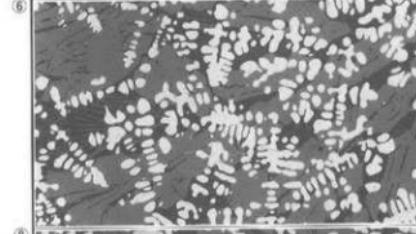
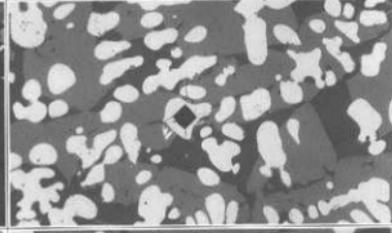
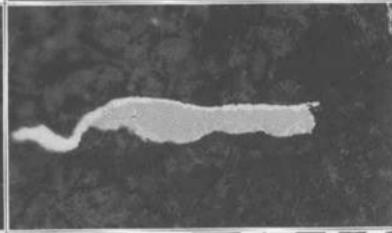
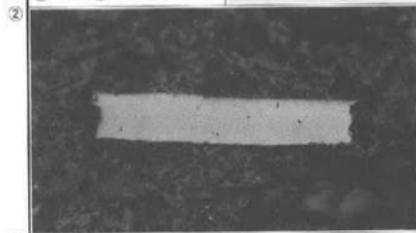
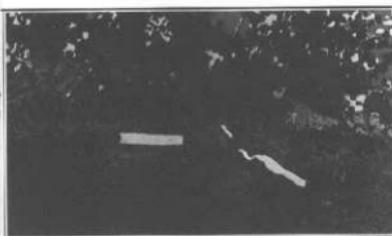


写真 6 楠形鍛冶津の顯微鏡組織(2)

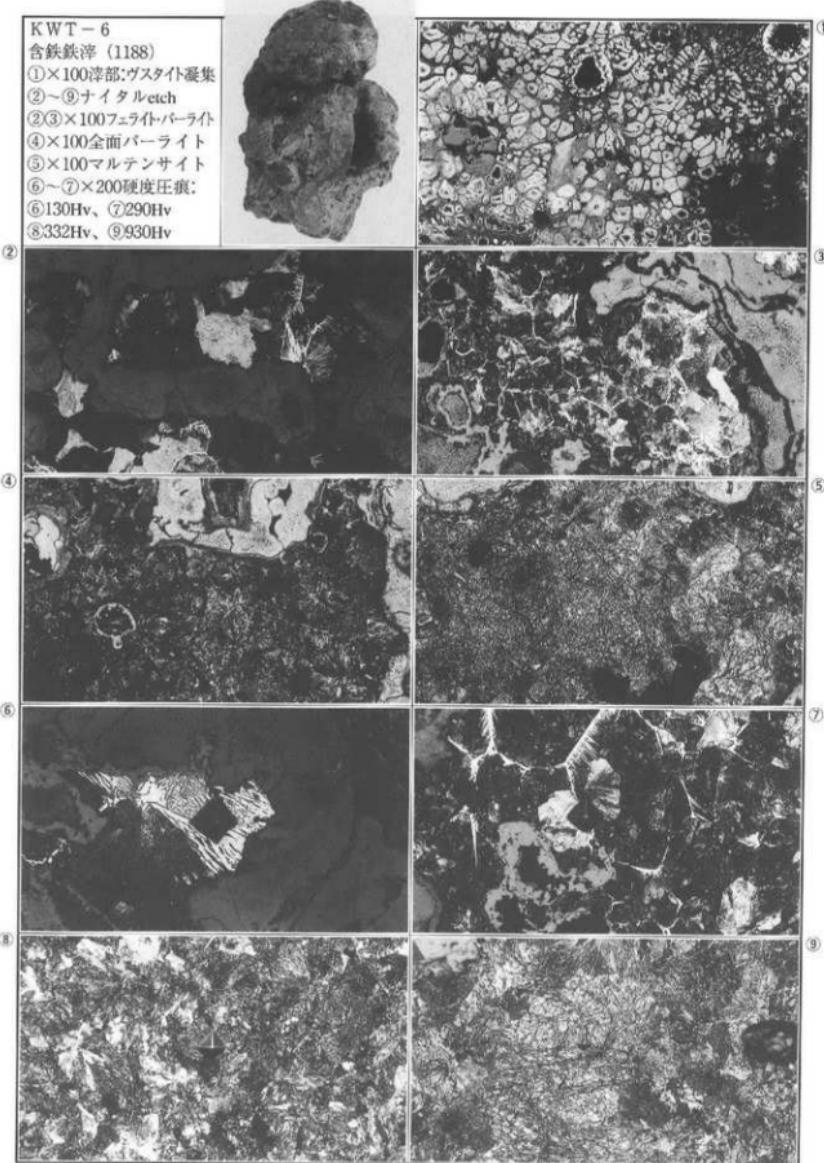


写真7 含鉄鉄滓の顕微鏡組織

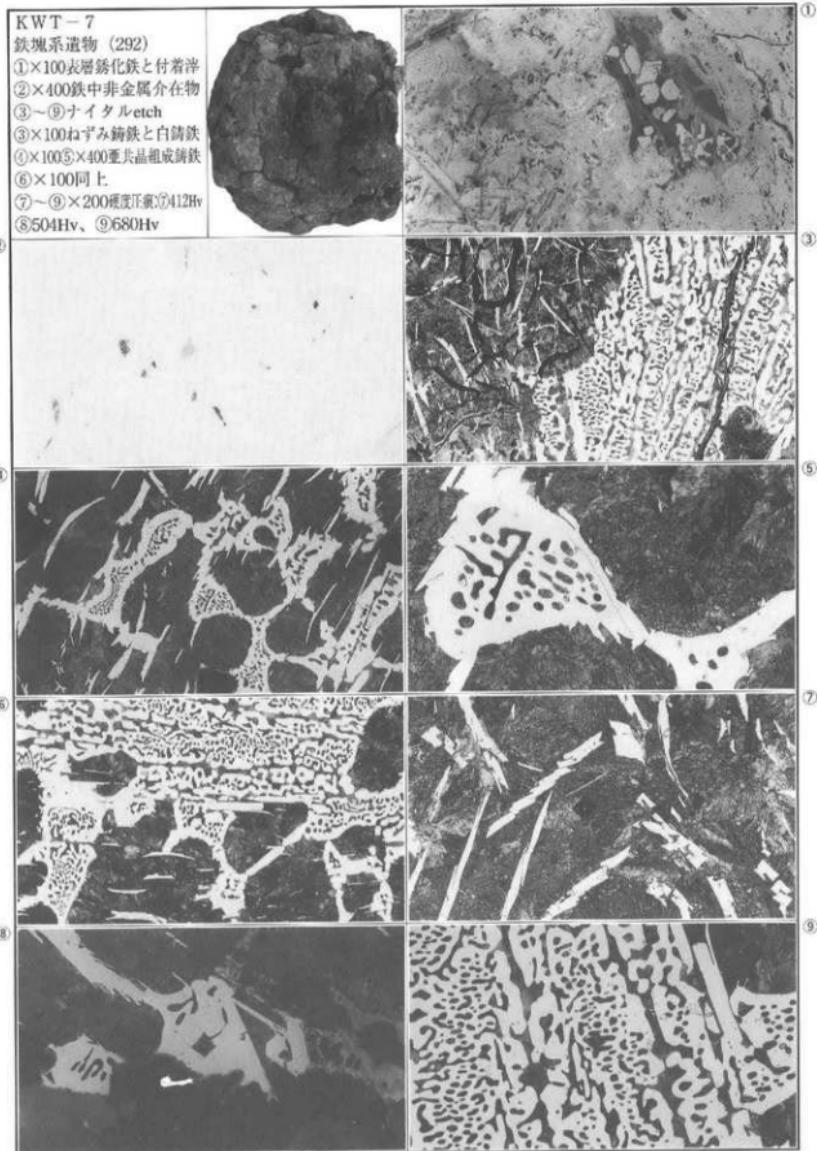


写真 8 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

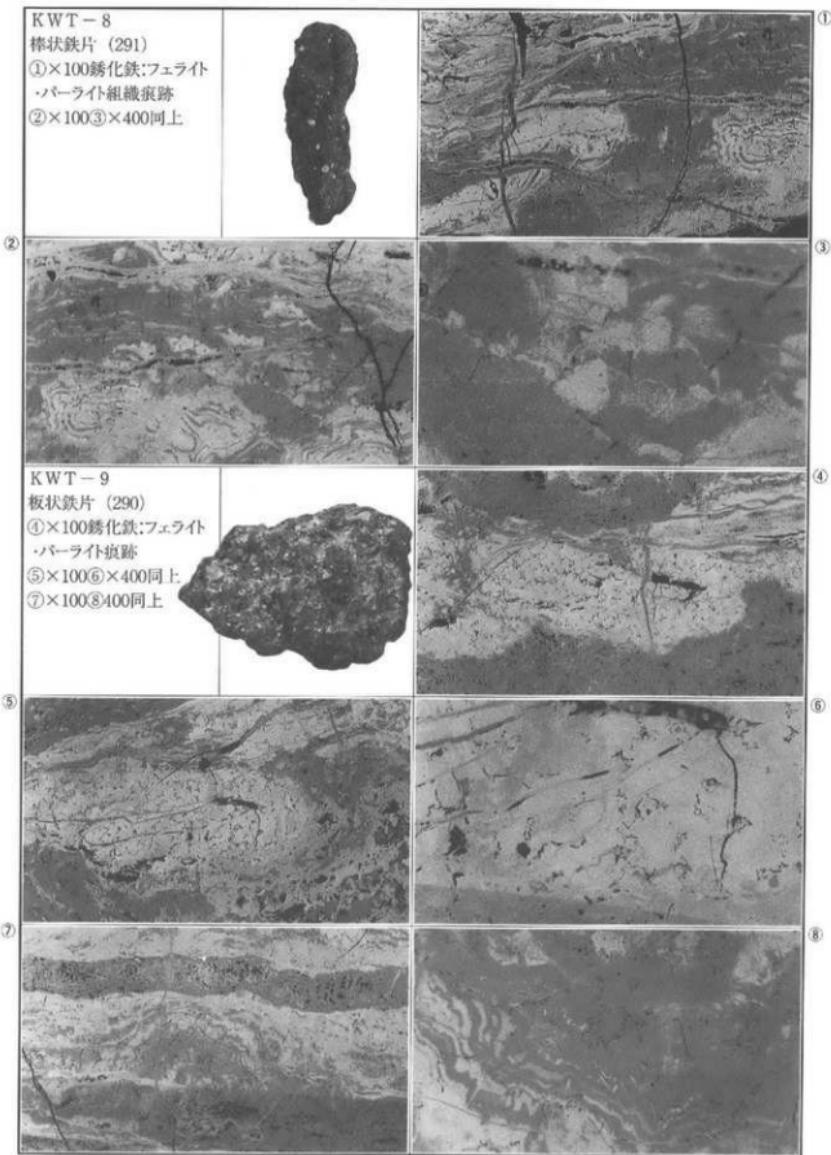
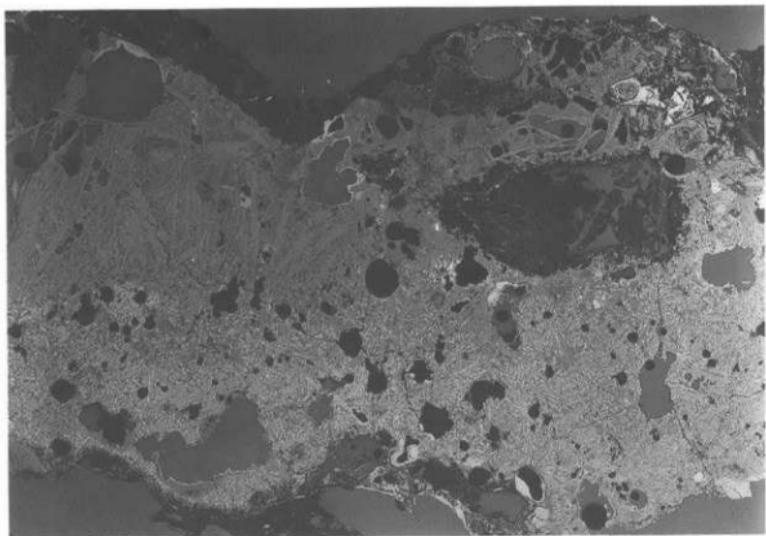
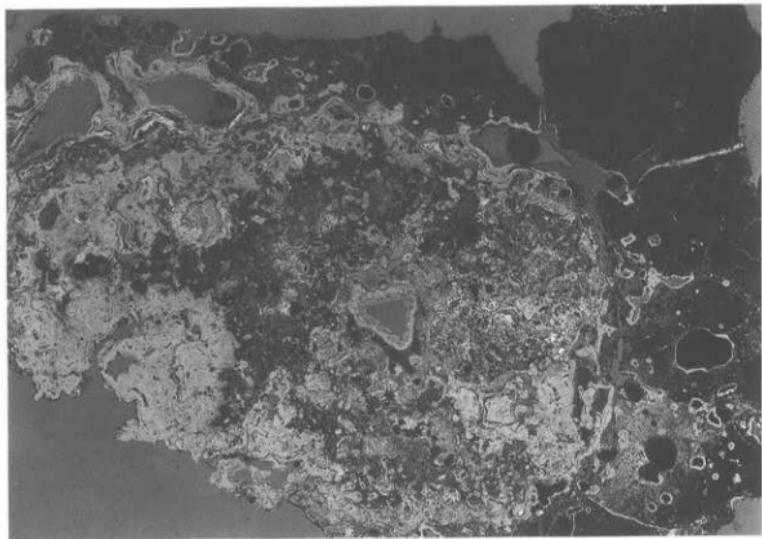


写真9 棒状鉄片・板状金の顕微鏡組織



KWT-5 ×10



KWT-6 ×10

写真10 上段：椀形鍛冶滓（KWT-5）のマクロ組織（×10）  
下段：含鉄鍛滓（KWT-6）のマクロ組織（×10）